THE CENTRAL REVIEW

中央公論

三月號

第廿八年第四號　第貳百八拾九號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大隈伯爵家

を始め其他の諸名家より多數御注文の榮を辱ふす以て本器が如何に優秀なるかを知られよ!!

新橋堂式組合せ本箱



△藏書の增減に從ひ自由に其大さを伸縮し得べし

△室內の構造に應じて適宜に配置し得べし

△硝子戶の巧妙なる構造を有す

△書物を分類するに最も適當なる構造を有す

△形狀優雅色彩美麗しかも堅牢此上なし

定價 金二十六圓 檜製 / 金二十八圓 欅製 / 金三十圓 櫻製

運賃荷造費御自辨

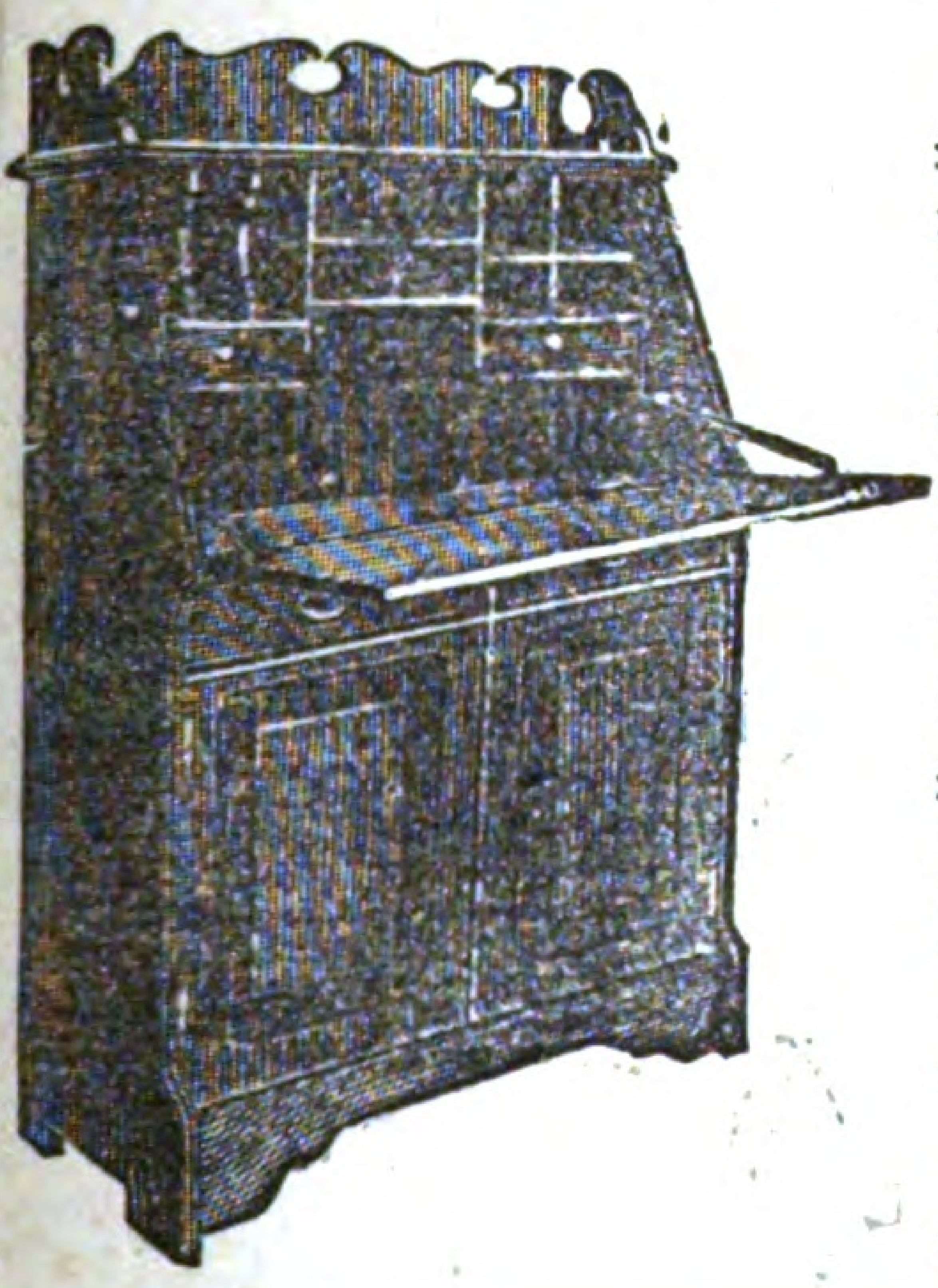
△之れを要するに最善最良の本箱!!

構造を示せる目錄は郵券二錢封入御申込次第進呈

理想のデスク

事務用定價金廿五圓
書見用定價金廿二圓
荷造各一圓八十錢
運賃は御自辨

●デスクの上部は事務用又は書見用に用ひられ下部は帳簿棚又は書棚に使用するやう構造されて居ります◐夫故日常必要の帳簿又は書物を最も手近に配置し得て便利此上もありません●デスク使用後は机板を閉ぢて其大さを短縮する事が出來ます●材料は兩デスク共檜です塗は木地色のラック仕上げです



發賣元 東京市京橋區銀座大通新橋際 新橋堂 振替貯金口座二百番 電話新橋千九百九十一番

第十二版

神經衰弱自療法

定價六十錢 郵稅六錢

狩野病院長 狩野謙吾先生著

此書は神經衰弱症治療の專門大家として有名な狩野先生が各種の神經衰弱症例へば腦神經の衰弱症胃神經の衰弱症生殖器神經の衰弱症等の治療法を通俗に而かも詳細に講述せられたものです斯病に惱める不幸な方が是非御一讀の必要ある書物だと思ひます

發行所 (東京市日本橋區檜物町八 振替二一〇三〇番) 文星堂書店 (東京市銀座大通新橋際 振替東京二一〇〇〇番) 新橋堂書店

體力養生叢書

(一)	(二)	(四)	(五)
大澤醫學博士述 冷水浴と冷水摩擦	二木醫學博士述 腹式呼吸	樫田醫學博士述 滋養物の攝取	遠山醫學博士述 深呼吸
定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價五十錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅四錢

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告は揭載謝絶す

此の廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

丁抹カリン・ミヒアエリス女子原著
涙香 黒岩周六先生評論
萬朝報記者文學士 小野秀雄先生補譯
春帆 片山春雄先生装禎

離婚せる四十女の思ひ切つた告白

（總ふりがなつき）

新刊

口繪 原著者肖像

優美新装 四六判 三百餘頁 函入
定價金八十錢
小包料金八錢

本書は曩に丁抹に於て出版せられ英獨佛等の各國語に飜譯せられて忽ち數十百版を重ね至る所に空前の反響を惹起したる奇書なり著者は自己の經驗によりて四十歳前後を以て婦人の最も危險なる年齢なりと斷定し自己が離婚を求めて獨身生活に入りし心的狀態より更に其青春時代に遡り奔放なる感情と虚榮に追はれて或は老富豪の妻たらんとし或は年少の青年に愛を求めし經路を其の日記及び書翰に依りて寸毫も蔽ふ所なく告白したり

秘密多き女性の心は本書によりて赤裸々に現はれ讀者をして茫然自失せしむるに足る本書は實に從來何人も試みざりし所を成遂げたるものにして其歐米の讀書界を驚倒せるも亦宜なりと謂ふべし

譯者其の流麗の筆を揮て之を邦語に譯出し附するに黒岩涙香先生の評論を以てす乞ふ一本を求めて此の前人未說の秘密を知られよ

●本書を讀まざる者は婦人問題を語る勿れ!!

發行所 東京神田松下町十 電話本局一七八一 振替東京四一八四 以文館

大好評忽三版

社會と自分

夏目漱石先生著

漱石先生自ら本書に序して曰く、社會對自分の關係を研究したるもの也と、或は道樂と職業を論じ、或は文藝と道德を論じ、或は現代日本の思潮を論ず、精到の研究、委曲の叙述、而して興趣汪溢、津々として盡きず、蓋し本書は先生の講演集にして、先生の講演は天下一品の稱あるもの、警句錯落、機智縱横或は辛辣に或は輕妙に、高遠なる哲理を說くに小說の興味を以てす、講演としては正にカーライルの英雄論に匹敵す可く、洒脫暢達の點は遙に之を凌げり。

▲上製箱入、定價壹圓五十錢、郵稅八錢

東京南紺屋町　實業之日本社　振替口座東京貳參六番

(前付の四)

（片上伸氏序一節）充たされない欲望の惱み、思ひ切れない執着の苦しみは、いつの時代にも止むことのない人間の悲哀である。けれども近代の文學が吾々の前に展開するさま〴〵の煩惱執着の中には血管と神經との末梢の、恐ろしいほどに鋭く細やかに顫動する有樣をまざ〳〵と見る。そして、吾々は今更に人間生活の神秘な奧底へ誘ひ込まれて行く。魂の眞洞から吹く冷たい風が、吾々の身に沁み心を戰かす。それでも人は、その戰慄と恐怖と不安とを貪り得ることを、寧ろ幸福に感じてゐる。そこに生命の緊張を感じてゐる。

片上伸氏序
小川未明作

津田青楓氏裝釘、柳敬助氏著者肖像畫

白痴

裝釘頗美本　箱入紙數四百五十頁餘定價金一圓十錢郵稅金八錢

内容目次

此の都會から絕間なく起る物音が「己は、この社會て、生活の途を見出し得ないて、しかも人一倍本能慾の強い白痴なんだ」と叫んだ世紀末的の男の耳に惱ましい響きを送る。うす暗の裡て奇怪な幻像を描く。冷かに頭を廻らして此の世界に同じく生を享けつゝある人間が何故幸福を同じく受けることが出來ないかといふやふな人生問題について、瞑想と煩悶をつゞけてゐるすべて驚異の官覺と血の染んだ想像の斷片てある。最近の苦心の作は蒐められてある幸に文壇の新しい產物として江湖に向つて推薦する。

發兌　東京市牛込區早稻田大學前　文影堂書店　電話番町三千六十四　振替東京七〇〇三

賣捌　東京神田　有斐閣・東京堂・上田屋　其他

文學士 小山内薰譯

近代劇五曲

菊版四百頁 口繪・挿畫入 全壹冊 定價金壹圓 市外小包拾貳錢

目次 ▲ハンネレの昇天（ハウプトマン）▲犠牲（ストリントベルヒ）▲犬（チエエホフ）▲タンタジイルの死（マアテルリンク）▲夜の宿（ゴオリキー）

現代思想は本書を**要求**す本書は我が**劇界革新**の急先鋒**也。**著者は赤門出身にして夙に身を劇界に投じ自由劇場主事として我劇壇に最も新しき運動を開始し現下歐州劇壇視察のため露都莫斯科府に在り泰西文學に造詣深く舞臺の智識に豐富なるは誰人も認識する所也。殊に著者の翻譯戲曲は文學として優秀なると同時に實演の臺帳として亦適確也。本書收むる所の多くは既に各劇場の實演に據て觀客の喝采を博せし者也。左れば曩に本社が發刊して好評を博せる「近代文學十講」に據て是等劇の輪廓を知れる者更に本書に據り其内容實質を究めざるべからず。之れ十講の姉妹篇として名著五曲を選び江湖に奨むる所以也。

東京銀座壹丁目 大日本圖書株式會社 振替東京二一九番

世論は……

本書を忠實なる最近思想の研究にして思想界出色の快著也と評す

明治・法政・國學院大學講師・雜誌「新日本」主任 文學士 樋口龍峽先生著

近代思想の解剖

■忽ち參版■

クロース綴函入 頗美本●全一冊 菊判●五百餘頁 金壹圓五拾錢 □送費十二錢□

□現代論壇の明星樋口先生が十年の研究と三年の苦心の結晶たる本書は現代文明の解釋にして深刻なる批判也最近一百餘年間の一切の思潮＝（哲學・文藝・科學・宗教）は固より社會的・政治的方面の思想に至るまで近代民衆の精神に影響を與へたるものは其學說の由來・特長・効果・に渉りて文明史的見地と批判的立脚地とに立ちて細大漏さず縱横に解說して讀者の眼前に鳥瞰圖を開展せしめ進んで思想界の將來に適確なる暗示を與ふ。

□現代思想に生き、現社會に雄飛せんとする士、現代民衆の趨向を知らんとするの士は來て此興味深き廣義の文明史に就け。必ず適確なる斷定を下すべし。宜なる哉江湖の歡迎文壇を壓して今や再度增刷を要求す。

酒井鼠兄先生が刻苦七年の大著

植物の文學的研究

クロース綴函入 頗美本九百餘頁 壹圓八拾錢 送費金十二錢

東京市京橋區南槇町十八 **廣文堂** 振替東京四六八四 電話京橋二四六三

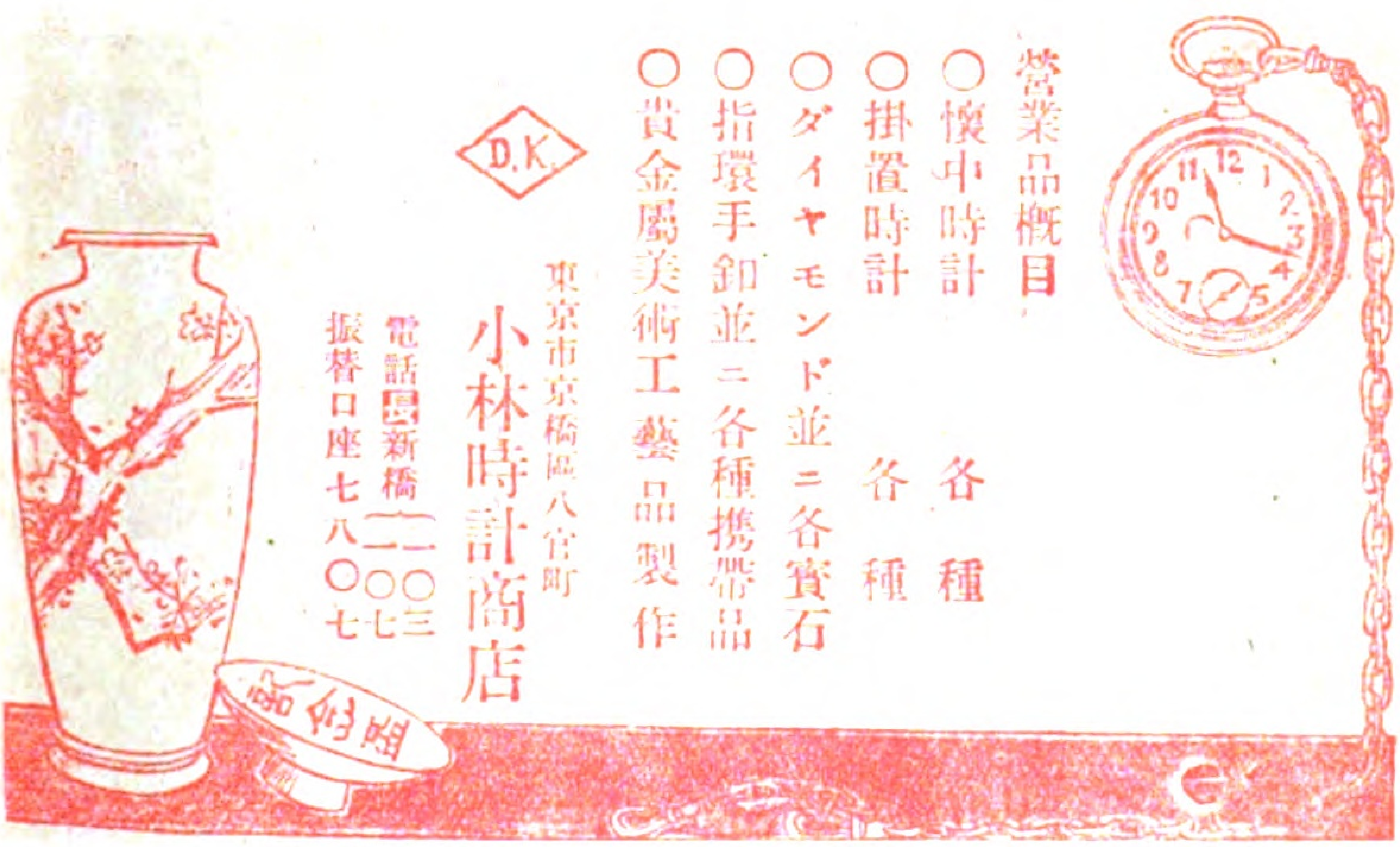
□文壇の奇才！酒井先生が和歌・俳句・漢詩・新體詩・狂歌・川柳等に植物を主題とせるもの丶名作少なきと歌人・詩人・俳人に植物の科學的知識も文學的研究も乏しきを遺憾として本書を公にせられたるもの也。□本書は著者が多年研究の結果により五百餘種の草木を網羅しその幹・葉・花・實等の文學的意味の花言葉を題材として採るべき場合及び季節を細說し、採用の方法は古今大家の意見を引證し、歌・詩・句の名作を挿挾み最も懇切に明瞭に評論せられたり。尚植物の生育・特質・運用をも附說せられたるもの也。

故に五百餘種の草木は本書ありて初めて文學的に偉大なる眞價を發揮すべし。敢て歌人・詩人・俳人は勿論日本文學の精粹を知らんとする士の必讀を俟つ。



中央公論第廿八年三月號目次




營業品概目
○懷中時計　各種
○掛置時計　各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
D.K.
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話(長)新橋 一〇三 二〇七
振替口座七八〇七

LUIGI NONO



THEIR PLAYMATES FUNERAL

中央公論



三月號

廿八年第四號

第二百八十九號

內閣急更迭

（一）

桂公の內閣は二月五日衆議院に於て政友會國民黨が聯合して提出せる政府不信任案の討議せらるゝや、五日間議會の停會を命じ、衆議院殊に政友會の反省を求め、且つ八日夕西園寺侯と會見したり、其の內容として報知新聞の報ずる所下の如し、是れ恐らくば確實なるべし。

桂首相は時局の進行に就て衆議院の反省を求めたるも形勢に變易なきを認め八日加藤外相をして、西園寺侯の來訪を求めしめ午後六時首相官邸に於て首相自ら侯と膝を交へつゝ是までの經過を打明け侯にして若し內閣組織の希望あらば直ちに明渡すべく陸軍問題の如き御相談とあらば相當の力を致すべしとまで切言したるに侯は所詮後任繼承の志望なく又其の成算をも有せずと答へ首相より然らば既に不肖を至尊にまで推薦し置きながら部下をして彈劾問題をも提げて不肖を攻撃せしめ益々時局を紛糾せしめらるゝ、如何と推

し侯が俄に意外の成行にて御氣の毒に堪へずと挨拶するや、否事は私情に非ず閣下も不肖も同じく　陛下の重臣として君國の爲に應分の券効を致すべき身分なりとて侯の決心を求めたるに侯は故伊藤公の先例もあり佛國大統領が教書を以て議會の紛亂を收めたるとあればとて暗に大詔煥發を欲するが如き口氣を漏すに及び首相は不肖は今更現地位を固執する志望もなく又政友會に對し何等手を入れたることもなく今更爲すべき理由を有せず閣下大詔の降下を欲せば何時にても至尊に拜謁し得べき御身分ならずやとて其の進退を迫りたるよしにて、侯は兎も角熟考の上明日確答することを約して引取りたる次第なり　斯くて首相は九日午前九時五十分參內して西園寺侯と會見の顚末をも奏上したるに其の結果なるべし同日午後急に侯を前總理大臣元老の一人として　闕下に召させられ優渥なる御諚を賜はれりといふ云々

西園寺侯の拜受したる御諚は、內大臣伏見宮殿下の御說明によりて、不信任案を撤回せよといふにありしこと確かめらる、侯は其の夜自邸に松田、原、元田、大岡、尾崎、岡崎、野田其の他の政友會幹部を招集し、且つ國民黨の犬養毅氏をも招きて協議せるに、原氏等は主として勅諚を遵行する外なしとし、之に反對を表するものもあり、而して政友會中の各團體は、尙ほ侯の意思幹部の希望に反して、飽までも最初の志を串徹するに決し、翌十日侯自から代議士に臨み「余自からは優諚に遵ひ奉つるの外なきも、諸君は國民の代表者也、愼重に考慮すべし」と告げ、頗ぶる模稜の言を爲し、斯くて代議士會は、全會一致を以て猛進するに決したり。

特に記すべきは、此の日早朝山本權兵衛伯が桂首相を往訪して何事か密談し、直ちに轉じて政友會に西園寺侯を訪ひ、密議時餘に亘れると也。

桂公は　陛下が西園寺侯に優諚を下し玉へるは、畢竟議會を無事ならしむる叡慮なりと拜察し、玆に

議會解散の決意を一擲して、十日自から辭職の志を定め、其の準備のため三日間議會の停會を命じ、翌十一日辭表を闕下に捧げたり。

此の結果として十二日山縣、大山、西園寺の三元老宮中に會し、西園寺侯主として山本伯を推薦し、元老之に一致したれば、侯は其の旨趣を伯に傳達し、且つ政友會をして伯を援助せしむべきことを内諾したり、茲に於て伯亦決心し、十二日内閣組織の大命を拜受したり。

然るに政友會中に異議あり、爲めに新内閣大臣の任命延期せられ（實は十三日中に親任式を擧行する豫定なりしと聞く）二十日に至りて始めて山本内閣の成立を看るに至れる也。

（二）

吾人は叙して茲に至り、坐ろに往事を回想して無限の興趣を感ず、衆議院が製艦費を否決して頑强に時の伊藤内閣に反抗し、十五日間の停會となるも尙ほ聽かざるや　天皇は殊に大臣、樞密顧問官、貴衆兩院議長に對し、年々内帑より金三十萬圓を賜ひ、且つ文武官をして俸給十分の一を納れしめて製艦費の一部に供すべきことを勅し玉ふ、是れ實に明治二十六年二月十日也、茲に於て議會始めて屈し、製艦費を可決す、伊藤公が稱して「大詔煥發、局面一變」と做せもの是れ也、伊藤公政友會を組織し、明治三十三年九月十五日其の發會式を行ひ、一擧にして衆議院に百五十六人の代議士を有し、正さしく過半數を占むるや、其の月廿七日山縣内閣辭職を爲し、十月十九日伊藤公大命を拜して政友會内閣を組織したり、然るに閣臣中に星亨氏（遞信大臣）あるがため、貴族院各派は伊藤首相に忠告書を贈りて星氏を罷め

しめ、若し聽かれずんば開議劈頭政府不信任決議案を提出し、尙ほ反省せずんば進んで闕下に伏奏するに內決せり、幸ひにして星氏辭し、原敬氏之に代れるがために事無きを得たるも、增税案に於て貴族院又々大反對を表し、卅四年二月廿五日の委員會まづ本案を否決し、次て廿七日本會議に入るや、伊藤首相辭を盡して懇請し、且つ十日間停會を命じ、次て又五日間の再停會を命じたり、貴族院のために再度まで停會を命じたるが如き實に異例とす。

然れども問題は之に止まらざる也、此の停會中伊藤首相は貴族院議長近衛公に托し、同院の硬派たる六團體の代表者に讓歩を交渉せしも効なく、更に山縣西鄕の兩元老に調停を托するや、兩元老及び松方侯は京都に會合せるも策の出づる所を知らず、既にして天皇電報を以て山縣(在京都)、松方(在御影)を召し、西鄕井上の二侯を加へて調停を命じ玉ふ、四元老乃ち貴族院の再考を求め、成案を示して調停を試みたりしに、貴族院の委員は之に大修正を加へ、而して政府到底之に應ずる能はざるを以て、四元老皆手を引けり、三月十四日勅語を貴族院に賜ふ、玆に於て同院は十六日の本會議に於て衆議院通過のまゝ增税案を可決したりき。

(參考)此の勅語に就て、貴族院議長手翰を以て伊藤首相に問合せしに、首相は博文其の責任者なる事、尙ほ憲法上に於ては至尊の政治上に關する御動作は總て總理大臣たるものゝ責任なることを答書したり

衆議院の非政友派は、此の詔勅に對し介大臣が單に進退伺ひを爲せるは無責任なりとの決議案を提出せるも百五十五に對する百二十八の少數にて否決されたり

此の議會は斯くて幸ひに無事なりしも、藏相渡邊國武氏の財政消極論のため、內閣は五月五日辭表を捧げ、六月二日第一次桂內閣成

立したり

是れ豈太だ興味ある事實ならずや、今次政友會國民黨の提出せる政府不信任案は、政府未だ一事を成さゞるに、唯だ閥族なりといふを理由とす、素より往年の貴族院が星亨氏の操行に就て不信任案を提出せんとし、次て增税を非として政府に反對したると同一に視る可からずと雖も、停會を命ぜられて尚ほ聽かず、頑强に抵抗せし一事は酷だ相肖たらずや、唯だ伊藤公は元老に調停を托し、次て至尊また元老に之を命じ玉へるに、桂公は直接に不信任案提出黨たる政友會總裁西園寺侯と交渉したるに止まり、殊に詔勅貴族院に下り、同院謹んで大命を拜受したりしに、今次は斯の如き勅語の衆議院に下るなく、僅かに西園寺侯に御諚ありしも、侯之を奉行して實効を擧ぐる能はず、竟に內閣總辭職となりしを異なりとす、嗚呼此の時勢の變化と、事の成行の相異なるとを視て、誰か無限の感懷なきを得んや、眞に政局に心を用ゆるもの、深く以て鑑むべき也。

（三）

之を事實より視るに、薩摩派と政友會との提携は全く成れり、然り、其の提携の秘密なりしもの茲に至つて公然となれる也、世上の一部には、薩派と政友會と始めより一路の脈絡を通ずるあり、殊に海軍擴張のため、薩派は昨年の總選擧に政友會を內助し、陰に若干の資金を補給したりとまで噂さするものありき、思ふに多年政權に遠ざかれる薩派は、今次の政變を以て乘ずべき最良の好機と看しなるべし、殊に聰慧なる山本伯は桂公が新たに政黨を組織し、全然藩閥の窩中より蟬脫して、新たなる勢力を植ゑ

んとするを看て、永く晏然たる可らずと做し、一飛躍して茲に政友會と相携へて政局を擔當するに至れるならん、西園寺侯今次の苦境を解する政友會の一部は、桂公已に非政友を標榜して一政黨を組織する以上、公を戴きて黨首とするの期望空に皈しせしを以て、茲に斷じて薩派を助けて、以て政權を手にするを利なりとするに至れるならん。

桂公既に政黨を作り、自から其の黨首たらんとする以上、理に於て目するに藩閥を以てす可からずと雖も、世人の多くは尙ほ以て閥族と稱す、此の論理よりすれば、政黨に入らざる山本伯は純乎たる閥族と爲さゞるを得ず、即ち我が政局の近狀は、長閥と薩閥との對抗となれりといふを當然とす、茲に於てか彼の憲政擁護を主張せし政友會國民黨等は、少くも義として此の內閣に反對せざるを得ざる結論に到達すべし、所謂憲政擁護派なるものは、閥族を一掃して純乎たる政黨內閣制を實現するを以て其の唯一の主張としたれば也。

（四）

吾人をして茲に少しく近狀に對する純正なる批評を挾ましめよ、憲政擁護、閥族討滅の旨義に至ては、吾人素より異存なし、抽象的にいへば苟くも國民たるもの勿論之を非とすべき理なければ也、然れども事實の傾向に徵して今や大なる掛念を懷かざる能はず、思へ、其の政治運動既に憲政のためなる以上、徹頭徹尾立憲の大義と相離る可らず、凡そ憲政の妙は、政治上の爭議をして、公明且つ寛大ならしむるにあり、議論相爭ふときは舌端焰を吐くも、然かも禮意節度を失はず、歡然相交りて毫も君子の態度を

逸せざるは、是れ憲政國民の常態ならずや、彼の反對論を主張する新聞紙及び代議士を凌辱し、甚だしきは代議士を變節と罵りて之に暴行を加へ、其の車を破り、家屋を汚損し破壊するが如き、或は新聞紙にボイコットを行ひ、甚だしきに至りては、竟に瓦石を投じ火を放つが如き兇暴を敢てせしは、斷じて立憲の精神を體する運動に非ず、蓋し群衆も亦警察官の穏當ならざる措置に激昂したると論を俟たずと雖も、其の餘波をして茲に至らしむるが如きは、深く怖れて戒めざる可らず、識慮ある人々は、何故に此の傾向を抑止するに努力せざりしや。

世或は支那革命の我が國に影響するなきやを憂ふるものありき、閥族討滅といひ、倒閥興民といふが如き、寧ろ支那革命黨の標語を摸せしに非ざらんや、人の名譽財産を重んぜず、有らゆる惡名を之に加へ、輕々しく反對者の名譽を毀傷し、太だしきは其の身體を危害し、門を汚し家を壞りて有らゆる醜辱と壓迫を加へ、暴力を以て言論を壓伏せんとするが如き、立憲國に類例なき狀態にして、名譽財産の輕んぜらるゝ實に其の極に達す、若し此の趨勢にして底止する所なくんば、或は竟に佛國革命時代の亂調に入るも亦測る可らず、嗚呼是れ杞憂乎、吾人は其の必らず杞憂ならんとを希ふ、眞に人心の機微を覗るもの深く鑑むべき也、吾人は此の點に於て桂公等が速かに其の地位を去れるを可とせざる能はず、而して國民また大に自省せざる可らざる也。

（四）

單に理義のみより立論すれば、問題は最も直截簡明也、即ち憲政擁護、閥族掃蕩を唱へたる一團は、

素より山本內閣と一致す可らず、如何に强辯するも此の內閣が純平たる政黨內閣に非ずして、一種の聯立內閣なると明白なれば也。

憲政擁護派が桂內閣を猛擊したりし所以は、單に桂公其の人を惛めるには非ず、其の內閣を以て政黨內閣に非ずと認めて也、然り、桂公既に新政黨を組織せんとを聲言せるも尙ほ信せず、結黨は畢竟政權主持のための策略に過ぎずと爲せしが故のみ、然るに新內閣の首相たる山本伯は、所謂薩閥の出にして、口に政友會の主義政綱に憑據すといふと雖も、其の人全く政友會員に非ず、即ち紛れもなき聯立內閣にして妥協と相距る五十步百步のみ、純平たる政黨內閣の實現を以て立憲の要道なりと主張するもの、如何ぞ之と相容るゝ理あらんや。

吾人は第一に西園寺侯の措置に疑ひを有す、政友會をして猛然奮進して桂內閣を擊破せしめたる以上、次の內閣組織の責任は當然西園寺侯に歸せざる可らず、是れ憲政擁護派の目して以て、立憲の大道とする主張の歸結點ならずや、侯が二月八日桂公との會見に於て、內閣引受けの志望と成算となきを答へ、退し、更に後任者を擧げて總裁と爲し、而して新內閣組織の大命の之に下るべき順路を拓くを當然とす、爲めに桂公の推問を受けしは吾人の最も恠む所、侯洵に其の志圖無くば、義宜しく政友會總裁たるを辭然るに二月十二日山縣、大山兩公と共に元老會議に列せる侯は最初より大命の山本伯に下るを至當なりとし、自から奔走して伯を起し、意に半閥半政黨の內閣を組織するに至らしめたるは何ぞや、純平たる政黨內閣を主張する擁護派の人々は、理に於て先づ第一に侯の責任を明らかにせざる可らざる也。

第二には山本伯の起てるにも疑ひあり、伯や眞に時局の紛糾を治むべき決意あらば、何故に自から政友會に入り、純乎たる黨員となりて政友會を率ひざりしや、桂公すら政黨を組織して自から其の首領たる今日、伯にして若し洵に政權に志なく、唯だ時局を慨して起てりとせは、理宜しく自から政黨に入るべきのみ、政友會が曾て天下に公表せる主張を實にし、由つて今日一切の紛糾を一掃せんと欲せば、理素より然かするの外なければ也、民論の囂々たる今日に在て、依然政黨の外に立ち、唯だ口に政黨主義を執るといふも、久しく政權に離れし薩人をして、再び頽勢を挽回せしめんとする事實の蔽ふ可らざるを奈何せん、唯だ始めより政友會と通謀して、政界に勢力を占めんとせし結果たるの否定す可らざるを奈何せん、乃ち憲政擁護派は理に於て長閥(桂公一派)に代ゆるに薩閥を以てせしのみと做さん、而して此れがため再び攻撃の鋒鋩を攅むると、論理上極めて明瞭ならずや。

故に理義のみよりいへば、政友會も國民黨も、今にして別に彷徨し逡巡するの要あらず、問題は甚だ明白也、進退の節は多言せずして瞭然たり、若し政友會にして曩の閥族掃蕩憲政擁護論は、唯だ桂内閣顛覆のためのみ、既に桂内閣を倒せる以上、戰捷後の處分は我が自由なりといはゞ、其の言論と行動とは、徒らに政權爭奪のため、國論を沸騰せしめて政局を紛糾したるに止まる、曾て憲政擁護を唱へし一團は玆に矛を逆まにして政友會と新内閣とに抗せざる可らず、理素より然るべき順序なれば也。

（五）

理論を離れて、更らに實際の利害より觀察するに、問題は頗ぶる多岐なるが如し、然れども之を要約

していへば、第一政黨主義の程度如何、第二時局收拾の成行如何に歸着すべし、而して政友會其のものに利害得失は之に亞て生ずべき問題とす。

政黨は勢ひにして理に非ず、且つ世界の大勢よりすれば、政黨は漸く小分し、同時に漸く其の勢力を失はんとす、政黨政治の主張者が理想とする英國に就て看るも、自由保守兩黨の外に、愛耳蘭を除きて勞働黨あり、保守黨即ち統一黨も亦關稅問題によつて更に分裂を來すべき傾向あり、自由黨と雖も勞働問題外交問題等に就て黨內必らずしも常に一致せず、且つ政黨の外、勞働組合の勢力大に加はるに從ひ、政黨の勢力之と比例して漸く減少する傾向あり、識者或は竟に獨逸の如く小黨分裂の情形を現ぜんと爲すなきに非ず、凡そ立憲政治の要は、政治上の爭議をして公明且つ寬大ならしむるにあり、隨つて吾人が今や一步を轉じて政黨政治の已む可からざるを認むるの理由も、之に由て政治上の爭議を寬大公明ならしめて以て人心を調和し、政治型式の爭を根絕して政治實質の良否を競爭せしめんとするに在り、內閣成立の型式を爭はずして專ら政策の是非得失を爭はしめんとするに在り、彼の理論よりも多く感情に偏し、得失の爭いを轉じて正邪善惡の爭ひとなし、太だしきは名譽財產の安全をも危ふして幾んど革命亂に似たるが如き激烈なる爭議に陷らしむるとは、寧ろ非立憲として吾人の擯斥を禁ぜざる所とす、此の見地よりして今純然たる政黨政治を實現するとは、或は考慮すべき問題ならざらんや、乃ち一種中間性の內閣を作り、漸を以て政黨政治に到らしむると亦過渡期に於ける寬和劑たらずとせず。

去年以來、時局の紛糾幾んど言語に絕す、萬衆偏へに閥族掃蕩を叫喚し、竟に家を壞り火を放ち、人

を傷害して然かも其の事や頗ぶる誇大に、俗情を愕かす最も太だし、若し斯の如くにして底止する所なくんば、內は臺灣朝鮮等の新附民に誤解を生ぜしめ、外は支那人の視聽を謬まり、列國をしてまた或は日本爲すに足らずと思はしめ、竟に國際上に於ける我が威信を輕くするに至るも知るべからず、是れ最も識者の憂とする所、速かに此の紛糾を拾收して、以て有爲なる內閣を出現し、其れをして中外政治に自由手腕を發揮せしめんとは、苟くも心ある者の齊しく待望する所なるべし、桂公が自家の地位に固執せず、又議會を解散せざりしも、畢竟時局の前途を憂慮せし誠意に出でざらんや、閥族掃蕩憲政擁護や理に於て正しく義に於て順なるも、尙ほ之のみに拘泥して更らに紛爭を繼續せば、或は內竟に紀綱を解弛せしめ、外延きて外侮を招くなきを保せず、單に理義に走りて現時の激烈なる國際競爭を度外に措くが如きは、殊に考慮せざる可らず、姑らく不滿足を忍ぶもまた國家に親切ならずといふ可らざる也。

政友會の利害に至つては、吾人必らずしも多く眼中に措かずと雖も、今一氣に純乎たる政黨內閣を出現しがたき事情あり、內閣組織の大命の直ちに松田氏原氏に降るの事實に尙ほ距離ありとせば、姑らく中間性の聯立內閣に甘んじ、步一步、順を追ふて政黨內閣に近接するも一策ならん、政治は全く理想を捨つ可らざるも、又餘りに實際と離る可らず、俗論といふと雖も尙ほ事實利害を考へざる可らず、假令理義に於て矛盾撞着を免かれず、輿論の指彈を免かれずとも、飽まで結束して、多數黨の實質を喪はずんば、前途尙ほ爲しがたきに非ず、今の政局を擔當するに於て、西園寺內閣は尙ほ全く力足らざる所ありき、乃ち暫らく隱忍して以て實力を養成し蓄積し、以て他年大に成すあらんとするも、また政事家の

事ならざらんや、要は聯立内閣に由て宿昔の政綱を實行し得べき程度如何に在り、人心を得ると失ふとまた實に繋りて玆に在り、吾人は政友會が聯立内閣に甘んずるを以て、必らずしも悲劣度しがたしとは觀ざる也。

（六）

山本内閣の實質より觀るに、其外務大臣牧野は到底加藤男に較するを得ず、大藏大臣高橋男は素より若槻氏に下らざるも、首相山本伯が國家財政に通曉するに於て桂公に及ばざるがために、財政上の信用は或は前内閣に及ばざらん、乃ち桂内閣が言明せる政費五六千萬圓を減ずるより以上の成蹟を擧んとは頗ぶる難事ならざらんや。

山本伯の海軍に於ける威望は、桂公の陸軍に對する其れに比して遙かに高し、然れども其の陸軍に於ける威力の足らざるとは、或は桂公の海軍に於ける其れよりも甚だしからん、海軍は以て最良の内閣なりと傲さんも、陸軍は必らず然る能はざらん、山本内閣の弱點は、外交と財政と國防問題とに存在せざらんや。

山本伯は剛勁にして精力に富めり、事を敢行するに於て或は桂公に優さるあらん、且つ列國の情勢にも昧からず、曾て獨逸皇帝に進謁して滔々萬言を吐き、竟に帝をして饒舌を恣にするの餘地なからしめて山本の名の頗ぶる列國に聞ゆるに觀るも、外交上に一種の抱負を有すべし、然れども財政上の智識と威力とに於て、遙かに桂公に譲るは一の弱點ならん、且つ他を包容する雅量と推服せしむる襟懷とに於

ても、また敷籌を桂公に輸せざるを得ず、況んや内閣の性質聯立にして、而して政友會の野性動もすれば伯の痼癖に觸るゝ掛念なきに非ざるをや、結束の靱性に於ても亦大なる弱點を有することは、何人も之を否定せざるべし。

貴族院に對する關係に於ては、更に桂内閣より不便不利なるやまた著るし、貴族院の多數は素より公平を主として、容易に感情に偏せざるを努むと雖も、政友會が憲政擁護を唱へし運動の成行に視て、斷じて好感を有せざるや明らけし、且つ國民黨及び政友會一部の純埋義派亦始めより慊然たらざるあり、假令幸にして俗衆より擾々たる攻撃を受けずとするも、また安易の境遇にあらざるや多言を要せざらん。

吾人は如何なる内閣に對しても、有力にして而して有爲ならんことを希望す、型式の政黨内閣たると否との如きは、多く問ふ所に非ず、隨つて山本内閣が巧みに事を處して能く中外に對する施設を過らざらんことを期望す、殊に山本伯が初めて内閣の首班たるに於て、十二分に其の技倆を揮はんことを曉望す、唯だ恐らくは不幸短命にしし多く其の抱負を實にするに至らざらんことを。

（七）

吾人の殊に掛念するは、山本内閣が海軍に偏せざる莫きやにあり、世或は長閥に代るに薩閥を以てせしのみと做すものあるも、藩閥は實際に於て僅かに殘喘を保つのみ、桂公は既に全く政黨の人となつて藩閥の窩中を脫したり、山本伯また夙に人材に重きを置きて藩閥を眼中に措かず、素より自家の勢力を扶殖する形迹なきに非ざるも、藩閥に偏せざることは吾人も明らかに之を識認す、唯だ伯が海軍出身に

して、特に海軍に重きを措くがために、或は以て海軍内閣と做し、陸軍問題を提げて之に當らんとするものを生じ、竟に海陸軍を以て政爭問題と做すに至るなきや否や、若し國家の最重なる國防問題を政爭の犧牲と爲すが如きあらば、是れ實に最大憂患也、國家安危の繫る所、盛衰の仍て關する所、素より閥族掃蕩の如き問題にあらざる也、吾人は之を以て殊に山本伯以下閣僚の反省を促さんと欲す、記せよ、世間の一部には夙くより海軍と政友會と通謀し、今や全く其の幕を撤して公々然其の關係を暴露せんとさへ傳稱するものあることを、桂公一派が陸軍問題を以て西園寺内閣を倒したりと噂さゝるさへ、吾人は以て大なる不快を感ず、況んや更らに海軍を以て之に當るといふをや、吾人は幾重にも國防問題を以て累を政局に及ぼすなからんことを切望す、眞に君國を憂ふる誠意あるものは、應さに必らず吾人と感を同じくすべし。

桂公を評す

(一)

今よりいへば、事の成敗を視て批評するに近きも、桂公の近業こそ實に最も興味あるものなれ、恐らくは公其の人と雖も往々にして意外の感に打たるべく、局外者たる吾人に於て一層其の然るを覺ゆ、試みに茲に數言を下して後の參考にも資せん。

桂公の宮中より出でゝ內閣を組織するや、多く世の誤解を受けたり、實は故意に事實を曲げて公を誣ひたるものありしこと論なきも、然かも國民の多數は全く公を誤解したり、詳らかにいへば、公の內大臣侍從長となれるを以て、公自からの發意に出て、信望を宮中に殖えて以て新帝の殊寵を私せんとしたりと做せるは其の一也、宮中に入れるは唯だ此のための一時の權宜のみ、苟くも機を得ば直ちに出てて政權を掌握すべく、所謂『赤い信女がまた孕み』の事實を再現すべしとしたるは其の二也、西園寺內閣の覆滅を以て、公の陰謀に出てたりと做し、現に死せる沖守固男が十一月中に西園寺內閣を倒し、桂公自から大政黨を組織すべしと語れりといへるが如き其の三也、西園寺侯辭職の後松方侯自身內閣組織の意ありしに、桂公自から宮中の侍醫を遣りて侯を診斷せしめ、以て侯の起つを沮止せしといふが如き其の四也、公が宮中に入れるも、出てたるも、總て自から優詔を奏請し、身を袞龍の御袖に匿して以て世上非難の衝に當れりとなせしは其の五也。

凡そ此等のために、公が世の憎惡を受けしの大なるは意料の外にあり、政治上の智識無きものが一部の政客又は新聞紙に煽動せられしことは素より蔽ふ可らずと雖も、煽動の太だしく効を奏せし根本を考慮せば、公が多數の國民に誤解されしことは、今に於て公自から深く反省して可なるべし、隨つて此の誤解の燒點中に立て、敢て政局を擔當す、決して其の處を得たりとは爲す可らず。

單に桂公の利害よりいへば、暫らく宮中にありて新帝に常侍し、以て輔弼の重任に當りて動かざるを妙なりしとすべし、西園寺侯の後を承くるものなくんば、侯或は再び起つ乎、或は何人が之に代るもの

あるべし、然かも時局を收拾する能はずして、終局再び桂公を煩はすに至るや言を俟たず、公が其の機の到るを俟たず、猶豫せずして起ちたるは、假令元老の推薦（並びに西園寺侯の奏薦）に出て、且つ新帝の初政に永く內閣の成立を見ざるに忍びざりし誠意に出てしにせよ、唯だ利害のみより打算して智と稱す可らざる也。

（二）

世人は多くは公の律義に過ぐるを解せず、擧げて政權に渴せるがため、怱卒蹶起したるものと做せり而して公自からも其の機會を得ざりしを知るべし、唯だ公が政黨組織を以て正さしく好機會なりと做すに至ては、吾人聊か疑ひなき能はず。

公曰く「伊藤公の信望と雄材とを以てして、天下を遊說する一年有餘、竟に政友會を作れるも、元老及び貴族院の包圍攻擊を受けて、中途に蹉跌することを免かれざりき、蓋し先を見て其の脚下に氣附かざりしのみ、余若し野に在て徐ろに政黨組織に着手せば、元老貴族院亦多くは反對すべし、唯だ余何人も局面に立たざる時に起てり、苟くも余の行動を難ずるものは、余に代つて責任の地位に立たざるを得ざるがために、今や何人も余の政黨組織に異言を挾むものなし、余は全く故伊藤公の覆轍に鑑みて、一歩々々脚下に注意す、四邊の實情斯の如し、今日を措て政黨組織の機なきのみ、政權を握りて而して政黨を組織するを難ずるものは、未だ此の情勢を察せざる也」と。

果して然らば、公は何故に早く政黨組織の計畫を發表せざりしや、若し公にして內閣組織の大命を拜

する數日後、遲くも議會召集日の前後公然之を發表せば、實際上の便宜少からざりしなるべし、且つ政黨發表の後、直ちに其の主義政綱を發表せざりしことも、吾人の私に疑ふ所とす、公にして十二月中に之を發表せば、國民黨の多數は多く紛擾することなくして之に趨くを得べく、憲政擁護派の運動も未だ騎虎の勢ひを成さずして、多少寛和さるゝの効ありしや疑ひなし、公が玆に出てずして國民黨の大會紛擾の後、政友會の態度一定の後を俟つて、僅かに政黨組織の意思を發表したるは、少くも機會の宜きを得ざりし也。

憲政擁護派の運動益々勢ひを得、政友會各團體の結果漸く成り、國民黨亦殘壘を堅くするに及びて始めて宣言書を發表するも、尚ほ未だ政綱を公表せず、豫算案の印刷間に合はざるがために十五日議會の停會を命じながら、其の間政友國民の兩黨が益々結果を鞏固にするかため、有らゆる手段を講じ、益々民論を鼓吹したりしに拘はらず、桂公は僅かに國民黨より離脱したりし若干子を網羅せるに過ぎず。

二月五日以後の停會期間に在ても、民黨派が益々警戒を嚴にし、代議士に附するに壯士の監視を以てするが如き、幾んど到らざる所なく、激烈なる政談演說會を開きて益々政府反對の氣焰を揚ぐるに一任せしも、亦頗ぶる無爲に過ぎたりとす。

何故に二月五日を以て直ちに議會を解散し、以て國民の信任を問ふことをせざりし乎、斯くして赤心を國民の腹中に布き、公以下の閣臣親しく地方人民に親炙して其の意衷を盡さば、或は形勢を一轉するの希望絶無に非ざりしならん、事玆に出てず、總て後手をのみ取れるは何ぞ、桂公の智或は竟に鈍れる

なき乎。

(三)

二月八日桂公は西園寺侯と會見したり、此の會見に於て、公は西園寺侯にして希望せば、即時内閣を明け渡すべしといひ、陸軍問題の如き、應分の助力を辭せずとまていへるに、侯は新内閣を組織すべき希望も成算もなしと答へ、公が更らに政友會の不信任案撤回を求むるや、侯は寧ろ大詔渙發の可なるを仄めかし、故伊藤公の先例及び佛國大統領が教書を下して議院の紛糾を治めし事例を引けりといふ、果して然らば、公は何故に此の事實を明らかにし、政友會が後繼内閣を作るべき志望成算なくして、徒らに不信任を迫るを難じ、堂々乎として直ちに議會を解散せざりし乎、假令御下問ありしとはいひ、西園寺侯と會談の顚末を奏上し、其の結果西園寺侯の御召となり、殊に侯に對して不信任案撤回の勅諚降下とまて爲れるに至ては、吾人實に嘆惜を禁ずる能はず、此の勅諚は勿論桂公の奏請に出でざるや推斷に難からざるも、現に内閣總理大臣たる以上、其の責任を負はざる可らず、思へ、侯にして勅諚を遵奉し、竟に政友會をして、不信任案を撤回せしめたりとせよ、而して政友會の分裂を來したりとせよ、勅諚を以て玆に至らしむるが如きは、果して憲政の要道に適せりと謂べき乎。

夫れ不信任案の最大理由は、實に詔勅問題にありしに非ずや、事や素より政友會の誤解謬想に出づと雖も、詔勅を以て桂公を難ずる天下滔々として然り、公たるもの宜しく努めて至尊を煩はし奉つる可らざる也、思ふに公が侯と會見せるは、所謂一騎打なるものにして、實に最期の惡戰なるべし、停會に重

ぬるに停會を以てし、有らゆる手段を盡して以て奮闘したるは、流石に政事家なり、然かも勅諚降下に至らざる以前、早く議會を解散せば、事順にして理正し、公の之に出でざりしは亦一着を誤まれる也。公が政黨の組織によりて、一身を憲政の濟美に盡すべしといひ、政敵を誘拐し買收するが如き非立憲手段に出でざりしは、吾人の嘆美を惜まざる所なるも、議會解散の好機を失し、竟に西園寺侯への勅諚降下となりて、公自から内閣を放棄せざるを得ざるに至りしは、また唯だ機を逸したる過失の結果に外ならずとす。

公は西園寺侯に由て不信任案を撤回せしめ、由て以て議會の解散を避けんとしたり、事の天聽に聞えて、西園寺侯への勅諚降下とまでなれる以上、而して政友會が不信任案を撤回せざる以上、公は義宜しく議會を解散せずして自から内閣を退かざる可らず、吾人は公の辭職の當然なるを承認せざる能はざる也。

公始め多くの抱負を以て出づ、然かも内閣組織以來僅かに五十餘日にして倒れ、從來に類例なき短命の記錄を貽せり、吾人は深く其の心事を悲むと共に、又甚だ公の機を逸せしを惜まざるべからず、彼の不信任案なるものは、理に於て甚だ正しからざるもの也、之を以て始めより議會を解散するは、是れ事の順にして義正しき也、而して公が敢て速かに之を斷ぜざりしは、吾人の殊に嘆惜を禁ぜざる所とす、嗚呼公の智何ぞ玆に至れるや。

（四）

火中自から冷あり、桂公は失敗に重ぬるに失敗を以てしたるも、唯だ僅かに一の勝利と一の便宜とを有す、一は政敵たる西園寺侯を倒し得たることにして、一は幾分か世間の同情を回復し得たること是れ也。

西園寺侯は其の辭職の際、後任者として桂公を奏薦したり、素より奏薦の故を以て之を援助すべき義務なしと雖も、其の失敗なきに方つて早く既に不信任を唱ふべきに非ず、乃ち公の施設を視、其の失政批政あるに及びて、始めて不信任を唱ふべき也、然るに侯の部下たる政友會は、公未だ一事を成さゞるに、早く既に桂内閣の不信任を唱へて鏖戰せんとす、是れ侯をして上下に對して不信の人たらしむる也。而して侯や寸毫も之を制御する所なかりき、既にして桂公が内閣を侯に明け渡さんといふや、侯また之を受けず、益々不信任案をして無意義なるものたらしめたり、殊に至尊軫念の極、侯に諭すに不信任案撤回を以てし給ふや、侯また聖旨を奉行して以て政友會を鎭撫するに至らず、其の内情は兎に角、表面に於ては、恰かも聖旨を遵行せざると共に、又總裁として政友會を統御する信望威力なきことを證明せし也、侯たるもの茲に至て、また如何ぞ永く政友會に臨むべけんや、恐らくは侯は其の地位を去て政界より退隱するの外なかるべし、侯をして然らしむるは、是れ政友會に取つて一大損失也、政友會をして此の大損失を受けしめ、併せて侯を政界より驅逐す、是れ豈桂公の一勝利に非ずして何ぞ。

桂公矢盡き刀折れて退けり、天下の公を憎惡するもの以て一大決哉を叫ぶべし、然かもまた其の不幸短命を憐れむものあつて、自然に同情を寄與するに至るや言を俟たず、是れ從來の憤怨憎惡（假令誤解の結果なるも）を一掃して、更らに新たなる好感を迎ふる所以にして、公が甦生し復活する所以ならず

や、況んや此の辭職に由て、公が政權に戀着せざることを明らかにし、延きて宮中を出でたるの其の志に非ざりしとを證し得べきをや。

夫れ攻むるものは餘りあつて守るものに足らざるあるは勢ひ也、公今や野に下りて攻者の地位に立つ、事太だ易くして而して効を收むると多からん、苟くも政戰に倦まず、新政黨のために奮戰し健闘せば、將來の希望甚だ少からざるべし、況んや公の技倆は天下の認むる所にして、其の政費五千萬以上六千萬圓を節し、減稅的稅制整理を行ひ、社會政策を實行し、外交を刷新して支那問題に鋭意すといふが如き、汎く人心を收攬すべき多くの好問題を有するをや、其の地位を一轉したるは正さしく公の一便宜と稱するも妨げなき也。

（五）

吾人は最後に公に一の忠告を爲さん、公が政黨組織に就て、其の方策を謬まらざらんと是れ也。

公の政黨は、國民黨より脫し來れる所謂五領袖を重もなるものとす、然れども思へ、此の五領袖は政黨界の競爭に失敗したる落伍者也、其の意氣も技倆も識見も、一の犬養氏にすら敵するに足らざる也、之を恃みて重鎭と爲すが如くんば、公の政黨なるもの亦知るべきのみ。

公は人物の更新によりて、財界の實勢の一變したるを看取したりしなるべし、政界と雖もまた豈然らざらんや、新らしき時代は新らしき人によりて作らる、眞に健全にして新たなる政黨を作らんとせば、又新たなる人材を網羅せざる可らず。

更に思へ、現に公の旗下に集まれる代議士又は院外中、孰れか是れ新らしき人材ぞ、試みに之を物色すれば、殆んど荒寥を極むるに非ずや。

且つ官僚出身のものは、群心の應酬に熟せず、區々の階級と辭令とのみに齷齪して、天下の俊髦と臂を把て相語るの襟度に乏し、斯の如くにして眞に天下の人心を得んと欲するは難し、公たるもの宜しく率先して三十年來の舊生活を一擲し、全く一個の新人となりて活動すべし、斯くして汎く天下の俊材を集め、經驗ある長老を重んずると共に、生氣潑剌たる新進の士を迎ふるに禮意を盡すべし、直ちに心腹を布きて天下萬衆の信望を收むべし、是れ眞の健全なる政黨を作る所以にして、又實に時代の要求に從ふ也。

公今や閑地に就く、敵は剛勁なる山本伯其の人にして、然かも衆議院に絕對多數を有せる大黨派を擁す、宜しく奮躍して以て天下の民心を鼓舞作興すべし、然らずんば或は力較するに足らじ、公たるもの既往五十有餘日の苦く貴き經驗によりて、深く悟る所ありしなるべし、夜郞自大素より非也、永く時運の寵兒たるを恃む最も非也。事每に失敗せるは、公に取て寧ろ蘇生復活すべき良藥也、然り、公は今にして初めて良藥を得たる也。

大正維新の實を擧げよ

永井柳太郎

日本で憲政の運動の初まつたのは事實に於ては明治十四年、彼の大隈伯が廟堂にあつて議會の開設を主張し、保守的なる諸公と相容れずして決然野に下つて改進黨を組織したる時に發して居るのである。此時に當つて内閣の諸公は大隈伯を以て急進家となし、之を閣外に放逐したけれども、而かも尚大勢に對抗する能はざることを悟つて、遂に國會の開設を約束するに至つたのである。而して此約束が遂に事實となつて明治二十二年二月十一日に憲法の發布を見たのであるが、然しながら其後今日に至るまで約卅年を經過したるに拘らず、憲政の發達は極めて遲々たるものであつた。凡そ議會政治は輿論政治である。法理上に於ては内閣大臣は、天皇の大命によつて進退するのであるけれども、一度國民の輿論に反抗せらるゝ時は、豫算を遂行することも出來ず、又其他の行政の施設を繼續することも出來ぬのである。故に間接には國民に對して責任を負うて居るのであつて、此國民に對する責任を全うしなければ、陛下の大命に答へ奉ることも出來ぬのである。然るに藩閥の諸公は國民の大勢に抗ふことが出來ずして憲法の發布には同意をしたが、而かも議會は超然主

義といふが如き無意義なる解釋によつて常に蹂躙せられて、彼の大隈板垣の兩伯が憲政黨內閣を組織したる時の外、殆んど憲法的の意義に於て內閣の更迭が行はれた事がなかつたのてある。今日は憲政擁護を標榜して國民の味方となつて居る政友會其物の如きも未だ嘗て內閣を授受するに際して憲政的の進退をなした事はなかつたのてある。彼の西園寺侯は議會に於ける大政黨を率ゐて居るに拘らず、議會に於て堂々と內閣の授受を決することなく、常に桂公と妥協し、桂公の駙馬たる事を條件として次の內閣を繼承し得たのてある。

斯くの如き狀態てあつたのに、今日は其憲政の蹂躙者てあつた政友會其物も、憲政を擁護する爲めに奮闘するに至り、又此政友會を籠絡して閥族の私利を營むに忙しかつた桂公の如きも、自ら立憲同志會と稱するものを組織して以て憲政を擁護し、國民の政友たらんことを宣言して居る。之は實に王政維新あつて以來の大維新といふべく、此度の政變によつて我日本國は眞正の意味に於ける立憲國となつたのてある。

それて今日に於ては最早我國に於て憲政の敵となるものは存在しないのてある。世人は新政黨を以て憲政の賊、國民の敵と稱して居るけれども、彼等桂公の一派が世間に公約したる所によつて見れば彼等は已に過去の非立憲を懺悔して、將來は憲政を保護せんことを約束して居るのてある。大凡憲政の擁護なるものは憲政を破壞するものがあつてこそ必要なのてある。已に憲政を破壞するものが無くなつた今日、最早憲政擁護の叫びをなすの必要がなく、又其叫びをなすの必要が無くなつたのを祝福せざるを得ぬのてある。

全體過去の罪を論ずれば西園寺侯も桂公も正しく罪相同じきものてある。私は桂公が總ての進退に詔勅を煩はし、　天子を挾んで四海に號令するといふが如き態度を取つたのは甚だ不忠てあると思ふ。然しながら西園寺侯も亦之を繰り返したのてある。即ち彼の　先帝が在せし頃は元老といふが如きものは公然世間に存在してゐなかつたのてある。新帝が即位し給ふと共に詔勅によつて元老が公認せられ、而して此元老が彼の

憲政擁護の運動の攻擊の的になつて居つたのであるが此詔勅の發布せられた當時の總理大臣は即ち西園寺侯であつたから、侯は此詔勅に對して責任を負はざるべからざること明かである。其後彼の陸軍大臣が財政の整理に反對したる時の如きも、西園寺侯の態度は依然として優柔不斷であつた。若し陸軍大臣が國民の輿論に從つて財政の整理をせんとする內閣の方針に反對したのであるならば、何故侯は陸軍大臣を免職せしめざるか。若し其後任を陸軍現役軍人の間に求むる能はずんば何故　陛下に事情を伏奏して豫備軍人若くは文官を以て陸軍大臣たらしめ得るやう官制の改革を企てざるか。若し此官制の改革に對する勅令の發布に對して樞密院が異議を唱ふるが如きことがあれば、何故侯は　陛下に其事情を具申して樞密院其物の改造を企てざるか。之を企てんとするに當つて　陛下の御許なくば之れ御親任の無きものなるが故、玆に於て初めて辭職すべきであつた。然るに侯が此等の戰爭を避けて未だ戰はざるに先つて其陣を棄てたるが故に、世人侯を以て國民に公約したる財政の整理を斷行し能はざるが爲めに、口實を軍人の跋扈に藉りて內閣を投げ出したのであるといふ如き非難をするのである。

大凡西園寺侯の態度は立憲政治家として甚だ不得要領である。桂公は非難の多い政治家であるが然し今度の政變に對して自己の過去を懺悔する點に於て西園寺侯よりも寧ろ磊々落々であつた。即ち彼は新聞記者を集めて公然と自己の前非を悔悟して將來の助力を希望して居る。西園寺侯自らも前非を悔悟したやうであるが、然しながら侯自ら未だ嘗て一言も之を公けにしない。國民は只政友會の大部分が憲政擁護の運動をなして居るに拘らず、總裁なる西園寺侯が之を默過して居るから侯自らも此運動に同意なるならんと推測するに過ぎないのである。斯くの如きは立憲政治家の態度として決して賞讚すべきものではない。私は政友會なるものが若し眞に立憲的運動を喚起せんとする考を持つて居るなら、先づ其頭に戴ける非立憲的なる總裁に入を誡るの必要があると思ふのである。

然しながら桂公門らの態度が未だ眞に懺悔したる人としては誠實を缺いて居るやうてある。公にして眞に懺悔の赤心を有し、又眞に自己の政見を以て國民に訴ふる覺悟があるならば先づ國民の間に遊說して其政見を全じうするものと政黨を組織するの擧に出づべきてあつた。然るに公が玆に出てずして漫りに金錢によつて徒黨を狩り集め、又た恩義を賣つて同志を募り、停會に停會を重ねて敵黨を攪亂するの機會を作らんと試みたるが如きは決して公明正大なる態度とはいへないのてある。之れ桂公が其口に於ては磊々落々と前非を悔悟したるに拘らず尙國民の同情を得る能はず遂に今回帝都に於て見たるが如き國民の反抗的大示威運動を惹き起した所以てある。然し兎に角桂公は此大示威運動に僻易して遂に內閣を抛つたといふ事てあるが、其抛つや甚だ遲しと雖も而かも之を爲さざるに優る。今後は其國民に約束したる所を履行して、一切の進退を憲法の條規に從つて决せんことを希望するものてある。

要するに今回久しく藩閥の頭目てあつて且つ政黨の敵てあつた所の桂公が自ら政黨を組織するに至つたが如きは、桂公自らに取つても大いなる變化て、之を西洋の歷史に譬ふれば恰かも彼のサー・ロバート・ピールの穀物條例令廢止に對する狀態に似て居る。サー・ロバート・ピールはかの穀物輸入稅を制定した人てあつて、久しく國民の怨府の中心となつて居つた。然るに多數の人民が食物の騰貴に惱んで、凶年ならざるに餓孚道に橫はるといふが如き悲慘な狀態を生じたので、玆に彼のコブデン。ブライトといふが如き熱血ある政治家は起つて大いに自由貿易の急務なるを絕叫した。此のコブデン。ブライトの運動が國民の間に大反響を惹き起し、遂にかのサー・ロバート・ピールも此大勢力に反抗する能はざるを看破して、其與黨の中には反對するものも少くなかつたに拘らず、決然として從來の自己の貿易政策を抛つて、コブデン。ブライトと相携へて此穀物條令の廢止を斷行した。我國に於ける大隈伯、犬養毅氏などは即ちコブデン。ブライトてある。此等の人が幾十年間の淸節を守つて民權自由の爲めに

奮闘し、其絶叫が今や國民的反響を喚び起して藩閥に肉薄し、遂に桂公及び西園寺侯の如き人々をも自ら憲政擁護の本家たることを争ふに至つたが如きは、恰度サー・ロバート・ピールの變心に髣髴して居るのである。
然しながら今回桂公及び西園寺侯をして最後に至るまでサー・ロバート・ピールたるに至らしめ得るや否やは偏に今後の國民の監督の如何によるとてあるから、我等は此際國民が益々嚴重なる監督をなし、以て此等の政治家の懺悔を將來の行爲に於て實現せしむるやう強制せんことを希望するのである。（二月十一日）

高等寄生者

河上肇

私は茲に、高等下宿又は高等私娼の場合と稍々似通つた『高等』の意味に於いて、高等寄生者なる題目を撰んで置く。而して其の果して何を意味するやは、全篇をして之を語らしめたいと思ふのである。

共同生活が吾々の幸福を增進するが爲め最も利益ある事柄たることは、何人も疑はぬ所である。現に動物社會に在つて人間に亞ぐの文明を發揮し居る者は、かの蟻及び蜂であるが、彼等が驚くべき程度に發達したる共同生活を營み居れる事實は、人の能く知る所である。彼等は數萬のもの相集つて一の社會を形造り、更に社會を分つて三種又は四種の階級と爲し、階級毎に一定の仕事を分擔して、例へば生殖のこと、産業のこと、軍事のこと等、其れ〳〵分業的に經營して居るのであるが、吾々の見る所に依れば、蟻とか蜂とか云ふが如き極微の動物が今日の如き高度の文明を發揮し得たるは、一に此共同生活の賜であると信ずるのである。

茲に共同生活とは、多數の者が相互の利益の爲めに共同して生活するの謂てある。されば縱ひ多數の者が一つ場處に集合生活を營んで居ても、只だ一部分の者が働くのみてあつて、殘りの一部分のものは、遊んで居て、何の貢献もせずに、他人の勞働に依つて生活して居ると云ふわけてあるならば、之は決して共同生活と稱すべきものては無くて、其は即ち寄生々活に外ならぬのてある。遊んて食べて居る者が、働いて居る者の上に寄生して居るのてある。而して彼の共同生活は再々の幸福を增進する爲め最も利益あるものたると同時に、此の寄生々活は、畢竟社會困窮の一大原因たるものなることは、夙に學者の着眼したる所てある。

例へば或意味に於いて近世經濟學の鼻祖とも云ふべきアダム・スミスの『國富論』には、其の開卷第一の所で次の如き意味のことが述べてある。即ち各國民の年々消費する凡ての貨物は、各國民の勞働に依つて生ずるものてある。されば若し勞働の効果にして同一ならば、國民の貧富は、其の國民の中、自らは勞働せずして他人の勞働の產物を消費すと云ふが如き者の多少に依つて決まるものてあると。又た我國の三浦梅園は、我國の經濟學史に於いて或はアダム・スミスと同じ地位を占め得る學者と云つて必しも不可ならずと思ふが、此の三浦梅園は嘗て福田博士が指摘されたる如く、恰もスミスと同年に生れ、其の歿年も僅に一年の差あるのみてあるが、殊に面白いのは、其著『價原』を撰述した年は、恰も西曆一七七三年に相當するので、即ちスミスが一たび『國富論』の稿を脫し、其の原稿を懷にして鄕里のカーカルヂーを出發してロンドンに向つた年と同じてあると云ふ事てある。之は全くの餘談てあるが今ま我國に於ける理論經濟學者の嚆矢とも謂ふべき此の梅園の『價原』を見ても、矢張り社會貧困の原因を遊手の存在に歸して居る。彼が茲に遊手と云へるは、士農工商の外に、只だ進んて居て金を取つて居る者(今日の言葉て云へば不勞所得を取つて居る者)のことて、つまり社會の寄生者。其が社會の經濟をして益々貧血症に陷らしむる根本原因てあるから、之を驅除しなけ

れば爲らぬと云ふのが彼の議論である。

此の如く、寄生々活の害は夙に學者の着眼したる所にて、殊に東西の二大學者時を同うして先づ之を經濟學史の冒頭に道破し居るは、奇と云へば則ち奇なるも、また以て其害の如何に大なるかを察するに足る。而して今ま余の見る所に依れば、此の寄生々活の害たる、之を動物社會に徵する時は、更に一層明白なるものありと信ずる。

動物學上寄生々物と云ふは、一定の生物が他の生物に宿り、其の宿主の獲得せる食料又は宿主自身の肉體を食ふて生活し、之に適當せる對價を支拂はざる者の謂である。例へば蚤の如きは吾々人間に寄生して居る動物であつて、彼等は吾々の血液を吸ふて生活しながら吾々に向つて何等の代價を支拂はぬのであつて、即ち蚤は吾々人間と共同生活をして居るのでは無くて吾々の身體の上に寄生々活をして居るものである。人間社會にも此の蚤の如き人間が居る、而かも自ら稱して共同生活の一員であると云ふならば、蚤も亦た人間社會の一員で、相應の生存權を有し居る者と見なければ爲らぬ。

寄生々物には、外部寄生をする者と、內部寄生をする者との二種がある。例へば蚤の如きは外部寄生をする者で、蛔虫の如きは內部寄生をする者であるが、是等の寄生虫が吾々の幸福の爲めに何等の貢献をして居らぬと云ふ事は、何人も疑はぬ所で、現に吾々は之が驅除排斥の爲めに注意を怠らぬのであるが、今ま廣く吾々の經濟社會を見渡すと、矢張り何時の世にも斯かる寄生虫に類した人間が少からず居る。而して吾々は現に法律制度其他の手段を以て之が驅除排斥に努めつゝあるので、例へば乞食、盜賊、强盜、掏摸の取締の如きは即ち其の一例である。

併し乞食、掏摸と云ふが如き類の寄生者は、古より此の社會に存在する所のもので、決して近世的の寄生者では無い、且つ其害も割合に少いものである。近世的の寄生虫は近世の經濟組織に伴ふて發生した所ののであつて、之が驅除撲滅策が即ち近世の國民經濟上

に於ける最大問題の一てある。茲に所謂近世の經濟組織に伴ふて發生したる寄生虫なる者は、かの勞働者の階級にも居れば、又た資本家の階級にも居るかと思ふ。例へば失業勞働者の如きは即ち無產者階級より發生したる寄生者てあるが、かの有產者階級にも或は之に類する者が無いても無からう歟。

其は兎も角もとして、余の考ふる所に依れば、寄生者の中、恐るべきは他種の生物に非ずして同種の生物てある。蚤とか蛔虫とか云ふ寄生虫はさして恐るゝに足らぬが、恐るべきは吾々と同じ人間が吾々の上に寄生する場合てある。

姑く之を蟻の社會に就いて見るに、例へばポリエルグス・ルフェスケンスなる蟻は、フォルミカ、ルフィバルビス又はフォルミカ・フスカと云ふ小さな種類の蟻に寄生して居るのてあるが、其の寄生の狀態は吾々人間にとつて餘程參考に爲る點があると思ふ。彼等は前に述べた種類の蟻の巢を攻擊し、其蛹を誘拐して己が巢に連れ歸り、之を養ふて奴隸と爲し、一生其上に寄生するのてある。少く餘談なれども其の方法の一班を述べん

彼等掠奪を決行せんとするや、群を成して巢より出て、忙しげに其の前脚を以て頭部及び觸角を磨き、又た其の中脚及び後脚を以て身體を掃除し、斯くて其の準備を終りたる時は、何れも跳び上り、其の觸角を以て互に其の頭部を打つ、之れ即ち出陣の相圖にて、之に次ぎ數頭のもの先頭に立ち、數百又は數千の全軍、全速力を以て之に從ふ。其の軍隊の幅は約二三尺にて其の行軍の狀恰も掌大の蛇の匍匐して進むが如しと云ふ。かくて彼等は約十五六間の遠方にある他の蟻巢に向つて進軍する次第なるが、其の未だ到着せざるに先ち、之が攻擊を受くべき方に在りては、既に非常の騷を始むれども、所詮は其の甲斐なく、即ち彼等は凡ての抵抗に拘らず、直に敵の巢に侵入して其蛹を奪ふ。或は之に抵抗し、或は蛹を咬へて放さざる者は、一々之を咬み殺し、かくて數分間の後には、各々其口に蛹を咬へ再び列を成して引上ぐ。引上ぐる時は、進軍の時はど隊列は整はず、其の速度もさほど速かては無い。

而して彼等が其蛹を捕虜と爲して之を己が巢に持ち歸る時は、其蛹と同じ種類の蟻にて、既に以前より奴隸と爲り居れる者共、之を迎へ受けて巢に持ち運び、かくて其の本能に驅られつゝ、種々の苦心と注意の下に之を育て上ぐ。而して此の如くにして育て上げられたる蟻は、矢張其の本能に從つて各種の勞働に從事し、孜々營々として敢て怠ること無く、其の主人に對しては、之に向つて食物を供給し、又た其の身體を掃除する。然るに他方其の主人たる者は、所謂寄生的退化の結果、斯かる奴隸を掠奪し來るの外、何等の能力なき者と化し去り、食物の如きも奴隸に食はして貰はなければ、食物が眼の前に在つても自分で食べることの出來ぬ程のものに爲つて仕舞つて居る。

扨て今まで述べたる如き場合には、動物學者は强い方の蟻を主人と云ひ、弱い方を奴隸と名け居れども、其實は、弱い方の蟻が動物學者の所謂宿主であつて、其の宿主の上へ强い蟻が寄生して居る理なのである。而して斯かる場合の寄生關係に就いて吾々の注意すべき事は、第一は、寄生して居る者の方が寄生されて居る者よりも强いと云ふことである。蚤とか虱とかいふ者ならば、容易く捻り潰すことが出來るが、自分より强い者が强制的に寄生して來たのでは、其の寄生の害を免るゝことは誠に困難である。思ふに斯かる種類の寄生關係は、征服したる種族と征服されたる種族との間、又は母國と殖民地との間、或は同じ社會の階級と階級との間にも起り得る關係であるが、何分にも寄生されて居る者の方が弱いのであるから、其の寄生關係を破ることは甚だ困難である。是れ其の注意すべき第一點にて、其の第二點は、寄生されて居る者は、其の本能に驅られて他人の爲めに働いて居るのであるから、殆ど何等の不平なく、自己の不利なる狀態を自覺せずして打ち過ぎて仕舞ふと云ふ事である。近頃外國に輩出しつゝある彼の恐ろしき女權論者の一群も、女子の軍人たり得ざることを不平としては居らぬ。天性本能に本く差別不平等は、何時如何なる所に於いても當事者の不平と爲り得ざる者である。されば此點より見るも

上述の寄生關係は容易に破れ得ぬ者である。

乍併、此の如き寄生生物を或る生物が負擔して居ると云ふことが、其の生物の進化にとつて不利たるは殆ど言ふを待たぬ所であるが、殊に注意すべきは、彼等の進化が寄生物の爲めに故意に妨げらると云ふ事である。蓋し彼等が或る程度以上に發達して來ると云ふことは、彼等の上に寄生して居る强者の爲に生存の危險を來たす所以であるから、强者は出來得る限り彼等の發達を妨げる。尤も强者それ自身が彼等の上に寄生して居るのであつて、彼等が滅亡すれば己等も亦た之に伴ふて滅亡する理であるから、强者は彼等が滅亡せざる程度に於いては絕へず之を保護して行くけれども、其より以上の發達をすることは常に之を妨げる。故に此の如き寄生々物を或る生物が負擔すると、其の生物の發達は殆ど止つて仕舞ふ。然るに、既に其の生物の發達にして止ると云ふ以上、其上に寄生して居る寄生者の發達も亦た、之に伴ふて自ら止まらざるを得ざる理である。されば斯かる寄生關係は、寄生されて居る者の爲めに不利たるは勿論、寄生して居る者の爲めににも結局不利であつて、此事は寄生動物の中に曾て立派な發達をし、充分な發展をした者が無いのを見ても、能く分ることとである。是の故に余は、かのポリエルグス・ルフェスケンスの爲めに、將たフォルミカ・ルフィバルビス乃至フォルカミカ・フスカの爲めに、彼等が一日も早く其の寄生關係を廢止せんことを希ふ。見よ、人類社會に在りては、夙の昔に奴隷制度は廢止され、又た米國殖民地も遂に英本國より獨立して、北米合衆國となつたては無い乎。ポリエルグス・ルフェスケンスよ、汝等宜しく其の奴隷を解放せよ、是れ奴隷等の利益にして又實に汝等の利益である。

之を要するに、共同生活は社會の進歩を促せども、寄生生活は貧困の原因にて、社會の進運を阻害するものである。然るに共同生活と寄生々活との區別は、共の寄生々活が同類寄生たる場合に於いて、特に識別し難く、現に近世の經濟社會に在つても、或者は眞の共同生活をば寄生々活と誤解して盛に之を攻擊し、或者

は眞の寄生々活をば共同生活と曲解して頻に之を謳歌しつゝある。今ま此の一篇の論は、只だ蟻の爲めに老婆心を陳ぶるのみ、姑く人類社會の現狀に就いて具體の見を立つるを避けたれども、詮ずる所、强者弱者の本能を利用して之に寄生し居る場合には、弱者は敢て自己の不利を自覺するに至らず、自ら其の地位の改善を企つるの能力なきものなれば、其の寄生關係は知らず識らずの中に永く維持せられて、大に社會の進歩を妨ぐるに至るものであるから、斯かる寄生關係の存在又は發生に向つては、識者たるものゝ常に充分なる注意と警戒とを以て之が研究を怠るべからざる所なりと信ずる。時正に草木凋落の秋、嘗て營々として我が庭前に稼ぎし蟻の今ま地中に於いて何を感じ何を樂みつゝあるかを思ふて、玆に筆を擱く。

政局紛糾の源をなせる

憲法問題

帝國憲法の根本義

法學博士 筧 克彦

日本の帝國憲法は何人も知るが如く明治二十二年に初めて發布せられたので、大體からいふと西洋諸國の憲法に範を取つたと評しても差支はないだらう。けれどもそれは表面の事實丈けを見たのであつて、本當をいへば、かゝる大憲が一朝一夕に、而かも人眞似によつて出來たものではないので、其根據は建國の當初からしてあつたのである。否な建國よりも、もつと古く、建國以前即ち神代からして日本の民族にはさういふ精神が到る處に現はれて居つたのである。それはもう疑ない事實である。イヤ疑ない所ぢやない。我々が段々昔の記錄を調べて見れば見る程其事實が益々確實になつて來るのである。支那の思想が入つてから日本の文明開化は進んだに違ひない。けれども其支那思想の精髓を見事に引拔くことが出來たのは、日本は少くも建國の時から健全なる精神を持つて居たことを證據立てるのである。獨り支那思想の精髓を持つて來ることが出來たのみならず、之を日本の精神によつて變化して用ひて居る。儒敎が來ても其通り、又佛敎が來ても矢張り其通りであつた。聖德太子などは世の所謂愛國者などから佛敎かぶれの人のやうに批評せらるゝけれども、聖德太子は外國の思想を統括包容して、日本固有の美なる點を益々發揚せんと心掛けられた御方に相違はない。支那の天子に對して「日出づる所の天子日沒する所の天子」云々と言つてやられたのを見ても、支那の天子と對抗し其上に立たれんとの御精神であつたことが分る。其後思想上にいろ〳〵の波瀾があつたけ

れども、何時も外から來た思想を日本の生命、精神に化して居る。時として日本の缺點を補ふやうな方面をも採り入れてあるが、大體に於ては、日本の氣象に合ふ方面を主もに採用して、さうして日本化して居るのである。

斯く申せば內容の無い、甚だ漠然たる空論のやうであるが、內容を見ると、此事が最もよく分るのである。煩はしさを避くる爲めに、今一々何の記錄にどう書いてあるといふことは省くが、先づ神代に榮えて居つた思想や、神武天皇建國の御趣意について見ても、上下の一心同體といふ事は確定不動の事實であつた。これは、相方に都合のよい協同の目的の範圍について假りに一心同體にならうなどゝいふ、そんな薄弱なものでない、本來の一心同體であつて、上と下とは全く歸一して居る。イヤそれを通り越して上が下を敬ふといふ所までも行つて居る。現に高天原では　天照大御神は高皇產靈神と御一所に、天孫以下世々の御子孫を天に於て祭つて御出になる。又　皇室に於かせられても皇大神宮の外宮として祭つて居らるゝは　豐受大神であつて、其　豐受大神と申すは農民の大恩人たる神樣である。此農民の大恩人たる神樣を御先祖の　天照大御神と御一所にお祭り遊ばしてお出になる。

今次に少しく本來の一心同體といふことを分折してお話して見ると、之には二つの方面がある。一つは日本は昔から動かないといふ方面である。日本は元、農業國であつたからして、天體の四時規則正しく運行して違はぬといふ事や。自分の田や畑が幾十年も依然として變らずに存在することや。其田や畑には種を播かねば植物の生えぬといふことや。播いた種は一定の理法によつて生長繁殖するといふ事などを觀察して、動かぬといふ事が深く頭に染み込んだものと見える。此物には動かぬ根柢があるといふことの信念が、日本の神道にあらはれて、又日本の國體にも決して動かぬといふ觀念が基礎となつて居る。之は一方の保守的、靜止的の方面であるが、それと共に他に進歩的、活動的の方面が儼存して居る。それは創設の方面である。創

造、化育、生成の方面である。之も亦農業と大關係がある。農作物は一定の理法に從つて出來るけれども、作物は矢張り内分自らの內部の力で以て發育するといふことが著しく意識せられ、又天然の力の外に、人間の力で手傳なければならぬといふやうな事も感ぜられた。その他農作に關するいろ／＼の關係からして創設といふことが大切となり、動かざる基礎の上に創設するといふ根本觀念が作りなされた。それで神樣の上についていうても最も大切なのは動かざる所の　天之御中主神である。此神の上に　產靈神を認めて居る。

此　產靈神は物を創造、化育、生成する神である。けれども只無暗に創造化育生成するのではない。百姓が物を作るにしても其作物の生成といふことを喜ぶ。非常なる愛を以てする。子を產むのも憎んで產むのではない。愛と離れぬ所の創造である。愛の創造、創造の愛である。此創造をなす　產靈神を　天照大御神と御一所に考へて見るといよ／＼双方の神樣の性質が明かになる。天照大御神は　高皇產靈神と御一體をなして居る神樣である。御一體と申すのは委しくいへば產靈神と共々にお仕事をなされ、又產靈神のお言葉によつて仕事をなされ、又產靈神の繼承者として仕事をなされたお方である。先づお名からして見ても　天照大御神と申上げ、恰かも太陽の洽ねき創設的の慈悲を垂るゝと同一のお名をおつけ申してある。怠け者だから日が照らぬとか、憎いから光線を與へぬとかいふ事がなく、誰にでも一樣の惠を與へる。然し只無暗に可愛がるんではなくして、物を創造し生成せしむることと離れぬ愛の力慈悲の力である。さういふ太陽の德を以て形容さるゝ神樣であつて、素盞嗚尊の如き荒魂を主とせらるゝ神樣と相對立して居る、素盞嗚尊は其荒魂の爲めに充分に國土をお治めになることが出來なかつた。天照大御神は和魂を以て六合に照臨せられた。即ち高天原にお出でになつて世界を總攬なされた。それて天孫に詔のあつた時にも三種の神器を賜つたのであるが、鏡は各人の本來の一心同體をあらはし、劍は神道に於ては昔から創設といふことをあらはして居る

伊弉諾、伊弉冊の尊が劒を以て磤馭盧島を作られといふのも詰り劒を以て國土を創設せられたのてある。そして要は萬世一系のことをあらはして居ると思ふ。此三種の神器を天孫に降し賜つて、萬世一系天上無窮の皇位と共に日本の國是とせよとのお言葉があつたのである。

天照大御神は固より和魂を主としたお方てはあるが、和魂計かりてはなく荒魂の方、即ち强制力を以て威壓する方面をも持つて居らるゝ。例へば　神功皇后の三韓征伐の時に　天照大御神は　撞賢木嚴之御魂としておあらはれになり、神功皇后の仕事をお守りになつたのてある。天照大御神の荒魂即ち　撞賢木嚴之御魂は其後攝津の廣田神社にお祭り申してある。伊勢にお祭り申したのは、天照大御神の和魂丈けてある。日本の社の中て最も大切なる伊勢の大神宮は、内宮としては　天照大御神の和魂、外宮としては農民の本てある所の　豊受大神をお祭してある。世々の　皇室初め人民が何を措いても先づ此大神宮様を忘れずして、此神様と歸一して仕事をせんとするのは昔から動かぬ所の、我國是てある。

此外　大國主命といして國土經營殖産興業の事について著しくお手柄があり、今ても引續いて人の心の中から去らぬ神様がある。此神様も初めは荒魂を主とせられ强制力て以て威壓してやらうとされた。處がどうしても旨く行かない。それて大變に心配して居らるゝと、一日或神様がお現れになつて、自分を祭つて自分の魂になつて國を治めればよく治まると仰せられたので大國主命は甚だ怪しく思ひ、私てさへ思ふ様に行かぬ事を遂げさせて下さるといふお方とは一體どなたて御座るかとお聽きなされたるに、イヤ我は汝の和魂てあると仰つた。それて　大國主命は自分の和魂をお祭りし和魂を主にして上下本來の一心同體を發揚され、國土の經營も初めて完成された。其　大國主命をお祭りしてある神社は、日本全國の中て、特別に大社といふて居る。即ち出雲の大社がそれてある。それから其和魂を祭つたのは大和の大神神社てある。

さういふやうな譯であつて高天原に於ては固より、豊葦原に於ても抑壓とか、威服とか、强制とかいふ事を主義とするのでもなく、又利害關係を基礎とするのでもなくして、上下の愛によつて、本來の一心同體を創設する、又は本來の一心同體を氣を揃へて發揚することを主義として來たものである。而かも只御一人がさうであらせらるるばかりでなく、實はお上も下々も皆其積りで來たので、お上は常に其總攬者でいらせられたのである。又總攬者と被總攬者間の分は決して亂るゝことがなかつたのである。

こんなやうな風に和魂が主であつたけれども、和魂といふものは前にも申した通り、只優しいとか柔和だとかいふ丈けのものではない。何時でも大創設といふことゝ離れぬ魂である。恰度太陽の恵の物を創造すると同じ力である。それだからして佛教なども日本へ來てからして、佛の人格的方面が非常に重きをなして來た。眞言宗でも眞如といふ如き力のない理論の代りに大日如來といふが如き人格的佛が出て來た。又淨土宗に於ても阿彌陀佛は普慈の主體たる人格的の佛である。又特に日蓮宗のやうなものは、其本佛が人格的の釋迦と離れざるのみならず、日本を中心として、其眞正なる所を世界に擴張することを主義としたもので、創設の方面の最も著しきものである。漢學なども日本へ來ては只の支那風の漢學ではなくなつて、日本流の漢學になつて居る。近い所では陽明學などは支那の方に餘り發達せず、却て日本へ來てから盛んになつて益々其光輝を發揚して居る。日本にはなか〳〵強い所がある。自分の信ずる所、自分の生命を中心として之を世界に擴張し、世界を改造せんとする氣慨がある、それ位であるから、自分の純粹の理想生命を發揚する爲めには、外のものを、いくらでも採用して少しも躊躇しない。いゝ事は一つも見遁さずして之を輸入することを努める。而かも自分の大主義、大理想、大生命は決して之を失はない、又動かさない。それで日本は神代からしていろ〳〵の變化はあつたものゝ、今日まで一つの大主義、大理想、大生命の連續したものであ

る。それだからして日本の今日の文明といふものが、明治維新以來出來たなど丶思ふのは大變な間違てあつて、遠い〱神代からして連續して居つたのである。日本の生命は維新以來の短い生命ではない。今生きて居る人間が、三十年とか四十年とかの間に今のやうな人間になつたなど丶思ふのは大間違てある。親の親の親の又其親から――イヤ少くとも三千年來の大生命の續きてある。

そこで今日の憲法の根底も一方にはそこに根ざして居ることを考へなければならぬ。實をいへば憲法の如きは、其解釋に於ても、其運用に於ても、加之其規定に於ても日に日に新たにして、又日ゝ新たなるの必要あることが確かである。一度作つたからとて變へてならんとか、一度斯う解釋したから其慣例に從はねばならんなといふ。そんな、凝然不動の死んだものでない、けれども同時に新たになればなる程、動かざる所の大生命を益々見事に發揚することが出來るやうでなくては駄目てある。其主義理想までも動かせるならば是れ憲法の改新發達にあらずして破壞蹂躪になるのである即ち憲法の憲法たる生命を失ふのである。其大主義大精神を失はずして益々之を新たに發揚せしむるのが、誠の進歩である。不動の根據の上に日に日に新たなる發展をするのが眞正の改善進歩である。

之を手近い所について見ても、憲法は明治二十二年になつて初めて發布された。之が制定されるには卑近ないろ〱の手續があつたに相違ない。けれども其卑近な錯雜した事實の後ろに決して動かぬ、統一した大主義大理想を見なければ役に立たない。明治の御維新が出來たのも、國内に於けるいろ〱な勢力の關係もあらうし、又外國から刺激を受けたいろ〱の事件もあつたに相違はない。然しそれ等の内外の力を纒めて其方向を定めしめたものは決して偶然な主義や出來事てない。夫には殊に幕府の中頃からして盛んに起りかけて來た國學によつて日本古來の大精神が自覺せられたことを忘れてはならぬ。それによつて神道を旗印として之を助くるに儒敎を以てし、而して政治上の復古

革新をもなさしめたのである。故に一方に於ては西洋に模倣することが其頃から大袈裟に行はれたと共に一方に於て動かざる大主義大理想といふものを發揚したのである。それで明治元年の御誓文を見ても其趣旨があり／＼と見えて居る。或は御誓文は外國の精神を採用したものだといふ人があるかも知れん。夫も手近の所にていへば尤であるけれども、外國に於てもいろいろの精神もあり主義もある。之を僅かに五箇條に抽き拔いた、其抽き拔き方は、神道の精神がなければ出來ない仕事である。一體どんなものでも之を分析すればあらゆる物を含んで居る。只、本來の關係の存任する所に妙味がある。何が本であり末であるかを分つのが拔も精神を要し力量を要する所である。明治元年頃にはまだ外國の事情が根本的に研究されても居らぬのに、其中から抽き拔いた五ヶ條は如何にも活躍して居るのである。是れ全く内外の状況に鑑みて神道の精神によつてなされたからである。

一體神道といふものは日本丈けの偶然の道でない。これは世界の道である。故に外國の事情に照して神道が益々其光を發揚するに至るのは決して偶然でない。御誓文の箇條は短いから之について多少の解説を試みて見やう、之れは大體二つに分れる。一つは國内について見た事で、一つは廣く世界について見た事である。其國内について見た事の中は三箇條に分れて居る。其一つは「上下心を一にし、盛んに經綸を行ふべし」といふことで、之は實に和魂の主義を外の言葉を以て書いたものというてもよいので、何も西洋の翻譯をしたものでない。西洋の有樣に鑑みて我和魂の精神をいひあらはしたのである。「上下心を一にし」といふ方は一心全體なる所以を發揚しなければならぬことをいひ、「盛んに經綸を行ふべし」といふは創設作用を意味して居るので、經綸といふ事には特に注意しなくてはならぬ。先づ國内について自ら一心同體となり、其一心同體たる所以を創設しなくてはならぬ。そして之を擴張して世界を經營しなくてはならぬといふのである。處で之を行ふ方法については、「廣く會議を起し、萬機公論に

決すべし」といふのである。之は御誓文の一番初めに出て居るが、御誓文は學理を主としたものでなく、實行の必要から出たものであるからして、其方からいふと會議に決するといふ形式が適切に自覺された爲めに初めに持つて來たものと思ふ。それから「官武一途、庶民に至るまで各々其志を遂げしめ、人心をして倦まざらしめんことを要す」といふ事があるが之も日本の昔からの主義であつて、神道は專制的でないといふ事について世界の標本とすべきものと信じて居る。支那文明の輸入後、兎角專制の形式なども行はれた事があつたが、西洋の有樣に鑑みていよ／＼其の神道主義を自覺して斯くの如き御誓文の箇條によつてあらはれた事と思ふ。此「庶民に至るまで各々其志を遂げしめ」といふ事が實に尊い事と思ふ。乞食一人でも之は即ち國家である。皆他人を以て代ふべからざる所の日本の大生命を表現して居るものである。此日本人たる乞食某を外に求めたつて古今東西何處にだつてありはしない。况んや良民たるものが自己の自由心證に基いて行動することは此上もなく神聖なものである。之を認むるによつて之を總攬するによつて上下の秩序を誤らず、之れを統括するによつて初めて本來の一心同體といふものが發揚せらるゝのである。扨之に對して御誓文の他の二箇條は世界との關係についての事で「舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし」といふ事が一つ。之は聖徳太子なども特に重きを置かれた點である。いくら日本は神國でも差當りの處に於ては不完全の所があるに相違ない。それを破り之を補ひ之を轉ずればこそいよ／＼以て神の國たる本質を發揚せらるゝ事になるだからして古に復ると云ふ事は本當の哲理的の古に復らなくてはならぬ。只今までして來た事は何でもよいといふ事ではない。之も亦神道の趣旨である。其次には「知識を世界に求め、大いに皇基を振起すべし」といふ事がある。斯くの如き御誓文に基いていろ／＼盡力した結果遂に憲法の條文として之を發揚したものであると思ふ。

それて憲法を解釋し、又は之を運用するには、どうし

ても此御誓文の趣意を忘れてはならぬ。否な憲法は全く古神道の趣意であつて、昔からして動かぬ大いなる神の道に基いたものである。それて明治二十二年の憲法は根本に於てなか〳〵深い長い生命を持つて居るのである。又此憲法を解釋するについて必らず參照せざるべからざるは、憲法發布の時の勅語である。日本帝國憲法は欽定憲法であるんだからして御發布の時の勅語は是非參照せなくてはならぬ。けれどもそれては實はまだ淺薄である。實は欽定憲法と矛盾せず、然も夫れ以上の神定憲法である。夫故に憲法發布の時に神樣にお告げになつた御告文を見なくてはならぬ。御告文を顧みずして、憲法發布の勅語を讀み、憲法發布の勅語を讀まずして、憲法の條文のみを論ずるのは實は魂のない體をいぢるやうなものであつて、決して憲法の眞精神を解することが出來ない。先きの五ヶ條の御誓文といふものも其の名前の示すが如く御誓文であつて即ち天地神明に誓はれたものである。其御誓文にも「我國未曾有の變革をなさんとし、朕躬を以て、衆に先んじ、天地神明に誓ひ、大いに此國是を定め、萬民保全の道を立てんとす。衆も亦此趣旨に基き協心努力せよ」とある。實に有難いお言葉て全くの神道流てある。此天地神明に誓ひ給ふといふ點は一層眼を着けて見なくてはならぬ。御告文に至つても文こそ違へ同じ趣旨てある。先づ一番初めに「 皇朕れ謹み畏み 皇祖 皇宗の神靈に誥け白さく」といふお言葉が出て居る。中の御趣意を見ても、決して憲法を 明治天皇陛下の御獨斷で御定めになつたとか、或は西洋に倣つてお定めになつたとか、或は委員をして考案せしめたとかいふやうな事はない。それは形式に於ては何れも必要であつたらうが、根本の精神が已にさうてない。從つて假令如何なるお手續を以てお定め遊ばしたにしても詮ずる所皆古來の大生命を發揚したものに外ならぬのである。故に御告文の中にも「皇朕れ天壤無窮の宏謨に循ひ惟神の寶祚を承繼し」云々とある。此惟神といふ事に注意しなくてはならぬ。又「宜く 皇祖 皇宗の遺訓を明徴にし典憲を成立し」といふ事もあり、又「昔

皇祖、皇宗の後裔に貽したまへる統治の洪範を紹述するに外ならず」ともある。又此出來上つたものも只明治天皇陛下の御一身のお力で出來たものとも御覽になつていらせられぬ。昔からの大主義大生命が追々に發揚して終に此結晶をなしたものと認めてお出になる。それで御告文中にも「朕が躬に逮て時と倶に擧行するを得るは洵に　皇祖　皇宗及び我が　皇考の威靈に倚藉するに由らざるは無し」と仰つて居る。

而して尚此憲法の運用については何處までも、神佑が基になつて居る。人間の權謀術數によつて運用するといふのではない、天子樣初め神樣のお助けをお祈りになつて、神の大いなる表現者として之を運用せしめんとお誓ひになつてお出になる。我々と雖も皆其積りで神樣を祈つて、神に歸一して、私を去り、表現者として行動せずんば決して　陛下の御趣意に添ふことが出來るものでないのである。吾々と雖も只憲法によつて統治せられて居る丈けのものでない。憲法の運用については我々も皆責任を持つて居るものである。それて御告文中にも「臣民翼賛の道を廣め」といふお言葉がある。尚「朕が現在及び將來に臣民に率先し此憲章を履行して愆らざらんことを誓ふ」とお述べになつて居る。臣民に率先してといふは臣民を率ゐて臣民と共にと仰つやる意味であることは明かである。其事は尚憲法發布の勅語を參照すれば一層明かであらうと思ふ。憲法發布の御勅語には憲政の實を擧ぐることについてお上に希望を同じくし「此の負擔を分つに堪ふることを疑はざるなり」といふ事がある。固より臣民はお上と負擔を分つても臣民は臣民であつて、天皇は何處までも總攬者であることは疑ない。けれども國民が惟神（かんながら）の道を發揚し、其上に存在して居る所の憲政の大事業を完成することについて努力しなければ、よく忠君愛國の實を全うしたものといふ事が出來ない。其事は御告文並びに憲法發布の勅語をよく讀めば更に疑ない事であるから、詳く述べることをやめる。

斯樣な次第であつて、憲法の箇條〳〵を一々調べて見ても、古神道の大主義、御誓文、御告文及び御勅語

の御趣意は到る處に活躍して居る。日本皇國は上下一般の間に存在して居る所の根本的の活きて居る所の大生命である。國家といふものは只治者と被治者との間の關係として存して居るに過ぎぬものでない。我々の中に存在する普遍的の大生命をいふのである。大日本帝國は昔から變らぬ所の形式によつて發揚せられつゝある普遍我である。又日本の國權といふものは天皇の總攬の下に成立する所の上下一心同體の普遍意思である。法律も亦さうである。只之は規律普遍意思であるばかりである。議會、裁判所、國務大臣の如きも皆其自由心證に基いて眞正なる普遍意思を表現しつゝあるものである。而して政體は益々發達して日に日に新たになつて行つても國體は萬古決して變ることがない。之が皆古神道の大趣旨であつて、同時に又憲法の直接間接に規定して居る所である。（二月十一日）

我憲法と政局

法學博士 上杉愼吉

憲法を專攻する者として刻下の政局を如何に見るかと云ふお尋ねであるが、所謂刻下の政局なるものゝ眞相を詳く承知致さぬから適切なるお答へも出來ぬ次第であるが、項目を分けてお尋ねであるから其れに對してお答致さう。（一）桂公の聖詔濫奏は非立憲なるや否やと云ふお問の意が分らぬ。第一に非立憲とは如何なる意か、憲法違反と云ふのか、又は唯だ不都合であると云ふのか。次に聖詔濫奏とは何か。假りにも上御一人の御思召に對して斯樣の不遜なる語を發すべき筋合のものでない。先頃衆議院に於て多數の議員より勅語は何人が之を奏請したりやとの質問が出てたが、かゝる無遠慮なる事を申して上を恐れざる心持を有するに至るとは誠に嘆息に堪えざることである。（二）宮中と府中とはお問の通り制度上分れて居る限り混同してはなら

ぬ。(三)勅語には式を具えて發せらるゝ詔勅と區別すべきものがある。法律上一定の效果を生ぜざる御沙汰の覺書に副署なきは當然。(四)國務大臣たる者は其の輔弼の職務に對し天皇に對して責任あり。法律上天皇の外に大臣を糺問する權能ある者は無い。然かし大臣の責任は副署したる事のみに限らぬ。輔弼は不斷何事に就ても存する以上副署なき事に就ても天皇より糺問せらるゝ場合あらん。又大臣は道德上國民一般に對し責任あり。後世歷史の批評を免るゝことは出來ぬ。之は大臣に限らず凡て公人に共通のことてある。(五)されば議員とても議院内に於ける言論の自由に藉口して士人の批評を免るゝことは出來ぬ。お尋ねの尾崎某の演説迷說を見れば誠に不遜なる放言を爲したるものと思ふ。事柄の是非は兎に角上を恐るゝ心あるならば同じ事を申すにも謹愼なる云樣があるべきものと思ふ。其れにつけても世論の之に對して大に起らざるは如何なることであろうか。煽動に雷同して暴擧を敢てする輕卒者は多けれども眞面目なる憂國者の少きは前途を思へば誠に憂慮に堪えぬ。

今次の政局に於ける憲法問題

法學博士 副島義一

一、桂公の聖詔濫請は非立憲なり

桂公は其の内閣組織に際し、聖詔の降下を奏請し、以て僅かに之を遂ぐることを得たり。是に於て此の組織は非立憲なりとの批難が紛起したり。抑も非立憲とは何ぞ。曰く立憲の主義に非違せるの謂なり。然らば立憲の主義とは何ぞ。言ふ迄もなく明治元年の御誓文に明示ある如く、廣ク會議ヲ起シ、萬機公論ニ決ス是なり。夫れ天下の政治は正義に適はざるべからず。而して正義は會議と公論に依り之を見出し得べし。是れ政治上最良の主義にして、御誓文に明示ある如く、亦我國の國是なり。我政治の大元則なり。而して憲法は

此の大元則を以て其の主義の重要なるものゝ一として制立せられたるなり。是れ即ち立憲の主義なり。從て內閣の組織に際しても亦此の主義に則らざるべからず。然るに今次桂公一派の內閣を組織するや、敢て公論に據りたるにあらず。其の宮中の人なるに拘はらず、先づ種々陰險なる手段を廻らし、西園寺內閣の瓦解を釀成して其の辭職を强要し、然る後勅語の降下を奏請し、以て宮中より出てゝ府中の人と爲れり。是れ自己は元と內閣組織の意なかりしも、唯聖旨の降下あり、萬止むを得ざるに出てたるのみとの口實を以て西園寺內閣破毀の實を蔽はんと計りたるなり。即ち西園寺內閣の政策及其の施行に付ては敢へて反對し駁擊したるにあらず、唯無意義に之を倒して之に代りて以て政權を握有したるのみ。而して其の辯解の方法として聖詔の降下を利用したるものにして、万機公論に決するの主義に從ひ內閣を組織したるにあらず。其の立憲の大元則に非違するものたるや、昭々として明かなり。桂公は勅語に奏請者あるべき理なしと辯解せるも、是れ甚しき誣妄なり。固より勅語は何人の奏請もなく、天皇の獨斷にて發せらるゝこともあらん。然れども大臣たる者は場合に由り必要に應じ勅語の降下を請ふことあらざるべからず。而して勅語降下の奏請其事が必ずしも非違なるにあらず、唯勅語の降下に依り自己の罪惡を蔽ひ自己の責任を免れんとすること其事が立憲非違の行動たるなり。然るに勅語に奏請者ある理なしと云ふは一般の事實を誣ひ、又今次の勅語降下の事實を瞞着するの辯解なり。輿論の紛起せるは當然なりと謂はざるべからず。

二、宮中と府中の區別

國家の政務に關しては、宮中と府中には嚴肅なる區別あらざるべからず。明治元年四月二十七日の政體書に「天下ノ權力總テ之ヲ太政官ニ歸ス」とあり。是從來國家の政治が多方に出てたる弊害を杜絕し、以て政令をして必らず一途に出てしめんが爲めに發せられたる我國政治上の一大元則なり。而して當時の太政官は即ち今日の內閣なり。內閣は即ち國家政務の出づる唯一

の大本なり。蓋し凡ての事業には責任者あらざるべからず。然らずんば事業の整理及其目的の遂行は得て期すべからざるなり。而して國家の政治は事業中の尤も重大なるものなり。必ずや此の責任者存せざるべからず。是を以て憲法には國務大臣の輔弼の職を掲げ、其責任を明記せり。故に責任を負ふ所の國務大臣は國家政治の本源たらざるべからず。即ち府中が政權の中心なり。是れ即ち政體書の大旨なり。今若し政治上の責任を負はざる宮中官が濫りに政治に容喙するが如きことあらんか、是れ則國政をして多方に出てしめ、其の紛亂を釀成せしむるの開端にして、明治元年の政體書の大旨並憲法の主旨に反するや大なり。是れ大に排斥せざるべからざるの事態なり。

故に宮中と府中の區別を嚴肅にせんとするには、現制の公式令に於て國務に關し宮内大臣若くは内大臣の副署すべき場合を規定せる條項の如きも亦之を改むるを要す。

内大臣府官制には「内大臣ハ常侍輔弼シ」とあり。而して憲法には國務大臣が天皇を輔弼すとあるに由り兩者の間に衝突を生じ得るやの如く見らるゝも決して然らざるなり。それ國政には宮中府中の區別あるは前述の如し。而して國務に關し、既に國務大臣が輔弼の職を有する以上、内大臣が復た國政に關し輔弼の職を有するものにあらざるや明かなり。何となれば内大臣府官制は憲法の規定を變更するの効力を有するものにあらざればなり。然らば内大臣は國務大臣と同一の輔弼の職を有するものにあらず。内大臣は唯内大臣府の事務にして、國務大臣の職務に屬せざる事項に付輔弼の職を有するのみにして、主として聖旨と國務大臣の献替とを奉行するの職を有するのみ。故に内大臣たるものは公平忠貞にして一片自己の私心を交へず、專ら此の職務を盡すことに誠實なるを要す。然るに桂公の内大臣の職に在るや、此の本旨に戾りしこと多し。桂公に對し新帝を擁して天下に號令せんとする者なりとの非難の起る亦當然なりと謂はざるべからず。

三、詔勅と勅語

詔勅とは天皇の意思發表なり。天皇が其の意思を發表するには或は口頭を以てすることあるべく、或は文書を以てすることあるべし。而して憲法第五十五條第二項には：：「國務に關する詔勅は國務大臣の副署を要す」とあり。故に天皇が國務に關し意思を發表するには國務大臣の副署を要するなり。既に副署を要するものなれば、文書を以て發表せざるべからず。從て天皇の國務處理の爲に意思を發表するには文書を以てし且つ國務大臣の副署を要するなり。若し副署の具備なくんば、國家的處理の命令たる効力なきなり。然らば天皇は口頭を以ては一切國務を處理するを得ざるかと云ふに、何ぞ必ずしも然らんや。事物の性質上必ず口頭を以てするを得るもの亦あるべし。例へば大臣に副署を要求し、又は大元帥として軍隊を指揮する場合の如し。而して天皇が口頭を以て意思を發表する場合には大臣の副署を爲し能はざるは固より辯を待たざる所なり。此の口頭の意思發表は所謂勅語とは亦之を區別せざるべからず、從來の所謂勅語なるものは之を文書に認め、又之を內外に公示することを得るものなり。口頭の意思發表即ち言語は口より出て耳に入れば直ちに消滅するものなり。故に此兩者は之を區別せざるべからず。然らば勅語とは何ぞ、勅語も詔勅の一種類なり。勅旨を文書に認めたるものなり。然らば其効力如何。苟くも憲法に國務大臣の副署を以て國務處理の必要條件と爲せる以上は、副署なきものを以て國務處理の効力を有するものと爲すを得ず。故に斯る副署なき詔勅は若し國務に關するものなるときは天皇の政治の希望、注意、勸告等の實質を有する意思發表と爲すべきのみ。決して國家的命令たるの効力を有せざるなり。而して是れ天皇の口頭の意思發表も同じき所なり。故に例へば桂公に內閣組織の御言若くは勅語降下あり、桂公は內閣組織を辭任するも決して不法にはあらざるなり。唯不法にあらざるのみならず內閣組織を以て不當と信じ、若くは組織の任を全ふするを得ずと信ずるときは之を辭するを得るなり。又辭せざるべからざるなり。之を辭せずして內閣を組織す即ち其の責

任を免るゝを得ざるなり。

四、國務大臣の責任

國務大臣は天皇を輔弼し、其の責に任ずとは憲法第五十五條第一項の規定する所なり。輔は贊襄なり。弼は匡正なり。故に國務大臣は天皇の適法適當の政治ある樣に贊襄せざるべからず。又天皇に不適法不適當の政治なき樣に匡正せざるべからず。若し此の職分を盡さゞるときは即ち其の責を免るゝを得ざるなり。今天皇の政治上の行爲に付不適法又は不適當のことあらんか、大臣は其の匡正の職分を盡さゞるが爲に其の責を負はざるべからず。例へば天皇が勅旨を降下することあり、其の勅旨の降下が政治上不適當の事ならんか、此の降下を奏請したる者、又は之を奉行したるものは其の責に任ぜざるべからず。而して其副署の有無は責任問題には何等關係なきなり。且つ勅旨の降下に付奏請も爲さず、奉行したることなきも、不適當の勅旨降下あるを知らば之を諫止して匡正すべきは亦國務大臣の職分とする所なり。大臣に對する責任の問糺は議會に於て之を行ふこと其の權能上當然の事なれども、又一般國民も亦之を問糺するを得べし。是れ明治天皇が屢々聖旨を宣詔して臣民の翼贊を期待せられたる大旨に適ふものなり。桂公は切りに勅語と詔勅には區別あり、又勅語には奏請者なき事を辯解せるも、是れ自己の責任を免るゝ爲めの口實としては何等の効力なき贅言たるのみ、假令勅語と詔勅とに區別ありとするも、大臣の責任には何等の差別なきなり。又假令勅語に奏請者なしとするも、苟くも之を奉行したる以上は責任を免るゝことを得ざるなり。桂公は是れ勅語なり、詔勅にあらずとの一言を以て、其の副署なきこと、奏請者なきこと、及責任者なきこととの辯解を爲すに十分なりと爲せるも、是れ大なる欺瞞の辯解たるなり。

五、尾崎氏の演說の批評

去る五日衆議院に於ける尾崎氏の演說は其大體の主旨に付て吾人の大に贊同する所なり。殊に桂公は新帝を擁して天下に號令せんとする如き者なりと言ひし點

殆んど吾人が言はんと欲したる所なりき。氏の演說中「國務に關する所の勅語に若し過ちがあつたら其の責任は何人が之を負ふのであるか」と言ひ又「勅語であらうとも何であらうとも凡そ人間の爲す所に過ちの無いと云ふことを云へない」と言ひしことに付世間或は之を不敬として批難を加ふる者あるが如し。然れども國務に關する勅語に過失ある場合に何人が責任を負ふべきやとの議論が何故に不敬なりや、毫も其の理由なし。抑も憲法に天皇を輔弼する國務大臣を設けたるは、天皇の降下する勅旨にも不法不當のことあるべきを前提としたるものならざるべからず。苟くも勅旨に不法不當の事全く無しとせんか、何故に之を匡正する大臣を設くるを要するか。天皇を匡正する職分を有する大臣の設けある以上、勅旨に過失のある場合に付論議するは憲法の法理を宣明するに當り、毫も差支なきことなり。若し勅旨に不法不當のことあらんに、大臣之を匡正せずして之を奉行せんか、即ち其の責任を負はざるべからざるなり。又「人間の爲すところのものに過ちのないと云ふことは言へない」と言へるのも、何も囂々然として不敬呼はりをすべきことにあらず。是れ當然の事を言ひたるのみ。畏れ多きことなるも天皇も人間即ち人なることは世界何人も爭ふを得ざる事實なり。亦天皇は人なるゆへ尊敬せざるべからず。人にあらざる者に尊敬の生ずべき理なし。吾人は天皇も人として之を尊敬する也、唯天皇は人の中に於て最も尊敬せざるべからざる御方なり。其の尊敬の極は天皇を神として崇拜するも、之が爲めに天皇は人なりとの事實は之を忘るべきにあらざるなり。天皇は人なり。然らば絕對に過失なしと謂ふべからず。絕對に過失なしと言ふは誣妄なり。欺瞞なり。諂諛なり。鹿を指して馬と爲す者なり。凡そ斯ること辯明を要せずして明白なる事理なるも、世間僞忠僞誠の徒、忠良純白の國民を惑はすの說を唱ふる者あるゆゑ止むを得ず辯白するのみ。甚しきは「至尊の勅語に對して何人が之を奏請したりやと問ふは上を恐れざる不遜の言である」と言ふ者あり。それ大臣は國政に關し、天皇に向て十分獻替せざるべ

からず。故に勅語の降下を請はざるべからざることもあらん。是れ大臣の當然の職分なり。然るに其の奏請者の何人なりやを問ふことと不遜なりとは何故ぞ。大臣の責任を明かにする爲めには、先づ奏請者の何人なりやを明確にせざるべからず。是れ政治を公明正大にする爲め必要の事なり。若し勅語の奏請者の何人なりやを明かにするを不可なりと言はば、天皇が勅令を發するに當り、「樞密院の諮詢を經て」と云ふ附言を爲す如きも忌まざるべからず。又勅語奏請者の有無を議するを不遜なりと言はば桂公が議會に於て勅語に奏請者なしと明言せるも亦不遜なりと謂はざるべからず。何となれば是れ兎に角奏請者に付言議したればなり。

又尾崎氏の演説中「總て天皇は神聖にして侵すべからずと云ふ大義は國務大臣が其責に任ずるから出て來るのである」と言ひしは即ち國務行爲の不法・不當に付若し大臣が自己の責任に歸せずとせば、天皇が即ち獨り其不法不當の事を爲したることに爲り、累を天皇に及ぼすに至るとの意味にて、別に批難すべき點なし。

論者或は天皇の爲したることに不法不當の事なしと言ふも、不法不當は客觀的の事實なり。人に依り差異を生ずべき理なし。大臣が爲せば不法不當なるも、天皇が爲せば不法、不當にあらずと云ふことなし。故に若し事實上不法、不當の事あり、而して大臣は是れ自己の爲したることにあらざるゆへ其任を負はずと辯疏し得ば、其の累を皇室に嫁し皇室を民怨の府に陷しいるゝことに爲るなり。尾崎氏は之を恐れたるゆへ斯く明言せるのみ。適當の議論なりと謂はざるべからず。

桂西兩卿の出處進退を議す

二卿共に民意の趨向を悟らず

松山忠二郎

近頃憲政擁護といふ言葉が流行する。憲法政治を擁護するといふ事は誰も異議のない事である。日本の憲法に背いて仕事をしやうと思ふものは一人だつてありはしない。日本の憲法に明記してあることを破ることは何人と雖ども出來ない。又何人も敢てしないのである。然るに憲法を擁護する必要があるといふのは何であるか。之れは實は憲法の解釋の問題である。或は憲法の應用の問題である。日本の憲法に明記してない所を獨逸風に解釋するか或は英國風に解釋するかの問題である。そこで日本の憲法を英國風に解釋する人から見れば獨逸風に解釋し且つ之を獨逸風に應用せんとする人の行爲は非立憲的である。從つて獨逸風に解釋する人から見れば今の憲政擁護といふ事が却つて、非立憲的であるといふかも知れない。詰り非立憲といふ事は日本の憲法を獨逸風に解釋するか、英國風に解釋するかの問題であらうと思ふ。處で藩閥の方は日本の憲法を獨逸風に解釋せんとし、之に反して所謂民黨と稱するものは英國風に解釋せんとする。先日來の問題は詰りどちらに解釋し、どちらに應用するかといふ問題であつたのである。

處で國の爲めにどちらに解釋する方が得策であるかといふ事になれば、學者には大分議論のあることであらう、之れは政治學の問題である。が、實際上英國風に解釋するといふ事は大勢の免れない事である。議論は兎に角それは止むを得ざる結果である。蓋し少數の

權勢を持つてゐる藩閥にとつては獨逸風に解釋する方が自分達の利益である。此點から日本の憲法を獨逸風に解釋せんと思ふものがある。固より學者の中にも獨逸風に解釋せんと試むる人もあるが、藩閥の獨逸風に解釋せんとする理由は自分等に得策だからと見ても構ふまいと思ふ。處が英國風の解釋であると多數の希望を容れることになる。輿論に從つて政治をするといふ事になる。其利害は兎に角に、大勢としてどうしても英國風に解釋するを免れないのである。况んや理論からいふても少數の藩閥の爲めに利益ある解釋をするよりも、多數の利益あるやうに解釋するのは當然である。日本の憲法に明文のない處は段々に英國風に解釋するものと思はなくてはならぬ。

元來日本の憲法程容易く出來たものはない。申すまでもなく西洋の憲法では血を見なければ出來なかつたものであるが、日本の憲法はさういふ事なしに出來たのである。が、此應用に至つては之から多少の混亂が免れまいと思ふ。さうして次第に日本の憲法が英國風に運用されて行くことになるだらうと思ふ。殊に昨年新帝陛下が御即位になつてから以來、此點に於て國民一般の政治上の考も大分進て來たやうである。然るに桂公は此大勢を知らないのである。何時までも日本人の憲法に對する考は獨逸風の幼稚な解釋で滿足すると思ふてゐたのである。之が今度の失策の大原因である。桂公は昨年の十二月に宮中を出てから徹頭徹尾失敗を重ねたが其理由は外でない。人氣の一新してゐることを知らなかつたのである。それて昔の通り詔勅を仰いて事をすれば人民は畏れ入つて桂公に對して何もいふまいと考へてゐた。從つて總ての場合に詔勅を乞うてそれて虎の威を借る狐の眞似をせんとした。昔なれば日本の人民はそれて畏れ入つたかも知れない。處が段々憲法に對する人智が進んで來て、最早や獨逸風の解釋では滿足しないで、英國風に解釋するやうになつて來た。從つて詔勅が出れば其詔勅を奏請したものが誰てあるかといふ事を追窮して其責を奏請者に負はさなければ止まない事になつた。桂公は勅語には奏請者が

ないといふが、之は三百的の理屈であつて誰も滿足しない。現に昨年桂公に詔勅を賜ふだらうといふ事が其四五日も前から新聞に出てゐたし、桂公の內閣を組織することと並びに其閣員の顏觸までチャント新聞に出たのである。それから二三日してから詔勅が出たのである。從つて元老會議で詔勅を乞ふ事の段取りにしてあつて、何人か陛下に奏請したといふ事は事實の上に明かである。だからして勅語は陛下の思召で奏請者がないといふ事は誰も滿足して聞くものがない。桂公は勅語は陛下の思召であるんだから國務大臣は其責に任じないやうな事をいふたが又さういふ擧動を取つたが、然し進んだ人民は之で滿足しないのである。それは皇室に累を及ぼすものだといふて攻擊する。桂公は啻に內閣を組織する時ばかりでなく、議會が不信任決議をした時も矢張り陛下の詔勅を乞うて鎭撫しやうと試みた。一面からいへば責任を免れやうと試みた。之が失敗の原因である。之は獨逸風の舊思想から出來たのである。が、今後の人民は箇樣な解釋では滿足しない。矢張り英國風に國務に關する總ての責任は國務大臣が取ることにしなければ治らない。

然らば獨逸では何故それが治つて居るか。獨逸では陛下の思召で以て大臣を任免されるのであつて議會は何ともいふ事が出來ない。議會は獨逸の總理大臣に對して不信任決議をしても無効である。日本ではた樣な事では治らないに拘らず獨逸で之が行はれて行くといふのはどういふ譯であるか。參考の爲めに其理由を研究して見るのに、獨逸の憲法は千八百七十一年に出來たものである。之はビスマルクが墺太利に勝ち佛蘭西に勝つた餘勢で以て皇室及び自分に最も利益ある憲法を一人で拵へたものである。多數人民の權利義務を保護せんが爲めよりは、獨逸の皇室並びに自分達の權勢を維持せんが爲めに拵へたものである。若しビスマルクを以て日本の藩閥とすれば藩閥に都合よきやうに拵へたものである。そこで獨逸の憲法には總理大臣は皇室に對して責任を持つが議會に對して責任を負はないことになつてある。(そして獨逸の國務大臣は總理大臣

に對して責任を負ひ總理大臣によつて任免黜捗されるのである）それで獨逸てはいくら不信任決議をしても帝室が總理大臣を信任される以上は如何ともすることが出來ない。第二に獨逸では小さい政黨が幾つかに分れて居る。大きな政黨は六つか七つであるが小さい政黨は約廿程ある。從つて政府は之を操縱するに便利である。之が議會の力で容易に內閣を制することが出來ない理由である。第三に獨逸の選擧法は極めて不公平なものである。千八百七十一年憲法を拵へた時には人口十萬人について一人の割合で選擧法を極めたのである。然るに其の後四十年間に獨逸の經濟界は非常の進步をして商工業の如きは長足の發達をなした。そこで田舍の人間が都會に集り、田舍の選擧區では頗る人が少くなつた。而して商工業の中心となつた都會の選擧區では非常に人口が增した。それにも拘らず選擧區は元の通りの代表者を出すのである。此不平公は非常なものになつて居る。そこで都會の人民は政府の政治に反對するもの多いが、地方の選擧區では或は大地主であるとか、僧侶であるとかいふ先天的の保守的の人間若くは先天的の政府黨が多いのである。之が爲めに獨逸の議會では政府黨が始終勝を占める。又獨逸の選擧法では絕對過半數でなければ當選しないことになつて居る。絕對過半數を得ない候補者は再選さるゝのである。此再選の數がなか〳〵多い。而して再選となると何時も政府は多數の政黨を操縱して旨い事をやる。之は中央政府の憲法であるが、殊に普魯西の憲法の如きは三級制になつて、人口は少くても多くても財產によつて選擧民を三階級に分つて居る。そして各階級から代表者を出すことになつて居る。從つて大地主であるとか華族であるとか富豪であるとかいふものは極めて少數の人間で一人の代議士を出し、之に反して財產のないものは非常に多數の人間から一人の代議士を出すやうな具合になつて居る。斯くて獨逸の選擧法は極めて不公平で、極めて政府黨に都合よく出來て居る。だからして立て行くのである。國務大臣は議會に對して責任を負はないといふ憲法は行はれて行くのである。

日本では之に反して國務大臣は議會に對して責任を負はないといふ明文がないのである。議會の希望によつて大臣が出たり入つたりすべきものであるか、陛下の思召なれば議會は何というても其儘に動かぬものであるか。其點は憲法に明文がないのである。之は解釋次第になつて居る。そこで藩閥を初め少數の權勢家は自分に都合のよい樣に獨逸風に解釋して陛下の御信任さへあれば議會は何人が多數を制しやうが自分は大臣の位置を維持するとが出來ると解釋する。藩閥及び藩閥に阿ねる連中がさう解釋する。然し多數黨はさうは解釋しない。陛下の思召と天下の輿論とは必らず一致すべきものである。從つて國務大臣は議會の意志に反して其位置を守ることが出來ないと解釋するのであるが前者は即ち獨逸風で後者は英國風である。然るに段々人智が進むに從つて獨逸風を採らずして英國風になる。桂公の失敗は此趨勢を見誤つたのである。元來獨逸でも多年超然内閣の憲法を以て維持して來たが、近年は之が大分怪しくなつて來た。國務大臣をして國事の上には總て議會に責任を持たせようとする傾向を示して來た。最も著名なのはソシアル・デモクラシー黨が近頃非常に勢力を得て來たのである。從つて之はもう大勢で仕方がないのである。

尤も桂といふ人は内々此大勢を知つてゐるのである。表面上籍を藩閥に置いてゐるが、それでは到底も行かない、どうしても議會の根據がなければ立てないといふ事を承知してゐるのである。それで今までに兩又にかけてゐたのである。從つて山縣公のやうに必ずしも武斷政治をやらうとしない。飽くまで議會を解散して甚しく選擧干渉をしやうといふやうな事もやらない。それと同時に議會には其勢力を植ゑ附けることに多年苦心してゐるのである。いふまでもなく貴族院の大多數には手を廻して居る。さうして衆議院でも國民黨の多數を手懐けてゐたのである。政友會に對しても主もな領袖株とは夙くに内々握手して居るのみならず、表面からも或は妥協、或は情意投合といふやうな事をやつて議會に基礎を置いて居る。又自分の政策と

輩も議會の多數黨の希望を迎合して政綱を作つて居る。表面は超然內閣であるが其實は一種の政黨政治をやつてゐるのである。詰り藩閥と政黨との中間に立つて双方を操縱して居つたのである。右手に藩閥を操縱し左手に政黨を操縱して來たのである。處で此政策には双方共不平であつた。桂公は憲法上の解釋はどうも灰色であつた。そこで藩閥も滿足しなければ政黨も滿足しない。つまりずるかつたのである。だから山縣公山本伯などは眼中陸海軍しかない、此人達に向つて桂公は充分滿足を與へない。現に大正二年度の豫算では陸海軍共其擴張を抑へんとして居る。さうかと思ふと、議會に向て超然主義を標榜して、叉其憲法の解釋は獨逸風を採つて所謂非立憲的行動をやる。極めてずるい方針を採つたのである。さうして之までは双方の乘合て權力を維持したのであるが、今度は双方からいぢめられて、旗幟を鮮明にせねばならぬ事になつた。

此點からいふと西園寺侯も餘り大した變りはないのである。西園寺侯はいふまでもなく政黨の首領である。そして政黨內閣を標榜してゐる。然るに其實行する所を見るといふと獨逸風のやり方が多い。直ぐ藩閥と妥協したり握手したりする。何か大問題が起れば自分は總理大臣でありながら直ぐ藩閥の力を籍りに行く。此方から藩閥を惹き出す。此の點に至ると桂公以上である。桂公は寧ろ自分の政治に元老の嘴を容れることを避ける樣子であるが西園寺侯は矢鱈に此方から元老の干涉を招きに行く。現に昨年の秋陸軍問題で困れば自分は山縣公の處に行つて公の助力を乞ふ。原敬氏を桂公に遣して桂公の斡旋を賴む。財政困難だというては松方侯や井上侯の助力を賴む。政黨を主義としながら其實行する所を見ると藩閥政治を惹き出すやうな事をやる。現に今度の如きも、超然主義の山本內閣と妥協するといふ事になつた。桂公と西園寺侯とは一方は藩閥に籍を置いて政黨を操縱しやうと思ふし、他の方は政黨に籍を置いて藩閥と手を握らうとする。兩方共ずるい事をやつてゐた。同じやうな事をして兩方共競爭してゐたのである。同じ徑路を踏んで勝負を爭うてゐ

たのである。

然し此灰色政治はどうしても永續しないのである。桂公が誠意がないといはるゝのも詰り兩叉にかけたからである。そこで桂公は已に元老からは反對され、民黨からは非立憲的と攻撃されて窮境に立つてゐる。之はずるい政治をやつた報である。從つて之から段々自分は藩閥から足を洗つて政黨の首領となつて新政黨を組織せねばならぬ必要に迫つて來たのである。西園寺侯も亦同様である。西園寺侯は二月九日に陛下から御諚を賜つたといふが、之はいふまでもなく、桂公と妥協の結果叡慮を煩はしたのであつて、皇室に累を及ぼした點からいへば、双方共同罪である。詰り一種の狂言をやつたのである。そこでそれが旨く行かないが爲めに桂内閣が倒れても自分は政黨の首領として内閣を引受くることが出來ない。政治家として非常の不信用を買つたのである。

斯くの如く桂公も西園寺侯も灰色政治ではもう大味噌をつけた。兩方共非常に手疵を負うて居る。其手疵を負うたのは双方とも國民の憲法に對する理想の大に進歩した事に氣附かないからである。國民は憲法を英國風に解釋しなければ滿足しない事を知らないで飽くまで獨逸風に行かう、或は灰色式で行かうとしたのが双方の失策した大原因である。

今度桂公は此大勢を悟つたかどうだか分らないが、政友會の方では西園寺侯、原敬氏などの所謂幹部なるものが、まだよく分らない。そこで矢張り藩閥と妥協せんとする灰色政治をやつてゐるのである。

（二月十五日）

桂西兩卿共に同罪

伯爵　大隈重信

今度の政變に就いて桂公西園寺侯の出處進退が何うの彼うのと言つても、要するに各人の心理に入つては知ることが出來ない。果して何ういふ心であつたかは解

らないが、兎角外に表れた事實は始め二個師團問題が起つて圓滿に之を解決せんが爲めに、山縣公寺内伯を始め、桂公は其當時内大臣で居られたに拘らず、從來の友誼上是れが解決に助力を與へられたやうであつたが、それも其甲斐なく到頭破裂して了つた。西園寺侯も陸軍大臣の代りを選むことに努められたのであらうが、それも出來ず、結局辭職するの巳むを得ざるに至つた。

其後は大層面倒なことになつて、病氣で寢てゐる松方侯を起たさうと、井上の老人が鎌倉までも出掛けて行つた。松方侯も病を押して之を受けやうとする意は動いたやうで、已に松方侯が受けるかと思はれたのを何ういふものか之も辭して了つた。

其時にお鉢は山本伯に廻つたのであるが、何故彼の時に山本伯は辭したのかね。今度愈々山本伯は大命を拜受したと言ふが、今受けるくらゐならば、あの時に伯が受けておけば可かつたらうにと思はれる。二ヶ月前に辭した伯が今度は受けるといふのも何ういふものか。これも人の心理は解らぬものだ。

桂公にしても内大臣として宮中に居られたものを豈公の外には此局に當るものはないといふので外の者が公を推擧する。公も身は内大臣であつてみれば踟蹰せられたとてあらうが、外に其人が無いといふならば已むを得ないわけで、餘儀なく受けやうかといふことになる。そこへ詔勅が降つたので非命默し難くとあつて、投みて大命を拜受して内閣組織をするに至つた。之れは表面に露れた事實であつて、其内面の心理に至つては、今言ふ通り恐らく研究問題であらうと思ふ。

一體桂公と西園寺侯との關係は、個人としては十年の親友であり、政治上に於ても日露戰役以前からの交友で、西園寺侯の子も桂公の内閣に秘書官を務めてをられたこともあり、公私共に十有餘年の交である。其間常に相互の意志は疎通してをつた。昨年の一月にも、確か八日であつたか、西園寺侯の演說中に所謂情意投合を表明せられてをつたのであつたが、先帝の御崩御に次いで新帝の御即位があり、其後何ういふものか、又

何から齟齬して來たものか、何時頃からか妙な風になつて、遂に不思議な破裂を見るやうになつたのである。

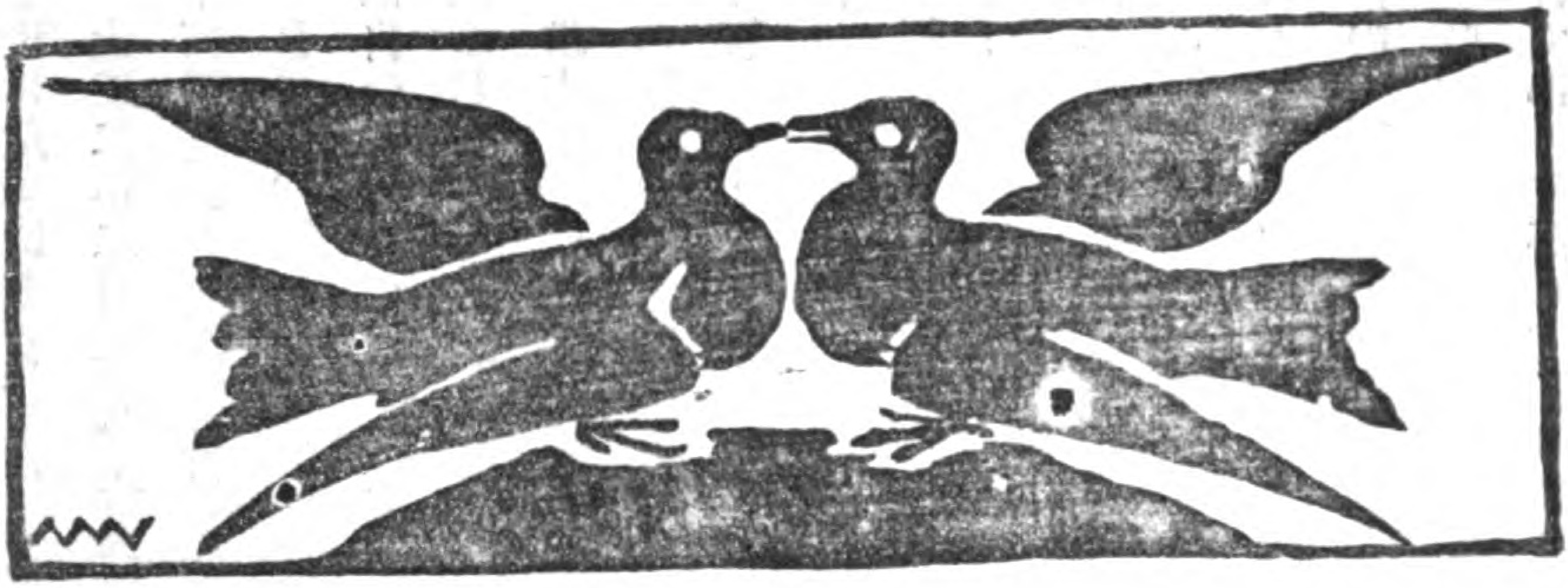
之を表面の事實から推定すると、彼等は道理に基いて進退してをらぬやうである。手段の爲めには權謀を用ゐる。陰險な處置をも敢て採る。調和的便宜的に事を圖つて、一貫した道理の爲めに、主義の爲めに政見の爲めに遣つてゐない。彼等は果して憲法を正當に理解してゐるか何うか疑はしい。社會の事情、內治、外交、財政、敎育、風俗等を理解してゐるか何うか。

であるから今度の憲政擁護の運動に就て見ても始めから終始一貫して主義の爲めに働いてゐるものは犬養一人だと言つてよい。政友會の連中があの通り騷いだのも要するに手段の爲めであつて、結局は依然り何うだ。怪しい所に歸着するやうではないか。そこは吾輩が常に言ふやうに、各自の性行といふものがさう一朝一夕に豹變するものではない。政友會の態度がさう急に變るとは出來ない。

桂公はといふに要するに漢法醫である。たまく西洋の醫術を施さんとする意志はあるけれど、少し難病人に出會すと直ぐに漢法の手を出す。

故に今回桂公西園寺侯の行動に就いては孰れを孰れとも言へない。君子の爭ではない。道理に基かざる爭である。他日理性の判斷を俟つて明晰に解釋せられる時が來るであらうと思ふが、吾輩をして言はしむれば、少しく手酷しい批評ではあるが彼等は同罪である。國家を危くし、憲法を誤り、國民を墮落させ、議會の威嚴を損せしめたる罪は同じである。誰か又烏の雌雄を知らんやだ。

吾輩は眞の立憲的政治は國民の自覺にありと思ふ。道德的政治運動を起すには其源流たる國民の敎育を必要とする。今日の如く金錢に依つて賣買される議員の頭腦によつて眞の政治を望むとは出來ない。先づその源流を淨めて然る後眞の立憲的政治は望まれるのである。(二月十五日)



女八人

松崎天民

中年の藝妓を書いて、これを「板新道の一隅」と云ひ、憂きは流れの姿を描いて、これを「最後の牛肉鍋」と云ひ、盛を過ぎた娼妓を見て、これを「名代部屋の客」と云ひ、オールドミスの女敎師と語つて、これを「紫の風呂敷包」と云ひ、華やかな女將と飮んで、これを「稲舟の四疊半」と云ひ、凄慘な狂婦人に泣いて、これを「十萬圓の奧樣」と云ひ、内服寒い看護婦を哀れんで、これを「廊下の曲り角」と云ひ、齡若い女優に微笑んで、これを「荒物屋の二階」と云ふ。明治三十六年から大正一年まで、大阪、京都東京にて、十年の間に接觸した八人の女に就いて、其の個々の上に潜む運命を讀むのが「女八人」の使命である。例に依つて、新聞記者生活中に得た副産物、雜報でも無く、小說でも無く空想と事實の中間を辿つて觀た、人生探訪の一報告書たるに過ぎない。

二、最後の牛肉鍋

——或る友人から、こんな手紙を送つて來た。——

「上」

天民兄足下

代議士に爲つて、政權爭奪の舞臺に立たうとも思はず候、大金持に爲つて、男爵を貰はうとも考へず候。私が一生の仕事は一部の「自叙傳」を書いて、これ

を世に遺すにあり。

大正二年二月五日、帝國議會の傍聽席に入つて、六十何度と云ふ場内の温氣に蒸され、汗の香高い男の肌いきれに、押へ付けられる樣な氣持になりながら、私は自分が歩いて來た三十餘年の歲月を、ジツと斯う腕組みしながら追懷いたし候。

議事堂では、今、元田肇の質問演說が終つて、桂首相の答辯中に、憲法とか、勅語とか言ふ言葉が、力强く響き居り候。場内の空氣は、刻一刻險惡になつて、停會の風吹くか、解散の雨降るか、大きく云へば、國を擧げて、今日の此の瞬間を眺めて居る時、私は沈默に咽せ返る傍聽席の一隅に座して、過る日の夢を現に追ひ居り候。

こんな激しい政爭の晴舞臺に、榮ある看客の一人となりながら、私の感情は立役者の科白にも動かず、敵役の一顰一笑にも熱せず候。日本國民としてこれを觀る時、××雜誌記者としてこれを聽く時、相應の大事件てありながら、私の胸は少しも波打たず候。私は議事堂その物が、大きな劇場の樣に見え、大臣席も政府委員席も、演壇も議員席も、舞臺の樣に見えて、其所に漲る凡てのものを、「戲曲」の一齣と見るより他には何の「眞實」も、何の「權威」も發見する事が出來ず候。

尾崎行雄の不信任決議案の演說は、少からず議場の空氣を煽動いたし候。贊成派の拍手と反對派の罵聲と、錯雜し混亂して、恰も角藤定憲時代の壯士劇を再現した時、私は政爭の戲曲的興味を覺えたと云ふ以外に、其の情感を動かす事を、大人氣無いと思ひ、恥係の樣にも思ひ候。これ政治思想が無いのでも無く、靑年の氣が失せたのでも無く、私が笑つたり泣いたりするのは、より大きく、より深い「自己の事件」であると思ふが爲めに候。人は「眞實」の前に對せざる限り、其の心臓の一鼓動たりとも、容易に承認すべきものて無いとは、私が平生より主張する所に候。

高調に達した議場の雰圍氣に包まれながら私は暫く議場を外にして、過る日の歡樂と痛苦を追ふべく候。三十餘年の短からぬ生涯を數へて、其のページの所々

に、淡からぬ色彩の跡を辿るべく候。他日「自叙傳」を書くの時、其の「口繪」とすべき一節を求めて私は「二十歳時代の大阪」を想ひ起し候。三十歳にならうとする青年期の最後に、妻あり子あるを忘れて、一人の女性に傾倒した春秋の日記を想ひ起す時、私の心は初めて波打ち候。

壇上には、四度、桂首相が現れ候。

天民兄　足下

政治は「虚」だけれども、戀は「眞實」に候。

別れてより足掛八年、何かにつけて「其の女」の事が忘れ離く候。今日も、雜誌社の任務を帶びて、四谷の宅より電車て出動の途すがら、座席を隣したる一人の女に依つて、「其の女」を想ひ起し候。八年の昔を、現に描き出さうとする譯に候。

相愛し相慕つた仲ては無く、唯何かの序に一二回逢ひ、互にもの云つた位の間柄ても、其の人の面影は容易に忘れ難いものに候。「今日は銀座の四ッ辻て、隣の細君に似た女を見た」とか、「淺草行の電車の中て、村の助役に似た男に逢つた」と云ふ樣な例は、お互の日常にも稀ならぬ事に候。兎もすれば過つてもの云ひ掛けんとし、其の人違ひなる事を發見して、胸ドキ／＼とする例なども、都大路の夕まぐれ、心忙しい往き來るさの時には能く經驗する事に候。

それが路傍相關せざる人て無く、亡き母君の面影を帝國劇場の觀覽席に見出し、別れた女の後ろ姿を、百花園に見る樣な場合には、何とも云へぬ哀愁に打たれるものに候。其の面影に依つて、母在せし頃の世を懐しみ、其の後ろ姿に依つて、相愛せし頃の樂しさを想ふ時、人誰か泣かざらんや。私は今日、四谷見附より虎の門までの電車中にて、八年の昔別れたのみにて、相見ざること久しき「其の女」に似た横顏を見て、「二十九歳の大阪」を想ひ起した譯に候。一國の政治を議して居る所て、遙に思を大阪の方に馳せて居ると、過る日の夢は、夢ならず浮び出て候。

八年の昔と云へば、恰も明治三十九年、日露戰爭の騷ぎが濟んで、天下漸く泰平ならんとする時、私は大阪の新聞社にて、僅に月給三十圓の安探訪に候。二十四歳にして妻を娶り、一男既に五歳、二男生れんとする三月中旬、縁あつて逢つたのが、「其の女」に候。私が二十九歳て、女が二十歳、今日電車て見た女の容貌風姿、能くも似通へるものかな。もとより歳月を經た事なれば、彼も老ひぬらん、我も老たり。今、途中て袖擦り合ふても、それと知らずに立別れて、何時の日かまた相逢ふべき。唯「其の女」の昔に似た女を見て、我が心痛むよ、逝ける歳月に恨あり。

今から思へば、一場の痴夢てあつたかも知れず。唯斯て戀し、斯て別れし八年の今日(けふ)に至るも、「其の女」は我が思ひ出に活く。政治の幕は「嘘」にして一時的ても、戀の涙は「眞實」にして永遠なり。馬鹿な事を云ふ奴だよ嘲けられても、私は何とも思はず候。

「現在」は苦痛ても、それを「過去」の月日に眺める時、初めて「戀」の苦しさを覺え候。

天民兄　足下

其の頃の私は、二十九歳ても、未だ大に若かつた樣に候。安月給の事なれば、藝娼妓の群に戯れる事も出來ず、詮方無しの品行方正が、日記の上にも大分續いて居るのを、一人て可笑しく思つたのも、度々の事に候。

妻、不憫ならざるに非ず、子、可愛からざるに非ず、然も、午後五時頃、社用を終へて歸宅と云ふ段になると、何だか心淋しい詰らなさを覺えて、酒が飮みたい、女を見たい、變つた刺戟を受けたいと、用も無いのに其處等を歩いて見たり、面白くも無いのに、寄席へ入つたりする樣な事が、幾日も續き候。こんな事ては不可(いけな)い、本を讀まう、何か書かうと、心の中ては思ひ煩ひながら、外泊した樣な事も、一月に三四日は珍しからず候。

六十を過ぎた老父と、五歳の男子と、臨月の腹を抱

へた妻と、一家の生計は窮迫を極め候。三四日目に歸宅して見ると、最う二錢の入浴錢も無く、妻はお召の袷衣を賣つて、僅の金を得たと云つて、泣き叫んだ事もあり、父は唯默々として、落淚した事も稀ならず候。それても私は、家に歸るのが賴り無くて、佗しくて、淋しくて、出來る事なら何時までも、「自分の家」と云ふものに歸る日が無くて、一生を終りたいとまで、變な氣持になつて浮れ歩き候。家庭の單調に飽いたとか、妻帶は無意義だとか云ふ、そんな理屈も何も無くて、唯家に歸る事を恐れて、飛び歩いた譯に候。

一つは、趣味性格が、妻と調和しなかつたのが、原因の樣に思はれ候。妻は貧しい家に育ち、小學校を卒へたばかり、裁縫、洗濯の業に堪能と云ふだけて、私を慰めて何うするとか、私を鼓吹して何うするとか、云ふ樣な事にかけては、更に何事も考へなかつた樣に候。貧しい世帶を持つて、貧しく暮し得る糟糠の妻としては、又と得難い賢妻かも知れねど、私の心の淋しさを慰めるといふ樣な、心性上の交渉に至つては、全然風馬牛相關せさる門外漢てあつたのが、其の頃の私を一層淋しくし、一層詰らなく思はせた事と存じ候。

斯る時、同情者を同性に得れば、これを「親友」と云ふべく、異性に得れば、これを「戀」と云ふべく候。それと明ら樣に、慰籍者たるべき立場に居らずとも、心の佗しさを慰め得る者とさへ知れば、全力を傾倒して相慕ひ、相懷しむに至るは、當然の事かと思ひ候。

初めて「其の女」に逢つてより、家あり、父あり、妻あり、子あるを忘れて、二十九歲の情熱を傾けたのが、明治三十九年のページに候。

天民兄　足下

「其の女」の姉は、遊藝が達者て、北の新地から藝妓に出て居た緣因に依つて、「其の女」と相見る機會が、偶然に出來た譯に候。

姉は酒飲みても、妹は一杯も飮めず、姉は唄が上手ても、妹は唱歌しか唄へず。姉は尋常小學を卒へたの

みても、妹は高等小學を終へて、女子師範に二年半勉强いたし候。然るべき人の娘に生れながら、家貧しうして落魄し、兄弟六人の內、藝妓になつた姉あり、小學教員になつた兄あり、「其の女」も亦、雇教師として、天滿の小學校で教鞭を執つて居る內、不圖した機會から男の肌を知り初め候。

大して男好きのする顏では無いが、色白の稍細面で眼の大きいのが男の心を引く。肥り肉の大柄で、態度もテキハキして、關東に見る女のタイプに候。私と初めて逢つた頃は、最う小學校の方を退いて、誰かの妾になつて居たが、旦那一人では收入も思はしからず、他に親切なお方があらば……と求めて居た時、其の姉の藝妓と云ふのが何して、二人は初めて梅田の料理屋で、盃を取交し候。

背廣の襟も垢付いた安月給取と、多少の教養ある一種の娼婦とは、其れより後、人をも世をも憚らず、逢引の度を重ね候。女は唯、若干の金を得る一人の男を得た位の考へを以て、男を遇つたに過ぎないが、私は久しく求めて居たものを、異性に得た歡喜の情を以て、凡てを「其の女」に傾け候。「其の女」の有つて居る文字と趣味と人柄とに、自己の生涯を彩るべき戀の幾ぺーヂを獻げ候。

妻に求めて得られなかつたものを、「其の女」に得てより、私は益々家を外にして、女と共に浮かれ步き候。或る時は中の島の料理店に飲み、或る時は梅田の宿屋に語り、或る時は北の新地の貸座敷に眠るなど、二人は一所不定に、時を選ばず、場合を省みず、隨分無理な逢ふ瀨を重ね候。女にとつては、有難迷惑の場合も少らずあつたらうに、私は何事も考へずに。逢ふ夜の數を重ね候。

斯る類の「妾」でありながら、女は字を能くして、言々體をなし、文を能くして、句々章を成すと云ふ風に候。鷺堂の流を汲む筆致拙からず、美文も言文一致體も、和歌も、新體詩も、高等女學校を卒へた位の巧妙を認め候。自然その言ふことと語る所、小說の批評に涉ることも珍しからず、新聞記者の職業を理解し、私の書

くものに就ても、同情ある批判を下すなど、其の頃の女、大阪の女には珍しき一人として、いよ〳〵離れ難い思慕の情を加へ候。

父を忘れ、妻を忘れて居る間に、父は突然、もの云ふ事の出來ない病氣になり、妻は二男を分娩して、一家は多事不幸を極め候。

・　・　・　・　・

天民兄　足下

「眞情」を以てしさへすれば、何ものも感動いたすべく候。「其の女」は最初の間頗る冷たい調子を以て、私に接して居たが、遂には燃える様な情火を、浴せ掛くべき夏の日が來り候。

月々與ふべきものも、滿足には與へること出來ず、其の上、宿屋や料理屋には、少しづつの負債が出來て、二人は最う他の家では、逢引する事が出來ぬ始末となり候。多病な女の母は、金の無い私を嫌つて、頑として其の家に入るを許さず、且つ「其の女」に說いて、私との離間を謀つたが、女は母を說伏して、遂に私を其の二階に迎へ候。

「其の女」の家で、幾夜かの逢引を重ねた朝、私は久し振に宅へ歸り候。病狀良からざりし父は、昨日より病の床に就いて、復起つべくも無い病勢の急變を見て、私は泣くに泣かれず驚き候。一二の醫師を迎へ、二三の親戚に急を報じて、一家は上を下への混雜を極め候。父は瘦せたる兩手を差し出して、この不孝の子の手を握り、ハラ〳〵と淚をこぼし候のみ。カンフル、食鹽水の注射など、あらん限りの手當を盡したれども、命運旣に盡きたり、父の命は明日をも待たず候。

斯る時にだも、忘るゝ能はざりしは。「其の女」の上に候。「其の女」の許に馳せて、每夜かを過して居る內、父に此の急變あり、失望、痛恨、悔悟、懊惱、此の心を語るべきもの、唯「其の女」のみと思ふ每に、私は益々起つても居ても堪らず。其の夜、父の枕頭に座して、左の如き端書を、女の許に送り候。

「今朝、歸宅すれば、父の病篤し。

既に、萬事休せり、あゝ萬事休せり。

この心の悶へ、この心の淋しさよ。

知る者は、唯、御身のみ、御身のみ。」

父、去りまさんとする枕頭に座して、淺からざる不孝の罪を悔ゆるの心よりも、「其の女」を慕ふ心の強く激しきを悲しみ候。其の夜―七月二十四日、雨大に降りて、情景轉た凄慘を極め候。あゝ父の面影は、死に囚はれたり、父の逝かんとする悲し、大に悲し。「其の女」と相見ざる、淋し、大に淋し。私は、其の夜眠らんとして眠る能はず、父の生涯を想ひ、「其の女」の上を思ひて、夜を徹し候。

骨肉離愁の際に於ても、予は御身の上を忘るゝこと能はず。――

と云ふ書き出して、其の夜、女の許へ、また長い手紙を送り候。翌る日の正午、女が其の手紙を見て居る時、父は終に永久に眠りに就き候。

女の許へ、三度、手紙を送り候。

天民兄　足下

通夜の十一時頃、女より左の返書參り候。

「御手紙、その都度〳〵拜見いたし候。御父上樣の御急變、涙もて悲しみ痛み候。

御葬式場へは、それと氣取られぬ姿にて、陰ながら參列いたす筈に候、母の機嫌、依然として上々ならず、あんな人と何時まで關りあつて居ても、何とか彼とか申して、昨夜も更くるまで爭ひ申候、今は姉さへも、二人のためには冷たい同情者に候。貴郞の熱い力には、何者も敵しがたく候。初めてお目にかゝり候夜より、妾は今日の來ることを覺悟いたし居候、妾の身體はあなた樣一人の者でなくとも、妾の心は凡て貴郞に囚はれ申候、昨夜も、お宅の前まで參り、門口を二三度往つたり來たり、それとなく御家内の御樣子窺ひしも、奥樣の御憎しみ、飛立つ思を忍んで、一人淋しく立歸り申候、せめて御呟きの聲をと願ひしも、それさへ空だのみと相成申候。

御葬式の後、當分は御外出も如何や、三日もお目にかゝらず候ては、この頃の夜々、殊に淋しく味氣なく候、夫と呼び、妻と呼ばれ候のみが、戀の終局には候ふまじ、妾の身體が一人の有となり候とも、あなた樣は永久に妾の心の中にあり、忘れ申す間じく候、御忘れ被下まじく候

又の日を待ち參らせ候、御心安らかに……」

父の葬儀は、生憎の雨に終り候、柩の後に尾いて、火葬場の佛壇に額いた時　白壁の暗い堂の隅に、私は「其の女」の黒い立姿を見出し候。二人の眼と眼と相合した刹那に、私は女の「眞實」を汲み取り候。かりそめの縁や淺からず、あゝ「其の女」よ、我が一生の思ひ出に活く。御憫笑被下度候。——

突然、ドヤ／＼と人の立騷ぐ氣配に、私の追憶は破れ候。議場にては、既に桂首相の答辯終り、議長は島田三郎を登壇せしめ、島田また大に辯ぜんとする時その時、大詔降下して停會を命ぜられたる所に候。日比谷原頭風雲急なり、之れからが愈々、「噓」の政治の本舞臺かと思つても、私の心は少しも波立たず、唯、追憶の夢に慄き候。

議場を出づれば、院外の群集堵の如く、万歳と罵聲と耳を聾せざれば休まざらんとするの勢に候。あゝ、もの思ふに相應しからぬ日や。

「下」

天民兄　足下

先日は突然、變な手紙を送つて、定めし驚いた事と思ふ。場所もあらうに、議會の傍聽席て、過る歳月の痴夢を追ふなど、熱狂せる政治屋連中が見たら、人非人とか、非常識とか、何とか彼とか、云つて憤ることだらう。然し、私には私の見解があるから、當分「夢の續き」でも、繰り返して居る方が宜い。

夢と云へば、「二十九歳の大阪」は、全く悲しい大きな夢であつた。父の葬儀が濟んで、五日間は宅に謹愼して居たが、最う何うしても辛抱が出來ない。私は妻に向つて、京都まで行つて來ると云ひ置いて、先づ「其

の女」の家に馳せ付けた。母親と云ふのは、私を少しも信じてくれず、これまでも随分失敬な態度をして居たが、其の時だけは思ひ遣りのある眼つきて、いろいろの弔みの言葉を述べて、例の二階に通してくれた、二階には「其の女」が寢そべつて、「新小説」か何かを讀んで居たが、私の姿を見ると直ぐ立上つて、ものも言はずに、笑ひながら、亂れた襟をかき合せた。

　香典返しをして殘つた金が、二三十圓はあつたらう。私はそれを女の母に渡して、長い間失つて居る信用を取戻さうとしたが、女は餘計な事をしなくても可いと云つて、何うしても受け入れなかつた。其の上、鳥鍋など取寄せて、今日は何所へも行かない、何時までも斯うして居ませう、といろ／＼欵待してくれた。不孝を重ねた老父に死別れて間もなく、貧苦に奪れた妻を家に殘して、斯うして女の許に居ることを申譯の無い事だと思ふ心はありながら、强て氣休めの理屈を付けて居た。私は其の日から三週間餘と云ふもの、社には出ても宅へは歸らず、夕暮れになると女の家に入びたつて、唯、差向ひて居る事を、此の上無い快樂にして居た。母親も初の間は、別に惡い顔も見せず、折々食事を一所にして居たが、終には「其の女」に向つて、何かと口ぎたなく罵り叫く樣な日が多くなつた。

　夏八月の暑い眞盛り、二人は晝を夜にしてまで、離れ難ない思に耽つた。母親の機嫌が段々惡くなつてからは、また他所での逢引を初めた。女の知つて居る理髪屋の二階、貸屋の奥座敷などでも、果敢ない逢ふ瀬を樂まねばならぬほどに、私の懷中は貧しくなり、女の義理も狹められた。春三月に初まつた二人の戀は七月の下旬から八月の上旬が、其の高潮に達した時て、再び他所ての逢引を遣り出した頃から、女の心が段々醒めかけて來たことを、男は明かに發見した。

　女は其の時、私の他に二人の旦那があつた。一人は北濱の仲買人て、一人は辯護士だと云ふ事を、女は隱さず私に打明けた。二人とも四十歳以上て、唯、月々定まつた金の支給が、安全て且つ豊なため、媚を送つて居ると云ふ事まて、女は私に隱さず物語つた。

私の情熱は舊の如くても、二人の仲は二週間前の樣な、激しさから冷めずには居られなんだ。

天民兄　足下

二人の仲に冷たい秋風の吹き初めた九月中旬、私は激しい花柳病を受けて、人知れず惱み煩つた。その病毒が何時の間にか女に傳染して、女も亦病床の人と爲つた頃、女の母親は私に向つて、罵り嘲けりの言葉を遠慮も會釋もなく浴せる樣になつた。

女に逢へぬ日も、逢ふ日よりは多くなり初めた。初めの間は病氣を名として、私を遠ざけ樣としたが、終には居ても居ないと云ふ樣になり、娘に逢ひたくば金を持て來い、と云ふ意味の言葉を、それとなく云ひ出す樣になつた。「其の女」に依つて食ひ、「其の女」に依つて活きて居る一家は、私を平和の攪亂者視して、邪魔物以上に取扱ふ樣になつた。「其の女」とても、一人の老いた母に背いてまて、情熱を私に献げるだけの勇氣はなく、終には「母が嚴しくて困るから」と、愛相盡かしを云ふ樣になつた。僅に一月經つか經たない間にしては、餘りに其變化が激しいてないか。

何ゃ彼ゃ一場の夢だと思ひながら、私は「其の女」を斷念める事が出來なんだ。逢はざること七日に及べば人を使つて呼出して見たり、毎日毎夜手紙を送つたり、有らん限りの手段を盡したが、三度に一度は逢ふとが出來ても、最う過る夜の樂しさを味ふ事が出來なかつた。あの手紙も、あの言葉も、女は何の氣無しに書き、何の考へも無く云つたのかと思ふと、私は腹立しいよりも情なくなつて、思ふ存分女を撲つて、人目も恥ぢず泣きたい樣な氣持になつた。夫婦になれるべきお互て無い以上、別れの日が來ることは初めからの約束事とは云ひながら、私は此の樣にして女に別れ、この樣にして女の心から忘れ去られる事を、味氣なくも思ひ、詰らなくも思つた。殆ど半歳以上親しみながら、女の心に何ものをも殘し得ずして別れて了ふのは、如何にも殘念てあり、如何にも不本意てある。

けれども、終に別れて了はねばならぬ日が、私の方に迫つて來た。豫て行きいと思つて居た東京へ、私は突然旅立たねばならぬ事になつた。同じ大阪に住て居ながら、相逢ふ事が出來ないのは、心殘りてもあり、口惜くもあるが、西と東に別れ去ること遠ければ、忘れる日もあらう、思ひ起さぬ夜もあらう。「二十九歲」を彩るべき戀物語の終焉としては、眞に相應はしい身境の變動てある。東京、東京、二人の戀のペーヂを閉ぢるにも、また新しい運命の途を辿るにも、私の東京行には、意義があり、生命がある。

女の許を訪れて、東上の事を話した時、女は「お目出度い」と云つて淋しく笑つた。女の母は「御出世てす」と云つて安心した樣に笑つた。私の東上は、「其の女」母子に對しても、大なる安心を與へるに相違ない。

天民兄　足下

いよ〳〵東上と云ふ日の午後、私は「其の女」の家を訪れて、最後の別れを述べた。

「其の女」も、姉も、母も居て、私のために心ばかりの別盃を交してくれた。餘り俄の事てすから、何の用意も出來なかつたと云つて、母親は大きな牛鍋を出してロースの上等を燒いてくれた。東京へ行つたら美味い肉が食へぬとか、酒の好いのが無いさうだとか、東京の藝妓は手輕ださうなとか、四人の間には、いろいろの雜談が賑つた。

あゝ「最後の牛肉鍋」、これを斯う突き合つて別れるのが、二人の戀の終局かと思ふと、私は長い間、何者にか欺されて居た樣な、輕い恥辱を感ぜずに居られぬ。二人の戀は、牛鍋て別れるだけの價値しか無かつたのか。二人の戀は、牛鍋て大詰の幕を閉るべきものてあつたらうか。二人の戀は、牛鍋の終局て滿足すべきものだらうか。私は女の顏をチョイ〳〵偸み見ながら、默つて酒を飲み牛を食つた。食つて居る間にも、何だか馬鹿にされた樣な、狐にでもつまゝれた樣な、變なくすぐつたい氣持になつた。

「この娘も貴郎のためには、大分苦勞したに」と云つて、母親は何を思つたか涙ぐんだ。
「お互てすわねえ、貴郎も隨分……」と、姉は微笑みながら盃を乾した。
「其の女」は默つて居たが、ツと立つて用簞笥の抽斗から、手紙の束ねたのを持つて來た。
「これだけあつてよ、貴郎のお手紙：破りませうか、燒きませうか。それとも一生涯、貴郎の紀念品として、秘藏して置きませうか」
私は何とも答へる事が出來なんだ。燒くとも破るとも、私に相談すべき事ではあるまい、と云はうとしたが、默つて女の爲るが儘を眺めて居た。
女は其の手紙の束を解いて、中から一通だけを拔いた。他の十通二十通は何うなつても宜い、これだけはと云ふ樣子をして、手早く簞笥の中に藏つた。
「貴郎の記念は、彼の一通だけて澤山よ。お父さんが危篤の時に下すつた、彼れだけは妾、一生涯誰にも見せずに、ね、ね」

女の眼は、何時の間にか曇つて居た。何うか壯健て居て下さい、御緣があつたら又逢ふ事もありませうと云ふ樣な平凡な事を早口て云つて、「其の女」の家を出た。
何時の御出發てすか、娘を見送らせますと、母親も涙ぐんて云つたが、私は笑つて斷つた。
その實、「其の女」には、見送つて貰ひたかつた。

天民兄　足下
「其の女」には、見送つて貰ふばかりてなく、出來ることなら京都邊まて同行して、最少し風情のある別れを叙したかつたが、それも事情が許さなかつた。
汽車の名古屋に著いた時、女に宛て繪はがきを出した。東京の宿に着いて見ると、最う女から、次の樣な長い手紙が來て居た。
「牛鍋のお別れ、何の風情もなく、悲しう候最少し何かと思ひ候へど、母や姉の手前御見送りも

得いたさず、眞に心殘りのお別れ、何事も御恕しを願ひ參らせ候

三月五日より十一月十日まで、僅に八ヶ月の御親しみなりしも、過る夜の事ども、一生忘れまじく、一生忘れ難く覺え候、中頃より誤解また誤解、終に解くべき日なくて、永久に御別れいたし候こと、これが何よりの心殘り、口惜しう存じ候。

妾あり子ある人への戀を捨て、生みの母を守り候、人はこれを孝行と申す由、妾には過ぎたる孝道かな、操を賣るのは婦德に背けど、それも孝行の一つに候由、世間には妾の樣な孝行娘が多いとのこと、操正しう持して居ても、それが母の云ひ付けに背いての事ならば、世は何と申すべき、神樣のおさばき、願はしう候。

最う毒の入つた身體に候、それも一人の母の犧牲よと、眼をつぶり居り候。何時までも斯くあるべき、一人を守りて身を固め、幸ある生涯を辿り申すべく候、妾のこと、一場の夢と御忘れ被下候こと、何よりの仕合せ、人の心に活くべき身ならず

東京は學問の都、また女の都、御出世こそ願はしけれ、御浮氣は御無用に、奧樣御大切に、御子樣御大事に、それのみ

御安着を疑はず、別れの其の夜、かしこ」

私は次の樣な手紙を書きかけたけれど、送らずに其の儘、今日まで持つて居る。

「出發前の別宴、有がたく謝し上候

御手紙拜見、また新に懐しさを覺え候、終に別れ去ること西と東、三百里の遠きに及べども、夕雲西に紅き頃よ、忘らるべき我が身ならず、忘る御身にても候ふまじ、有りし世の夢は現に通ひて、東京の晝も淋しく候、東京の夜も佗しく候

あゝ妻あり子あれども、捨らるべき我が身ならず、捨つる御身にも候ふまじ、――」

要するに、斯うして別れて了つた今日、「其の女」の面影は、「別離の牛鍋」にのみ濃い。

天民兄　足下

思へば戀愛ほど「眞實」にして、また「空虚」なる努力は無し。これを思ひ出に微笑む時、若き日の血汐を還しても、それが何の力あるものであらう、それが何の榮あるものであらう。失はれた時、「戀」ほど詰らないものはよく、戀ほどアッ氣ないもの無い。

議場で戀を想ひ、今また此の汽車中で、別れた女を想ふ時、感ずるのは、樂しさ悲しさよりも、狐につまゝれたアッ氣なさである。死ぬるまでに戀した仲でも牛鍋一つで別れて了う樣では、つまらない、つまらない。

こんな女は澤山居る、こんな男も澤山居やう。

それから後、一年を經て、大阪に行つた時、私は「其の女」を行ねて……。

天民附記す、「最後の牛肉鍋」は、天民自身の關係した事件を主材にして、大に風變りの女性を描く積であつたが、社用を帶びて信越を旅行して居た爲め、執筆の暇がなく、代ふるに友人某の此の手紙を以てした。この手紙は未だ先がこの倍ほどあつて、全部四通より成るものだが、何も知らぬ子供に破られて、こゝまでしか手許にない。これでは首尾貫通せず、未成品の甚だしいものだけれど、萬止むを得ず、これで責をふさぐ事にした。平に仁恕を乞ふ。

（一二、一七夜）

三奇厄

福本日南

自分が壯年時代の事であつた。或親友が結婚をするといふので、多少其事に關係し、間接に媒酌の勞を執つて遣つたので、首尾好く雙方の相談が纏まつた。それで福岡市の近郊に在る一富豪の別莊に於て、一夜華燭の典は擧げられた。新夫婦の兩家ともに地方では相當の家柄だけに、親族・知己の來會者彼是七八十名もあつたらう、其中には新郎・新婦の友人が半ばを占めて居たから、それは〳〵中々賑かな婚禮であつた。其席にお取持に出た女連の大分も亦孰れも良家の令孃だけに、小笠原流の三ッ指式で、中には往々生硬に失する者もあつたが、概して雅びやかな宴會であつた。併しながら客の大半が活氣に富んだ壯年輩であるだけに、酒杯の重なるに從つて、隣客を相手に駄じやる者、給事の令孃を呼留めて揶揄ふ者、滿酌の杯を連引して天下の豪傑を氣取る者など續出する。そうなると女性の方でも、おキャンの連中が段々見はれ、イヤといふ者に銚子を差向けて、是非ともそれを盛潰さうとしたり、次第に興に入つて、夜の更けるを知らず、午前の二時といふに、やつとお開きになり、新郎・新婦を車に乘せて、住宅に歸らせた。勿論それには當夜正式の媒酌人となつた一夫婦を始め、近親の誰れ彼れ二三人も其後に附添ひ、車を聯ねて送り込んだ。之を見て自分も席を辭し、玄關口まで出て來ると、

「君は新郎・新婦雙方との懇意で、お負けに此結婚上事實の月下氷人だ。是非彼の宅まで行つて遣つて吳れ給へ」といふ者がある。言はれて見れば、それもそう、「さらば諸君の議に從はう歟な」と、車を呼べば、「今皆出切つた處、暫く待ち給へ、直に來る」と云はれたが、

酒氣は少々運つて居るし、『何、僅か七八町、歩いて見るのも亦一興だ』と、玄關前に降り立つた。是時お取持の女性連も歸るとて、ドヤ／＼と一度に降りて來た。其中に最前から自分が膳の向ふに居て、始終お酌をしたり、お通ひをしたりして居た、年の頃二十四五の、顔の圓い、色の白い、頬の豊かな、氣釋な、調子の好い、人懐こい孃さんが、

「私の歸りますのは、貴下の行らつしやる方ですから御一緒にお連れなすつて下さいません歟」

といはれた。すると傍の人々が、

「そう／＼其れは好いお連れ、そうして下さい。それては別にお送り致しませんから何分宜しう」

といはれたのが、何と無く嬉しいやうな氣羞かしいやうな感じがしたが、勇氣を皷して、

「宜しい、お連れ申しませう」

と、彼女の手にして居た提灯を強ひて引つたくり、自分で提げながら、人々に別れ、彼女と二人ふらりと立出てた。平生女性に對して臆病極まる男が、是時に限つて、酒のお蔭か大勇猛になり、

「新郎・新婦が今夜の快感は如何てせう。羨ましいものてすネ」

など語つては、ハツハと笑ひながら、足許少々蹣跚の氣味て、松原を拔けて來ると、松が根に足を取られ、蹌めく機會に、蠟燭が倒れて、提灯にパツと燃移る。周章てゝそれを消止めやうとして、併せて蠟燭の火まて吹消してしまつた。其刹那、

「お危う御坐います」

と、彼女は自分が右の腕に縋り着いた。

「イヤ何ともありません。併し火が消えて、シマツた」

といへば、

「何、善う分つた路てすから、闇くつても大丈夫てす」

と言ひながら、彼女の手は尚ほ我腕を放れぬ。其中に何を話した歟、彼女はズツと差寄つて、

「貴下は彼御内へ行らつしやるんてす歟」

と問ふ。

「行くんです」
と答へれば、彼女は重ねて、
「是非行らつしやらなくつても好いんでせう」
といふ時には、覺えず、知らず、半ばゝ軟化して、
「サア併し……」
と極めて不決斷な返事をした。すると彼女の色こそ見えね、思ひ切つた容子にて、今まで取つて居た自分が右の腕を放し、彼は其手を自分の頸に卷き着け、其の豐かな頰を自分の頰にフーッと押着けんばかりに近づけて、息をはづませ、
「貴下…………」
「エ…………」
「何處へか連れて行つて下さいな」
と云はれた時には、眞から嬉しく、只命是れ從はんといひたいやうであつた。
　夜は森々たり、歩みは遲々たりだ。其中乃て一軒屋の巡査駐在所の前に出た。駐在所といつても、此頃在るやうな角な箱番ぢや無い。舊い百姓屋を借りて、それに充てたのだ。當時此に駐在したのは、天津得之といふ獨身者で、ズッと以前から懇意な人である。そこで風と一工夫が浮んだ。是は此女を此に預けて置いて一走り行つて來るのが、何よりの得策だと思ひ、トントンと入口の戶を叩くと、裏から、
「誰だ」
と應じた。
「ウン僕だ。定めてお寢みだらう」
といふ聲を聽きつけて、
「オー今ごろ何うして……今夜は夜業があつて、まだ起きて居ます。マアお這入んなさい」
といひながら、戶をズッと開け、自分の背後に婦人が佇んで居るのを瞥て、怪幻顏。
　自分は其儘ズイと這入つて、手短かに、
「君に少しお願ひがあつて來たのだが、今一寸人の所まで往つて來るから、其間彼婦人を此處に預つて置いて與れませんか」
と私語くと、天津君は早くも了解したらしく、

「アヽ宜うがすとも」

と即時に承諾して呉れたから、振返つて、

「貴嬢、お這入んなさい」

と呼込んだ。家は僅に二室しか無い。奥の一室に三人對座し、一寸今夜の婚禮の狀など話した後、彼女に向ひ、

「一走り彼宅まで往つて、顔を出して來ますから、其間此處に待つて居て下さい」

と言ひ棄てゝ、匆々表へ出ると、彼女も續いて飛出し來り、我袖を拉へて、

「貴下、それは宜けません。私を此處に置去りにしてお逃げなさるんでせう」

といふ。

「そんな不實な事をするもんですか」

「否え／＼そうです。私は、貴下を……逃がしはしませんよ」

「困りますなァ」

「それ御覽なさい。お困りでせう」

「そうぢや在りませんけれども」

「矢ッ張そうでせう」

と、薄闇い街燈の下で押問答をして居る處に、向ふから人の來る足音がする。此處を看られては一大事と、彼女を牽いて、再たび駐在所内に駈込み、表をソッと窺へば、絹帽を被つた人が二三人、前刻新郎・新婦を送つて行つた人々の歸りである。其内の一人、慥に鶴原定吉君の聲で、

「福本は終に見えなかつた、如何したらう」

といふを、他の二人が引取つて、

「ホンに見えなかつたが、彼奴何だか可笑しいぜ」

と高聲に笑ひながら行き過ぎる。之を聞いた時には、襟元から冷水でも灌ぎ込まれたやうに、冷やりとした。サア斯うなると氣遅れして、モウ彼家に赴く勇氣が無くなつた。二人で土間に佇んで居るのも變だから、又々奧の室に通つて、

「先つきにはアヽ願つたが、餘り夜が更けたから、モウ是でお暇にしやう」

といふと、主人は意味ありげに、自分を表の一室に呼出し、突立ちながら耳に口寄せ、
「貴下は彼女を是迄好く知つて居るんです歟」
と問ふ。
「イエ些とも知らん。今夜宴會の席で懇意になつて、歸りに送つて呉れといふから、送つて行く處なんだ」
と答へれば、
「それなら好いが、彼女は昨年までは氣が變になつて居ましたが、此頃は沈着いた容子。それでも油斷は出來ませんぜ。若しも關係でもつけて御覧なさい、貴下の名譽に取つて返しのつかぬ事が出來ますぜ」
と注意して呉れた。話を聽いて悚然とした。同時に今が今まで何處かに蟄伏して居た理性が忽ち情想を推除け來つて、商賣人か何かなら兎も角、何ぼ何でも良家の孃として、いきなり人の頸ッ玉に卷着いて、何處へか連れて行つて下さいナは、些と猛烈過ぎるなど、判斷を與へて來る。何でも無い風をして元の坐に復つた時にはモー一番雞の聲がした。之に驚かされて、先刻からヂレッタさうな顔をして居る彼女と倶に挨拶をして再たび此を立出でた。
表に出るや否や、彼女は摩寄つて、
「貴下、是から如何しませう」
「如何しませうといつたつて、東が徐々白みかゝつて來ましたもの、如何にもしやうはありません。お宅の邊まで送りませう」
といへば、彼女は大焦れに焦れて、
「ですから、最初から私の申上げる通りなされば好のにサ、彼んな駐在所に寄つたりなんか成さるので、此んなに曉方にまでなつて仕舞つたぢやありません歟」
と大詰責。
「だつて今更仕方もありません。人の見ない裏に早くお還んなさい。復た此頃に何とかして……」
といへば、彼女は悄然として力無げに、
「貴下、乾度です歟」
「エヽ乾度です」

「エヽ屹度イすなんて、頼りの無い」

「本統に屹度てす」

と押返せば、彼れ良々信用を措いたらしく、それから……何……漸との事に手を分つた。

嗟危ない！第一の奇厄は是てあつた。

＊　＊　＊　＊

一たび彼女と手を分てば、今更掌中の珠ても奪はれたやうな心地がする。ア、天津君に注意されねば、危なく引懸る處てあつた。と我と吾堅固を祝する下から、併し彼果して狂的か知ら。彼の輕はづみなのは、彼の天性に由るんぢや無い歟。それだと眞に可愛想だ。好しや彼狂的にもせよ、彼が別れに貴下屹度てす歟と念を押した其一語は、此甲斐を貫ぬいた。など繰返しくく思ひ續けて、我任する福岡の方へと一二町歩いて來て、フイと氣がついた。宴會から直に歸つたとすれば、時間が遲い。そうかといつて、泊つて來たのには餘り朝が早過ぎる。寧そ此足て、此近郊一帶を散步し晝前に我屋に還つた方が撥が好いと考へつき、又も郊外の方へと向ひ、足の赴く處に任せ、畦路傳ひ田甫を過ぎ、時の二時間餘も歩いて、一村落前の小さい阪の上に出た。

折柄朝日は東の空へ立登つたが、昨夜來非常な濃霧て、野山は勿論、太陽までも包まれ、其色といつたら、昏黃とても謂はう歟、往年自分は東京て金環蝕に邂逅た事があつたが、其時の光景に些とも違はぬ。世外の末日とは、斯んな幻映てゝもあらう歟など想像しつゝ、町筋だつた村落に入込まうとする一刹那、聽きも慣れざる獰惡の叫び聲が今しがた過ぎて來た阪を繞つて響き渡つた。すると此邊に群れ遊んて居た五六匹の犬がキャンくと悲鳴を擧げながら、狂氣のやうに逃出した。續いて百姓二三人バタくと驅來り、自分が茫然イんて居るのを視て、彼等は走りながら、

『檀那、危なう御坐いますよ。一昨日公園の檻を破つて飛出した獅子が此邊をうろつきます。今鳴いたのは慥かにそれてすぜ」

と言ひ棄てゝ、手近の家に驅込み行く。

「ヤー其奴は危險だ。油斷はならぬ」
と獨語をいひながら、前路を看れば、二三歳ぐらゐなトチ〳〵歩きの兒が莚の上で遊んで居る。
「是こそ最も險難だ。何處の兒だらう」
と抱取り、其處ら見廻す暇も無く、
「ソラ出たぞ！」
と背後よりの懸聲に、振顧りみれば、羆の毛に似た色の立髮を被つた巨大の獅子は早くも三四間の間に逼つた。最早何とする猶豫も無いから、掻抱いた赤ン坊を傍の百姓やの窓から擲込み、續いて其窓に攀登らうとする時遲し、千鈞の鐵椎にても撃たれたかと思ふやうな重力が脊後を壓した。其途端に
「シマッた」
と叫んだ事までは記憶があるが、それから以後は無我夢中で、全然知覺の境涯を出でた。
サア是からが變なんだ。獅子は自分が脊中に乗掛りながら、左右の前脚で自分の頭を攫んで、グイと吾顔を彼の方に振向け、シゲ〳〵と覗きこみながら、

「ヤア劣い面つきの奴だナア。何處かと尾崎愕堂に肖て居やがる。そして大隈伯が吹立てそうな事を拔かすらしい口許をして居るな。併し性質は善さそうな奴だから、食ふ事だけは勘辨して遣らう。代りに、、、、、」
といふ。
「馬鹿をいふな」
と遣りかへせば、
「贅澤いふな、食はれるよりか好からうが」
と拔かしながら濫暴狼藉。
「巫山けるな」
「默まつて居ろよい」
「此ン畜生」
「畜生だつて、固より己は畜生サ。獅子だもの」
といつて苦しめるから、自分は撥除けやうとして、ウン〳〵と唸つて居た。暫くすると戛然といふ音響が聽えたので、フイと目を睜いてみれば、身は戸板に載せられて、村[illegible]手の玄關に舁ぎ込まれ、今其臺を卸した

處。それから藪先生が何やら異しい水藥を呑ませて呉れた。それて漸く生氣づいて、四邊を見回せば、村民が黒山のやうに玄關にたかつて居る。彼等は口々に、

「お傷はありません歟」

と尋ねる。

「ソウ」

と答へながら、起きやうとすれば、體は全く綿のやうになつて、立つ處では無い。乃て其戸板のまゝて福岡の住宅まで送りつけられた。宅ては昨夜來歸らないのて心配して居た處。話を聽いて再生したかのやうに無事を喜んだ。

其後何處が何うといふても無いが、五體中が痛むのて、十日許寢込んて、漸つとの事に健康を恢復した。第二の奇厄といふのは、是てあつた。

＊　＊　＊　＊　＊

肉體は幸に猛獸の餌にもならず、舊の健康に立返つたが、精神は事前の淸が〱しかつたに似ず、一つには彼半狂的の女に攪亂され、二つには、獰猛な獅子の爲に凌辱された感じがして、鬱々として樂まぬ。聞けば其獅子は如何にしても捕まらず、尚ほ福岡界隈に出沒するとの事。それて此邊一帶の住民は防禦の利器を帶して外に出る事を許された。恰度獅子に襲はれてから十日目てあつた。餘りに氣がクシヤ〱するので、一刀を腰にして、午後からフラリと家を出て、知友の許を音なうた。すると朋友二三人圖らず此に落合ひ來り、其中には酒が出來る。互に遠慮なき時事談に興が乘つて、平生からの下戸が今日ばかりは不思議に酒が飮める。醉致淋漓とてもいふ可き愉快を覺えたのは、臍の緒切つて、是が始めてゞあつた。黄昏になつて此家を辭し、表に出たが、何と無く面白くて堪まらぬ。「平生一滴不レ入レ口。意氣頓使二千人驚一」なんて陸放翁の詩などを微吟して、一町許も歩く中に、馬鹿が又彼女の事を想ひ出した。彼奴其後如何したか知ら、今一度行つて容子を見やうと、酒の爲に促されて、博多の街を過ぎ、何時か市の東郊箱崎町の警察署前まて遣つて來た。彼女の家は松原南の堅糟てあるが、是から如何行くか

捷徑であらう、是は一つ警察で尋ねて見やうと、折柄三四名の巡査が署の門内で各々サーベルを拔いて、刀身の優劣を比べて居るのを見掛け、門外の大木の下に突立ちながら、會釋もせずに、酒が言はせる歟、
「オイ堅精に行くのは、如何行けば捷徑歟」
と出拔けに問うた。
「何たる横風な物の問樣歟。一體貴樣は何ぢや」
と其中の一人が尤めた。何此土百姓の巡査奴がといふ輕侮心は酒氣と倶に猍々と發した。
「乃公歟。乃公は乃公ぢや。……ぢやが君等はサーベル何ぞを振くり舞はして、本當に鬪ふ術を知つて居る歟」
と嘲弄すると、
「警官に對して無禮な事を言ふな」
と其一人が大喝した。
「何が無禮歟」
「無禮ぢや」
「其れなら無禮歟無禮ぢやない歟、眞劍勝負を試みてみやう」
といひながら、腰なる佩刀の鞘を拂つて立向つた。其間質に髮を容れぬ。敵も不意を喫つて避けるに遑が無い。手にせるサーベルを吾眉間に擬てゝ身構へた。平素から我が心掛ける處は此處ぞと思ひ、走り懸つて、諸手突きに一突き敵の心臟の邊りを突けば、鍔許近くまでグサと突透し、對手はアッと其場に仆れた。
是は大變可惜たら事を仕出かしたと、後をも顧みず一目散に、野ともいはず、山ともいはず、小三十町も走り逃げて、一縣道の邊まで來れば、續いて追來る者も無いので、並木の根に腰打掛けて、暫く息を次ぐ所に通りかけた一人の紳士がある。自分が喘々と息を切るのを見て、
「何かしやしませんか」
と問ひかけた。
「否や、餘り走り過ぎて、息が切れたものですから、それて……」
と、さりげ無く答へれば、

「それなら宜いが、自分は亦例の獅子にても追驅けられなさつた歟と思つて」

と今の珍事を知らぬらしいので、先づ安心し、是から何處に逃げやう歟と按じながら、其人と路連れになつて、再たび歩き出した。

彼人は尙ほ獅子談を續けて、

「昔から虎を野に縱つだの、市に三虎を出すだのといふが、市に獅子を走らしたのは、恐らく是が初だらう。それにしても十餘日かゝつて、まだ捕まらんなんて、警察の無能も驚く可しだ」

などいふ處、相當に物も識り、考へもありそうな仁と見て取つたが、自分の心中では、追捕は獅子よりも猛なりだ、成るだけ警察が無能であつて吳れゝば好いが、其間に何處にか落ちのびたいものだと思ひながら、尙ほ話を續けて來る中、縣道を交叉する横の細い里道から、ヒヨイと出て、又横に這入つて行く女がある。何か物思はしげに下を向いて、力無げに歩く樣を、見るともなしに風と瞥れば、日暮てこそあれ、紛ふ方なき先夜の美人である。自分は覺えず、

「アラ……」

といひながら、覺えず立停まつたが、又其刻下に、今彼女にても認からうなら一大事と思ひつき、早脚に脚を進めると、路連れの紳士は、自分が尋常ならぬ驚きに悟つたらしい顏色にて、微笑を帶び、

「君は彼女を御存知てす歟」

と問ひかけた。

「イーエ」

と平氣を裝うて答へれば、

「それても何だかお近づきらしかつた。」

と揄揶ふやうにいふ。

「一體彼女は何處の女てす歟」

と更に問うてみた。すると

「彼は福岡の者て、高等女學校なども卒業した女だが、昨年から氣が可笑しいので、此處の親類に保養に來て居ましたが、大分快いので、先頃一旦歸つたやうに聞いて居た。それが復た來た處を見ると、亦

再發したかも知れん。君、關係でもしたんぢやありません歟」
といふ。此先生も亦吾胸板を抉る。
「冗談いつちや困ります」
といひながら、話頭を轉じ、
「失禮ながら、貴下の御姓名は何と仰しやる」
と問へば、乃公の姓名を知らぬかといつた風の顏つきで、
「黒岩周六」
「ア、貴下が黒岩涙香さんですか」
といへば、今度は
「貴下は」
と來た。此處で吾姓名を名乘れば、吾事休むと思つたから、
「私はホン詰らない者です」
と答ふるを、幸に强ひて問究めやうともしない。併し黒岩涙香と聽いては、モー浮か／＼路連れなんかしては歩けぬと思ふ矢先又亦道の交叉點に來ると、涙香先生、
「自分の宅はツイ此横だから、是で失敬」
と來たので、先づ／＼一安堵。此で亦ホッと二息した。
第三の奇厄といふのは、即ち是れなんだ。

＊　＊　＊　＊

サア是から此一身を何としやうと左思右考、獨り冥想に耽つて居る途端、出しぬけに背後から吾肩を摑んだ者がある。不意を喫つて、扨はと驚いたが、弱味を見せまいと、
「誰だ」
と問うてみた。すると、
「貴下如何かおわるうは御坐いませんか。大層魘されていらしやるから、お起し申しました」
といふのは、老妻の聲。ハテなと目を瞭いて、四邊を見回せば、吾家の内で、而も宵に潜り込んだ夜着の間であつた。何の事だい、災厄の三つも重ねて、散々に困んだのは夢であつたか。マ善かつた。それにしても恐ろしい長い夢を見た。此んな長い夢を見た事は是迄に

ない。否や無いことはなからうが、一通り前後の辻褄が合つて居て、お負に其光景が歴々と、目覺めて後まで、記憶に印象した事は無い。それて餘りに珍らしく感ぜられたので、見たまゝを一寸書きつけて見た。時は方に前月廿五日の事てあつた。

全體夢は熟睡の間に見るのては無い。睡眠中に寐返りをするとか、何かの音響が耳の鼓膜を打つとか、或は光線の光が目に射すとかして、休息して居る知覺神經の頭を一寸掻きむしる。するると知覺のホンの一端が其活動を開始しかける。それが即ち夢てあるといふが如何にもそうらしい。併しながら此際に動き出すものは、先づ記憶力て、判断力はまだ／＼起き出て參加しない。それて夢といふ奴は、諸の記憶の雜陳てある。從つて時間と場處との觀念が其記憶を順叙立てぬから過去も現在も、内地も外國も、一つになる。之を譬へれば、恰も天狗俳諧をするやうなものてある。各々吾作を秘して、別々に句を持寄る。それが銘々他と沒交渉て出來たのてあるから、扨出し合はせて見ても、多くは何の意味をも成さぬ。是は成さぬのが正則だ。併し何かすると、奇妙に各句の繋ぎが着いて、名句を成す事もある。世に面白き夢だの、正夢だの、靈夢だの、夢の知らせだのといふのは、之と一般て、雜多な諸記憶が都合善く出合つて、偶然にも一文章となつたのに過ぎぬ。

てあるから、如何に巧妙に構成された夢ても、之を見た人平生の記憶以外、想像以外の材料はない。悉く皆箇中の物てある。事の序に自分が今見た夢の記憶材料を分解して見やう。

第一此夢に可笑しいのは、一度ならず、二度ならず、三度までも、自分が危ない處に頭を突出す事てある、是は何の不思議も無い。此數日、御大喪使の一部から賴まれて、御大喪記錄の或部分を修正した。其中て御轜車御通行の御道筋の記に至ると、警衛隊の活動がまるて戰記を看るやうだ。ソラ虎の門外繩張の第一線に群衆が一萬有餘押寄せたとか、ヤレ赤坂見附の警戒線を突破せられたから、應援隊を繰出したとか、扨は何

處やらの繩張を踏切つて襲ひ來た幾千の奉送人をヤッと何處やらで喫留めたとか、其喧囂、雜踏、制止、防衞が數里の間の要所〳〵に續發して居る。それを寢るが寢るまで讀んだのが、頭の裏の平靜を攪亂された根元なんだ。

それから第一厄に婚姻の幕を現出したのは、一箇月前に自分の甥が日比谷の大神宮で婚姻の式を擧げた。其折立合人一同と記念の爲に撮影した寫眞が、結夢の朝到着した。そして其甥といふのが福岡の人間である。それに誘はれて、場處が福岡の事となり、一轉して、此に住して居た壯年時代が幻映する。すると其頃からの知友鶴原定吉君までが呼出される。尤も當年の知友も尠からぬのに、獨り鶴原君のみが見はれて來るのには、別に尙ほ一つの近因もある。結夢の前日であつたか、當日であつたか、憲政擁護團とかの同志記者大會とやらが、築地の精養軒で開かれた記事が見えた。其席上鶴原君が議長を勤めたと其記事中に見える。之を一讀した際、時代といふものは可笑しいものだ、鶴原君が憲政擁護呼はかりして騷ぐなんて、不思議な事もあるものだと感じたのが、それなんだ。それから夢の幕中の大立物となつた美人、是が實に問題である。如何して彼んな容貌の婦人が眼界に出現したかと、種々に稽へて見るうちに、礑と想ひ當つたのは、同じ月廿三日の夜國民黨の大懇親會で尾張町の松本樓に會した時、席上に周旋して居た同樓の女中がそれなんだ。それが偶然にも幻影せられたのである。但し是が如何して半狂的に取做され、お負にそれと相思の關係まで組立てられたかは、疑問である。意外な嫌疑は此邊から起らぬとも圖られぬ。蓋し此種の半狂的美人は、自分が少時長崎の遊學中に覩た事がある。材料は之と結び着いたのでもあらうか。それにしても餘りに脚色に念がいり過ぎて居る。此處遺憾ながら本人の凡々たる凡夫なる事を明白に證明するものがある。古人の誰やら「不レ夢ニ周公ニ夢ニ美人ニ」といつたが、大概此乃公と肖た奴であつたらう。次に警官の天津得之君、同君は現に今芝區の或署に在勤する舊識の人である。但し福岡などに奉職し

て居た事は無い。それが夢中福岡近郊の一所に駐在するのも可笑しいが、是は警官を想起すると同時に、聯想は直ちに同官の同君に及んだものと見える。

次に第二厄を司配する猛獸獅子との問答、是は自分獨得の夢想である。總別自分が夢には、可笑しい變な奇夢が多い。中に就いて特有なものが二つある。其一つは兩足の足趾を揃へて、空中を翺翔する事である。尤も此種の夢は人間に在ることださうな。現に吾知友中では末永鐵巖君なども時々見るといつて居た。併し同君のは春の麥圃などから告天子かなんぞの飛立つやうに、何處までも空へ／＼と昇つて行くのださうな。が自分のは左樣ぢや無い。地上を離れること三四尺にして、兩足を揃へ、能の橋懸りといふ腰着きとなり、或は前面、或は左右の何れかに方向を取り、横へ／＼と直進するのである。是時に當つては、海洋の上であらうが、沼澤の上であらうが、何等の故障も無く、燕か何ぞのやうに思ふがまゝに翔られるので、其折には何時も飛行機だの飛行船だのといふ左樣な憾空な道具が要るものか、斯うすれば斯う飛ばれるものを、世間の奴共の馬鹿サつたらない抔と考へ續けるのである。此種の夢は、月に大概一度ぐらゐは見るが、是だけは何から來るのであるか、今に自ら判斷がつかぬ。若し自分を高く買つてやれば、古から天馬空行などいふ語があるが、斯る想趣の一分でもあつて、それが夢裡から見はれるか。抔といふさへ黴氣の性だらう。

今一種は今回の夢にも這入つた動物との問答である。此種の夢は幼年の頃から、即今に至るまで、是も毎月見ぬ事は無い。對手は犬・猫・牛・馬・蛇・鷄・猿・鹿・虎・豹・熊・獅子等の類である。時にはそれと親しみ遊ぶ事もあれど、多くは倶に奮鬪する、追詰められる、進退谷まつて憐みを乞ふ、詭言を放つて彼等を欺く、其結果として互に論難交渉する等が落である、之に就いては、夙に自ら一説を得て居る。願ふに自分は人樣と違ひ、自分の祖先が大野蕃であつて、其れから自分までの距離が割合に近いのであらう。それだけ自分に野蕃性が多いと見える。漢語でいへば 不面目ながら自分

などが所謂猛々の民サ。……が、此種の夢なら、自ら何時でも製造する事が出來る。それは寢しなにドッシリ何か食込んで臥やうなら直なんだ。ビフテキの二皿も平らげて枕に就けば雜作は無い。若も御注文の方でもあつたら、夜の八九時過ぎに、西洋料理御持參で御訪問下されい。何時でも動物と鬪つたり會話をしたりする夢を見てあげませう。それから本夢中の獅子が自分の面を瞰きこんで、尾崎愕堂に肖て居るのなんのと言ひやがつたのにも、亦手掛りがある。それは何時であつた歟、芝の紅葉館で集會の折、愕堂君も居れば、自分も列坐した。すると席上に三宅雪嶺君も來合せて酒宴の際中用ありげに、自分を坐敷の一方に引出し、同時に愕堂君をも、其處に呼出したから、何の用事があるのかと待つて居れば、此咄々博士は相對坐する自分と愕堂君と指ざして、坐中の衆客に向ひ、例の諷語的口吻を以て、

「見たまへ……二人は何處か肖て居る……フヽヽヽ、」とやつたから、衆客は同時にハッハヽヽヽヽと笑つた事がある。今は獅子を假りて、自分が面の棚卸しと來たから、連想は直ちに當年の雪嶺談に及び、其語が獅子の口から再出する事となつたと見える。獅子との夢關係は雜と斯樣な次第であるから、自分には些つとも不思議も何んにも無い。併し獅子の妄動中、ヽヽの始末に至つては、我ながら少々驚いた。兎はいひながら、夢想は既に郷里といふ區域で活動すれば、昔時郷里の少年習癖が此に持込まれるも、亦自然の針線であらう歟。

最後に警察官との格鬪は、亦御大喪記の一部から胚胎し來つたことを疑はぬ。其中で對手の警官の胸許目懸けて、諸手突きに一刀をグサと突込んだ邊りは、慥に解釋の材料がある。自分が壯時刀を揮つて、支那人の賊を遣着けた事がある。初太刀を敵の頭に擊込んだが、戞乎と音がして、手應へはしたものゝ、二の太刀に胸の下を衝いたので、ウンと一聲、其儘に仆れた。爾後熟々思ふに、日本人に刀をさへ執れば、「擊つ」とか「斫る」とかいふ古傳的觀念があつて、必らず此に出

やうとする。明治十年西南の役に於ても、最初叛軍から白兵斫込の襲撃に會つた近衛兵が、散々に遣られたのは此方は銃に銃槍を裝しながら、敵の白刃を揮つて來り向ふを見ると、其銃槍の穗を揃へ、隊列を正して之に對しやうとはせず、直に其銃桿を揮翳すので、其透に何時も乘ぜられた。それて數回敗を取つた、辛き經驗に懲りて、後には白兵來侵と見れば、銃槍の穗尖を衝着けるやうになつたので、流石の薩摩隼人も長技の施しやうが無くなつたといふ事てある、自分も前の盜賊征伐て頗る覺り得たものがある。傳説の所謂空竹割などは、景氣は好いが、自分等の生くら腕ては所詮出來る譯ては無い。之に反して、胸間の平方尺ぐらゐな面積なら、何處を突いても、鋒刃が届きさへすれば、致命傷を與へるに足るのてある。そこて自分は思ひついた。如何なる强敵に出會つても、敵に自分の頭を斫らせ、自分は斫られながら敵を突けば、己は仆れるまても、敵を慥に遣着ける事が出來るとの確信を得た。それて萬一格鬪の已むを得ざる場合に際會せば、此に出づるの外は無いと、日頃から考へて居たのてある。それが夢中の活劇に見はれ、見事功を奏したのてある。諸手突の種子は即ち是れなんだ。此だけは夢とはいへ、平生の心掛に背かずと、自分ながら自賛を禁ぜず、頗る得意の氣味がある。……が、其場から逃散つて、苟も刑戮を免かれやうとした根情に至つては、夢ながら淺ましい。平生から何處かに斯んな卑しい量見が潛伏して居るかと省みれば、暫汗の背に浹きを覺えぬ。其處まで自分は卑夫てあらう歟。それから對手が亦警官と來たのは、亦又御大喪祀の影響と見える。最後に突如として黑岩周六君が局面に入込み來つたのは、何とも異樣な感がある。が、併しそれも考へてみれば、平生周六先生は學者て六ヶ敷い人てあるとの觀念が、吾頭に在るに相違ない。處に本夢て逃走の途中に六ヶ敷そうな人に邂逅したので、忽ちそれが先生と結びついたものと見える。

夢のたどちを繹ぬれば、雜と斯んなものである。皆平生の諸記憶・諸思想から來たのてあるから、何の不思

議も無けれど、餘りに好く繋がつた夢てあるから、昨今湯治のつれ／＼に、暇にまかせて書きつけて見た。古から痴人夢を說くといつて、馬鹿の骨頂になつて居る。それを知りつゝ書きつけるなどは、餘り氣の利いた業でも無いが、御本人固より痴人に相違ないから、御遠慮なしに書くの如くす。（大正二年一月の初、相州湯河原の客舍藤田屋に於て）

夢の記事としては面白い。

斯くあるべき男（下）

田村俊子

○寡婦に對する男

私のこゝに云ふ寡婦は年の若い女にのみ限つてゐると思つて頂きたいのです。

私の友達に一人年の若い寡婦があります。非常に美しい女てすが自活の道を立てゝ間借りをしながら一人て暮らしてゐるのです。實家は相當な生活をしてゐるのてすが實家へ歸れば夫の姓を嫁入つた先きへ復さなければならないと云ふのを悲しがつてそれて、唯一人て夫の姓を名乘つた儘淋しい生活をしてゐるのです。小供がなかつたものてすからその儘夫の家に居る譯にも行かなかつたのです。友達とは云つてもさほど親しい間柄てはありませんから、この人のほんとうの心の內と云ふものを聞いた事はありません。けれども四年以前に別れた夫をいまだに追慕して毎日墓參をする事ばかりを何よりの樂しみにしてゐるらしいのです。別れた當座は毎日泣いてばかりゐたそうです。その當時

私が逢ひました時も涙をこぼしながらいろ〳〵な話をしたのでした。それでこの頃逢ふとよくこの人は「もうあきらめた〳〵」と云ひます。「何うあきらめたのか」と聞きますと、「死亡なつたものは何う思ひ詰めたところで仕方がないから、この頃では自分の傍に夫が始終附き添つてゐるものだと斯う信じるやうに心がけてゐる」と云つたのです。身體は虚弱な人ですが近頃では以前のやうに憂欝なところがなくなりました。狹い座敷の内にはちやんと別れた人の寫眞を飾つて、いつもその前に美しい花などが供へてあります。
て、この人は非常に美しいのです。若いけれどもおしろいなぞは塗けてゐた事などもありませんが、途中なぞで出逢つてもふと人を振り返へさせる様な美貌を持つてゐるのです。自活をしなければならないのでその仕事の爲によく出て歩いてゐます。それで周圍の人がこの人を一人でおくのを勿體ないと云つてゐるのです。そうして斯う云ふ美しい人を獨身でおくのは男へ對して罪だと云つてゐるのです。

この人の職業上からいろ〳〵な男性とも交渉があるに違ひありますまい。そうして現在の周圍の男に對してこの人がどんな考へを持つてゐるのかそれは聞いた事がないから私は知らないのです。然しこの人に逢ふ度に私はいつも世間の男と云ふものがこの人の傍に近寄らない事を眞から望んでゐるのです。何故か知りませんが私はこの人の傍に男性の近付かない事をいつも望んでゐるのです。

寡婦に對する男に向つて私は何うあれでせふと云のうか。それは極く何でもない事なんです。單純な事をのです。私がこの人に向つていつも不安を感じる事なもつて男に向つて一と言を云へばいゝのです。それは世間の若い寡婦に對しては男性は近付かない方がいゝと云ふ事だけなのです。

○無知な女に對する男

男の慾情の奴隷となり得るものは無知な女です。
無知な女は男から愛されやうとするよりは、男から

殘虐的な憎惡を受けまいとして男に向つてはその心が阿諛的に萎縮してゐます、そうして一面から云つて男をアドマイアするものは無知な女です。無知な女は男に對して屈從のほかには何も知らないのです。

男は無知な女を侮辱的に虐げる術に長じてゐます、無知な女の前では男は非常に意地が惡るくなります。そうして嫌厭します。けれども男の心のうちに、いつも影を窄めてはいつてくることの無知な女に對して、男は常に一種の印象を無知の女から强いられてゐるのです。男は無知な女を厭ひながらも、自分自身の感情をあやす事によつて男は矢つ張り無知な女を求めてゐるのです。

然うして男は無知な女の前にあつては自身の感情を制止しません。激した時には女の肉體を打擲する事が出來ます。放縱な慾情の前に男は恥ぢを省みずに女を弄ぶ事が出來ます。無知な女の前では男特有の專横をもつて虐げる事が出來ますし、又無知な女の前では一とつの動物體になつて這ひ廻る事も出來ます。男は自分の玩弄品を大切にしなくてはいけますまい。

自覺した女は男に玩弄物とされる事を拒絕します。然うしてある權利を主張したその結局は女の方から男に對して女の玩弄物となる事を望んでゆきます。ある非常に新しい女が「私が夫を持つなら何でも云ふことを聞くやうな男にする」と云ひましたが、現在の女が男より先んじやうと云ふその結論は、振り返つて男を玩弄すると云ふ事になるのかも知れません。現在の性の爭鬪は男を玩弄するか男に翫弄されるか、この二たつの權利を主張し合ふにとゞまるだけの事かも知れません。斯う云ふ場合に男が多くの女を翫弄すると云ふ一とつの事實を、自覺しつゝあると云ふ女の面前に執拗く見せ付けると云ふ事は好い皮肉です。男は自分の翫弄品をどこまでも大切に保護しなくてはいけますまい。

○社會的卓越の技能を持てる

女に對する男

ある卓越した技能を持つて社會から尊敬されてゐる女性は、自身の生活を中心にして四方へその心を活動かしてゐます。ですから男性化してゐると云ふよりは性そのものを解放してゐるやうな女が多い。同性に對して男性的の心持で過してゐる事もあれば、異性に對してもそれを殊更に異性として取扱つてゐないのです。

かう云ふ女は自分の技能に對するプライドの爲に、普通の女の嫉妬と云ふやうな性癖を失くして、その性格が寛濶になつてゐます。男が小供のやうになつて女と云ふものに愛されやうと思ふなら、かう云ふ女を選ぶに限ります。自分の愛するものに對しては情熱があつて、又理智に富んでゐます。感情は燃えてゐながらその心は冷めたく澄んでゐるやうなところがあります。自分の獨特の技藝を一層研く事に心を集注してゐますから精神的の修養は少ないかも知れませんが、凡てに對して義俠的なところがあつて頼母しい。かう云ふ女に對する男はあくまで純で眞面目でなければいけません。可愛いらしくなくてはいけません。さうして斯う云ふ女の前ではいつも何かしら感激の涙を催うしてゐる様な男でなくてはいけないのです、あながちこの女より若年でなくとも、弱い憐れつぽい、女の指の先きに突かれてもひよろ〳〵とする様な、女の前で一と言を云ふにも顔を赤くする様な、女に壓迫されてその瞳子をいつもおどつかしてゐる様な男でなくてはいけません。それからもう一とつの資格は、男がお坊つちやん的に美しくなければいけない事です。

○老孃に對する男

私のこゝに云ふ老孃と云ふのは、一種の戀愛の絶望者ばかりを指します。

老孃は男に對して恐ろしく神經が強くなつてゐます。さうして兎もすると男性と云ふものを呪咀と憎惡の方へ引きたぐつて來ます。老孃は男を忌み嫌つてる

のではないので、唯憎んでゐるのです。男と云ふものが憎いのです。それと同時に又同性を嫌ひます。異性を憎んで同性を嫌ひます。さうしてその心のなかには輕石がつまつてるやうに偏執になつてゐます。

春を知らずに徒らに老いて行く女はある意味から云つて悲慘です。この老孃の偏執な感情を柔らかに解きほぐしてやるのは唯異性の親和があるばかりだと思ひます。老孃に對する時の男は、いつも謹嚴で、さうして親和に滿ちた忠實な友人でありたいと思ひます。

○自分と婚姻的關係のある女に對する男

夫は妻に對して決して小言と云ふものを云つてはいけません。事情が何であらうとも家庭において夫が妻を泣かせると云ふ事はたいへんな罪惡だと思はなくてはいけません。妻の爲に夫が泣くやうな場合があつてもその感情を妻の前で露出にしてはいけません。まして妻を怒罵ると云ふやうな事は神佛の刑罰に逢つても仕方がないと思はなくてはいけません。自分の妻が氣の利かない痴愚なものであつたら、それは神から與へられた自己の運命だと觀じてあきらめなければいけませんし、又それが非常に怜悧で婦人としての天分を盡くせるやうな德の高い女であつたら夫は神に向つてその事に就いて毎日感謝の辭をいたさなければいけません。

夫はまた自分の妻の器量萬端を出來るだけ世間に向つて吹聽する必要があります。家庭にある時の妻に對する態度と、世間へ出て自分の妻を批評する態度とは、いかなる場合にも一致させておかなければなりません。妻に對する不滿や不平を世間に發表する事は、つまり自身の愚鈍を露骨にするものだと思はなくてはいけません。自分の妻に對しては物質的の滿足をさせる事をもつて最要件としなくてはいけません。自分の妻に對して共稼ぎをする事を宣告するやうなものは男としての價値の零な事を示してゐるものだと思はなくてはいけません。

妻を除いて他の婚姻的關係のある女に對しては、男はたゞ姑夯を下げない事を忘れさへしなければそれでいゝのです。

○放縱な女に對する男

放縱な女はもつとも肉的の誘惑の氣分に富(と)んでゐます。

放縱な女には藝術味があります。男の肉體を溶ろかし謡すだけの熱氣(はつき)を含んでゐます。そうして眼には燃えるやうな情熱があつて、その肌ざわりが何所(どこ)と云はれず甘つたるいのです。放縱な女は浮氣です。男の要求をしりぞけるだけの力は、その體内を烈しくぬるく流れてゐる血潮の爲に痲痺されてゐるのです。それから又、放縱な女は遊戯的の氣分に充ちてゐます。

男は放縱な女を決して馬鹿にしてはいけないのです。もつとも戀情的の色彩のある興味を女と共に持つ爲に、情趣的な遊びを女と共にする爲に、男は放縱な女を華やかな明るい芳烈の香りの充ちた歡樂の底に大切に闘つておかなければいけないのです。そうすれば放縱な女の身體からは絶へず耽溺の滴汁が蒸發してきます。男の爲にはその滴汁は人生のオォシスかも知れません。

○人の妻に對する男

人の妻に對した時は、その妻の良人たる人よりも阿呆げな様子をしてゐる事をもつて最善といたします。

○藝妓に對する男

襯衣を着ないことをもつて最上といたします。

女優の内幕を暴露せる 獨逸女優の日記

山本迷羊

一、はしがき

彼方でも女優、此方でも女優。女優女優といふ聲は津々浦々にまで響き渡る。私のやうな田舍に引込んでる者には滅多に本尊樣を拜むことは出來ないが、評判は始終承つてる。曰く「東京朝日」の『新女優』、曰く「讀賣」の『女優とは?』、曰く「東京日々」の『帝劇の女優』……見聞のごく狹い私の眼に觸れただけでも、これらの續き物を始として、それ何雜誌の女優號だのやれ誰ぞれ名士の女優觀だのと、此頃の新聞雜誌は、何とか女優問題に嘴を容れなければ氣が濟まないと云ッた態だ。流石は日の本、斯う來なくッては、その昔天の岩戸をお開き申した女神さまに申譯のない次第である。尤もこれらの記事は、今日の處では多くは讀者の好奇心を釣るための手段のやうに思はれるけれど、やがては之が眞面目な社會問題の一つとして論議せられる日が來るに相違ない、又さうならなければならぬ筈である。

て、目下の我國には元より風馬牛の事とは信じて居るが、今茲に近頃世界の視聽を聳かした獨逸一女優の日記出版事件――彼の國女優の內幕・劇界積年の秘密を暴露した一事件を紹介して、我國の眞面目なる女優研究者の參考に供したいと思ふ。

其日記といふのは、昨年(一九一二年)の四月頃、獨國シュトゥットガルト市の或る書肆から「傳記叢書」の一冊として現はれた『獨逸女優日記抄』と題する四百ページばかりの綺麗な本である。仰山な雜誌の廣告に釣られて早速取寄せて見たら既う六版を重ねて居た。著者は或る都會の牧師の娘で、この人妙齡にして女敎師

となり、極めて融通の利かない道學先生を校長に戴き、その校長の指導に基いて鑄型へ嵌つたやうな教授法を墨守して居る孰れ劣らぬ御芽出たい仁々に伍して、バイブルを說き歷史を語り算術を敎へて居たが、持つて生れた他人一倍の藝術慾は竟に彼女をして沈香も炷けず屁も放り得ざるこの乾燥無味な職業を棄てしめ、「骨と皮とで造られた」現身を何處も同じ陽春の百花繚爛たる梨園の眞中央に拉し去つた。この女は、果して天才かどうか解らぬが、兎に角女優としては普通以上の天分を持ッてゐるところから、僅の間に劇壇の寵兒となりかけたが、故あッて又もやこの新しい華やかな職業を棄て、今は都離れた某地にさる人の爲めに擧げた最愛の幼兒を抱いて悠々自適の閑日月を送つてゐる。

父に死に別れて平和に滿ちた溫い家庭を去つた十八歲の處女が、俄に荒波立ち騷ぐ社會も社會、現世からなる伏魔殿とも謂つべき芝居道の男波女波に揉まれ揉まれて、我ながら呆れ返るやうな女になり了らうとしたが、危い所で足を拔く、そのざッと六年ばかりの日記から書き抄いたのがこの書物である。此の本の內容を一言で蔽せば、二十世紀の今日に於ける獨逸女優の內幕、從つて獨逸劇場關係者の罪惡を遠慮會釋なくぶちまけたものである。然らば彼女は何の爲めに他人には見せぬ筈の自分の日記を公刊したのかと云ふに、この本の序文にこんな意味の事が書いてある。

「一千九百十一年(即ち一昨年)五月にギーン及びフランクフルト・アム・マインでこの兩市の女優連が集會を催して、女優の社會上の悲慘な境遇並に經濟上の困難をどうかして貰ひたいといふ事に就いて意見を交換し社會の輿論を喚起さうと試みたことがあッたが、何しろ其處へ集つた女優は現在其の都會の各劇場へ傭はれてる連中なので、自分の前途を犧牲にしない限りは、平常から腹の中にむしやくしや思ッてる色々の事を公然と口へ出す譯に行かず、從ッて世間の者に女優の有りの儘の內幕を知らせることが出來なかつたから、折角の集會も何等の効も無いに定ッてる。女優の地位を高め今日彼等が受けつつある有らゆる虐待を防遏するに

は、自分の如く最近まで自ら女優であって、且つ現在は劇界と全く縁の切れてる者が、自分の經驗を率直に語り、臭い物の蓋を除つて恥も外聞も厭はずに女優に關係のある劇界の内幕を事明細に社會に告げるのが最上策である。現在憂き目を見てゐる女優自身が今日のやうに色々の事情の爲めに左顧右眄して人前ばかり貴婦人振ッて居たのでは、彼等の境遇の改善は百年河清を俟つの類である」

この抱負を以て、彼女は自分が豫て書き溜めて置いた日記を剞劂に附した。とはいふものの著者は自分が女優時代に蒙つた迫害の復讐をする爲めにこれを出版するのでは決して無い。上述の如く目的とする所は女優の境遇の改善を促すにあるのだから、その結果が現在の劇場關係者に直接の迷惑をかけ彼等を死地に陷れるやうなことになッては甚だ面白くない譯である。そこで著者はこれを出版するに當つて、書中の人名地名及び劇場の名を悉く抹殺し、人物の描寫を全部省略し、年月日もすッかり後へ戻して、誰が見ても解らないやうにした。次にこの本は如上の目的如上の用意を以て世間に提供されたのではあるが、著者もまだ前途春秋に富む婦人ではあり社會の一員として愛兒を養育し一家の幸福を計る責任のある以上は、どんな迫害が來まいものでもないからと云ッて、本名は絶對に秘密にして居る。この本に署名してある「ヘレーネ・シャルフェンシュタイン」Helene Scharfenstein とは全く世を忍ぶ假の名である。

併しかういふ風に固有名詞を悉く抹殺したのと、その内容が餘り人心衝動的なのと、今一つには日記そのものが文學上の作品としても相應の價値がある—例へばエンゲル教授の如きは、この書に「渾然たる藝術品」なる讃辭を呈してゐる—ところから眞正の日記ではない、作り物だとの批難が諸方から出た。そこで出版者は更に卷頭に或る有力な人の證明書を添へて、この書が決して空想の産物でないことを主張してゐたが、とうとう日記の草稿をシュトゥットガルト市の區裁判所へ提出し、同裁判所一九一二年度告示C六五六二號で、

眞の日記に相違ないといふ證明を得たとのことである。日記の日附は一八九六年九月から一九〇二年十二月迄になッて居るが、これは著者の自白通り殊更に變へたもので、ヘレーネ女史がイプセンの『蘇生の日』の中のイレーネに扮して旺に活動してゐることから判斷しても、女史は確に三四年前に梨園を退いたものらしく思はれる。私のやうな劇壇の門外漢にはテンで見當もつかないが、著者の詮議なんかは第二の問題、たゞ書いてあることが如何にも痛快だから、何かの參考にもならうかと思つて少許紹介することにした。序に曰ふが、獨逸女優の起源は凡そ二百五十年も前である、この長の歳月の間に彼の國の女優劇は勿論長足の進歩をしたかはりに、それに伴つて裏面には種々の惡弊が增長した、否、今も現に增長しつゝある、たゞそれが表面に現はれないだけである。明治聖代の末尾に方ッて我國にも新女優なるものが勃興した、大正の御代にはさぞかしいや榮えに榮えて萬緑叢が紅で塡まることゝ思はれる。初のうちは何のかんのと言つてても、時といふ萬能の王樣にチリ〳〵と呵られると、雀が蛤に化けないとも限らぬ。殷鑑遠からずとやら、昔の支那人は乙に悟つたことを言つてる。

二、牧師の娘

ヘレーネは妹のアンナと共に慈愛深き兩親の膝下て、乳母日傘とまではゆかなかつたらしいが兎に角何一つ不自由もなく養育され、父の牧師から懇に普通學の教授を受けた。悲とか愁とかいふものは此家庭の何處の隅にも影を翳さず、ヘレーネの責任といふのは父に課せられる問題の答案を作る位が關の山で、月日はいとも樂しく流れ去ッたが、さしも頑丈であッた父が、不圖驟雨に打たれて風邪を引いたのが原因で中耳炎に罹り更に腦膜炎を併發して遂に黄泉へ旅立ッてからは、ヘレーネの身にもそろ〳〵浮世の鹹い風が當りはじめた。ヘレーネは、これも矢張牧師をしてゐる叔父の勸告によつて師範學校へ入學し、已むを得ず色々の學科を詰込まれる事になつた。これは勿論將來學校の先生になる目的なのである。

母は二人の娘を連れて別の家へ引越したが、高い家賃が拂ひきれないので、家を半分さいて下宿人を置くことにした。知らない人と同居するのは何となく氣がひけて厭て厭て仕方がなかつたけれど、案じるより生むが易く、室借をしたのは、同市で最も有力な「日々新聞」の主筆を勤めてゐるギョッツといふ至極溫良な紳士であッた。この人は演劇に關する造詣頗る深く、絶えず劇場へ出入して、座頭や舞臺監督や俳優達から尊敬されてゐる。

かういふ人が自分の家に止宿してゐるのだから、ヘレーネも何時とはなしに芝居見物の味を覺えた。土地の劇場は、「日々新聞」のやうな有力な新聞へは、劇評記者席のほかに特に主筆に對して二人分の席を献じてあるところから、ヘレーネはギョッツに誘はれて折々その席へ這入り込んだのである。

ヘレーネがまだ學校にゐる間に、妹は嫁に行つた。

三、女　教　師

生れつき怜悧なヘレーネは、師範學校を優等で卒業したお蔭で、直に同市の高等女學校の助教に採用され、はじめて八百マルク（四百圓許）の俸給を貰つて家計を輔けることが出來るやうになッた。無論家には父の遺産があるのだけれど、其元金には手が付けられないし、それに妹の結婚以來元金が減つたから從つて利子も少くなッてるのだ。

英語フランス語歴史地理算術、バイブルの話もすればシルレルの「鐘の歌」の講義もするといつた風で、教へる範圍は馬鹿に廣い。教へることは師範時代に實習をやッてゐるから左程苦にもならないけれど、困つたのは自分の教授法がこの學校の方針と全然ちがふことてある。教師と生徒とは愛情て結びつけられなければならぬとヘレーネは確信してゐるのだが、この學校の先生方は、生徒から怖がられやう憚られようとばかり心掛けてゐる。從つて生徒の方でも先生から情愛の籠つた言葉を掛けられようとは夢にも考へて居ない。生徒を退窟させないやうに面白く授業をする、これがヘレーネの主義である、然るに校長は、教場で戯談を言

つたり熱情の籠つた物言なんかをするのは以つての外だと言つてヘレーネにお眼玉を喰はせる始末である。ところが或時視學官がやつて來て　ヘレーネの教授法を讃めて他の先生方の干固つた敎へ方を批難してからといふもの、同僚は彼女を敵視する、校長も內心怨を含んて、時が來てもヘレーネを正敎員にしない。

敎師になッてから、ヘレーネは益頻繁に芝居を觀に往つた。劇通を以て他人も許し自らも任ずるギヨッツは自分の蘊蓄を傾けて演劇に關する說明や批評を聽かせ、ヘレーネの趣味を指導するに毫の毛程も勞力を惜まなかッたところから、さらぬだに藝術慾の旺盛なヘレーネは、演劇に於て無上の慰藉を見出し、いよ〳〵演劇の價値を尊重するに至つた。

ヘレーネが木石の如きギヨッツを戀ひ慕うて、小さい胸の中に生れて始めての可愛い煩悶を覺えたのも此頃のことてある。

女敎師時代の目星い出來事といふのは、休暇中に自分の敎へ子のゲルダといふ生徒（男爵の令嬢）の家の別莊へ呼ばれて往つた位のものだ。この別莊へ或時貴族連が多勢集つたときに、ゼングニッツ男爵といふ風采も心も確乎してゐる四十恰好の紳士（陸軍少佐）が夫人同伴て來て居た。夫人は巨萬の富を積んてる猶太人の娘て中々の辣腕家だが、或る事情から男爵と結婚したものて、男爵は夫人に爪垢ほども愛情を捧げて居ない。夫人との間に令嬢を二人までまうけてゐるけれども、要するに男爵は失意の人てある。ゼングニッツ男爵は氣六ケ敷さうな顏をしてゐるけれど、ヘレーネには、多勢の貴族の中てこの人が一番賴もしさうに思へた。

四、道學先生

妙齡の美人女學校の先生が男と連立つて芝居を觀る、夜更まて役者と話をする、いかさまこれは敎育界の大問題てある。

ヘレーネの日記にこんなことが書いてある。

「一番終の授業時間の終るちよッと前に敎室へ小使がやつて來て、授業が濟んだら校長室へ來るやうにと校長の命令を傳へた。こんな事は屢々あることだから、

別に面白くない事が起つたのだとも思はなかッた。何ても上へ立つてる人は始終くだらぬ用事やくだる用事がある、十中の八九は前者だ。校長は容態ぶッて思ふさま冷淡に自分を招じたが、やがて徐ろに口を開いていふやう、

（實は、貴女が職務を蔑にした所業をなさるちうて、近頃諸方から私のところへヤイ〳〵言うて來ますのぢやが、どれを聞いてもこの私にはどうも面白うありませんのぢや……〔中略〕……貴女はよう芝居へ往かれる、加之選りに選ッて道德上よろしからぬ近代劇や猥褻な佛蘭西の芝居を觀なさる。全體貴女はこの類の文學が貴女の道德上の修養を資けると思うとられるのですか）

（ト仰有ッて校長樣、貴殿は近代劇をどの位御覧になりましたのですか、それに貴殿は第一「近代」といふ語をどんな意味に使つてらッしやるので御座いますか）

自分はかう問ひ返さざるを得なかッた」。

次いてヘレーネは、敎師は其時代の文藝に親むことが必要である、學校なるものに文明を形成する一因子たるの使命を荷負はせるからには、敎師は何へぶつかッても相當の判斷が下せるやうに、あらゆる方面で其時代と接觸しなければならないといふ意見を述べると、校長は「男の敎師はさうかも知れんが、女の敎師はいけません」と頑張る。

校長はエヘン〳〵と聞えよがしに咳拂をし乍ら、いかさま敎訓になる話をはじめる。

（若い娘御が夜更けてから屢々紳士と一緒に往來を歩くのは差支ないてせうかナ）

（妾はちつとも差支ないと存じますわ）

（若い御婦人が兄でもなく許嫁の夫でもない紳士と腕を組み合つて夜遲く歩くのは差支ないでせうかナ）

（ええ、差支ございませんとも！　地面が凍ッてツルツル滑る時や腓が返りました時なぞは、どんなに氣丈夫て御座いませう）

（若い御婦人が踏舞會へ往つて、幾時間も同じ紳士の傍に腰をかけてゐるのは差支ないてせうかナ）

（紳士は極親しい知合でございます、あの舞踏會は校長様がたでさへ御出席になれる大層高尚な催でございます、それが何で差支ございませう）

（若い御婦人がその紳士と夜更まで三鞭酒を飲んで、その人と一緒に役者どもの極みだらな一座へ入り込んで、それから最後にその人と腕を組み合つて家へ送つて貰ふのは差支ないでせうかナ）

（ええ勿論、二人が醉ッて居りませず、品行上潔白でございませば一向差支ございません）

賣言葉に買言葉でお互に火の手が強くなッた。此處で校長が紳士紳士と云つてるのは勿論ギョッツのことなので、ヘレーネはとう／＼ギョッツを擔ぎ出し、彼にそんな侮辱を與へたら、屹度自分の新聞へ書くに相違ないと嚇しつけて埒をつけた。

五、女優志願

嗚呼女優になりたい！ お肚の蟲がムヅ／＼する。が待てよ、愈々この決心を實行するまでには新職業志願の動機を熟考して見なくちやならない。

教職が厭なのか、沒分曉の校長を押し戴いてお尻の穴の小さい同僚諸先生方の御仲間入をして自分の自由を束縛されるのに愛想をつかしたのか、それとも、教師生活よりもずッと自由らしく見える生活、外觀的の成功、觀客の喝采、月桂冠、晴々しい名譽といふやうなもの、一言で云へば即ち虚榮といふものに憧れてのことか、さもなければ、獻身的熱誠を以て藝術に仕へ、詩人に對してはその作を理解してこれに同情を寄せる熱心なる解説者となり、觀客に對しては、自らも醉ひつつ觀客を醉はせつして久遠の眞と美との宣傳者たらんとする娑婆氣を離れた願から出たことか。

兎つ措いつ胸に手を當てて考へ拔いた揚句、藝術に對する抑へ難い愛好心が最も強い動機である、虚榮心や自由な生活を慕ふことは殆ど動機の中に這入らないことを知つた。かう譯が解つたからには、何でもかんでも女優になる。が、たゞ一つ困るのは、果して自分にそれだけの才能があるかどうかといふことである、考へれば考へる程、この問題は不安になる。それに、

若し自分が女優になると言つたら、さぞ親戚の者達が反對をするだらう、友達からも棄てられよう、稽古は定めし辛からう、愈一本立になつたからとて、屹度當違があるに相違なからう、朋輩の嫉妬怨恨の烈しさは今までどころの騷ぎぢやあるまい。考へれば色々なことが心配になるけれど、自分には勇氣がある自信がある。それに自分は、世間普通の女優志願者に比べて、考も定ッてるし、敎育も迢にあるし、操行も堅固なら資產も餘計ある、だから若し自分に才能がありさへすれば、あらゆる障礙は屹度押退けて是非とも目的を貫かずには置かない。

かう決心の臍を固めて、ギョッツにこのことを相談した。ところが意外、ギョッツはこれを聞くと眼をまはさないばかりに仰天して、女優なんかには忘れてもなるものぢやない、貴女は劇場の裏面に關する智識をちッとも有つてゐないから、役者が綺麗な衣裳を着け、華やかな電燈の下に立つて、或は王となり富豪となり戀人となり、時に深遠な人生問題を解決し深刻な煩悶を切拔けるのを觀て、役者その者を大變偉いもののやうに考へ、自分もああいふことをして見たいと思ふのだらうが、あれは全く表面だけのことで、裏面へ廻れば大ちがひ、俳優は火の車で暗闇を走るやうな慘憺たる生活をしてゐる、貴女は二言目には藝術藝術といふが、今はそんな浮いたことを言ふ場合ぢやない。と、口を酸ッぱくして說諭しても、ヘレーネは言ふことをきかばこそ、敎師のやうな平穩無事な生活はもう御免を蒙る、これからは是非とも戰のある活きた生涯を送りたいと剛情を張る。

六、劇場か妓樓か

ギョッツは、自分一人の力では到底ヘレーネの決心を飜へさせられぬことを知つて、友人のコンラードといふ俳優に助太刀を賴んだ。コンラードは至ッて穩健な考を有つてる人て、腕も中々達者らしく、バルナイ、ミッテルヴルッツェル、マトコウスキイ、カインツ、フリードマンの如き名優を友人にしてゐる。彼は自分の經驗を立場として、極力ヘレーネの女優志願に反對し

たが、その說諭の中に次のやうなこともある。

……こんなことは勿論淑女の前で口にすべきことゝてはないのだが、事實を言へば、非凡な才能があるか又は澤山の資産を有ッてるものは格別、さもない處女が女優を志願するのは、手もなく娼妓を志願するやうなものである。忌憚なく言へば、劇場は體の好い妓樓である、如上の資格の何れか一つを備へてゐない者が女優で候と威張るには、否でも應でも操を市らなければならぬ。獨逸に俳優多しと雖、一年三千マルク（千五百圓位）以上の給料を貰ふのは一割ぐらゐしか居ない、それにこの中には歌劇専門の俳優が居て、これは一般に普通の俳優よりも給料が高いのだから、この連中を除くと、結局普通の俳優で三千マルク以上取るのは百人中十人などとは思ひもよらぬことになる。成る程勉强すれば技倆も進み、給料も多くなるが、さうなると今度は格のいい劇場へ出勤するやうになるから、從つて衣裳その他のものにかける費用が著しく嵩んで、結局給料だけでは引張り足らぬことになるのだ。それに又俳優といふものは、外面は如何にも華々しい商買だが、裏へ廻れば一向働き効の無い悲慘な職業で、たゞパンを得るため幸福を得るために始から終まで四苦八苦の惡戰苦鬪を續けなければならない、現在の名優と言はれる程の者でも、眞に會心の技倆と富と譽とを併せ獲てゐるものは殆ど無いと言つても好い位だ……

コンラードはヘレーネの利益を思ッて、どうかして女優志願を喰止めようとしたが、ヘレーネは頑として初一念を飜さぬ。

本篇は非常の長篇にして本號に掲げたるは僅かに其五分の一に過ぎず。次號には成るべく續稿の全部を載すべく、其小題を擧ぐれば「怖しい初經驗」「新生涯」「役爭ひ」「蛇の道」「女優と私娼」「衣裳の謎」「金が敵」「女優の浮世」「操が大切なり」「實習？」「火と燃」「鼻持ならぬ女客」「女優と結婚」「二千ヵ百マルク」「追害」「恩人」の諸項にして、一項毎に興味益々加はるものあり。乞ふ次號の出づるを俟て。

劇的見地より見たる明治政局の十幕（一）

黒頭巾

序言

◉今朝、甚だ爽快。春來、天氣未だ此の如く淸明なるは無し。流鶯數聲、頻りに、吾が夢を呼び醒ますものゝ如し、乃ち起きて、茶を啜り、香を焚き、靜かに、淨几に對す。

◉今日、吾が心、極めて平かにして、寂びしからず。僅かに春霞を帶び初めたる、遠き薄青の空、禿落して、嫩芽の、未だ色付かざる喬木、輕寒の軟風に弄せらるゝ叢竹の綠、すべて長閑に、吾が明窓に映じ來る。

◉劇的見地より見たる明治の政局史は、甚だ豐富なり。內容と、精彩との兩方面より見て、前古未曾有の感興的時代ならずんばあらず。其の背景は、年時の近きにも係らず、時勢の急轉せるが爲に、恍然として別世界の觀と爲すものあり。而して登場の人物は、尙ほ現存する者少からざるが爲に、更に感興を挑發するもの無きにあらず。

◉吾輩は、明治政局の舞臺の、殊に、劇的色彩に富めるものを撰擇して、試みに十幕を劃定す。好舞臺、必ずしも此に限れりとは言はず。而して其の記述は、一々、實話及び記錄に據りて、これを闡明するを期し、唯だ、考證の煩を避けて、其の出處を明記せざるに止まる。畢竟、此の十幕は、自然に、劇的舞臺を爲せる史實にして、此の篇は、劇的趣味に衝動されて、起稿せる明治政局の內面史ならずんばあらず。

第一幕　長崎の會議事務所

綱要

幕末維新に於ける、內外勢力接觸點としての長崎。
明治外交談判の初舞臺、
長崎に於ける志士の自治行政。
英國公使パークスと伯大隈。
長崎に於ける切支丹事件の解決。
維新史に於ける興味ある一大關鍵。

其一

◉長崎の會議事務所は、長崎の市政、及び、日本を代表して、長崎に於ける諸外國に對する外交機關也。會議所は徳川氏の大政奉還より始まり、澤宣嘉卿が、九州總督の印綬を帶びて、西下し、此に、總督府を開くまでの約二箇月の短期を支配せし、多頭政府にして、國家非常の場合に際し、維新志士が、帝國の體面と、地方の平和とを、書生の自力を以て維持したる、一時の假政府なり。

◉當時の假政府を組織したる志士、現存する者は、侯松方と伯大隈とあり。既に、故人となれるは、侯佐々木高行、伯副島種臣、江藤新平、岩崎彌太郎、中島信行、谷口藍田、中野禮駉等あり。其の餘、他年、明治の政局に、多少の名を成せし者も亦た少からず。是等の志士は、或は舊藩の公職を帶び、或は、留學の書生たるもあり。佐嘉藩と、高知藩とを其の主體とす。年輩閲歷、自から群書生の首領となりしは、佐々木と副島となり。一は、高知の、一は佐賀の、人物、勢力を、代表す。則ち、此の二人者は、會議所の總統たり。而して一面より見れば、會議所は、純乎たる壯年書生の政府なりし也。

◉是等の、會議所志士は、朝命を受けず、朝威を假らず、自から奮つて、難局に當り、維新中興の精神を體して、一時、假政府を組織したるものにして、九州總督の來任するに及び、直ちに、既成の成業を捧げ、事務引繼を完了し、更に、引續き、奉公の任務に服し、其の多數者は、總督府に任用せられたり。

◉長崎會議所は、吾が近世文明史に、また維新政局史に於ても、殊に、感興に充ちたる舞臺ならずんばあらず。而して從來、此の舞臺に關する材料の缺如せるが爲に、往々にして、維新史上に閑却せられ、世上、未だ、其の名すら知らざる者少しとせず。吾輩が、先づ、此の舞臺を、第一幕に採れるは、一には、興味の爲め一には、之に依つて、埋沒しつゝある材料を、江湖に徴し、以て、維新史の一關鍵を闡明するを得ん事を期するのみ。

其二

◉長崎會議所は、爛熟せる長崎三百年の文明を背景とし、迸り出づる維新中興の精神力を、自由活動せしめて、これに依つて煥發する光彩をして、舞臺一面に照映せしむるものなり。故に、此の一幕を描き出さんには、先づ、極めて異樣の色彩に富める背景美を缺かず

んばある可らず。

◉長崎會議所は、明治政局に於ける、幾多の大立物の揺籃たらずんばあらず。而して會議所を引繼ぎたる、總督府の中心人物は、今の侯井上馨なり。是等の人物は、井上や、大隈や、松方や、佐々木、副島、江藤や且つ岩崎彌太郎や、此の舞臺に於て、立法、行政の事殊に、外交及び貿易を習得せる、學生たり、當局者たり。自由活潑の青年精神を以て、國務擔當の氣慨を涵養したる也。

◉這般の趣味あり、波瀾ある活劇は、三百年來、國際舞臺の歴史を有する、而して中央政府に遠隔なる長崎の好舞臺に於てこそ、始めて、行はるべき事たり。これを長崎の古今に徴するも、最初にして最終なるべき尤も華やかなる短時期ならずんばあらず。長崎人は、宜しく、此の舞臺を誇榮すべし。然るに、從來の長崎志は、すべて此の好舞臺の研鑽に努力せるもの、未だ之あらざるは何故ぞや。

◉長崎の一語は、近世の日本人に、與味を以て響く。舊幕より維新に移る、長崎の舞臺の上に、一箇の「ダーク、チエンジ」あり。これまでの歴史には、少くともダーク、チエンジと見られたり、何ものも、史上に映出されて在らざりき。然れども、此のダーク、チエンジの間には、長崎會議所の活劇行はれて、ダーク、チエンジの終結すると共に、長崎の地上には、觀客の前に、明らかなる明治の政治の幕始まりて在りし也。

其三

◉長崎會議所の幕は、長崎奉行の遁走を以て始まる。幕末に於ける長崎は、志士の淵叢たり。天下の志士、外國事情を研究せんが爲に集來する也。志士の集合は、新氣運を醱酵し、幕府排斥、王政復古の氣勢は茲にも蒸出す。維新の大業は、京都に開幕せらるゝと共に、同時に、其のミレイジを長崎の天に映出す。京都の新朝廷と、長崎の假政府とは、同時に現出し來る。京都にては、主に、幕府と爭戰し、長崎にては、專ら外國人と接衝す。故に、此の舞臺は、長崎の背景美に、種々、多數の碧眼紅毛の人物を點出するを要す。

◉此の時、强藩の代表的勢力は、概ね、深き襞の底のようなる長崎の港に集注せられざるは無し。就中、尤も活動したるは、土佐、薩摩、肥前等の諸藩にして、彼等は、維新の運動の外、一面に、海軍と貿易とを研究し、蒸汽船を運用したれば、日の丸の旗影は、外國旗の色彩と、互に、交はりて輝けり。

●舊幕は、勿論、新文明輸入の機關を、此の地に創建し、習得館を設け、西洋人を聘して、新醫學を講習し、佐嘉藩にては、致遠館を開きて、洋學を學ばしめ、學生の中には、今の伯大隈もあり。支那人の勢力も、未だ盛んに、邪教排斥の勢焔の下に、漢學塾を開く者もあり。いろ／＼さま／＼の人物、新色彩を帶びて躍動す。倫敦より歸來せる伊藤博文は、芳川顯正と共に英書を研究し、櫻癡居士の、嘗て脚色せる女浪人お信の如きも、隱約の間に出沒す。女浪人の事は、未だ詳かならず、然れども、長崎會議所を脚本とすれば、點出すべき一掬紅ならずんばあらず。

●長崎は、內外の勢力、人物を、錯綜、壓搾せる小天地たり。此の時に於て、這般、舊藩の勢力と人物とは、此の、小局面に、跳梁を逞しくして、而して幕府の、既に衰頽せる、一奉行の力を以て、之を統制するに勝へず、長崎奉行は、僅かに、形式を、殘骸に維持するのみ。其の危きこと「熊蜂の巨巢」の上に座するにも似たる也。

●大政奉還の飛報は、局面を爆裂せしめ、滿巢の熊蜂を突出せしむ。佐々木、副島、大隈等は、志士を代表して、長崎奉行を訪問して、長崎の政治を受取らんと要請す。彼等は曰く、大政既に奉還せられたれば、德川の吏員、宜しく政治を執る可からず、吾等、朝廷に代りて、直ちに、君等より、政治を引繼ぐ可し。と。書生志士の氣勢は、既に、堂々として、幕府の代表者を壓倒す。

●嚴かめしき町奉行は、書生志士に氣を吞まれて、拒絕の一句を出し得ず。然かも尙ほ逡巡して、テキパキたる動作にも出て得ず。交涉の末、書生志士は、事、平和に行ふ可らずば、腕力を以て、大義名分を貫かんといふ。事態、漸く迫る。町奉行は、遂に、授受の時日を約定するに及んで、彼我、交綏す。

●約定の時日到る。書生志士、奉行所に到る。奉行所は、一掃して空しく、更に、人影を見ず。奉行は、部下と荷物とを取纒め、前夜、竊かに、汽船に搭し、暗影に包まれて遁逃したる也。書生志士、政治は一日も空しくす可らざるを以て、即刻、會議所を組織し、總統を選擧し、部署を定め、國事を分擔す。其の中、外交に當れるは、大隈也。長崎會議所は、此の如く、一滴の血を見ること無くして、舊勢力を打破し、新生面を開幕せる也。

其四

◉鐵道、長崎線に依りて南下し、肥前に入りて、哩程、漸く長崎に近く、大村灣に沿ひて進めば、水盡きて山路にかゝる。萬山の中に入る心地すべし。峠を超ゆれば、碧山周遭として、擂鉢の底に、青インキを湛ゑたるやうの、長崎の海を見下す。海山の間に挾まれたる、長崎の天地に、海外文明の吸收の三百ページは、其のインキ壺のインキもて書かれ來りたるなり。

◉吾輩の知れる七十許の舊幕老人に、長崎奉行の叔父ありしが爲に、江戸に在りて、六十年前、早く既に、西洋料理の一品二品を味ひたりといへる者あり。材料は、これを向ふ兩國のもゝんぢい屋より採れるなりと聞く。長崎奉行は、海外人を見、海外の新文明の、泡の影ほどのものと、長崎の海光のかげにて味ひたるなり。

◉蜀山人は、長崎に往き、多く、支那直傳の文物を味ひたるも、幸然、露國人に應接し、其の假館を尋ねて、咖啡の一杯を味ひしことあり。彼は、咖啡とは、小さき豆を黑く煎りて、煮出したる豆茶なりと記す。蜀山人は幕吏也。長崎の奉行所には、支那の書籍、緞子、奇珍の外、泰西の珍味、硝子など、奥座敷に見出さるゝ事あり。旗本氣質の、江戸通の、舊文明のチョン髷上下、帶刀の、ところ〳〵に、萬里外の海光の、チラ〳〵と、映りたり。

◉長崎は、維新前に於ける、ハイカラの本場ならずんばあらず。若し活眼の士ありて、刮目して見しならんには、新文明の空氣は、百年前に、既に、磅礴したりし也。唯だ、舊文明の士人は、譯も無く、龍宮城を、眼前に見る心地もて、ウットリとりとして、專ら奇珍の光彩をのぞみ愛て耽りたる也。

◉京の女郎に、江戸の張りを持たせて、長崎の遊廓にて遊んで見たしといふは、古粋人の夢想ならずんばあらず。吾が鎖國の民は、西洋人に接觸するを嚴禁せられたりしも、丸山の遊廓のみは、治外法權の地とせられ、更に、「守護不入」の靈地として特許せられしかば、丸山の遊女は、尤も、早く海外、新文明人に接觸し、目色毛色の變はりたる麒麟兒を產めることもあり。長崎の遊廓には、新文明の香味、逸早く、入り浸りたり。粹人をして傾倒せしめたるは、新文明の香味の薰出せる這般の妓樓ならずんばあらず、いづれの世、いづれの國も、先づ女の世界より開け始むるなるべし。

◉和蘭出島も、唐館も、今は、全く、維新前の面影だ

に留めず、京の人、岡田春燈の銅版畫に、丸山の妓樓を畫ける者あり。和蘭人、二階の、擔端に立ち、花の粧せる華魁を隨へ、遠目鏡を以て、出島を望まんとす。西洋臭き敷物、西洋臭き釣燈籠、それ等の間より、「箱庭に刻み付けたらんようの西洋館の出島の一廓」、繪のように遠く浮び出て、他方に、大きく唐館の見ゆ。

◉出島の和蘭人は流人の如く、自由を束縛せらると雖も、藥草を郊外に採り、及び、時には、欝散の遊を爲すことを許さる。その時は、丸山の華妓など、數多携へて、笑ひさゞめきて、異境の花に醉ふなり。

其五

◉劇界の珍とすべきは、維新前、長崎に於てのみ、和漢洋の芝居を見るを得たる事なり。唐館に支那芝居あり、出島に、和蘭芝居あり。其の興味、三都芝居を、一都に演ずるの比に非ず。

◉唐館の支那芝居は、左まで吾が國人の血を沸かしめず。第一に、見ても了解し易く、舊思想の日本人をして、驚異の眼を睜はらしむること無し。時には、手品師も、出演することあり。和蘭芝居に至つては、全然、思想を、根本的に相違し、舊學問の人々は、和蘭芝居は青年には見す可らざるものゝように思ひたり。

◉和蘭芝居は、筋書に、戀愛を主とするを以て、漢學先生に嫌れたるなり。抱擁し、握手し、接吻するなどの、如何に、珍らしくも、亦た苦々しく見られしならん。然れども、和蘭芝居を見たる人の頭中には、新たらしき或るものを、遠く、泰西の別世界より吸入し得たるを感ぜしならずんばあらず。

◉出島に於ける和蘭芝居の舞臺の大概を言はんか、或時の芝居に、舞臺の左右には、出島に於て、劇を演じ、以てアポロに献ずるの詩を書し、正面の上には、人生は短かく藝術は長しと題し、天使、花をアポーロに捧ぐるの圖を描く。

◉或年の芝居に、乳賣娘登場す、美しき主人公なり。手に一の壺を持てり。獵師に、山路に行逢ひて、戀著せらるゝとき、娘は、痛たく之を拒みて、吾が寶は、此の乳盛る一つの壺なりといひて、空うつむいて歌を謡ひおはりていふ、吾、此の壺の中なる乳汁を賣り、其の價もて鷄卵を買ひ、これを孵化して鷄となし、卵を産せ、また其の卵をかへし、數々の鷄となし、鷄を殖やし、數多の鷄を賣りて羊を買ふなり、また〳〵此の如くして止まざるときは、遂に、莫大の金銀を儲け得べきが故に、此の、一の壺をば、吾が寶なりなど、

いよ。

◉次の幕は無言劇なり、美しき乳賣娘は、只だ一人、嘆息の歌謠ひ、大に嘆げきて、戀人の繪姿を取出し、押し開き、生けるが如くに打向ひ、思ひの丈をかき口説きつゝ、カッパと臥して泣き沈み、繪姿を大地に引のべて、野邊の花を集めて散らしかけ、泣き入り、生體なく〳〵其の側に倒れふして居る。やがて、計らずも戀人尋ね來り、吾が繪姿の、地上に落ちたるを見て、取上げ、驚き、心ゆかしき事なりと、其處あたりを探ぬるに、草叢の中に倒れたる、美しき娘あり。

◉長崎會議所の書生志士の中には、これ等の支那和蘭芝居を見し者ありや否やを詳かにせず。彼等は、芝居を見たること無しとするも、唐館の事情を詳かにし、殊に、彼等が、熱心努力して、近接したりしは出島及び在留の一般外國人にして、幕末、維新前に至っては、在留外國人、非常に增加し、出島の外、市內の寺院などに居留する者も少からず。それ以前に在っては、志士の目標は出島に在りし也。

其六

◉長崎の風景は、趣味に富めり。殊に、南國の氣象、三都と、全く別趣にして、其の繁華も亦た三都を凌駕す。維新前の長崎は、支那の楊州ならずんばあらず。

◉十二月、紫菊、花のこりて、路傍、別に紅梅の薫ずるあり。歲晚、籬外の梅花盛りに。八重の花も咲き、一重は落花す。天、雪を飛ばさず、時々、雷雨す。

◉歲晚、年初、崎陽に淹留する三都の客は、特に、物景の新奇なるに打たれずんばあらず。

◉長崎會議所は、時節、まさに歲晚より年初を超えて、仲春、春晚に及ぶ。瓊浦の風物の、殊に、感興を惹くときに在り。長崎を舞臺として、背景美の、最も奇雅にして絢爛たるを得るの幸運に逢へる也。歷史上に實現したる自然の書劇の、これほどに後人の好奇心を滿足せしむるものは稀なるべし。

◉長崎會議所を脚色せんとするものは、史實に見えたる活劇の外、之に伴ふ自然の背景美と人物趣味との調和を見よ。

◉長崎にては、正月に、二日より十六日までの中に、長崎の七山、金比羅山、七面山、烽火山、秋葉山、豊前場彥山、愛宕山を游攀するの舊習あり。秋葉山より山越に、蒙茸たる草むらを攀ぢて、烽火山に上らば、四望すべて廣濶、群峯、皆々朝宗し、海上に五島、天草島など見え、長崎の全都は、脚下にあり。

◉七山の中、彦山は、山形、ビスマルクの頭に似たりといふを以て、ビスマルク山の異名あり。獨逸人は、入港の時、此の山を目標とす。蜀山人、長崎の方言を綴りて、此の山月を咏ずるの狂歌あり、「わりたちも、みんな出て見ろ、今夜こそ、彦山やまの月の、よかばい」

◉豊前坊は、山形に依りて、また飯盛山ともいふ。危巖亂立して頗る奇觀たり。豊前坊の麓には、今、溪間に、堊壁の屹立せるを見るべし。これより順路、日見峠に至る。日見峠は、日出を見ること早きを以て名づく。峠の後ろに烽火山峙つ。

◉日見峠は、鐵道開通前に於ける、長崎に入るべき、唯一の國道とす。幾多の人物、船路に依らざるものは、皆、此の道に由れりしは勿論也。彼、大隈も、大髷に大刀を横たへ、峠の茶屋に憩ひしならん。

◉峠の茶屋は、長崎の一名稱とす。游子を送りて、陽關三疊を歌ふところ。落柿舍去來が留別の句に、君が手もまじるなるべし花薄は此處の作。石に刻して立てり。峠に櫻あり。去來が「靑葉にても事足る」と詠みし櫻の花のかげより海を見わたすべし。此處を、長崎奉行鎭治の界とし、奉行の往來を送迎する地點とす。

◉長崎を出て、日見峠を下りて、國道を進めば、石橋を渡りて人家あり、日見の宿なり。石橋をわたり、阪を登る。矢上の宿となる。鄭寧に、奉行を送る者は、此處まで來ることあり。稍々進みて小川あり、八郎渡あり。土橋を架す。小流を渡り、水に沿ひ、右折して溯りて行く。樟の木の大なるが川邊に立つ。樟の木川といふ。川を渡りて古賀村あり、冬は、柘榴の花など返り咲す。昔、道の左に、一茶店あり。軒に、藤棚あるを以て、藤棚の茶屋と呼びならはせり。茶屋の、あるじの娼は、丸山にて小式部とて、艶名を唄はれし美女なりしもありしとか。かゝるところにて、結髪帶刀の武士、二三人、店先きに、腰掛け、小竹筒など取出して、互に酒を勸め、醉心地に、小謠にても謠ひ出でたらんには、似合はしかるべきや。

◉春初、浦上邊を散策するは、崎陽の清樂事の、主なるもの丶一たらずんばあらず。浦上は、三百年來、長崎に殘留せる切支丹宗徒、割據の一角也。野邊は、一面の菜花燃え、ついで山吹の花咲き、次いで緋桃も亦た花咲く。町の中には、園中の躑躅花なんど咲く。

◉鎖國の日本に、切支丹の信教を堅持し來りしは、唯だ、此の浦上ばかりなり。安かりし信仰の心田を驚か

し、は、長崎會議所の、切支丹捕縛事件なり。則ち、春は早く花咲く平安郷よりぞ、明治政局史の、劈頭の、國際問題を惹起したるなり。

◉二三月、初櫻咲き出て、一重咲なり。桃花、躑躅花なども盛りとなり、牡丹も漸く芽を含む。春晴に、高處に登臨すれば、海上、島嶼、山々、風光、眞に畵の如く、出帆の唐船、西洋船など波上に浮ぶ。旅客をして、日本の土に非るやの詠嘆を發せしむるなり。長崎の假政府及び總督府は、此の、春光駘蕩の畵趣を背景とするなり。

其七

◉維新の長崎を描き出すは、極めて、陽氣に、殷盛の光景を畵くを要す。海外貿易を獨占し、金銀の融通、活達にして、些の礙滯あるを見ず。鼈甲は市に滿ち、物資湧くが如く、天に月あり、地に女あり、人氣は則ち柔漫にして、所々、なまのろき喧嘩あり。

◉長崎の、喧嘩に、庖丁にて六十箇所の負傷を爲せしといふ者あり。江戸兒の見たるところにては、「叱りても、睨みつけても、蛙の面に水の如く、一向、針の利かぬ男どもにて、自烈度き事」と放言せしもありし。

◉江戸は、金融必迫といひしときにも、長崎は、宛然、別世界を爲し、市を擧げて、融通の策源地を爲し、九州諸藩は申すに及ばず、他方有志ハ諸藩よりも入込み來り、貿易の爲に金銀の出入盛んに、餘銀を以て、大名その他、寺院、商人等にも貸付け、取引の廣大なること、人を驚かすものあり。昔は、堺の商人にて、輸入品支拂の爲替に、銀五千貫目の根證文を書きしものあり。根證文といふは、地所家屋を抵當にするをいふ、その頃、京都の商人、銀貳百貫目の爲に、根證文を書きしとて、笑草となれり。

◉長崎の歡樂郷は、丸山遊廓なり。古來、江戸の吉原と對稱せらる。支考に、前麿山賦、去來に、後麿山賦ありしは、古の事、維新前後の繁盛は、更に、前古を空しくするの慨あり。花月樓といへるは、和蘭人を、現を拔かせしところにて、此の樓に傳ふる「鶴の枕」は、楊貴妃の遺物なりと聞へたるも、枕の眞僞は知らず。滿樓の美人は、皆、楊貴妃を欺くの嬌艶ありて、當年志士の逸興を煽ほりしならずんばあらず。大隈も、井上も、此に來りて、連りに千金を擲ち、大隈の大名遊びは、殊に名を爲す。

◉伯大隈は、嘗て、伊藤、井上の遊び振りの、ケチ臭きを言へり。彼の遊び振りは、多數の遊伴を隨へ、末社

取卷々携へ、大坐敷を擇んて、美酒嘉肴を列陳し、美妓を總揚げにし、自からは、殿樣然として、床の間の前に、寛々然として脇息に凭れつゝ、氣を吐くこと、虹の如く、座上に綿花を振り、忽然として大風雨の如くに去來す。而して其の來るは、月に、僅かに一二回。來ることは稀にして、來れば全盛を恣にす。

◉伯大隈は、全盛遊びを以て、持てる所以の第一と爲し、チヨコ〳〵遊びを排斥す。吾輩を以て見れば、彼は、其の性格に於て、必ずしも豪奢なるに非ず。其の遊び振りに、彼が政治、外交の天禀は、早くより發揮されたる也。而して彼の全盛遊びは、丸山に於て訓練されたる也。此の意義に於て、丸山は、幾多、政局の人物の、「遊び振りの搖籃」にてもありしなり。

◉當時、諸豪傑。いづれも年は壯に、氣運は盛ん也。況んや會議所を組織するの後、聲望あり、抱負あり、英氣、內に磅礴す。定めて十人十種の遊興ありしならん。長崎假政府を脚色せん者は、須らく丸山妓樓の一幕無くんばあらず。

◉丸山の阪を上れば、高島秋帆の居址あり。今は、寶亭となる。仰げば右の丘上には、福屋あり、西洋料理の開祖を以て聞ゆ。是等の光景、またすべて丸山の背景美を印象せしむべき一要素と爲す。

其　八

◉恰も維新前、長崎會議所、出現の前に、大隈は、致遠館に學生たるの外、特に、英語を米人「フルベッキ」に、數學を英人ウヰリヤムスに學び、其の寓居に通學したり。ウヰリヤムスは、大浦に、ツエルベッキは大德寺に寓居す。

◉將軍、大政奉還の數日前の事なるべし。長崎にては大隈は、例に依り、大浦にウヰリヤムスを訪ふ。偶、席上に、一人の武士、來會せるありて、ウヰリヤムスの、之を遇すること甚だ鄭重なるを見る。其の人、短小堅實、年齡も四十五六なるべく、頗る頑丈也。

◉大隈は、初めて、此の奇異の士人を見る、彼と、言貌、人物、好箇の對照を爲す。此の人、谷口藍田、狷介にして鄕里に容れられず。大隈が、多年、名を聞いて未だ見ざりし、同藩の先輩也。依て、相携へて僑居に歸り、快談數刻、一夕にして、多年の親交を爲す。此の二人者は、他鄕に、計らずも、外國人の紹介に因つて結びつけられたる奇緣の友也。

◉谷口は、三年前、フエルベックと大德寺の寓居に相會し、爾來、漸く交情を厚くし、西洋の事情を研究す。

彼も亦た、藍田を師として、日本語及び和漢學を研究す。其後、ウヰリヤムスも亦たフエルベックの紹介を以て、藍田に師事するに到り、藍田、則ち其の寓居に就いて講義を爲す。

◉吾輩、少時、唯だ一たび、フエルベックの演説を聞きし事あり、氣魄渾厚、頗る雄辯也。而して彼が、かくまでに自由なる日本語の素地は、彼、之を大德寺の寓居中に得たる也。

◉大德寺は、もと崎陽の一名所也。境内に、名物、梅ヶ枝餅あり。およそ長崎の名物餅、べた餅、きび餅と櫻餅と、梅ヶ枝餅とを併せて、四尤物とす。名物に、甘きもの無きやを保せざれども、梅ヶ枝餅は、名物にフエルベックを得たり。彼は、明治政局の内面に於ける、人格あり、功業あり、紀念すべき一大人物たらずんばあらず。

◉明治の初年、大隈、志を廟堂に得しころ、彼の最高顧問は、フエルベックなりき。大木喬任の文部卿たる學監に、ダビッド、モルレイを聘するも、空しく虚名を擁して、事實の顧問は、フエルベックたり。吾輩は、之を伯大隈に聞く。學令の起案者は、實に、フエルベックなり。學令は、大木これを提案し、大隈、その通過に努力す。彼等が、早く、フエルベックの人物識見を知れりしは、大德寺寓居に於ける英語の修業に基いするなり。

◉吾輩は、長崎會議所の外交部長大隈の外交振りは、其の黑幕に。フエルベックありしを疑はず。則ち、知るべし、フエルベックは、長崎假政府に於ける、異彩ある重要の一人物たる事を。而して吾輩は、彼が大隈に及ぼせる影響は、啻に、功業の上のみに非ざるを信ず。

◉大隈の雄辯、及び辯論の調子、姿勢等に至るまで、彼の同輩に相似たるもの無し。固より獨造の奇才なるべし。然れども、吾輩の見るところを以てすれば、大隈の雄辯は尤も能く、フエルベックに似たるものあるなり。

◉今の大德寺は、吾輩、これを知らず。維新前の大德寺は、雅趣に富めりしを聞く。冬は、庭に、支那の楓樹、紅葉して、一種、可憐の嘱目を爲す。春となれば、八重櫻あり、鹽竈櫻といふ。江戸の植木屋にて、大膳といへる櫻に似たり、大膳は、則ち、櫻品にいへる大膳櫻なるべし。落花すれば、春晩の青葉櫻も亦た甚だ可。よと川と呼べる紫の躑躅花、咲き亂れて、池面に

も、藤波咲きかゝり、繡毬の花も、所得がほに見えし。此の如き、花の大徳寺は、則ち、短かりし長崎假政府の時節に當る。

●フエルベックは傳道の爲め渡來せるなり。博學にして人品高し。彼は、藍田の講義振りを稱揚し、一日、傳道の爲に、彼の力を借らん事さへ申出て、藍田の、武士氣質の一徹なる、買收するなりと思ひ込みて、言下に峻拒せしといふ。

●大隈と藍田と、フエルベックとウキリヤムスとの四人は、絆へる繩のように、互に、因緣を有す。而して大隈の長崎外交に於けるは、また、是等諸人の智力を利用す。彼は、國際問題にはフエルベックを、支那事件及び經術文章には、藍田を利用せしなり。是等の諸人は、互に、大德寺に於て結緣したり。就中、吾輩をして憧憬せしむるものは、フエルベックが雄辯を揮つて、大隈を感動せしめつゝありし英姿なり。寺の庭の花紅葉を背景にして。

●吾輩は、敢て、雄辯の伯大隈を以て、巧みに、フエルベックを學びて、脫化し得たりと爲す、知らず、彼、心中、肯首すべきや、否や。

其九

●一草、花發く、以て、萬花の春を知るべし。長崎假政府の志士の、意氣込と智識と事業とを示さんには、當時漢學者にして、石炭坑を經營したる、谷口藍田、唯だ、一人を以て類推するを得べし。彼等の多くは、時代の先頭を壓するに足るべき、抱負と智能とを發揮したるなり。

●露國軍艦、長崎に碇泊するや、藍田は、長崎奉行に請ひ、其の屬吏に扮し、軍艦に到りて、艦內の構造、器械の運轉を觀、原動力は石炭に存するを知り、將來の海軍、通商は、皆、石炭に待たざる可らざるを感發し、石炭の需要、頓に增大すべきを豫見して、一旦、潤然として、炭礦採掘の決心を抱くに至れり。慶應元年の春、彼は、獨力を以て、炭礦を高島に開く。先是、佐賀藩に開坑の擧ありしも、箇人として炭礦を開きしは、此の老漢學者を嚆矢とす。

●藍田が、主に、取引せし西洋人は、ガラバ。及びオルス。チヨロチ等なり。且つ、彼は、支那船に依り、廣東米を購入して、坑夫に供給し、外人に交涉して、炭價を一定せしむ。長崎總督府の新政の頃の、彼の手記に依れば、外人との談判に、石炭の賣渡は、百噸を以て標準とし、價格は金二十五兩と約定せるあり。こ

れを今日の相場に換算すれば、隨分、不廉なりといははずんばあらず。當時、來舶の外國船に於ける、石炭の需要の、其の供給に超過したる事情ありしなればなり。

◉藍田は、實業致富の思想ありしも、炭業の經營は、彼の妻の內助の効に歸すべきもの少からず。彼の妻は、名は益、蘭室と號す。龜井少琴の門生なり。少琴は、欲レ知花眞味二三更踏レ月來の詩を以て著聞す。此の詩は僞作なるも、彼女は、元來、詩人なり。蘭室女史も亦た學問あり、詩藻あり。藍田が江都に再游せんとするを、笈篋復此向二江陽一、何日錦衣歸二故郷一、妾飢兒凍尋常事、其奈二𨙸白任二双堂一の詩を作りて、諷止せしことあり。藍田の書院を守りて、夫の不在中は、代りて門人に講義す。

◉蘭室女史は、夫に隨つて長崎に來り、乃ち炭業の經營に參與す。經營の手腕は、寧ろ、彼女に在り、彼女は、女に珍らしき膽才を具す。其の性格の詳なるは、詳證、未だ之を知らず。定めて、翩々たる女學生の氣風を帶びず、然れども社交に快濶なる新味を有せし女なるへし。總督府の大官、參謀等も、時々、彼女に依りて、「やりくり」をつけて、樽散の軍資を工面せしこともありといへば、內剛、外柔、貞烈と圓滿と兼有せし女たるは、想見するに難からず。此の人、また、長崎假政府の舞臺を著色する一點紅ならずんばあらず。

其十

◉長崎假政府は、極めて短期の政府なるも、活潑にして突飛に、大膽に、試みに之を形容すれば、無鐵砲の不りといふを得可んも、或は、之を、一歩々々に、絢爛たる精彩を發せりといふも、强ち、過稱なりとせず。輓近、當時の諸豪傑、老境に入る。頃日の政綫には、伯大隈も、可惜、放膽の機鋒、漸く消磨するを見る。長崎時代には、いづれも花なりしなり。

◉假政府が、最も、困難を感ぜしは、外交問題なり。隨つて彼等は、此の方面に向つて、精英を集め、全力を盡せり。則ち、外交の主任、大隈は、當時隨一の花形役者ならずんばあらず。

◉斷脚前の大隈は、斷脚後の大隈よりも、遙かに放膽にして突飛なり。就中、其の、尤も放膽、突飛を、自由に發揮せるものを長崎時代の大隈と爲す。

◉紋付きの羽二重の、七ツ下りを著て、雨に濡れたるが故に、定九郎は、御家老の若息子の落ぶれたる姿と見ゆ、假政府の大隈は、髷を大名結びに結び、大小を落

し差し、寛濶に、鷹揚たるを以て、腕白殿様とも思はる。其の實は、天下を相手とする腕白書生なり。

◉假政府の大隈は、颯爽の姿を以て、外交に處し、斬つて斬り捲くるの慨無くんばあらず。彼は、目に、未だ外交の先蹤を見ず。日本の歴史に、外交の偉人を聞かず。天稟の機才を發揮し、當るに任かせて、外國人を壓倒し去る。彼は、其の職分に於て、崇拜すべき木鐸を有せず。唯だ、自から己の進路を開拓して、自から痛快とするのみ。

◉伯大隈は、嘗て、吾輩と語りて、當時の事に及びしとき、『吾輩とても、國際法の、一通りは心得て居た』と言へり。然れども彼の金科玉條とせしは、事實に於て、漢譯國際法の一卷ありしのみ。彼は、此の一卷を、縱横無礙に揮り廻はしたるならずんばあらず。其の餘彼が國際法の智嚢は、唯一のフェルベックあり。是れ實に百萬の精兵にも比すべし。それとても、彼が不十分の語學を以てしては、隔靴掻痒の歎あるを免かれざれば、これに依つて、彼の活動又、生命を吹き込みしものとは爲す可らず。彼の機鋒は、彼の天稟なり。今の彼は、書齋に於ては、汲々たる讀書生なり。長崎の彼は、英雄何必讀書史の英才なりし。

◉伯大隈の、外國語の發音は、中々、可なり。吾輩、彼に、シイボルトの短かき蘭文を示したるに、彼は滑らかに、其の半ばを讀みたり。蘭語の修業を廢する五十年後の彼にして、此の如しとせば、五十年前は嘸ぞかしと欣慕せらるべし。然れども吾輩を以て見れば、彼は、讀みて忘れざる人也。長崎時代の語學と雖も、或は、今日と、相似たるものなりし乎。長崎假政府の外務大臣の、國際法と、外國語との造詣は、此の如きものなりし也。

◉長崎の會議事務所は、各國領事に通告するに、王政維新の大義を以てし、而して漢譯國際法に準據して、關稅を徴收す。兎も角も、形式を具したる外交府也。外交府の雜件は關稅問題に關して、頻々、提起さる。大隈が佛國領事と折衝するの一事、尤も興味あり。

◉佛國領事、大隈に面會し、勢、猛に、詰め寄せ來る。彼は、大隈の頭上の結髪を認めて、頭皮下の新文明を藏するを見ざるなり。彼は、未開國の奇才を解せず、此は、開明國の凡人を呑む。勝敗の機、戰はざるに定まる。

◉大隈は、佛國領事の抗議を斥け、冷然として動かず。彼我、辯難、餘地を剩さゞるに至る。佛國領事、騎虎

の勢に驅られ、切迫、極まる。彼曰く、貴國、頑冥、若し吾が要求を峻拒せば、速かに本國に通告し、東洋艦隊を派遣し、貴國の責任を問ふに至らん。悔を貽すこと勿れ。大隈ますく冷然としていふ「戰爭は好むところに非るも、條理は枉ぐ可らず、此の上は、御隨意に爲さるべし。」當時、大隈は、佛國の大勢を解す、また一領事の力、能く軍艦を派遣するを得ざるを知り高を括つて、彼を擊退せる也。

●大隈、他年、外務卿たるの時、彼、領事、依然、卑官を以て東京に駐在し、往々、外務省に、大隈を見ることあり。歸つて人に謂つて曰く「大隈卿が、余を揶揄するには困まる」蓋し、大隈、笑つて、彼の肩を拍つていふ「あの時は、君は、大きな法螺を吹いたね」

●碧眼紅毛の外、外交は、辮髪の人とも、屢、問題を起伏せしめたり。長崎には、支那人の、一勢力を爲すは、古、なほ今の如し。方言、支那人を呼んで「阿チヤサン」といふ。チヤンチヤンに阿の一字を加へて、親愛を意味するなる乎、敬意を表するなる乎。大隈は、支那問題には、屢、藍田を活用したり。彼は、續いて、總督府の外交掛となりしとき、澤總督の名を以て、上海道臺に交涉し、及び隣好規則を選定せしときも、藍田をして起草せしめたり。

●藍田が、白髮毿々たりしころ、彼の兒子、彼に問ふ、「大人、洋食を味ふは、新味なるべし」藍田、微笑していふ「洋食は、吾輩、三十年前、維新前から食つて居た、日本に於ける洋食家の魁たる者也。唯だ、卿等の食べるやうな粗末な洋食は初めてだ。」當年の外交は、彼も來り、我よりも往訪せしなる可ければ、彼等が、泰西料理の珍味に、舌皷を打ちしは、如何にも維新ごろよりなるべし。

●長崎の假政府は、卓勵風發の勢を以て、外交事務を處理し、既往數年の間、幕府の手に、紛錯に紛錯を重ねて、澁滯し來れる一切の難件をば、僅々、二箇月の間に、一瀉千里に、解決し畢る。是れ書生政府の功也。

●假政府より總督府に引續き、未了の間に、長崎問題は、發展して、一轉して、日本の國際問題となれる、唯一の難件あり。切支丹事件是也。則ち明治外交談判の大舞臺の第一幕也。然りと雖も、此の難件も亦た大隈を招致して、見事に解決するを得たるなれば、是れ亦た長崎役者の功名に數ふ可く、唯だ、田舍芝居を、中央の檜舞臺に移したるまでのものにして、吾輩は、これを以て、第一幕の幾幕と爲すの妥當なるを信ず。

◉蓋し、明治外交談判の第一幕は、長崎の舞臺に開幕したるゝ、登場役者が、古今の大當りを占めたるが爲に、檜舞臺に呼び迎へられて、殘りの後半幕を演じ、都人の喝采を博したるものならずんばあらず。

其十一

◉長崎の、繁華の眼目を諏訪神社とす。名勝として、長崎の誇りなり。今、公園もあり、山に倚り、形勢高爽、石磴巍々として、自から雄偉の觀を具す。艶陽三月、京都より天降れる九州總督の一隊は、錦旗を推し立て、長崎に著し、先づ、此の神社に參拜し、祠前に、錦旗を樹て、御稜威を示す。一隊の中央に、陣羽織を著け、床几に倚れるは、總督澤宣嘉卿。其の脇に控えたる、軍師とも見ゆる、頰に刀痕の尙ほ鮮やかなる、半洋服を著けて、大刀を肩より釣りたる、精悍なるは、總督の參謀井上聞多。而して半洋服、釣り刀の兵士一隊、環ぐりて羅列す。此の日、バタ臭き長崎の舞臺に、突如として、復古王政の將軍觀兵の、時代劇を現出したる也。

◉諏訪神社は、國幣小社。古來、皇室の、尊崇淺からず。吾輩、曾て此に賽す。神社は、蓋し、地方稀觀の大規模と爲す。神社の山を玉園山といふ。四邊の邱山、環拱するもの、悉く、春は綠を凝らす草山ばかりなる中に、此の山だけは、森の松柏、高く、天を刺し、鳥鳴、啾々、春心を、ひとり、此處に留むるかと想はる。喬木の中に、神殿在り、七十二間の廻廊、靑銅の大鳥居、森嚴として、神威輝く。今の大鳥居は、明治七年の暴風に倒壞せるを、再建したるもの、三菱造船所の寄造に係り、舊に依つて、鎭西大社の額を揭ぐ。一條忠良卿の染筆也。俳人去來は長崎の人、彼の句に、「尊ふとさを、京で語るも諏訪の月」といふ。諏訪の月は、大鳥居の月也。支考の句には、「一は闇、二は月影の鳥居かな」といふ。諏訪の月は、京都に推出しても、長崎人の自慢すべきほどの趣味ある也。

◉諏訪神社に、諏訪公園、附屬す。ダンダラ阪を上れば、シイボルトの碑あり。グラント將軍の紀念榕樹もあり。それより上に東照宮在り、これ亦た玉園山の一名勝。殊に、其の奇勝は、祠前の元日櫻ならずんばあらず。此の櫻は、舊曆元旦には咲き出づるを以て名く。古來、元旦、其の一枝を先づ神前に捧げ、次に、一枝を長崎奉行の捧ぐるを流例とす。明治維新の元旦には書生政府に捧げられしなるべし。

◉玉園山中、祠前、茶屋多く、「眺望の雌」には、例に

依り、赤毛布の腰掛臺を排列す。錦繪に描けば、遠目鏡など梶ゑ付けて、長崎の町を越して、海を見渡す圖なり。茶屋には白首女あり、野の花のように裝ひて、人を見れば、鳥のように囀づる。「オハイリマッセ」「オヨリマッセ」と呼び立つ。マッセは長崎の方言なるも語調、特に强きは、玉園山の特徴とす。蜀山人が、此處にての咏懷に、「爭はぬ風の柳の糸にこそ、堪忍袋縫ふべかりける」といへり。さしも時めきし幕吏の、刀の手前にも、かくばかり堪忍力を涵養したるを見れば幕吏に對し、知らず／＼冷遇に陷るほどにも、「オハイリマッセ」女は、忙がしかりしと見ゆ。

◉玉園山の名物はベタ餅也。ベタ餅は牡丹餅也。白首女は賣笑婦には非ず。目立ち白きのみ。試みに、腰掛に、腰を卸し、ベタ餅を食ひ、茶を啜りて展望に耽るも亦た一樂事。兩岸の山、遠く袋を爲して、中に碧海を湛はす也。蜀山人の詩に、天門山斷海門開、岸上人煙擁鎭臺といふは眼中の景也。海の上には、團平船、サンパンなども賑はしく浮びて見ゆべし。團平船は和蘭貿易時代より流行し、胴の張りて頑丈なる。「サンパン」は三板酒に非ず。船の舳は支那風に尖り・彩色を施し、黑船式の屋形也。維新前、發明の通船也。鎭臺は、即ち長崎奉行の役所、昔作政府の政事堂也。

◉玉園山の西南麓に、長崎中學校あり。相並んで縣知事官舍あり。中學の庭内には、長崎奉行の遺物、手水鉢、高麗燒などあり。長崎奉行は二人ありて、おの／＼役所を構ふ、山ノ手なるを立山役所、海岸に近き、下町の森崎なるを「西役所」といふ。長崎假政府を建てしは、西役所にして、今、長崎縣廳あり。外交の關係、自から地勢の便を占むればなり。立山役所の跡は、則ち、長崎中學にして、文化五年外艦闖入の時、奉行松平康英（圖書頭）が責を引いて切腹せしは、近世史に有名なる事實、而して切腹の地點は、今の、中學の職員室の中ほどなりと聞く。

◉立山役所は、戰國の時、葡萄牙人が大寺堂ヘヤノサンダを建立せし地、一變してカトリック教會堂となり、再變して奉行役所となりたるもの、三變して、今、中學となる。而して九州總督の錦旗の旗風は、維新の曙光に、先づ其の屋瓦の上に向つて靡きしなり。

◉錦旗といへば、或は、普通の旗ぐらゐのものと想像するものもあるべし。鳳輦の錦旗は、非常なる大旗なり、赤地の錦に、金を以て、月日を描き、眞中に、天照皇太神と大書す。旗竿は、下地は分らず、打見たる

ところにては、藤を巻き、黒漆を塗りたり。大男およそ六人位にて捧持す。九州總督の錦旗も、これに準じたるものなるべし。而して此の大錦旗は、山口にて仕立てたるものと傳ふ。

●此の頃の、朝廷の武人は、身に、半洋服を着すも、頭には、結髪の上に、韮山笠を戴きたるが多かり。半洋服といふは、マンテル、則ち、フロックコートの上衣にして、ヅボンは裁付袴のやう、それに兵子兒帯を締めて、小刀を差し、大刀を釣る。而して足には草鞋を穿つ、京都の新朝廷より天降りて、諏訪神前の檜舞臺に勢揃して、武威を輝やかし以て、異物の西洋人、西洋服を見馴れたる長崎人を驚倒せしめたる九州總督の一隊は、此の如く、奇異の光彩に充ちたりし也。

其十二

●九州總督の政治は、元日櫻の、既に落花し、長崎凧の春樹を見下して、半天に飛揚する頃に始まる。正に是、長崎の、一年間の全盛時節に、春風春水一時來るもの也。此の「花の舞臺」に推出したる大立物を參謀井上馨とす。總督澤卿は、僅に一點張りの舊公卿にておはせば、總督府の政權は、一に、參謀井上の掌中に在り。此の時、彼が、放膽精悍なる改革振りの政治は、急轉直下の勢を以て、傍若無人に振舞はれぬ。但し、彼に對して、調子を合はせて活躍せるは、假政府より引繼ぎの花形役者大隈あり。

●伯大隈は、嘗て、伊藤、井上を評論して、「組織の才」の伊藤、「事に幹たる才」の井上を以て、明治の天才なりとし、而して侯井上の史的聲價は、維新初年、廢藩置縣に至るまでの、燦爛たる短時期を以て、彼の性命なりとまでに推賞す。長崎に於ける井上は、突飛なる急進改革振りの、殊に、諸豪傑を驚かしゝものならずんばあらず。大隈は、當時の大ハイカラなりと雖も未だ長崎港の外を見ず。井上は、則ち、倫敦より歸來せる、自らいへる『五洲山水踏縱横』の當時唯一の、大々的新智識なればなり。

●書生政府の總統佐々木高行は、總督府の判事となり、更に、轉じて、天草の民政官となる。彼は、書生政府中の、尤も温厚著實なる人物。自づから急進盲進の氣分を抑制しつゝ進むの氣味あり。此の人、去つて、長崎の天には、急激改革の、新文明の空氣ひとへに磅礴するばかり也。

●此の頃、長崎には、既に、造船所あり、鐵工所あり。參謀井上は謂ふ、官營といふと雖も、商賣は商賣なり。

武士帶刀して、高き處に坐し、人民に威張るといふの理無しと。此の主意を以て、鐵工所の役人を拘束す。此の時、維新とは云へ、江戸城未だ落ちず、武士は結髮と共に、頭の中も、未だ結髮せり。參謀の命令を以て、武士の面目を蹂躪し去るものと爲す。

◎長崎には、橋多し、木橋ばかり也。參謀井上は、立案していふ、長崎の繁華を以てすれば、街上を、敷石の道とするに非ざれば、不經濟也。木橋も朽ち易し。宜しく改造して、鐵橋と爲すべしと。鐵橋の一語、實に靑天の霹靂也。破天荒也。長崎の急進政治家と雖も未だ鐵橋を想像したる者あらず。鐵橋は、彼が、倫敦に、見來れる唯一人也。長崎政府は、井上を語れば、鐵橋の二字を標出して目を丸くす。

◎吾輩は、井上政治の一例を擧ぐ。當時萬般の改革、悉く、此の調子ならずんばあらず。彼の人格の、多角なる、勇猛なる、一事を爲さゞるも、自から敵を作るに足る。況んや、此の時。彼は、一切の敵を無視して、邁進するをや。然れども、彼が機運に乘ずるに勢威を以てするの盛なる、切支丹事件の外、あらゆる難事を粉碎し去る。而して反抗の殺氣は、遂に、爆然として、內外より湧き來る。何人か、有志者の名を以て、市中處々、橋標などにも揭示する者あり。其の文中に、參謀井上を不俱戴天の酷吏也とし、重賞を懸けて、其の首級を募るに至る。

◎總督府の同僚志士、參謀井上を月旦するの言、頗る趣味あり。彼等は、井上を目するに、「兵刃の料理庖刀」を以てす。其の說にいふ、井上の庖刀は、實に、能く斬れる、啻に俎上の魚のみならず、併せて俎をも斬り割ると。

◎長崎の春は、凧の春なり。春風に、金刀比羅山上に於ける凧合戰は、天下の奇觀を以て目すべし。凧を「ハタ」とひ、糸を「ヨマ」といふ。「ヨマ」には硝子或は磁器の細末を、或は金剛砂の細砂を、糊に和して塗る。塗れる糸を、單に、「ビイドロ」といふ。「ビイドロ」は、硝子の蘭語なり。ビイドロ糸を引掛けて、凧の輸贏を天半に爭ふ。之を「カクル」といふ。糸は百間を單位とす。百間といへども、事實に於ては、六尺單位の八間乃至十間位とす。凧合戰には、千間より二千間までの糸を要す。凧の製造方も亦た甚だ複雜なり。紙鳶屋あり、太くして節遠き竹を擇びて、其の骨を削り、紙鳶の形を造り、之を田家に送りて、竈の上に吊るすこと兩三年、充分に枯れ了りたる後ち、再び、之を削り直

して、凧紙を張り、模様を描き、凧合戰の戰士は、おのく特有の紋章、旗章を描て、自家の軍容を天半に示す。順風を得て、大凧の飛揚するとき、名立たる勇士の紋章凧は、凄まじく、雄鳴を發す。

◉長崎は、凧の春也。而して維新の長崎は、併せて書生政府の春也。天には、チャンピオン凧、雄鳴し、地には、參謀井上雄鳴するあり。

其十三

◉長崎の切支丹問題は、參謀井上の庖刀の斬り過ぎたる也。浦上の一廓に於ける三百年來の切支丹信徒に、改宗を强制し、花の少女までも頑强にして屈せざるを怒り、遂に、數百人を捕縛し、浦上に天照大神宮を創建す。此の事、佛國公使の抗議となり、長崎政府の受付けざるを以て、遂に京都の朝廷に抗議し、各國公使の聯合突貫となり、内戰と財政とに餘裕なき京都の新朝廷に、由々敷、大難問を提起せしむ。此の事件の發展に、尤も、密接の關係を有するは、井上の外、勿論、外交掛の大隈なり。

◉京都の朝廷は、此の難問題を解決せんが爲に、木戸孝允は、事に當り、特に長崎に出張して、取調に從事するあり。然れども、火力の根抵强っは、小火にては治まり難く、結局、中央政府と外國公使との談判となり、大隈は、急召に應じ、始めて京都朝廷に出仕し、大阪の談判場裏に立つに至る。

◉大隈を載せたる英國船が長崎を解纜せしは、四月十八日、彼に伴ふには長崎志士の一群あり。凧合戰の盛りを過ぎて、若葉、青葉の、目に新たなる時なり。碧眼紅毛の理窟人を折衝するに馴れたる大隈は、利器を懷抱し、胸算を畫きて、檜舞臺の大談判場に立たんとする也。船は、四五の港に碇泊し、明媚なる瀨戸内海を長閑に通過して、やがて、パークス大隈論戰の、維新劈頭の、華やかなる外交舞臺は、大阪に開幕せられんとす。(完)

大阪談判は、長崎政府の後幕なり。然れども局面、更に展開し、豫定の紙數は、旣に、盡く。次回に、第二幕として、描き出すべし。筆を投じて、窓外を見る。夜來の春雨、止みて、陰雲、微に、雨を含み、樹々、靜平、葉末は重たげに、早や、春陰の天を思ふ。牆外の屐音、泥の音を齎らして行く。

大阪力士、帝都に乘込の翌朝、駒籠の里に於て、

黒頭巾記



犬養毅　尾崎行雄　元田肇　岡崎邦輔　片岡直温



大石正巳　島田三郎　河野廣中　武富時敏　箕浦勝人

人物評論（三十五）

問題の人、噂の人

△國民黨を脱したる五領袖

文學博士　三宅雪嶺

年齢にては河野氏六十五、島田氏六十二、箕浦氏六十、大石氏五十九、武富氏同じく五十九なれど十二月生れて最も若い譯てある。四十にして惑はずといふが、此等の人々は不惑を超して已に遠く、今更ら惑ふにしては餘りに遲い次第てある。併し當人自らは特別に惑ひはせず、從來の行動を續けて居るとするであらう。



仙石貢　早川鐵治　日向輝武　杉山茂丸　秋山定輔

五人の中、河野氏及び箕浦氏は鷹揚て迫らぬ所があり、何程か人に長たることが出來る。島田氏及び武富氏は自らの能力を恃み得る代り、單獨て能をあらはし、人の上に立つのに六つかしい。大石氏は人の言葉を容れ多數に推されると共に、自身にも多少の能力がある、五人の中て最も政治家たるに適して居る。何れも今は六十前後てあるが、皆早く頭角を顯はし、三十ならずして已に公けの人と認められた。只其望を囑せられた割合に晩年の振はんやうに覺える。

大石氏は或點に於て政治家として生れたといふべきてある。ボーン・ステーツマンといへなくてもボーン・ポリチシアンてある。氏は隨分樣々な事を試み、熱心に勉强したが大抵上達の見込が無い。屢々徹夜て碁を打ち何年と續いても依然として笊碁てあり、文章を勉强してもさうてあり、至極無器用てあるに、人を操縱することゝ演說することは早くから得て居る。都の人田舍の人を相手に、それ相應に挨拶し、不快を感ぜしめぬ所は頗る巧みてあつて、何にても贊成し、剩へ禪を修めて物に拘泥するに及ばんといふ所から不得要領を通り超して自家撞着に平氣な事がある。それても別段に尤められず、明けて通されるのが普通の團栗より稍々器が大きいといへばいはるゝ。然し明治十一二年頃名古屋の中學校て英語の教員となつた程て、其後も不器用ながら書を讀み知識を磨くに勉め、一寸人を煙に捲く丈けの演說の材料を作ることが出來る。外交論ては西比利亞を世界の公園とするやうな事をいふたが兎に角一通りの問題を解して居り、タイムスを土臺に論じたりする。自分ては憲法論も財政論も得意てあると

し、取り留りないやうても何の方面にも大風呂敷を擴げ得るが、誰か下に締め括る者が居るならば大きな政黨て幅を利かすことが出來るてあらう。順境に向ふ程大風呂敷が擴かり、逆境に向ふと共に擴がらなくなる。國民黨てゝ犬養氏を參謀とする程ならば更らに何等か働き得たらうに、只さへ黨の小さいのに犬養氏より互角以上に出てず、實際之に使はれるやうな事ては、いよ／＼座禪てもせねばならんことになる。よい參謀を得られるかどうかそこが疑問てあつて、相應に器も大きく能力もあるが締め括りが無い許りてなく、餘りに權勢に焦り、そして金を氣に病むのて、踏み耐へて新たに開拓したりすることは所詮出來兼ねる。自ら座禪に上達し、近頃禪坊主に敎へて居るといふて居るが、若し同志會が面白く發展せば其方面て頻りに働きもしよう、さもなければ禪を唯一の隱れ家とせねばならぬことになるかも知れん。

河野氏は生れつき人を惹き附ける力があつて、屢々多數の代表者となつて運動した事あるが、それ丈けて他に是ぞといふ取所なく、擔ぐ必要が無くなれば捨てられて了ふ。人を惹き附けるのも主もに容貌て、それに苟も口を開かず如何にも腹のありさうに見える爲めてあつて、屢々すれば案外なるのに呆れられる。頭分(かしらぶん)として大石氏より都合よい事あるけれど、一向に意見が無く、判斷が甚だ鈍い。一種場當りする芝居めきた能あつても、場當りした丈けて其先きが續かぬ。一時人氣の湧くが如きを致して其後火の消えたやうになる。それも他から案を授ける方が多い、議長として奉答文に彈劾の意味を加へたのも人の獻立てゞ、剰へ煙草屋の策と見られて居る。いろ／＼と政黨を遍歷したやうに宗教界をも遍歷し、眞言か禪か飯野か、何か迷信じみて居る。大石氏よりも更らに參謀を必要とする方て、よい參謀が無ければ別段榮えた事なく老衰して了ふてあらう。

箕浦氏は此二人程覇氣が見えず、溫厚の長者たる風がある。敬はれるよりも好まれ、好まれるよりも先づ敵が無いといふが宜い。相應に知識もあり事務も執れる。

然し自分の了簡を通さうといふてはなく、實は政治家よりも官吏か銀行會社員たるが適當てあつたらう。循吏ともなれるし、重役ともなれる。今後も政黨に居つて是ぞといふ事も無いが、さりとて別段に損することもなく、舊態依然たりともいふべきてある。報知新聞の販路擴張は三木氏の働てあるにしても、箕浦氏の社長たることは全く力なしとはせぬ。現在の報知は政論本位の舊社員の思ひも寄らぬ所てあるが、それ丈け有福になり得たのてあつて、箕浦氏は其邊に融通の利く方てある。

島田氏は自ら新聞に筆を執るに於て箕浦氏に勝り、公私の會合に演説すること多く類がなく、所謂口も八丁手も八丁てある。然し書いたり演説したりして遠方の人が感服したりする割合に近い人が感服せぬ。頭腦は明敏てあつても人情の幾微を外れ易い。自分の爲めにすることても人の爲めにするやうにいふ癖があつて人を心服させるに長ぜぬ。新聞社て言ひ附けた通りの事をしても、全く忘れたやうてあつたり、昨日命じた事と今日命じた事と違つた事も珍らしくない。議論に筋道が立ちながら思想全體に統一が附かぬ。黨派に加らず單獨に主張すべきを主張したならば或はよかつたかとも思はれるが、それにしては餘りに移り氣があり、其點に於て到底花井氏の如くなる譯に行かぬ。日本のコブデンとブライトといふ調子て、田口氏と提携して働いた頃が花てあつて其後は面白い事が少い。何の方面ても働らけて、中にも牧師になつたならば如何かとも思はれるが、何分充分に能を發揮し得んやうてある。桂公は充分氏を働かすことが出來ぬてあらうか。折角の能力を無駄にするのも惜いやうな氣がする。

武富氏の孤立に傾くのは島田氏の人交際(ひとづきあひ)の變なのと違ひ、冷靜なのか又は無性なのかから來て居る。或は又自ら大器を以て任じ居つたからてあらう。纒つた知識に於て五人の中に秀てゝ居り、普通な人が面倒がる財政について調べ上げ、數字的て沒趣味なる問題を提げて兎に角議場て人に諦聽させる能を持つて居る。然し政黨員として活動するには今少しく熱が無くてはな

らず、忠實でなくてはならぬ。官吏としても銀行會社員としても相當に勤まるであらうが、若し早く大學敎授となり、經濟學を受持つたならば一廉の學者となつたであらう。敎授とならずに經濟學を專らにし、著書をしたならば、尋常の敎授の及ばぬ所に出でたであらうが、さうはならずに只衆議院に於ける一財政通となつて居るのは惜むべきである。氏が明治七年江藤氏に與して戰つた時、年僅かに二十、當時既に有爲の人物と見られた。河野氏が明治元年官軍の板垣の門に到り、藩主のために辯じたのは十九歲である。而して他の三人も戰爭にこそ出でざれ、早く大舞臺に乘り出したのであるのに、五人共に今に至つて稍〻迷子の形あるは何であるか。

グラッドストーンは年六十に達した時、政治家で六十を過ぎて思はしき功を樹てたものは無い、自分も之で退隱しやうといつた。ところが爾後九十歲まで獅子奮迅の勢で運動し、進善か退惡か理想追求か老耄か明白を缺き、或は自由黨の衰弱したのは之が爲めであるといはる〻と共に、如何に老後に活動し得るかを示し、人の意を强うした。彼の五人は六十前後にて新たに政黨を作り、新たに運動しやうとして居るが、畢竟如何なることになるか。性質は區々なれど何れも其れ〲の長所がある。然し强ち五人に就て言ふてはないが、人に惜むべきは萬能あつて一心足らざる事である。只一心の如何である。

△憲政運動の兩大闘 木堂と學堂

鷲城學人

日頃餘り近しくして居る人を評するといふことは誰しも一寸やりにくい。我輩は犬養氏を餘りに多く知り過ぎて居る、殊に多大の尊敬を拂へる先輩である以上は、缺點よりも長所美點が目に映ずるから、勢ひ褒めることになる。餘り褒めると好む處に偏するとか、親しむ處に阿ねるとかいふ誚を免れない。尾崎氏とは市長時代に兩三度面會し、殊に政變以來は殆んど毎日の

やうに憲政擁護會本部で顔を合はしたが、犬養程に親密でない、親密でないから犬養程に此人を知らぬ。併し犬養といひ尾崎といひ、今日の時局に直接關係のある人物であつて、時局を論ずる場合は何うしても此二人者に及ばねばならぬし、又た世間も時局から兩人を引離しては承知せぬであらう。

桂内閣を倒したのは確に大勢の力である、言ひ換ふれば桂の失敗は大勢に逆行したからである。此大勢を作つたものは國民黨でもない、無論政友會でもない。初めて閥族打破を唱へたのは憲政擁護會であるが、ソコに民衆を引つける中心人物が居なければ、擁護會の運動も格別反響がなかつたかも知れぬ。杉田定一や岡崎邦輔は政友會と國民黨を結合せしめた聯鎖役として殊勳者であることは誰しも認めるが、此大勢の原動力となつたものは何といつても犬養と尾崎である。併し尾崎とても一方に犬養といふ大立物が附添ふて居たから引立つたので。彼れ一人ならば今度の藝は打てぬ。犬養は尾崎と道づれでなかつたにしても人氣の上に格別の増減はない。さすれば此國民的大運動の成功は犬養の力であるといふことに歸納しても差支へない譯である。

最初犬養が此運動に加はるについては、誰しも政友會に背負投げを喰はされはしないだらうかと危んだらしい。殊に國民黨の一部には政友會嫌ひと犬養嫌ひといふ二つの感情から陰口を叩いたものが多かつた。恐らく犬養自身も歸決する所を見拔いて大丈夫と言ひ切ることが難かしかつたであらう。併し國民黨としては政友會がこれまでの妥協や情意投合を悔いて本氣に戰をするとならば提携する外はない。殊に閥族といふ國民共同の敵を倒すには、黨派の歷史・感情を棄てゝかゝらねばならぬといふ堅い信仰を有つて居る犬養としては尚更さうなからねばならぬ。此至誠には政友會の人々もヒドク感じたらしい、感じたから彼を討閥軍の總大將に推立てたのである。當時或者は彼が獨斷で政友會と手を握つたなど丶攻擊したが、確に大石だけには相談したに相違ない。大石自らは表面に立つを避け

るが、黨内を纏めることに骨を折らう、君は同志と共にしつかりやつて呉れといつたかのやうに聞て居る。然るに大石は脱走後になつて自分等の變節を棚に上げて、犬養を謀叛人呼ばはりをして居る。其不德義はいふまでもないが、正面の敵たる閥族に降つたのが謀叛人でなく、主義目的を同うする政黨と働を一つにするのが謀叛人であるなどといふ議論は第一世間に通用せぬ。

犬養の陣立は頗る堅固で寸分斬込む間隙がない。これといふは如何なる場合にも道理の上に立つて居るからである。それから言ふことに些の曖昧がない、何事でも芽生への中から自分の意見を定めてキッパリ人に話すから、他日間違ひが起らぬが、大石は誰にでも御坐成りのチャラッポコをいふから、後になつて何と打消しても、併し足下は現に斯う〳〵いつたでないかと突込まれて自繩自縛に陥ることになる。大石が惡友から邪道に引込まれたのも、此曖昧病が餘程手傳つて居らぬだらうか。

今の政治家中、犬養の如く敵にブッ突かる力の強いものはなからう。斬拂ふ力もあれば斬込む力もある、小氣味の好い程斬味が好い。別けて偉いと思ふ點は大抵のものなら、如何に強いといつても味方が少くなると意氣沮喪するを免れぬが、犬養は困難が加はれば加はる程最後の一人となるまで進もうといふ決心が固くなつて、ます〳〵腕が冴えて來る。これまでも爾うであるが、殊に今度大石・河野以下の領袖悉く脱會する、代議士がゾロ〳〵跟いて出る、一時は蜂の巣を突いたやうに四分五裂するかも知れぬ形勢があつた。これも進歩黨以來の歴史からいへば已むを得ぬとであるが、國民黨としては實に容易ならぬ事件である。けれども彼は殘る四十士さへ結合を固くすれば天下の大事を成し遂げることが出來ると確信し、内外多難の間に立ち毅然として邁進した。これには政友會も大に同情するし、政治以外の友人も氣の毒に思ふし、第一國民の同情がます〳〵犬養の一身に聚まつた。即ち四十餘名の代議士を失つても、更にそれ以上の大なる味方を得た。

譯である。

尾崎と犬養と改進黨時代に形影相伴うた眞逆で、世間より犬養といへば尾崎、尾崎といへば犬養と並び稱せられた間である。此二人男が十餘年振りに舊交を溫めて同じ目的の爲めに奮鬪するといふことは、何となく世人の感興を引いた。一昨年であつたと思ふ我輩は同志の一人と共に尾崎を品川東海寺畔の邸に訪ひ種々政治上の意見を交換した末に、犬養尾崎が再び手を握つて現狀打破をするやうになれば面白いといつたことがある。當時は逆も不可能であつたが、今日其一夕話が事實になつたのを看て愉快に堪へぬ。閥族退治についてはこれまで手段の上の見解を異にしただけで双方とも目的に變りはない。併し兩人の此提携が一時的のものであるか、或は永續的のものになるか、それは政局の形勢殊に政友會の態度如何に依て定まる問題であるが、一は尾崎の決心にも因る。

尾崎が政友會に入つたり出たり又た入つたりしたのは、餘儀なき事情のあつたに相違ないが、政治上の岐路に迷うた形があつて感服しなかつた。若し尾崎が進歩黨に踏止まつて逆境政治家で通したなら、犬養同樣に世間の同情を得たであらうと思はれるが、最初の脫黨でヒドク名譽を墜すし、市長になつて森久保一輩の爲めに苦められ、議會政治家として働かなかつたので、何となく安つぽく見えた。今度猛然として起つたのは、確に名譽恢復の意味も含まれて居る。又た市長を罷めた以後の尾崎としては元の野武士に立歸らなければ活路を見出し得られぬ。今日は政界の人氣役者になつたとはいへ、犬養の人氣に及ばないのは、一面には歷史の祟といはねばならぬ。

有體に評すれば犬養に比べると尾崎は二三枚役者が下である。犬養のやうに有ゆる障害物を突破して進む氣魄に乏しい。犬養は事物を透視するの明があるが、尾崎は空想的で實際に迂遠な點がある。演說は流石に多年の熟練で巧いものであるが、以前のように精彩に乏しい、而して言ふことが部分的である。尤も分り易いから聽衆受けはするが、大政治家の演說でない。犬

養は常に大局を論じ根本に及び、深刻にして條理井然として居る、決して場合當りを取らぬ。此間國技館の演說會て一萬人以上の聽衆を前にしながら、恰も二十人か三十人に話すと同じ態度て諄々として言はんと欲する處を言つたのは流石に犬養だと思つた。

論功行賞的にいへば此二人は當然入閣すべきてある。殊に犬養を除外しては國民が承知せぬ。政友會議員の多數は此至誠の人を見棄てゝは申譯が立たぬといつて居るし、山本にしても西園寺・原・松田にしても無論其考へはあるが、犬養の强味は名利の上に超越して、原敬のやうに何でも構はぬから政權に有附けば好いなどといふさる卑しい考へを持たずして、何處までも大義名分に從つて行く點にある。山本內閣が成立するとすればこれはヤハリ閥族內閣てある。此間まて閥族打破を唱へながら、これに入閣しては理屈が通らぬ。犬養は決して道理に合はぬ進退をすまいと思ふ。

我輩は飽まて犬養を第三黨の首領として政府及び政友會を監視するの位置に立たせたい。今日の犬養は滿天下の輿望を負ふて立つ所謂憲政のパトロンてあるから、大臣にならぬからとて其價値を減ずる譯のものてない。寧ろ入閣しない方がます〳〵政治的に活きるのてある。

△土佐派の二雄たる 仙石氏と片岡氏

田川大吉郎

◎仙石氏は人に好かれ相な男て、片岡氏は人に嫌はるゝ男てある、人に好かるゝ男は、どこかのろい所、若くは拔けた所のある者てある、人に嫌はるゝ男は、概して善かれ惡かれ意地つぽい所のある者てある、仙石氏は前のやうな性格の男か、どうか、分らぬが、片岡氏は後のやうな氣象の人てあらう。

◎仙石氏は、九鐵の技師としての間には、何等の誹りも無つたが、社長と爲るに及び、度量が小さいとか、堅苦しいとかの批難があつて、新聞紙にも折々不評を傳へられた、その議院に入つたのは、何のためてあつ

たかを、怪しまるる程、僕は、不向の境に足を投じたものだと思ふて居た、けれども、その大まかな、こせつかない度量の人、淡泊な、奇挺な氣質の人たることは、僕は鮮かに此間に認識することが出來た、新聞紙上の評判は、兎角、眞相を得ないものである、僕は、仙石氏に於ても、現にその一例を見たと感じた。

◎片岡氏は、辯の人である、又算の人である、議院に於ての辯者を擧ぐれば、君以上の人はいくらもある、然しながら君の辯の如く引き締つた、撓みの無い辯者は少い、從つて君の演説には光焰が缺けて、波瀾重疊、奇趣横溢の所は乏しいが、その組立てが割合に細かて、聲がカン／＼、金石をたゝくやうな、堅い聲て、議論の筋は頗る通つて居る、それだけ氏は議院中の辯者の一人てある。

◎二十五年、有名な品川子の選擧干渉のあつた時、片岡氏は、その干渉の私生兒てあつた、土佐には、確に非常な選擧干渉の事實があつたらしい、その時、氏は所謂吏黨の一人として、議院の壇に立ち、おめず、憶せず、そんな事實は毫末も無いと論じた、而してその議論にも、若干の論理があり、又若干の生氣があり、滿場を服することは、無論出來なかつたにしても、傍聽者を霧中に迷はしむる位ゐの辯説は十分に弄したらしい、當時のその演説は、僕は聽かなかつたけれど、それを聽いた友人は、盛んに氏の演説の伎倆を稱揚して居た。

◎今年の春、僕は高知に遊んだ、高知の人曰く昔は片岡氏は高知に足向けもならなかつた者だが、昨年、高知に來た時分は、非常の人氣者と爲り、盛んに歡迎せられた、その變り方に、殆んど別世の感じがしましたと、高知は由來自由黨の發祥地てあつた、けれども、南風競はず、その自由黨は當年の權威を失つて、今は國民黨の天下てある（當時の國民黨）その縣會にも、政友會の議員は僅か六七名に過ぎない、それ程政友會が衰へて、國民派が榮へて居た、それは今春の事てある、今日如何、定めし政友派が復活して、復活の機緣を得て、盛んに片岡氏一派を窮迫して居るだらう、或は又、

高知に足向けのならぬ程の氣風に倣されて居るかも知れん、政界の人氣は眞に測り難いものである。

◎そのやうな場合でも、仙石氏は割合に無難だ、氏の、昨年の失敗には、矢張、同情がある、氏は又政友會にも親しまれて居る、所謂國民黨を脫した五領袖を、桂公に引合せたのも氏である、五領袖が始めて桂公に會したのは、實に氏の宅であつて、それが進んで帝國ホテルの第二次の會合と爲つた時の、仲介役も、矢張氏であつた、氏はゑらい働き役者とも爲るまいが、その生涯には浮沈が少からう、片岡氏とは即ち正反對であらう、而して兩人の間の結托が、それ程堅く無いにせよ、世の瞶々者流と趣を異にして居る所は一奇である、兩人とも、政治專門の人にあらずして、こゝまで達したのは、我議院では、先づ珍らしい方である。

△新政黨の策士 杉山茂丸と秋山定輔

匿名氏

杉山も秋山も一騎打をやる所はよく似てゐる。けれども人格は全然違ふやうに思ふ。杉山の方はどつちかといふと主義主張があつて策を立てるといふてはなくして、策の爲めに策を立てる策士のやうに見える、秋山の方は策士といふても兎に角一つの目的を有つてゐて、其目的に向つて進む爲めに策を劃するといふ風がある。是を以て杉山は動もすれば自分を中心にして元老とか時の勢力家とかいふものに斡旋する形になり、秋山には多少國士的の風があるやうに見受けられる。

杉山は元來頭山門下で玄洋社の出身であるが、今話したやうな性格であるが爲めに、生粋の玄洋社の連中からは排斥を受けて居る。玄洋社時代に頭山を出し拔いて閥族と結托した形蹟があるといふので今日に至るまで擯斥されてゐる。

秋山は最初に伊藤博文といふものを摑まへたのてあるが、伊藤の腹の中に入り込むについては三四年もかゝつたらしい。或は間接或は直接に自分といふものを伊藤に知らしむには隨分いろ／＼の手段を講じた。け

れどもそれは必ずしも伊藤に取り入つて自分の利福を恣まにするといふ卑陋な心から出たのではない。伊藤は兎に角大勢力家であるから、其大勢力を利用して自分の志す所を行はうと勧めたのだ。今度桂と結びついたのも矢張りそれで伊藤去つて以來日本の政治的中心は何といつても桂であるからして、其中心勢力の桂によつて自分の志を貫かうとするのである。此桂と結びつくについても隨分苦心をしたらしい。先づ桂に取り入つたのは一昨年秋山が洋行から歸つて間もなくの事で、即ち明治四十四年四月頃から準備したのである。それで第一に山縣老公に會ひ、次に山本伯に會ひ、自分の事を間接に桂に吹き込ますする手段を取つた。それからいよ〳〵準備が出來た時分に後藤を橋渡しとして桂に會見するといふ段取りにしたらしい。之も桂に取り入つて自分一個の利福を恣まにするといふではなく、桂の大勢力によつて對支那策を確立しやうといふのが一つ。今一つは内治問題に於ては立憲政治の有終の美を濟す手段として二大政黨を對立せしめなくてはならぬ。それには桂をして新政黨を組織せしめねばならぬといふ腹で以て桂に接近したのである。それで一年昨初めて桂に會つた時分に恰度三晩連續して會見した。最初の晩は先づ概論として大體上の意見の交換をなし、次の晩には過去の事を話した。詰り桂は秋山を誤解し、秋山は桂を誤解して居つたことを語つて互に釋然とした。三晩目には將來の事を談じて、そしてどうしても政黨の人となつて政治をやらねば本當の憲政濟美が出來ぬといふ事を說いた。そこで桂も自分も元來さういふ考を持つて居つた。それぢや是非一つやらうといふ事を明言したらしい。今度の新政黨の話の本もこゝに起つたやうに思ふ。さういふやうな譯で、杉山が十餘年もかゝつて桂から得た以上の信用を、秋山が二年足らずにして得たといふ一事を以て見ても、秋山の方が確かに杉山よりも上であることを證據立てると思ふ。斯うなるといふのは畢竟杉山は求むる所があるけれども、秋山のは自分一個の利益の上について何等求むる所なく、何處までも國士的態度を採るからだと

思ふ。

てさういふ譯て今度の新政黨の創立については杉山の方が新聞などに餘計に謠はれたけれども、實はそんなに深い關係があるてはなく、秋山の方が一昨年來の相談相手のやうてある。さういふ譯てあつて目下新政黨の創立に與つて居る人間て少しも心に疚しき所がなく、積極的に勇み勇んて盡力して居るものは秋山一人位てあらうと思ふ。外の人は何か求むる所があるから或は變節とか或は新穢多村だとかいはれて、世間を顧慮せねばならぬ風があるが、秋山には何等疚しき所がなく、自分が桂を強要して政黨を拵へしめたといふ關係だからして一番勇氣を以てやつて居るやうに見える。從つて新政黨に對して秋山等は桂、後藤あたりから兵站の供給を得て居るかの如くいふものがあるが、之は大いなる間違て、自分て以て金を才覺して櫻田倶樂部や何かを買ふたのて、金には一文も迷惑をかけて居らない。此等は桂、後藤等が却て秋山を畏れ憚つて居る點てある。

一體時の大勢力家を摑まへてそれを利用して事をなさうといふ事は、着眼もよいし、やり方によつては隨分面白い事も出來やう。只秋山は動もすれば功を急ぐといふやうな弊があつて、往々事が失敗に畢り勝ちだ。其點から見ると彼は結局失敗の人たるを免れんかと思はれる。明治三十五年の例の有名なる第一次桂內閣の下て彈劾奉答文をやつた事がある。あの芝居の脚本家は秋山て、あれて以て桂內閣を一擊の下に打毀さうといふ事はなか／＼面白い考てあつた。然しあれも矢張り餘りに功を急いだ爲めに、やり方が悉皆誤つて居つた。つまり人目を眩ましてドサクサ紛れに奉答文を朗讀して、異議なし／＼て通過させて了つたが、後て皆ボカンとしてあゝさうてあつたのかといふやうな具合て、宮內省に持つて行くことが出來なくつて居る中に議會は解散されて了つた。それて當局の怨を買つた外に又黨人達の怨をも買つた。そして其時の事が今以て拔けずに居る。あれは實に非常の失策てあつた。

今度の政黨についても、桂をして新政黨組織の考を

起さしめたのは實に目醒しい。けれども時期を失したといふ非難は受けざるを得ない。成程豫定の通り桂、後藤が歐洲を漫遊して歸つて來て、西園寺内閣が盛んな時に野にあつて新黨組織を唱へたならば天下靡然として風靡し、忽ちにして大きなものが出來たに相違ない。けれども御大葬の爲めに桂が途中から歸つて直ちに宮中に入り、又下つて内閣を組織して政權を握りながら新政黨の組織に着手した。非常に都合がよいやうてあつて却て人氣を失ひ、つひに今日のやうな頓挫を來した。即ち功を急ぎ過ぎたので失敗したのである。非常の力量あるに非れば之を旨く挽回するといふことはなか〳〵困難てあらうと思ふ。あれは暫く辛抱して政友會内閣が出來て、其内閣が人氣がなくなつた時に、野にあつてやればよかつたのである。三十五年の奉答文の時には彼及び其一派は彈劾案てやれば桂内閣は一擊の下に倒れ、伊藤に大命が降るものと思つて、解散といふ事は少しも豫想してゐなかつた。議長の彈劾文が宮中に入つて陛下が御覽になれば桂はじつとして居られまい。詰度桂が投げ出すだらうと思つたのが大違算てあつた。今度は又之と丸て反對て、若し民黨の不信任案が通過すれば解散といふこと許りを豫想して、却て内閣の總辭職といふことを少しも豫想してゐなかつた。之は勿論やり方の如何にもよるだらうが時の如何、人心の趨向を見ることについて頗る粗漏な所があるやうに思ふ。

要するに杉山も秋山も單身一騎打に中心點に切り込んてそして其れによつて事をなさんといふやり方てあるが、秋山は動もすれば功を急ぐ爲めに失敗し、杉山の方は主義主張の爲めよりも策の爲めに策を弄するといふ嫌があると思ふ。

△政友會を除名せられし早川鐵治と日向輝武

福井三郎

早川といふ男は頑鐵といふ名が附いて居る位て、非常に卒直な、直情徑行一遍の男だ。苟も說合はず議容

れられなければ、自分を曲げるといふ事はどうしても出來ない。之は彼の性質といふよりも寧ろ病である。

彼は官界に居つて最も早く出世した一人て、政務局長や辨理公使になつたのは十數年も前てある。外務大臣になつた内田康哉などは早川の後に政務局長になつたのてあるから、早川の方が内田よりも先輩な譯だ。其早川が其れ以後久しく官界を去つて居つたといふのは全く自分を引立てゝ異れた大隈伯に義理立てをしたのてあつて、伯が逆境に居るものだから、自分のみ政界に出るのは忍びないといふので、十數年間に幾度も顯達の門に入る機會があつたに拘らず、あの男の所謂浪人生活をやつてゐたのだ。

さういふ義理堅い、卒直な男てあるから、人と事を共にして事が破れた時に、大抵の人は他人(ひと)に尻を廻さうとするが、早川は決して尻を廻し得ぬ男てある。一旦やり出した事は之は誤つたと氣がついても、何處までも遣り通す男だ。其成敗利害といふやうなことは全然別問題にしてかゝる男だ。會社を企てるにしても、事業を起すにしても、他人に尻を廻すといふやうな事はない。之は彼のよい所てあるが世に顯達を計るといふ方からいへば下手な遣り方に相違ない。顯達の方には下手てあるが、彼の氣骨稜々として武士的氣質のあるのは其爲めてある。彼の常套語に「俺ア三百年も續いた士(さむらひ)の家に生れた」といつて居るが、ハイカラの學問をした癖にどうも元龜天正頃の士の頭を持つて居る。其學問は獨逸學問てあるが、獨逸の武骨な所丈けを持つて來たやうだ。日本本來の武士頭に持つて來て、獨逸學の武骨な方面を注ぎ込んだから、いよ／＼以て頑固一點張りになつて、頑鐵といふ名を取るやうにもなつたのだ。

今度の除名一件なども全く早川の此氣質から出たのて、早川の心事といふものは實は非常に皎潔てあつたのだ。詰り今度の事は、口てはみんな強い事を唱へてゐたが、桂がいよ／＼解散風を吹かせて來た時は強いものが殆んど亡くなつて皆内心ビク／＼ものてゐた。只強いのは幹部の二三人丈けて、それらの人が兎に角

內閣を紛碎して後に爲すあらんと期して居つた丈けてある。恰度二百三高地に全滅を期して上つて行くといふ有樣てあつた。此强い二三の幹部の外はみんな弱いのてあるからして、實は早川の處へ泣つくに行つたのだ。今度の不信任案といふのは政治問題てなくて德不德の問題だ。德不德ならば桂が主義を改めて政綱を改めればよい譯だ。それ以上に之を責むるのは、只政友會の野心の爲めにやることになる。野心の爲めにやるのは所謂無名の戰だ。無名の戰の爲めに解散されるのは犬死てあるといふやうな說が大分人々の胸に抱かれて居つた。此等の連中が早川の所へ詰めかけて、何とか一運動を起さうとしたのだ。其中には隨分顏の古い議員などもあつた。それて早川は擔ぎ上げられて小西鄉となつて、あの無名の戰に反對して、心配して居る議員共を救うてやらうといふのてやり出した仕事だ。處が段々局面が見え透いて來て、さうまてやらなくても桂が緩和策を出しさうな形勢になつて來ると、早川を擔いた連中も一人減り二人減つて、段々に人數が少くなつて來た。さアこうなつて來ると、益々やり出した事をやり續けるのが彼の病だ。又彼の本領だ。人がやめればやめる程自分がやめぬといふのが彼の氣質てある。それて除名される前の晩に私が早川の處へ行つて、君の今度の運動は廢せ、君を擔いだ連中も皆幹部の意嚮に從ふ事になつたんだから、君がそんな事をやつて居ると君只一人がオイテケ堀りになるから廢せ、且つ又君が廢めたからとてそれは內輪の事だからよいぢやないか、それよりも一人ても結束して事に當つた方が全軍の爲めだ。君がどこまても頑張るのは例の早川流て君の損になるんだから廢せよいつたら、早川がいふには全く君のいふ通りだ。けれどもこうなつては尙ほ廢められない。僕は奴等の小使になつたと思へば濟むんだから、一人になつても除名になつても何處までもやるといつて聽かなかつた。其時分には固より桂と通じて居る譯てもなし後藤と近いたてもなし、只同志を救うてやらうといふの念しかなかつた。あの時かいつた金なども皆早川が出したので、二三百圓位は使

つたてせう。

今度の一件では早川も實に呆れて了つて「政黨の奴等の浮薄不信實なのには驚くの外ない。義理も人情もあつたものでない。」といつて居る。早川を說いた古い議員が早川の除名になつたのを聞いて「誠にお氣の毒の至りで」とか挨拶したら早川は「糞ゥ喰らへ！」と叫んださうだ。

日向輝武を早川に並べて評するのは早川に對して氣の毒だ。日向の方はずつと人物が下で、到底も早川とは比べ物にならない。日向の人物を一言にして評すれば、あの男は事々物々何にでも變つた事をいひたい男で、不平をいつたり、變つた說を唱へたりするのがあの男の持前である。あれも矢張り早川を說きに行つた一人で、幹部では日向を運動の張本人と見て日向を馘れば早川も運動をやめるだらうと思つたらしい。處が早川は前にいつたやうな男だから、日向を馘るなら何故俺を馘らぬ。鴨を擊て天を驚かさんとし、頭を切らずして尻尾を切るとは何事だ。お姬様と心中することもあらうし、又情婦になればおさんどんと死なねばならぬ事もある、相手によつて初心を變へるのは己れの本意でないとて、日向を救ふことにも骨を折つた。日向は只變つた事をいふ丈けで別に普通以上の人と思はぬから、從つて評をすることもない。

△閣將元田肇と參謀總長岡崎邦輔

早川鐵冶

元田と岡崎の話か。岡崎といふ人は、今度の憲政擁護閥族打破の運動の主もなる働き手であつて、今度の運動の本はといへば、矢張り犬養と岡崎でないかと思ふ。岡崎はなか〳〵初めから强がつて居つた。先づ今度の事について功のあるものに勳章をやることになれば犬養はどうしても大勳位で、元田と尾崎は勳一等功一級位の處と思ふ。此二人は犬養よりもどうも少し劣るやうだ。然し岡崎が内に居つて輿論を起し、新聞を利用して益々手の火を熾んならしめた手腕はなか〳〵

な者で、犬養と並ぶべき人は此人の外あるまいと思ふ。

元田、尾崎は辯の人で當世の雄辯家の錚々たるものであるが、岡崎は智慮を用ひて畫策する人である。岡崎はよく眼が利いて、世間の事がよく分る人である。それで畫策は岡崎が第一である。元田は智慮に於て岡崎に劣り、辯に於て尾崎に劣り、又人物も正直で器が小さいが、然し今度はなか／＼よく働いた。

元田も岡崎も六十に近い人達で、何時までも陣笠と伍して居るのも嫌であらう。原なども元、岡崎が心配してあの位置になつたので古川との關係をつけてやつたのも岡崎である、處が近頃では原と岡崎の位置には非常の懸隔が出來、原は最高幹部として殆んど黨の全權を握つて居るのに、岡崎は總務補佐位の所で僅かに中幹部になつて居るに過ぎない。政權の授受とか黨の向背とかは主として原や松田のみによつて決せられて多くは岡崎が與らない。之などは岡崎が不愉快で堪らない。而して岡崎だつて政治界に働いて居る以上は一度は大臣になつて見たいに相違ない。辯もよくなく又押出しもよくない優さ男であるが、智慮はなか／＼よく働くんだからして、いろ／＼に考へて、政友會內閣の倒れると同時に輿論を喚起さして、最高幹部にも鼻を明かしてやり、自分も大臣位になつて見やうといふのが、今度の彼の目的であつたらうと思ふ。

元田は私共の政友會に入らなかつた前は不平黨の大將で、いつでも幹部に不平をいつて居つたさうだ。然る處第二次西園寺內閣の時に拓殖局總裁になつた。我々の如き役人生活をしたものから見れば、元田程の人物が拓殖局總裁位になつて、而かもあの貧弱な馬車を乘り廻して居るのは滑稽に見えるが、然し當人は役人が嫌でないと見え、又親任官が嬉しいと見え、餘程滿足したものと見える。それで幹部に對する不平は餘程薄らいだが、先生それと同時にこゝまで行けばもう一踏張りて確かに大臣まで行けると考へたらしい。今度の運動なども要するに其功によつて大臣になりたいのが主であらうと思ふ。

元田は辯に於ては尾崎に劣るけれども矢張り外に出

て働く部類の人て、政友會に於ては尾崎に次いでの闘將てある。岡崎は何處までも内に於て書策する人て、今回の運動ても確かに參謀總長の役目を勤めた人てある。

一人は幹部に對して不平の結果、幹部に鼻を明かしてやらうとし、一人は拓殖局總裁まで漕ぎつけたから今一息といふので運動を起したのであるが、要するに何れも大臣になりたい野心があるからである。

一體大臣の相場が近頃下落して、誰にても出來るやうになつた。前桂内閣の柴田だの、若槻だのといふのは丸て小僧に過ぎない。さういふ小僧でも大臣の勤まる今日であるから、私は岡崎や元田を大臣にしたら立派な大臣だらうと思ふ。私は今度の功に對しても、又彼等の野心に對しても一度は大臣にしてやりたいやうな氣がする。

四月一日發行の本誌は「春期大附錄號」にて平常の二倍以上の大册なるが、其附錄の豫告は本號の最終の頁にあり、論說の豫告は第三十三頁にあり。

京都帝國大學文科大學教授
桑木嚴翼先生著

最新版

哲學綱要

著者が渡歐以後『哲學概論』以降の蘊著を傾倒せる一大新著
最近世界思想の大縮圖

（前編）哲學綱要
一、哲學の由來（哲學思想の發展—學としての哲學）
二、哲學の概念（哲學の形式—哲學の內容）
三、哲學の構成（哲學の方法—哲學の態度）
四、哲學の問題（知識哲學の問題—自然哲學の問題—人生哲學の問題）

〔後編〕現代の哲學
一、現代の哲學
二、規範と規範學
三、歷史哲學の問題
四、自然科學者の哲學觀
五、哲學方法論斷片
六、倫理學說と實驗倫理學
七、矛盾の原理と哲學

〔附錄〕歐米哲學界の印象

洋裝總クロース頗美本
一冊約四百四十頁
正價一圓八十錢
送費拾二錢

（高評參版）
獨逸エナ大學教授
ルドルフ・オイケン博士原著
（原著者自筆序文挿入）
東京帝國大學文科大學教師 哲學博士 ラファエル、フオン、ケーベル先生序
東京帝國大學文科大學講師 文學博士 波多野精一先生序
文學士安倍能成先生譯

大思想家の人生觀

頗美本七六〇頁
正價參圓五十錢
送費拾六錢

現時世界思想界の最大權威たる、オイケン博士の著書中最も一般的にして最も萬人に切實なる代表的名著チーレーベンスアンシャウウンゲンデヤグローゼンデンカーを譯せるもの、プラトー以來現代に至る迄、流れて盡きざる生ける思想の大潮流を叙せし人生問題の發展史也世界に於ける最高最新の思想を解せんと欲するの士は必ず見られよ、本書を讀まずんば到底現代の思想を解すべからず

（中付一の一）

東京市神田今川橋大通
東亞堂
電話本局八八四
振替東京一七一

洋鋼

自己製品の品位と價格に注意せる顧客は照會せよ、當店は其信任に背かざるべし

洋鋼專業

上野半兵衛商店

東京市神田區材木町十九番地

電話本局 五一八、四〇七一、長一七七四番

東京振替口座四五七三

尾上柴舟先生閲　藤森花影先生述

好評三版

新刊

徒然草詳解

國語受驗の好參考書　好評嘖々として湧くが如し、帝國文學本書を評して曰く

徒然草が日本文學に於ける一異彩であることは云ふまでもなく、從つて古來その註解の書にも乏しくないのは尤もなことであるが今こゝに本書がその註解として現はれたのに就いては、必ず別に新意がない筈はあるまいと卷を開けば果せるかな中々面白い企がしてある。まづ「一」例へば「願望」「四季の感想」「無常」「男女の情交」と云つた風に一段毎に題を付してある。次に「二」一段毎に上欄にその大意を口語で述べたことである、それから「三」原文の傍に解釋をほどこし。又別に語釋として各段末に説いてある。これらの方法は極めて適當な便利な思ひ付きで。讀者そのまゝに一時に大意と詳解とを合せ得る便宜がある。加之、卷頭は、本書の解題價値、作者の略傳、作者の評論などが公平な總合的な見解の下に記されているのも親切な行き方と云はなければならぬ。實に國文學を學ぶ者にとつて。この上至便な詳解はあるまい。

上製　正價七拾錢
並製　正價五拾錢
郵税六錢　紙數四百廿餘頁

發行所　東京市小石川區同心町　良心堂書店
振替東京二一三四四番

（中付一の二）

樂まして而して教ふるの書 家庭の活寶典 教育者の典籍

文學博士 服部宇之吉先生
文學博士 三島毅先生 題

從五位 日高秩父先生
鳴鶴 日下部東作先生 字

水戸 中村立節編纂
水戸 岡谷義端補編

草書大字典

草露貫珠

本書賛助員

公爵 三條公美閣下
侯爵 黑田長成閣下
伯爵 土方久元閣下
伯爵 大原重朝閣下
子爵 黑田清綱閣下
伯爵 松浦厚閣下
子爵 松平時陽閣下
男爵 野村素介閣下
大日本撰書獎勵會幹事 山腰弘道先生

本書頓裁 縱七寸天金角背皮クロース綴横四寸五分金文字入三千五百餘頁

申込次第見本進呈

美裝堅牢函入 全一册

製本 定價金拾圓 特價金七圓

五千部限 特價發賣

官衙學校に限り前金を要せず

既成

運賃 市内無料 內地四十八錢・朝・臺・樺・清・各七十錢

郵券二錢見本進呈

學校の必備品 愛書家の珍侶 今が最低價購入の絶好機會

書道の寶庫 開放せらる

水府西山公の命により其儒臣の編纂せる草露貫珠は漢魏より元明に治るまての大家の筆跡を探擇蒐し以て草書に於ける變幼白態の妙味を現出せしめたるものにして眞こ天下の偉觀なり含む所の草體四萬九千五百字原本廿一卷に上り世人其の容易に得難きを痛數せり今や之を鐫刻して精巧なる寫眞版となし草書大字典と題して江湖に推嘗するを得たるは洵に昭代の賜なり特に本書は新に畫引索引、音訓索引を添へて其使用捜査に便ならしめたれば舊來有りふれたろ幾多の草書字彙ゝ類と全く面目を異にせり内容の完備に伴ひ外裝も亦頗る善美を盡したれば單に好書家の良友たるのみならず官衙學校會社銀行等に於いて實用の書たると同時に品位ある家庭の文房書籍を飾るに足るべき珍書たるは信じて疑はざるなり書道復興の機運は來れり希くは本書特價の時期を逸せざらんことを。

發行所 東京神田錦三丁目 隆文堂書店 電話本局一四〇三 振替口座二九四四

(中付一の四)

和歌

尾上柴舟選

○ 姫野浪次

落葉せし木々の肌の濡れぬれてうす光する雨の夕ぐれ

秋の午後坐して河見る安けさよ靜かに靑き水はながるゝ

明るくも輝く遠き山々の白きひかりも淋しやまひる

うづくまれば砂はほのかに暖し白く輝く冬の海づら

○ 大眉朝果

落葉鳴る峽の小徑をいくかへりあゆみぬ秋の嶺をふまむと

さしぐめるこころ抱きて峽のみち越ゆるわが背に燃ゆる太陽

おそるおそるわが背をよする樹の膚のうすくしめるに死ぞうかびくる

○ 佐野翠坡

行きくれて鄙 廓の灯を見つゝくだる山路の笹の葉ハ雪

醉ひざめてひとり雪かむ窓のそとおもはぬ方に月を見るかな

足早にこの町すぐる旅人ありありて聲なし雪の夕ぐれ

わがあとに黑くつゞける足跡のやすく〳〵消えて雪しづかなり

○ 白曙海王星

默したる名知らぬ山の連りに沿うて歩ゆみしこの幾日よ

夜の霧にしつとりぬれて數へたるわが戀人の數程の星

別れなば泣くてふ人にとらはれてもだえてありぬこの若人は

○ 深井藻花

枯草の風の冷たき夕ぐれを時たま鳥の鳴くは悲しき

濁りたる灰色の空を見上げてはわが病的の戀を泣くかな

強ひて瞑づる重きまぶたににじみてる涙の中のいとし少女よ

○　　　　捫垣青花

夜ふかくかへりて二階をのぼるとき冬がつめたく身に沁みるかな

ぼんやりとものおもふでもなくねころべば電燈のつくはつ冬の部屋

黒猫のあゆみよるごときけはひしてこゝろおちつかぬはつ冬の夜

○　　　　綠川朝夫

ふるさとをのがれこしわがあきらめの心につらき雪もよひぞら

汝がいにしあとの座敷に灯ともせばわが影壁にゆらぐさびしさ

汝がのめばわれもともどものむ酒のこのまゝ毒とならばよからむ

○　　　　村上夕人

病める眼にあてしガーゼに何やらむ春來るらしき風通ふかな

雪のころ郊外に來て春らしき京の都の人のさゞめき

○　　　　田中壽夫

かく遠く來しわが胸にはなれじとつきまとひたる奈良の少女子

乳色の溫泉が軀にしみ〴〵と人の情を想はするかな

○　　　　吉村青陽

なにかいとたのしきことの追憶の湧きくるごとし雪のつもれば

神明の鳥居の上に風船の赤きが一つ飛べる夕ぐれ

○　　　　水木蝶次

夜となれば火柱の立つ山を見る不安の群に交る母と子

なつかしき汝が頭字を霜白き橋の欄干(テスリ)にかきし朝かな

○　　　　木村隆吉郎

悲しさの極みに座せばものすべて變へず泣かず靜やかにみゆ

天地の遠く我より去りぬべきときを思へば悲し

かりけり

○　外島うしほ

なげやりに物ゝ見なれし我が心今更人のたのまれもせぬ

うちつけに物も言はねば自(おのづ)から與(くみ)し易しと思はれやする

○　竹村宗一

默念と机にもたれ思ふことなければ何時か涙もよふす

寂しくもこぼれつゝなほ咲きつゞく花になげたる冬の午後の日

○　前田黄昏

やはらかく心の上におちきたる月の光の靑き哀愁

すなほにも叔父の言葉に從ひてくらすと云へる君はかなしや

○　山邊溪韻

うちくもり重うくれゆくおそ秋の國道ぞひのちさきわが家

秋の道黄なる木立にわけ入れり月の照る丘を右にめぐりて

○　佐藤辰雄

船の夜の幾日を思ひつゞけ來し山ふところの小さき町の灯

汝も冬を知るや鷗の一群が鳴いて騷げる海のさびしさ

○　藤井黎白

戸の隙に星かぞへつつ山の宿つめたき枕あてがひしかな

人も世もただこれ夢の繪巻ぞとあふげば空に滿つるかなしみ

○　佐久良草迷

赤ちやけし禿山すそのひろ原に男々しや君が畑うつ姿

妻爭ふうねび耳なし見えも來ば涙落つらむこの若き子も

○　馬場俊一

よこゐざり女の膝のまろらかに浮びいづるにしづ心なし

○　荒川潛龍

醉ふほどに哀しき歌をうたひ出る友にさびしく盃をさす

○東京の晝の疲に黒光る神田の川の夜のどよみかな　柳悦生

○秋の日のもとしをたれてゆく群れつゞく岡陵の身の白き穂すゝき　丸尾英一郎

○群青の波ゆるやかにうちゆらぐ海にはかなく消ゆる白雪　大庭妖春

○ゆら〳〵と香のゆれてたつ牛乳を一息にスーと吸ふ心地よさ　道川煙二

應募和歌原稿は東京小石川區原町一一五番地
尾上柴舟宛の事

俳句

淡雪　高田蝶衣選

客送るに強ゆ草鞋酒淡雪す　愛香
淡雪の山山や池も湖に似て　同
春の雪門弟の擧を句に讃す　同
春の雪參籠一列の紫衣映ゆる　蔡雨郎
湯華沸す女徒弟淡雪に居て　同
淡雪の晝となりぬ絹はどき居て　同
淡雪に濡れて黛痒うせり　芳葩
淡雪や木の香よき玉川の里　同
參籠の尊き人よ春の雪　同
防風林の淡雪や蟹の穴まどひ　茶の門
煙流れて淡雪となる大焚火　同
お山口に焚火や春の雪祭り　同
籠てくに竹紙とぶ淡雪の門　明兮
淡雪に雫落つ丸窓の梧　同
淡雪の衣に寒し放下僧　塘木魚

淡雪や瀬戸内海は朧にて　同
移居旦淡雪もよし花屋來て　草鳥
淡雪や奈良までの給旅振ひたる　同
和に富めば波瀾も美なり春雪夜　筑樓
淡雪や一行名殘る水驛　同
又の手荒れ忌む陶工や春の雪　蕉風
淡雪に芽獨活買ふ厨裡貝生きて　同
淡雪の背山晴れ樋に水鳴れる　東阜
淡雪に日遲れを木屋が待つ筏　同
大寺の門扉の華麗春の雪　雨露人
淡雪に泊り繼く旦歌もあり　同
淡雪の風だまり籔間菜畑見る　鬼州
春の雪消ゆとなき火入れ藍の泡　同
淡雪や木戸に灯入るゝ素足寒む　木雨
紬售りに來ての泊りや春の雪　同
淡雪や舍人が烏帽子日に光る　銀杏庵
牧開きせしが春雪しきりなる　同
風呂場隣る立萱に淡雪の音　桂仙
鳥語籔に靜まりて淡ッ雪となり　同
淡雪や象徴詩徒の集ふ酒座　耳山
淡雪の日榮え山朝餉過ぎて見る　朽葉

檜笠洗ふ噴井の曇を春の雪　紅夾比
淡雪や未定の稿を疾く召さる　國郎
施米閉づ日殊に人寄る淡雪に　一箕
鶴憂と梅園に下りつ雪の春　天行子
淡雪の夜となりぬ城に灯つく　水馬
新居殊に淡雪に愛づる君と酌む　菫湖
淡雪に灯して廐仕舞居る　津灣
淡雪の底水の行く山葵窪　雨春草
傾斜道と並ぶ裏屋根春の雪　飛雪
溫泉も溢る刻限を鷄や春の雪　柳子
庭鶯鶯に降る淡雪や草の色　（花鰻改）人子
鹹日和を待つ郷に春の雪となり　藍一星
御遊潰れの邸第春の雪寂し　蘇花
歸郷其日の墓參を春の雪晴れて　北斗青
歸杖思ひしをまた春雪に病む湯治　鶉衣子
淡雪の宵や橋戸の流し三味　小籟
馬場草はほのめきて城下雪の春　滿峰

鹿角猿賀邑に田道將軍戰死の地と云あり

淡雪や史に洩るゝ菩提野軍森　奇淡

竹秋

濡れ佛還す木洞や竹の秋　明兮
四季咲の花淋し竹秋の背戸　同
綴り魚干す裏戸竹の秋晴るゝ　同
日暮殊に村人淋し竹の秋　芳葩
竹の秋この家は酒も何も賣る　同
畑主へ貢持ち行く竹の秋　同
竹の秋當年の飛將公事にあり　三光鳥
竹の秋臨時費にす送迎の大　同
竹の秋蠶科増す女學黌のあり　同
繍りむらを透し見る綠や竹の秋　雨春草
妻迎へて機も買ふ竹の秋うらゝ　同
荷かき女の住む里麓竹の秋　同
竹秋す汲まぬ井に甍の月澄めり　雨霽人
竹秋す寺徑の晝を暗き行く　同
竹秋す沼尻人の夕映えて　同
寺も竹の秋す見て溯江緩るやかに　愛香
卓の賓を茶に煮る里や竹の秋　同
竹の秋侍臣に賜ふ古硯　同
竹秋や廉直累をなして致仕　愛宕生

岩苔を摘む蟹や竹の秋の崖　同
竹秋の疾く闌に矢竹選り容るゝ　筑樓
犢呼ぶ間を黄昏れて竹の秋吹ける　同
雨の夜の竹秋す佾を迎ふ道　茶の門
蝶も見て船上がる竹秋の里　同
竹の秋法會果てゝ庫裡に恭客あり　朽葉
科擧の日の迫れるを喪に竹の秋　同
僧房のしのあざやかに竹秋す　銀杏庵
竹の秋南緣の寂を鳥落つる　同
對岸の竹は秋なり雨日記　國郎
絃歌聞き狎る寓居に竹の秋を侘ぶ　同
蠶所の祝ぎ事も竹の秋の宮　藍一星
棹の痕竹秋の長瀞の崖　同
雨崩れの薪小屋や竹秋の家　水馬
竹は秋に世疎んずれば閑ゆかし　同
竹秋や財主が昔屋敷晴る　耳山
拾錢ののびる音淋し竹の秋　同
病鶴の跛行す竹の秋となり　楊杞子
飛鳥歷見る青潭や竹の秋　同
筆の軸腐らす虫や竹の秋　小獺
机脚食む虫見つ竹の秋の窓　人子

猜酒に珍ら醉ふ宿も竹の秋	紅奀比
院を守る人代りたり竹の秋	骨舟郎
勸農談竹秋を寺に睦み寄る	薫風
灯し頃軒飛ぶ雨に竹秋す	東皐
竹秋や麥も末枯る毒風が	一箕
遷宮祭の余興餅撒く竹の秋	天行子
追善の一座竹秋の大爐なり	水響
高僧法話も一鄕の供養竹の秋	句瑠璃
藪寺の春會も雨に竹の秋	飛雪
峠三池にうつる大山竹の秋	北斗靑
竹の秋沼摺り鳥に草咲いて	鬼州
寺男に扶持あるや竹の秋の頃	碧凝滴
綸天井古りにしを値ふむ竹の秋	柳子

課題（梅（二十句）新題（不限）……三月五日〆切
暖（十五句）春雜吟（十五句）……四月五日〆切
若葉（十五句）晝寢（十五句）……五月五日〆切）

注意（各題別紙、新題規定は十二月號及新年號參照
淡路國釜口村高田蝶衣宛中央公論句稿と表記）

評論

近東の形勢

一

近來の山野は、再び砲煙彈雨の修羅場となりぬ、是何故ぞ、言ふ迄も無く土耳其內閣更迭の結果なりと云ふ、少しく其次第を記せん、

一月二十三日午前十一時、土耳其宰相キヤミル、パーシヤ、內閣會議を進行せしめ、勃牙利の要求に基きアドリアノープル州の一部割讓を諾することに決定したるが、此時靑年土耳其領袖タラットベイ入り來りて辭職を勸告せり、然かも宰相之に答へず、列國聯合通牒に對する回答文の協議を繼續せりき、

然るに午後三時、前アダナ州知事デゼマル、ベイ、五名の將校を隨へて土國政廳前に現はれ、十五六名の人員亦た俄かに裏町の酒屋より躍り出てゝ高く旗を掲げたりしが、數分間内に約二百名の人員となりぬ、此時エンバー、ベイは、參謀本部員數名と共に群衆喝采の裡に馬を驅つて來り、政廳内の内閣會議室に入らんとせるに、衛兵之を拒みて入れず、爲めに激烈なる爭鬪起り、陸軍大臣ナジム、パーシャ始め數名殺害せられたり、次てエムバー、ベイはタラット、ベイと共に宰相に迫つて辭職せしめ、大命は茲に靑年土耳其黨首領セブチット、パーシャに下るに至れり」

平和主義の内閣已に仆れ、對外硬を標榜せる後繼内閣成る、アドリアノープル問題の解決、困難なるや知る可し、勃塞希墨の四邦が、一月末日迄再戰を延期したるは、豈寧ろ潜故にあらざらん哉、

二

然らば則ち再戰の結果は如何、吾人はその土耳其軍に執りて有利なる可きを認むる能はず、何ぞや、土耳其軍兵は人數に於て勃牙利軍に優る可しと雖も、然かも其兵數の二分一は訓練缺如たる劣等數なり、況んや大砲古式にしてその數十分ならざるに於てをや、唯だ小亞細亞より新銳の軍勢至れるは喜ぶ可きも、何ぞ頽勢を挽回するの望みあらんや、之に反して勃牙利以下聯合軍に執りても、今回の戰役は難有からざる可し、其理由に二あり、第一、チャタルヂャ附近は沼澤多く、大兵を動かすに不便なり、爲めに戰鬪永續して勝敗容易に決し難く、其間に財政上の窮迫起り、土耳其軍同樣聯合軍を惱ます可きを疑はざる也、況んや勃牙利の農園の如き、今や一日も早く壯丁の歸臥を要求しつゝあるに於てをや、第二、君斯丹丁堡はビザンチン帝國の後繼者を以て自ら居る露國が覬覦して措かざる所たり、依つて勃軍にしてチャタルヂャを陷落し、首府に入ると雖も到底之を占有するを得ざる可し、勃軍戰を好むと雖も、豈獲物無き勞役を欲せんや

茲に於て平穩かに思ふ、今回戰役は最終迄進まずして中止の運に接せざる乎を、換言すればアドリアノープル要塞の陷落の如き、或は和議再始の機會となるにはあらざるかを、

三

土耳其對巴爾幹諸邦の關係再び破綻せるに反し、勃

牙利對羅馬尼亞の難問、平和に解決せられんとするは、何等の幸ひぞや、

傳ふるもの曰く、勃牙利はシリストリアを羅馬尼亞に讓與し又同地より黑海岸カヴルナに至る諸村落一帶をも讓與す可く決定したりと、夫れシリストリアは勃牙利之に砲臺を築き、羅馬尼亞人をして危懼せしめたる所なり、蓋し羅馬尼亞が重視するダニユウ河、同河鐵橋、及び羅國首府と黑海を聯絡する鐵道は、皆なシリストリア砲臺に支配せられ居たるを以て也、然るに勃國之が讓與を肯んず、羅國民の滿足想見す可し、次ぎにカヴルナ方面の諸村落に至ては、勃牙利領と言へども、勃牙利人の住居するもの少く、羅馬尼亞人、土耳其人多きに居る、その羅馬尼亞に歸するや當然の結果と言はざる可からず、

勃羅問題決定せんか、土勃關係を外にして殘留する問題は、唯だアルバニヤ境界の劃定のみ（即ち塞爾比に委す可き部分とアルバニア獨立州に歸す可き部分等の決定）、之が處分は墺地利の硬軟如何に在り、知らず老帝フランツ、ヨセフ陛下の平和意見勝つか、皇嗣フランツ、フエルヂナンド親王の膨脹論勝つか、吾人は之を將來に徵するの外なき也、

墨西哥の革命

二月九日墨西哥首都の軍隊叛亂し、同月十六日大統領マデロ氏辭職の止む無きを認め、前駐米大使デラバラ氏假大統領に內定す、知らず如何にして茲に至りたる乎、

前大統領ヂアス氏は勤續三十年、殆んど帝王たるの觀ありき、再選又重選、國家の政治は氏一家の私事の如き狀あり、憲法の規定の如きも、宛然死文に過ぎざるを覺えしめき、茲に於て乎フランシス、マデロ氏、一九〇九年、憤然蹶起、種々の危險を犯して大統領再選に反對し、且つ選擧權擴張を唱道し、一九一〇年ヂヤス氏に迫害せられて、米國に遁亡し、間も無く斷乎兵を北部ジユアレスに擧げたりき、爾來各地に轉戰し、一昨夏、漸くにして事成り、十月一日公式に大統領に選擧せられたりしが、在職一年三月にして今や辭職の止むを得ざるに至る、知らず如何にして此運命に會せる乎、

吾人は之を以て墨西哥人民が根本的に政治的能力缺如たるに基因すとなさゞるを得ず、何ぞや、墨國政治家、皆な功名心に滿ちて、權謀術策を愛すること貪財

酒食よりも甚し、老大統領ヂヤス時代に在りては、多少運命と諦るを得たりと雖も、新進のマデロ氏に對しては、尊敬心も無く遠慮も無し、マ氏亦此形勢を觀取し、爲めに内閣其他の要職を親戚友人に附與し以て自ら安全にするの方法を講ぜりき、換言すれば新大統領は必要に迫られて先きに自ら攻撃したる前大統領の政府私有策を自ら踏襲するに至れりき、而して其の結果政府の内部は比較的圓滑なりしと雖も、疎外せられたるゴメス、レエス、サバタ諸將相次で反し、國内又大に亂れざるを得ざりし也、詮する所、墨國民に私黨ありて公黨なし、何ぞ今日の騷亂を來せるを怪まん哉、

然らば則ち今後墨國の支配者たるものは誰ぞ、今回墨國首府の叛徒が推戴したる前大統領ヂヤス氏の愛甥ヂヤス將軍歟、將た久しく山林に苦戰したるゴメス、サパタ等の豪傑歟、吾人未だ之を豫言するを得ずと雖も、唯だ確信を以て叫び得可き一語あり、曰く墨國は何人が支配者たるにもせよ、禍亂又々起り、當分兵馬を收むるの好機なかる可く、遂に外國干渉を誘致するに至らんと

佛國新内閣

佛國前首相ポアンカレー氏、一月十七日、大統領に當選するや、前大統領ファリエル氏は、ポ氏の就職準備を容易にせんことを欲し、内閣更迭の爲め、大命を法相ブリアン氏に下したり、一月二十一日ブ氏之を諾し、次で新内閣の成立を見たり即ち下の如し

首相兼内相ブリアン、法相ベルトー、文相スチーグ陸相エチアンヌ、海相ボーダン、外相ジョンナル、藏相クロッツ、拓相ジャン、モーレル、農相フェルナン、チヴヰ、商相ギッタウ、工相ジャン、デュプイ、勞相ベスナル

之を前内閣に比せん乎、海軍卿としてデルカッセの如き無く、勞働卿としてブルジョワの如き無きは惜む可しと雖も、是ブ氏の統合的勢力、ポ氏に及ばざるに基因す、亦實に止むを得ざる所也、然かも唯だ其外相としてジョンナル氏を得たるに至ては、祝賀を値ひするもの無しとせず、他無し氏はアルゼリア總督として摩洛哥其他北阿問題に精通す、方今佛國活動の地、正さに阿非利加に在るを想へば、氏の就任が佛國民に歡迎せらるゝも亦怪むに足らざる也

米國の正論

米國船(沿岸貿易に限る)の巴奈馬運河通航料を免除したるは、英米條約に約言したる「公正的取扱」の義に適はず、然るに米國學者、曲學阿世是れ事とし、極力非行を辯護して止まず、ハーバード大學國際法教授ウキルソン氏、「國際公法」著者テーラー氏等則ち其例也、論じて曰く英米運河條約は、米國が巴奈馬運河地帶を合併せざるときに成れり、然るに其後事情一變、運河地帶は米國領土となり、運河は內國運河となれり、從つて同條約は効力を有せしむ可きにあらざる也と

異なるかな論や、運河條約には唯運河地帶の使用を米國に許せるのみ、斷じて領土の割讓にあらざる也、唯獨り此間に在つて、公正の論議を行つて憚らざるもの、一人あり、曰く前國務卿現上院議員エルー、ルート氏是、

ルート氏運賃免除規定廢止案を上院に提出し、滔々說いて曰く運河地帶は我が領土にあらず、我れに信托せられたる土地なるのみ、又曰く米船の運河通航料免除は斷じて非なり、昨年通制定の運河法中該件規定の項目は削除せざる可からざる也と、此聲あり、米國未だ正論の跡を絶たざる也、

放火トラスト

文明の餘澤かは知らねど、色々のトラストを見るものかな、今春紐育に開かれたる放火事件は放火トラストの存在を明かにするに至れり、

其內容に曰く同市イーストサイドに在る約一千の住民はその家屋に放火せらるゝ條件の下に火災保險會社員の勸誘に應じて保險を附せり、而して放火團には火災保險會社員も加はり、放火係と家主との間には豫じめ打合せをなし、家內にては放火せらる可き場所の附近にベンジン其他燃料を置き、出火を容易にしたりと言ふ、而して此種の秘密團體は決して尠少にあらざるものゝ如し、

感謝す可きかな、我國未だ米國の如く開明の境に入らず、從つて此種文明の餘澤に浴せざるを得ることを

濠洲政治家退隱

濠太利(オーストラリヤ)第一流の政治家、アルフレッド、デーキン氏

退隱す、氏や自由黨領袖として一九〇三年以後五箇年に亘り濠洲聯邦首相たり、一九〇九年又々首相となり翌年辭職せりと雖も、猶在野黨首領として勞働黨內閣を相手に奮鬪的生活を送りたりき、然るに今や俄かに去る之を惜むもの、何ぞ獨り濠洲人民のみならん哉、

遂莫、好敵手を失ひたる勞働黨領袖等に至ては、必らず爲めに其內閣の壽命を永うす可きを欣ばん、況んや新に在野黨首領に選ばれたるジョセフ、クック氏の如きは、德望足らずして、爲めに黨內二分の形勢已に萌せるに於てをや

批評と紹介

△千曲川のスケッチ　島崎藤村著　左久良書房發行

「自分を新鮮に簡素にする爲め」に何年か小諸の山に隱れて、沈默生活を送られた其時の紀念である。氏が今日の小說壇上の地位は今更言ふを俟たない。その今日あるを得たのは偏へに此沈默思索時代の賜であるといふ。いかに氏が今日の氏を其山上に作られたか、今日の氏の小說と共に必ず味ふべき書である。(定價金六十錢)

△留女　志賀直哉著　洛陽堂發行

今日の小說界に於て最も藝術家らしい藝術家、床しい香りに充ちた藝術は之を此著者に覓めることが出來る。稍世間と隔つた物足らなさを感ずるけれども皆とりどりに面白い。此書は「祖母の爲めに」外十幾篇を蒐めたものであつて、中に就いて「濁つた頭」「剃刀」等は最も興味を惹く佳作である。(定價金壹圓)

△近代思想の解剖　樋口龍峽著　廣文堂發行

錯雜混亂を極めて歸適の方向に惑はざるを得ざる近代思想界の趨勢を懇篤忠實に剖判說明したる所のもの也。近代思想界の大勢を知らんとする者の爲めに好き參考書たるべく、一般世人も一讀すべき便利の書たるを疑はず。(定價金壹圓五拾錢)

△惡魔　谷崎潤一郎著　籾山書店發行

嘗て本誌に掲載した惡魔と其續篇とに尙一篇を附して一册に纏めたも

のである。其點に就いては世既に定評あり。此處に批評するの煩を避けるが兎に角現文壇に於ける著者獨自の地歩を占めたるもの、江湖の愛讀に値するであらう。（定價金壹圓）

△大川端　小山内薫著　籾山書店發行

藝術的價値から言つて甚だしく物足らないものではあるが、兎に角一種の讀者をして狹斜の事情を味はしめ、興味中心的に讀過を妨げないだけの筆致を有する。（定價金壹圓）

△聖者　小野村林藏　吹田住二　共譯　警醒社發行

本書は以太利の Antonio Fogazzaro の "Magister Adest-et Vocat-te" を譯したものである。現代の唯物的、主智的人生觀に反抗して起つたベルグソン一派の人生觀と似通へる作者のそれを現代に識らさん爲めに本書を譯出されたさうである。譯者の努力を多とすべきであらう。（定價壹圓五十錢）

△チエエホフ集　前田晁著　博文館發行

チエエホフの短篇中でも特に比較的短いもの十篇を選んで譯されたものである。譯文はさらさらとして讀み可い。（定價金五十錢）

△滯英二年案山子日記　大谷繞石著　大日本圖書株式會社發行

著者が滯英二年間の見聞を其日々々の日記體に書綴つて、其時折りに本誌其他の雜誌に投じたのを此度訂正して一册に纏めたものである。比較的學門に亘るものや、日本の旅行者が屢々筆にした類のものは省いて、興味のあるもの面白いもののみを蒐めたのであるから、普通の見聞記よりは異つた味が多い。江湖の一讀を推奬する。（定價金貳圓）

△西洋社會運動史　石川三四郎著　東雲堂發行

悲惨なる運命を身に擔うて鐵窓の下に產み出されたる著者の發見である。現代社會の病弊に心を惱まし其改善に心を傾くるものは敬意を表して此書を讀むことを薦める。（定價壹圓三十錢）

△日記の端より　尾上柴舟著　辰文館發行

感情の流露を極めて自然に言ひ表したるは氏の歌である。「旅より」と「そのをりをり」との二篇に分れてゐるが、何れもあつさりとして溪間のせゝらぎを聞くやうな、讀んで胸のすく情調を覺ゆる。（定價金六十錢）

△若き教育者の自覺と告白　稻毛詛風著　內外教育評論社發行

運命に抗し境遇と鬪ひ、常に不斷の努力を以て自己の道を切り拓いて來た著者が告白であると言ふ。教育界の實際に心を傾くる者は此若き一教育者の苦悶と奮鬪の聲に聽け。（定價金五十錢）

△一萬金　澁川玄耳著　至誠堂發行

本書は著者が東京朝日新聞社會部長の職を辭したる事情より、一家の離散に至る十數日間の顛末を誌したる日記である。何の爲めに此書を公にしたか、著者は自ら稱して愚であると言つてゐる。そこに社會人生の痛烈な一面を窺ふことが出來る。（定價金八十五錢）

△聖代作文新辭林　女川宏剛著　至誠堂發行

名家の文章を蒐めて之を類別し、座右、文を作る者の好資料たらんとす。濫りに盜竊するなく自家藥籠中のものとして巧みに之を利用せば蓋し得

る所少からざるべし。(定價金貳圓)

△カーライル英雄研究　栗原古城譯　東亞堂發行

譯者も言つてゐるやうに、原著者の妙筆を譯出するに努めるよりも、其内容を理解せしむるやうに平易に解し易く譯された英雄崇拜論である。(定價壹圓七拾錢)

△大下藤次郎遺作集　大下春子著　春鳥會發行

大下藤次郎氏は水彩畫を以て聞え、其作亦觀るべきもの多い。氏の死後同志相圖りて其遺墨を寫眞コロタイプ及原色版として、總て五十葉、一卷に集めたのが本書である。無聲の詩集として座右に備ふべく、寫眞の巧緻、裝幀の瀟洒、製本の親切等間然する所なく、故人を偲ぶ好個の紀念品である。卷頭の鷗外博士の年譜亦氏の一生を窺ふに足る。(定價壹圓五拾錢)

△ナポレオンと少壯時代　長瀬鳳輔著　隆文館發行

近時世を擧げて淫靡懦弱の風習滔々たるを憂ひ、雄傑研究の目的を以て成れる奈翁會出版の第一卷である。漸次卷を逐うて全傳を出版せらるべしと。世の一般靑年子弟の讀むべきものである。(定價壹圓五十錢)

△社會主義倫理學　堺利彦譯　丙午出版社發行

原著は Karl Kautsky の "Ethik und Materialistische Geschitsauffassung." である。唯物的世界觀の上に建てられたる倫理である。社會主義の因つて起る理論である。今日の場合此種の平靜なる研究を必要とする。(定價壹圓)

△容貌と人格　篠原無然郎著　東亞堂發行

容貌と人格との間には、内容と形式、肉體と精神のやうに何等かの關係はあるであらう。それを科學的に研究したのが本書である。今後も大に研究せらるべく又興味ある問題であらう。(定價金九十五錢)

△アリス物語　永代靜雄著　紅葉堂發行

正しく美しい空想の子アリスの物語である。無邪氣な快活な熱心なアリスの面目が解り易い筆で綺麗に書かれてゐる。(定價六十錢)

△人物小春秋　鵜崎鷺城著　活人社發行

常に一管の筆を以て滔々たる天下の阿曲と戰ひ、社會の惡勢力を縊めんとする、是れ吾鷺城學人也。本書收むる所「元老亡國論」「卑むべき谷本博士」等二十餘題。筆鋒鋭利縱横論斷して完膚なからしむる所、例により快著たるを失はじ。(定價金六十錢)

△新帝勅語と修養　棟居喜九馬著　富山房發行

大正の新政に方つて社會の人心を覺醒せしめんために新帝勅語を註釋して、普く聖意のある所を知らしめ、併せて著者が實務に因りて得たる修養を説く。(定價金九十五錢)

△明治靑年思想變遷史　伊藤銀月著　文榮堂發行

靑年を中心として其思想の變遷を究めたる明治の文明史である。此種の研究は興味あり且有益なものたるは疑ひない。

△西郷南洲　伊藤痴遊著　東亞堂發行

偉人南洲を傳記したるもので、恐らくこれくらゐの自信と抱負と努力

とを以てしたるものはあるまい。又是れくらゐ完全に南洲を描き維新を敍したるものもあるまい。其人と其筆とを得たるものと言つて可い。(三册合本定價金六圓五十錢)

△由比正雪　琴瑠璃閣著　東亞堂發行

いつもながら氏の筆は讀者をして倦まざらしめる。家庭の好讀物てある。(定價壹圓拾錢)

△唯一氣（續編）　堀内新泉著　成功雜誌社發行

立志成功の志ある者の爲めにものしたる小說也。健全なる讀物。筆亦遒者也。(定價金八十五錢)

△努力　堀内新泉著　東亞堂發行

前者と同じく立志小說也。努力と奮鬪とによりて成功したる青年の歷史也。(定價壹圓十錢)

△性慾論講話　澤田順次郎著　文明堂發行

近時喧しき性慾問題を研究したるもの也。性慾の意義及哲學より起して其本性本質を明かにし、性慾の必要動機及衞生に關して具體的に說明したるもの、一般人の一讀すべき書ならん。(定價壹圓四十錢)

△長州之天下　平野秋來著　月東堂發行

山縣公を初め、桂公寺内伯井上侯皆長州の產、此書根本的に長州を研究せんとせるものなれば、長閥薩閥、藩閥打破の聲喧き今日一讀に値すべし。(定價金一圓三十錢)

△解說西域記　堀謙徳著　文榮閣發行

西域記の解說にして、常人の容易に手を著け得ざる此大部の書を譯了せられたる著者の努力を感謝せざるべからず。其道に志す者は勿論、一般人と雖此大著に依つて得る所決して尠少ならざるべし。千百餘頁の大部、附錄として漢字歐字の索引あり。親切を極む。(定價金五圓)

△國民高等學校と農民文明　那須皓譯　同志社發行

本書は近時北歐文明の一大勢力となれる丁抹の國民學校に就て、其起原沿革組織及び其根本精神を說き、其獨特の敎育が農民文明に及したる效果を說けるホルマン博士の著也。矢作博士嘗て丁抹に遊び、其國民生活に及ぼす所の偉大なるに感じ、我國民敎育の現狀を憂ひ住友家總理事鈴木馬左也氏の共力を得、譯者に囑して出版の運びに至りしもの價格至廉也。(定價並製八十五錢、上製一圓十錢)

△臺灣と南方支那　田中善立著　新修養社發行

臺灣が我版籍に歸してより殆ど二十年而も尙未だ國民の知悉に至らずと雖も同地は我國發展の門戶也。之を知るの要また深く言ふを須ひざる也。此書過去の臺灣より說起して現在將來に論及し、南方支那の國情を明にせる甚だ剴切を極む。(定價一圓七十錢)

△皇室要典　和田信二郎編　光風館發行

皇室に關して一般國民の知らざるべからざる所の總ての諸件を收めて遺漏無し。九重雲深くして皇室に關するの知識が普及せられざる今日、敎育家は勿論一般臣民の好參考たるべし。(定價金一圓卅錢)

△幼學綱要

宮内省藏版
文教會發行

幼學綱要は明治の二大勅選書の一也。先帝「教學の要は本末を明かにするにあり」と宣はせ給ひ、時の侍講男爵元田永孚氏に親諭して編纂、國民教育の基を定めさせ給ひたるものにして、孝行忠節和順友愛等二十項に亘つて先帝の大御心を窺ふを得る好紀念書也。(定價金壹圓五十錢)

△大阪陣（後篇）

熊田葦城著
至誠堂發行

本篇は大阪夏の陣を敍せるものにして、大阪の再擧に筆を起して、天下は徳川の統一に歸するまで同情の涙を以て編を終る。所々多くの本文に關係ある各地の寫眞を點綴したる、唯に興趣を添ふるのみならず、史實を重んずる著者の用意を窺ふに足るべし。(定價二圓)

△京都

井田弦聲著
木兎社發行

京都を書いた作品が近頃大分出だして來た。此書も二年間滯在の土産であるそうな。東京人の京都が寫したもので、他の人で出來る京都の報告では無いと言つてある。徒、祇園の一夜、薔薇色の三篇。(定價六十五錢)

△日本文法新論

金澤庄三郎著
早稻田大學出版部發行

朝鮮語及沖繩方言等と比較研究して成つた新しい試みの結果である。文章を學ぶものゝ一讀を勵める。(定價金九十錢)

△アウレリアス皇帝瞑想錄

高橋五郎譯
玄黄社發行

マーカス・アウレリアスは羅馬の皇帝であつて哲學者である。其著「メヂテーション」の飜譯が本書である。其哲學人生觀は何等かの意味で我讀書界を益するものあるであらう。(定價金一圓拾錢)

△熱血鐵火英雄傳

兒玉花外著
實業之日本發行

極東の英雄四十七人を物色して其面目を活躍せしめんとせるもの也。著者亦熱血の士。(定價金五十錢)

△傳教大師傳

山方香峯著
壬子出版社發行

本書は傳教大師を中心として、奈良朝より平安朝の初期に亘る思想界を論ぜんとしるものなり。我文明を導いたる佛教界精神界の當時を窺ふを得る良書也。(價金七十錢)

△現代文藝叢書第十八編 近代詞華集

小林愛雄著
春陽堂發行

近代の英國を主として獨佛の詩を集めたものである。主なるものはイエッ、アーサン・シモンズ、オーカー・ワイルド、エドモンド・ゴッス等五十名に及んでゐる。(定價金二十五錢)

△川柳選（名著文庫卷の五十）

芳賀矢一校訂
富山房發行

無邪氣な諷刺、江戸ッ子的ユーモアの結晶たる川柳を蒐めた、手輕で重寶なものである。事柄の六ケ敷しいのや猥雜なものは省いて面白いものをのみ集めてある。(定價上製三十錢、並製二十三錢)

文部省文藝委員會撰定世界四大古典の第一

文學博士 森鷗外先生譯

ファウスト

四六倍判頗美本上下二册特價二圓八拾錢（正價三圓五十錢）送料内地十六錢

時は大正に入りて西歐文藝飜譯の黄金時代は來らんとす。此黄金時代を飾る冠冕たるものは戯曲「ファウスト」全二部の完譯也。原著は世界第一流の大作、譯者は現代文壇の權威、譯文は平明流麗の時代口語を用ひて原作の理義と情趣とを併せ寫してまた遺憾なく、讀者の理解をして一字一句の末にまで徹底せしめざれば止まざらんとす。從來空しく學者文人の書齋に弄ばれたる大牢の美味は今や國民が日常の精神生活の米の飯たらんとす。書を讀まば常に世界第一流の書を讀むべし。乞ふ暫らく屑々たる小文學を離れて、この古典文藝の後勁にして近代文藝の先聲たる大詩人の傑作に、盡きざる心靈の泉を味へ、必ずや紛々たる雜念の頓に滅盡して、活人生に活動すべき新たなる性命の力の讓々として胸中に湧き來たるを覺ゆべきなり。

本戯曲は三月二十七日より五日間帝國劇場に演ぜられて文藝界を賑すべし。

（中付二の一）

發行所 東京神田（振替 電本 五四一 〇一〇 三三 一〇六）富山房

模範的家庭辭典の特賣 一切期日愈々限定

改訂増補 日本家庭百科事彙

索引附 大本全二册

背皮角皮 極美本 千七百餘頁六號活字振假名 項目 三萬二千 挿畫 精巧木版千三百石版廿度刷及三色版寫生圖七枚石版八度刷内外詳密地圖十四枚外光澤寫眞版四枚

辭書中の辭書として、各家庭に缺くべからざる要具の一として好評籍甚。上は各宮殿下より、下は學校官衙、銀行會社及び實業家、官吏、學者、教育家、軍人等の家庭、殆ど本書を備附せざる所無きに至り、増刷に増刷を重ねて、需要益々旺盛を極む。玆に最終三千部を追刷し、愈々來三月三十一日を以て特賣を撤回す。購入漏れの諸君子は期に先ちて申込まるべし。

見本進呈 往復葉書申込次第

特價 一時拂 金八圓（正價金十一圓） 送料内地卅六錢 臺樺六十錢 朝支七十錢

月賦拂 金九圓（申込規定詳細見本）

發行所 東京神田 振替五一〇四一番 電本一三二〇六 富山房

（中付二の三）

ぼんち

岩野泡鳴

一

「ほんまに、頼りない友人や、なア、人の苦しいのんもほッたらかしといて、女子にばかり相手になつて」と、定さんは私かに溜らなくなつた。

づん〳〵痛むあたまを、組んで後ろへまわした兩手でしッかり押さへて、大廣間の床の間を枕にしてゐるのは、ほんの、醉つた振りをよそほつてゐるに過ぎないのて。

實は、あたまの心まで痛くッて溜らないのてある。

藝者も藝者だ。氣の利かない奴ばかりて、洒落を云つたり、三味をじやん〳〵鳴らしたり、四人も來てゐた癖に、誰れ一人として世話をして呉れるも

のがない。
「ええッ、こッちやもぼッたらかして歸つたろかい」とも、心が激して來た。
渠は實際何が爲めにこんなところへ來たのかを考へて見た。夕飯を喰べてから、近頃おぼえ出した玉突をやりに行くと、百點を突く長さんと八十點の繁さんとが來てゐた。
長さんはさすが上手で、繁さんの半分も行かないうちに勝つてしまつた。
定さんは上手な人に使ふて貰ふ方がいいと思つて棒を持ちかけると、横合から繁さんが出て來て、
『わたいとやりまひよ――よんべはわたいが負けて敷島をおごつたさかい、今晩はなか〳〵負けまへん。』
「わたいも負けまへん。」
「ほたら、ビールだッせ。」
「よろしゅおます。」
定さんは持つた棒を置いて、翡翠の輪が付いた胸の紐をはづし、鐵色無地の絽羽織をぬぎ棄てた。そして白絽に鼠色の形を染めた繻絆の兩袖を折り返し、絹立萬筋の越後縮を紋紗の角帶で結んだ腰を後ろの方へ突き出し、生眞面目な顏を緣のそばへ持つて行つた。目をぱちくり、ぱちくりさせながら、ねらひを定めて、棒を二三度しごく度毎に、顏が自分の手とさき玉とを往復するその樣子が如何にもをかしいと云つて、皆が笑つた。て、長さんが默笑をつづけながら倚子を離れて來て、

「そないなこッちや明きまへんっ」そして定さんの尻を押して右へ寄らせ、そのからだの据ゑかたとねらひの付け方とを敎へた。

兎に角、弱い方から突き初めるのが規則だと云ふので、定さんから突き初めたが、最初の一突きも、そのやり直しも當らなかつた。三回目にうんと突いた玉は當つたが、ただの一發だッた。

「ちよッ！」定さんはわれ知らず舌打ちをして、長さんを見た。

「占め、占め」と叫んて、繁さんはねらひ寄つた。

「しッかりせんと負けまッせ。」長さんは親切らしく應援をした。

「負けたかて、よろしゅおまッさ。」から云つて、定さんは最初からの不成蹟を身づから辯護してゐたが、それても最初の勝負には勝つた。それから、然し、二回つづけて失敗した。そしてどちらからも、負けた度毎に朝日ビールを一本づつ明けた。

二回つづけて勝つたものが滿足さうにコップを傾けてゐるのを見ると、殘念で〱溜らないので、定さんから進んて今一回を要求して、また見事に負けた。渠はつひに往生して、一息しながら、四本目のビールが半分になるのを見てゐた頃、松さんが這入つて來た。

「また、いやな奴が來よつた」と思つた。定さんから見ると、松さんは身なりが餘りよくない上に、亂暴肌の男なのが氣になつた。

「さア、ぼんちのおごりだッせ」と、繁さんは連勝を誇りがにコップを新來者にさし出した。

「ふン」と、松さんは不滿足さうに手を出してコップを受けた。渠は既に一杯機嫌の顏をしてゐた。
「ビールやあきまへん、なア。」
「けど、なア、わたいが續けて三番勝ちましたのんや。」
「ほたら、ぼんち」と、松さんはあけたコップを下に置き、『わたいと一番七十で行きまひよか？』
「そりや無理だす。」長さんは定さんの肩を持つて吳れるやうに、『松さんも八十で行きなはれ。』
「ええッ、負けたろ！　その代り、なア」と、棒尻を床にとんと突いて、――その響を今思ひ出すと、定さんのあたまへは一しほぴんと來るのである、「寶塚だッせ、寶塚。」
「そりや面白い。」繁さんも側から贊成した。
「ぼんち、しッかりやんなはれや。」長さんが云ひ添へたのに力を得て、定さんは一生懸命になつた。
「そないに目の色まで變へんかてええやないか」と云つて、松さんは憎いほど落ち付いてゐた。二點、五點、七點、十點と身づからの聲で數へながら、渠は、定さんが三回もから棒を突き、二回二點と三點を取つたうちに、あがつてしまつた。
「さア、寶塚や、寶塚や！」松さんは小躍りして喜んだ。渠は長さんと繁さんとに頻りに何か耳打ちをしてゐたが、やがてうち揃つてそこを出た。
「わたいも行けまへんか」と、ボーイが云つたが、定さんがそんなに大勢は迷惑だと云ふ顏をしたので、他のもの等が遠慮して引ッ張らなかつた。

「あの時、いッそのこと、皆をことわつてしもたらよかつた」と定さんは考へて見ても、跡のまつりて仕方がない。

江戸橋から市中の電車に乘つたが、松さんは景氣よく大きな聲を出して、相生(あひおひ)にしようか、菱富(ひしとみ)にしようかと皆に相談してゐた。

いづれ酒を飲む場所のことだらうから、他の人々の手前、こッそり相談すればいいのにと、定さんには何だか晴れがましく思はれた。が、松さんは人前もかまはず嬉しさうににこ付きながら、ずか／＼と渠の腰かけてゐるところへやつて來て、渠の意向を聽いたのである。渠は自分のおごりだから結局自分のさし圖(づ)を他のもの等が受けるのだと思つて、少々得意になつたと同時に、どこがいいのやら一向勝手が分らないのを恥辱であると思つたかのやうにおど／＼した。ビールも飲まなかつたのに顏に少しほてりをおぼえながら、暗にどこがいいのだと尋ねるやうな目附きを松さんに向けた。

ても、松さんはそは／＼してゐて、定さんの心持ちを判じて呉れなかつた。脊は低いが、酒樽に辨慶縞の浴衣(ゆかた)を着せ、その腰に白縮緬の兵兒帶をしたやうなからだを釣(つ)り革(かは)にぶらさがらせ、車臺のゆれる通りにゆれながら、

「おい、どッちやにしョう?」

「……」定さんはこの時ほど恥かしいことはなかつた。溜りかねて坐席から立ちあがり、人々に聽えないやうに松さんの耳もとへ口を持つて行つて、「どッちやがええ?」

『そりや菱富の方が——』と、松さんは自分のよく行く方の名を云つた。
『ほたら、その方にしまひよ。』
『わたいの通りだッせ』と、また大きな聲をして松さんは他の友人を返り見た。
定さんはどちらに決つたのかを不圖おぼえ落したが、その聲で秘密をあばかれたやうにひやりとして腰を下ろした。すると、松さんはつづけて渠を見おろし、
『藝子は四人と決つたぜ。』
『藝子までも』と反問しようとしたが、口には出なかつた。そんなものまで懸けたのぢやアないと云ひたかつたのだが、兼て一度は呼んで見たいと思つてゐたものが呼べると考へると、嬉しさと恥かしさとに先づからだがすくんでしまつた。それに、行く人數だけ呼ぶのだとすれば、自分にも一名當るのだから、自分はその當つた女とどうすればいいのだらうと云ふことが何だか恐ろしくも待ち受けられた。

二

梅田から郊外の箕有電車に乗り換へる前に、松さんはそのそばの郵便局から今行くからそのつもりでゐて呉れいと云ふ電話をかけた。
『さすが、松さんや、なア。』定さんは、かう心で感心しながら、遠距離二十五錢の電話料を出してやつた。

その頃には、もう、長さんや繁さんの顔にも醉ひが十分に出てゐた。それでも、最も多く目に立つほどはしやいてゐたのは松さんばかりで、どこかで飮んだ下地があつたので腰がふら〳〵してゐるにも拘らず、電車の中を別々に離れた長さんのところや繁さんの前へ渡つて行つて、何か面白さうに度々耳打ちをしてゐた。そのあげくが定さんの隣りへ腰をおろして、その肩に痛いほど——實際、痛かつたが——抱き付いた。そして、わざとだらうと思へたほど醉つた振りをして、

『おい、こら、ぼんち』と、定さんをゆす振り、渠の鼻のさきへ熟柿のやうになつた圓顏を、ぬッと突き出した。『あんたにも、なア、ええ女子を世話してあげまッせ。』

定さんは耻かしかつたので、それを隱す爲め、目をそらして、誰れとも知れない隣りの人や正面の人を見た。そして、さう云ふ人々が若しうちの人や出入りの男であつたら、直ぐおやぢや姉さんに知れてしまうだらうと心配した。

『おい、ぼんち、心配するな、大丈夫や。』松さんはただ無性にはしやいでゐて、長さんや繁さんが襦袢の肌ぬぎになつたのを見て、『おれもやつたろ』と云つて、同じやうに肌をぬいだが、襦袢を着てゐなかつたので、直肌であつた。

『肌をお入れ下さい、規則ですから』と、車掌にやッつけられて松さんがすご〳〵肌を入れたのは、定さんには氣味がよかつた。

松さんはなほしつこく定さんの肩に取りすがつて見たり、低い齒の向ふ附き利久をはいた足さきで空

を蹴ッて見たりしてゐたが、そこにも落ち付けないで、定さんの向ふ側の席へもどつた。その時、渠はどうした拍子か、——見てゐた定さんが思ひ出してもおかしくなるのだが、——自分の脱いで置いた麥藁帽子と隣席の人のとを取り違へ、隣席の人の被つてゐた帽子をその人のあたまから取つて自分のあたまへ上せた。

「どうした？」東京口調で怒つた隣りの人は、それを突差の間に奪ひ返した。

松さんも自分の失敗に自分でびッくりしたのか、失敬しましたとも何とも云はず、腰をあげて、自分の帽子がその脇にころがつてゐるのを探し取つた。そして黙つて再びそこに腰をかけ、手なる帽子を——
——失敗の時と同じ手早さで——あたまに上せた。

他の友達は二人てはッはと笑ひながら、何かしやべり合つてゐたので、それに氣がつかなかつた。が、多くの乗客は東京辯の怒り聲がした方へすべての注意を向けた。中には、その時の様子を見てゐたので、思はず吹き出したのもある。

松さんは獨り興ざめた顔をして、席をまた定さんのそばに移し、

「暑い、なア」と云つた切り、窓から外をのぞいた。

同じ側の乗客てまたわざとらしく吹き出したものがあるが、定さんは——をかしいとは思ひながらも
——笑ふだけの餘裕がなかつた。

「四人の料理に四人の藝子や。なんぼかかるやろか？　ふところには、そないに仰山お錢は持つてをら

ん。足らんだけは、電話てうちへ云ふて、助さんに持て來てもろたらええ。」こんなことを考へながら、何だか嬉しいやうな、おそろしいやうな、賑やかなやうな、悲しいやうな氣分に壓迫せられて、行くさきばかりが急がれた。て、松さんと一緒に無言て外を眺めてゐると、電車が切つて進む涼しい風がほてつた顔に當つて、からだの汗臭いのをも吹き拂つて呉れる。

新淀川の鐵橋を渡る時など、向ふに焚い松をともして漁てもしてゐる光が水の上にきら〱と映つて、玉突屋などではとても見られない涼しさてあつた。

「もう、鮎が取れるのんや、なア。」

「さうだッしやろ。」

こんなことを小さな聲て語つてるうちに、十三驛も過ぎてしまつた。

大阪の方の空がぼうッと赤くなつてゐるのが見える。あの下にうちの者や好きな女子等、殊に、隣家の靜江さんも住んてゐるのだ、な、と思ひながら、その空が車の向きて隱れて行くのを追ふ爲めに、定さんは窓から首を出した。そのとたん、頑固なおやぢにても太い棒を以つて投られてもしたやうに、渠のあたまをいやと云ふほどがんとやつ付けて行つたものがある。

「あぶない！」松さんの手がいつのまにか定さんのあたまをさすつてゐた。

「何や、何や？」長さんも、繁さんも、松さんの聲に驚いてやつて來た。

「あたまを柱て打ちやはッたのんや。」

「怪我(けが)しやへんか?」

「したか知れへん。」松さんは定さんの無言で押さへてゐる手を無雜作に押し除(と)けて、そのあたりを方々圓く撫でて見た。

「てんごうすな」と、定さんは云つてやりたいほどであつた。

「異狀はありませんか?」車掌もやつて來て、見舞ひを云つた。

「大(たい)したこともないやうだす。」松さんはこの場合、かう云つて置かなければ目的地へ行けないと思つたのだらうと、定さんは跡になつて考へられた。

「あの時直ぐ引ッ返して大阪病院にでも行(い)たらよかつたのに——今では、もう、手後れか知れへん。」かう考へると、今にも自分の死が近づいてゐるのではないかと思はれる。押さへてゐるあたまが段々張れぼッたくなつて來るやうで、その張れぼッたいのは、頭蓋骨(づがいこつ)の碎けた間から、腦味噌が溢れ出たのではなからうかと。

三

兩手で押(お)さへてゐても、づん／＼あたまが痛む。が、世話役の松さんは少しも思ひやつて吳れない。おのればかりがえらさうな風(ふう)をして、長さんや繁さんを番頭ででもあるかのやうに取り扱ひ、來てゐる藝者を皆までわが物にして、

『おい、ぼんち、不景氣に何ぢやい、しッかりしなはれ』もあきれてしまう。『寶塚へ行たら、醫者に見てもろたらええ』と云つたてはないか？ それを、終點て下りると全く忘れてしまつて、直ぐ酒だ、藝子だとさわぎ出した。

玉突には負けたが、一體、これは誰れのおごりだ？ 皆おれの財布を當て込んでゐるのぢやアないかと定さんは憤慨すると同時に、あの時、電車の窓から首を出さなかつたらよかつたのにと云ふことを祈禱のやうに繰り返してゐるのである。

電柱と云ふものは、電車軌道の兩側に立つてゐるものとばかり思つてゐた。ところが、さうてない場所もある。

『この邊と螢ゲ池とは、柱が眞中に立つとりますから、お顔を出すとあぶないてす』と車掌が説明した。

定さんはそれを知らなかつた。

今更ら後悔しても仕やうがないが、首を出さなければよかつた。いや、電車に乘らなければよかつた。いや、玉突て懸けなければよかつた。と、かう云ふ風に考へを繰り返して見ても、柱に衝突した事實は頑として取り返しが付かない。

定さんはあの時驚きと痛さとをじッと辛抱して、窓を脊にして席にもたれたまま、

『何ともおまへん』と苦笑したが、膝の上に置いて見た兩手がおのづからあたまへ行つた。すると、松さんは

「痛いか」と聽いた。

「そないに痛いことありやへん」と云ふつもりで手を膝におろし、首を左右に振つたが、いつのまにか叉手を上へやつてゐる。

「痛いか」と、また同じことを松さんが聽いた。

「そないてありやへん」と答へた切り、うるさいので、手をおろしてゐようと思つても、直ぐまたそれがあたまに行くのである。

じッとしてゐると、その痛みに堪へ切れなかつた。直ぐそばに立つてゐる眞鍮柱にあたまをもたせかけて、ひイやりする氣持ちに痛みを忘れようとして見ても、自分の呼吸が迫つて來る。からだをねぢつて顏を窓の枠に押し當てて見ても、いのちが縮こまつて行くやうだ。が、今から歸りたいと云ふやうな弱音も男として云ひ出せない氣がした。

「馬鹿だ、なア」と云ふ東京人の聲が車臺の隅から聽えた。また、見える限りの乘客等は、すべて目を見張つて、あざけりの顏をこちらに向けてゐる。

定さんは內と外とから押し苦しめられて、水の中から息をしに出た時のやうに、耻ぢも構はず、すッくりと立ちあがつて見たが、まだしも自分の家の隣りの靜江さんがここにゐないのを大丈夫だと思つた。と云ふのは、あの子にこんな失敗を見られたら、ここらの人と同じやうに冷遇し出して、樂しみにしてゐる云はず戀も全く物になるまいと思ふからである。

が、自分の意中をまだ云はず語らずのうちに、こんなことで死んでしまうのは詰らないとも思つた。
そのとたん、電車が不意に大ゆれがして、足をすくひかけられた。
同時に、くら〳〵と目まひがして、あたりかまはずつッ伏してしまつた。
尋常に進行してゐる電車の響に脊中が痛いのを感じて、再び氣が付いた時は、定さんは松さんの太つた膝の上につッ伏してゐるのであつた。その上に松さんは兩肱で頰づゑを突いてゐたらしい。それが痛くて重苦しい感じを與へた。
『苦しい、置いて呉れ』と云ふやうに脊中をゆすると、松さんはその固く重みのある兩肱を離れさせて、兩の平手を載せた。が、なほ人臭いあッたか味が定さんの鼻のあたりに付いてゐた。
渠は母の懷ろを出て以來、人のにほひをかう近く嗅いだことはなかつた。
『これが靜江はんの膝であつたら、なア』と思ひ及ぶと、この刺戟があるだけでも松さんを懷かしい氣持ちがした。男は男で、女でないにせよ、かうして、いつまでも抱かれてゐたいものだと。
て、かうした姿勢のまゝ、定さんは兩手をあまへるやうに柔かにあたまへ持つて行つたら、松さんもその手の行つたところを撫でて呉れながら、
『ソリヤキコエマセヌーデンペエサン』と語つてゐたが、やがて定さんの耳もとへ口を寄せて、
『しッかりしなはれ、な、行たら、女子を抱かせてやるさかい、なア。』
低い聲ではあつたが、定さんはそれが人に聽えたら困ると思つた。そして、その聲の下から俄かにか

らだを起して見た。すると、松さんの隣りにゐる人が眞面目腐つた顔をしてこちらを見つめてゐた。きまりが惡かつたので、手がまたあたまへ行つた。

松さんは然しそんなことには頓着なく、その座をつるりと抜けて、先刻から筋違のところへ移つて腰かけてゐる長さんと繁さんとの間に行つて、どッかり腰をおろし、窓の方に靠れたまま、先づ長さんを首に手をかけて引ッ張り寄せ、何か耳打ちをした。すると、長さんは松さんの手を振り切つて、

「知りまへん」と逃げ、目じりを下げて松さんを横目に見た。次ぎに又松さんは繁さんにも同じ耳打ちをして、だらしない笑ひを呈せしめた。

「ぼんち大明神やさかい、なア」と叫んで、松さんはべッたりと脊を窓の方にもたれさせ、ただにこにことそら嘯いて、また利久下駄の兩足で空をかたみ代りに蹴ッてゐた。

いづれ、呼ぶ女の話だらうと定さんは推察して見ないふりをしてゐたが、渠も渠等のと同じ樂しみを心に書がいてゐればこそ、あたまの痛くて苦しいのをも辛抱して行くのであつた。

四

「けど、お父さんやお母はんに知れたら、どないしょう?」

この疑問は、定さんには、おそろしいよりも耻かしいのであつた。

「長はんとこて泊めてゐろた云ふとこか」とも考へて見た。が、「行かん、行かん。歸つてから醫者を呼

んてゐろたら、直ぐ白狀せんならん。」

最終電車に乘り後れて寶塚に泊つたと云ひ爲して置かうかとも思案して見たが、「そや〳〵、電話をかけて、うちからお錢を取り寄せんならんのや！」跡て調べられたら、「藝子遊び」をしたと云ふ化けの皮が剝げてしまう。

「けど、あの時は、まだこゝまでせッぱ詰つてをらなんだ」と思ふと、定さんの心には、二度目に氣が遠くなりかけた時のことが浮んだ。

じッと堪へて、自分の目をどこか一ヶ所に据ゑてゐようと思つても、その目から先きに動いて行つて、からだを靜かに落ち付けて置くことが出來なくなつた。右を向いて見た。左りを向いて見た。座わつて見た。また腰かけて見た。孰れにしても、結局は、手があたまへ行つて仕かたがなかつた。

「人が冷かしたかて、かまへん」と決心して、自分の手の行くまゝにして見たが、それも亦その儘ては續いてゐなかつた。

まだしも電車が進行してゐて呉れれば、多少でも氣がまぎれてゐるが、あの石橋の分岐點て、さきの箕面行き電車に故障が出來、自分等の車臺が二十分ばかり進行を停止した時は、自分の呼吸もそこに全くとまつてしまうのてはないかとまで思へた。

やッと動き出したが、今度は、また、その動き出した電車その物までが自分の苦しい呼吸をしてゐるやうに思はれて、定さんは今夜おぼえようとする藝者買ひの天罰を、前以つて、こゝに受けてゐるかの

如く感じて來た。

「石橋で下りたら、よかつた。」から思へば思ふほど、息が詰るやうだ。

そのうち、池田停留所へとまつた電車は發車した。と同時に、もう、辛抱がし切れなく、一時も早く下車したくなつた。て、立ちあがつて、よろ〱しながら、松さんの前へ出て行つて、皆を怒らせないやうに、先づ、渠に相談して見た。

「わたいだけ下りまひよか？」

「どこで？」松さんは、じツと、おどかすやうな怖ろしい目付きをして見せた。「こないな寂しいとこて下りたかて、どないしなはる？」

定さんはこの反問にいぢけた。默つて、睡い時のやうに重くなつた上目蓋をあげて、ちよツと松さんを見返したまゝ、またしぶ〱ともとの席へもどつた。そして、てれ隱しに窓の外を見ると、池田の小蘭山と云はれる五月山の麓に、ちらほら涼しさうな光が見え、電車はがう〱響きを立てゝ、猪名川の鐵橋を渡つてゐるのであつた。

「こゝまで來たら、なア」と、繁さんも松さんに贊成するやうに、「梅田へもどるよりや、先きへ行た方が近おまッせ。」

「そないし給へ、そないし給へ。」長さんも亦ぞんざいに口を添へて、ぐた〱したからだを窓へもたせかけた。

『人の苦しいのんも知らんと！』かう思ふと、定さんは自分のあたまの痛いのは、もう、全く自分一個の問題だと分つて來た。一番親切だと思へた長さんまでがこの場合の相手にもなつて呉れなかつた。まだ昔日は淺いが、玉突て知り合になつた友人は友人だのに、揃ひも揃つて、たツた三十點の初歩者をばかり喰ひ物にして、ただおのれ等の樂しみをしたらいゝのかと云ふ、僻みも出た。

『何をしなはる』と云ふ角立つた聲が聽えたので、定さんは注意をその方に向けた。

『濟んまへん。』かう云つて、松さんは自分の下駄の片あしが渠の正面にゐる客の足もとにころがつたのを拾ひに行つた。

『阿呆かいな』と心で叫んで、定さんは松さんを初め、長さんや粂さんの至つて冷淡なのを聯想し、『わたいは死にかけてんねやで』と云つてやりたかつた。

我慢すればするほど、刻一刻に死が迫つて來るやうな氣がして來た。て、花屋敷を通過して、段々目的地へ近づいたのを知りながら、待ちかまへた――やがてこの電車から救はれるが早いか、他のもの等はうッちやらかして置いて、自分は自分で、どんな醫者でもいゝ、醫者と云ふ名の付くうちへころがり込まうと。

五

淸荒神の梅林や竹藪の暗い蔭を出て、涼しく開らけた夜の空氣に、新温泉のイルミネションが山と山

との間を照らして、ぱッと皆の目を射初めた。

「さア、寶塚の終點や！」かう思つたら、然し、張り詰めてゐた精神が忽ちゆるんだので、定さんは意識がぼうッとなつた。空氣の外、さえぎる物もないのに、温泉裝飾の電光が見えなくなつた。そして電車の中も、自分のからだも、殆ど全く眞ッ暗に暗い。

「腦味噌が早やおれを死ぬ方へ引ッ込むのんやないか？」ふと、かう考へて身ぶるひをした時、どんと電車のとまつた反動が來て、定さんはあたまのづん／＼するわれに返つた。

「どなたも終點でございます。お忘れ物のないやうに。」

「來たぞ、來たぞ！」かう他の三名は爭つて、立ちあがつた。そして定さんをせき立てた。が、渠は立つて渠等の手にがッくりと取りすがるより外に力が出なかつた。

「お醫者はん――呼んで――欲しい！」

「醫者がおまッしやろか？」かう賴りなげに云つて皆を見まわしたのは繁さんだ。

「おまッしやろ、こゝても仰山人の來るとてだッさかいな」と云つて、長さんは車臺の出口へ集つた人のどれかに聽いて見ようとした。

「おまッさ」と、車掌は氣の毒さうに言葉を引き取つて、醫者の家のありかを說明した。

「おましたかて、――先きへ行てから呼んだかてえゝやないか？」松さんは叱り付けるやうに促した。

他の乘客等が憎々しさうに松さんの顔を見たり、冷笑するやうに定さんの樣子を熟視したりして出て

行く跡から、定さんは重苦しいからだを松さんと長さんとの肩にもたせかけた。そして改札口を出てから、餅菓子屋の角を曲り、氷屋と食道樂との向ひ合つた電燈が明るい道を殆ど夢中て歩いて、相生橋に突き當ると、

「あ、何てもこゝや」と安心しかけた。が、なほ左の方へ引ッ張られて、その隣りの門へ這入つた。

「お出てやす」と云ふ男や女の揃つて出したのが見える聲が、定さんにはどこかの遠い一齊射撃の音のやうに聽えた。そして脊の低い樽男が眞ッさきにわざとらしく大股に足をあげて、式臺をあがつて行くのが、定さんの目に朦朧と映つた。その時、渠は長さんと繁さんとに助けられてあがつて行つた。

にこ〳〵して出て來た女中に松さんは先づ聲をかけた。

「おい、お菊、また來たぜ。」

「ようお出てやす？」お菊と呼ばれたのが笑つて、わざと大きな聲を出した。「顏見たら、來たのんは分つてまッさ――なア、旦那」と、かの女は長さんにとも繁さんにとも付かず念を押した。

「何をぬかす」と云つて、松さんは女の首に取りすがつた。

「いやア」と大きく叫んで、女は渠の手をふりもぎつて身をかはした。そして渠がまたさし延べた手をぺたりとうち拂つて、にらみ付けながら、「いたづッ兒！　やんちゃはん！」

そのなまめかしい聲と奇麗に飾つた姿とに、定さんは姉のことを思ひ出した。そして自分の、あの姉ても、男に冗談を云はれると、こんな眞似をするのかと思ふと、自分の隱してゐる慾望が遠慮するに及

ばないと云ふやうに自分をそゝり出して、目の光までが俄かに明るくなつたやうな氣分だ。

「おい、ぼんち、大丈夫か？」松さんがふり向いたので、

「大丈夫だす」と笑つて見せた。

「ちッとァ勢ひようなつたやうや、なァ——おい、繁はん大いに飲まう。」

「飲まいてかい、な？」

「あんたもしッかりしなはれ。」長さんの肩をぐいと引ッ張つて、「玉突に勝つたんやないか？　今となつては、ぼんちがいや云ふても、わたい等が承知しまへん。なァ、繁はん。」

「もッとも、もッとも！」

「どうや、ぼんち、そやないか？」

「…………」定さんはただ苦笑ひをしてゐる。

「大丈夫だす云ふたやないか？　ぼんち」と、跡戻りして來て、相手の肩をぽんと叩いた。「しッかりしなはれ！　わたいは醉うてるやうでも、醉うてやへん。これからまだ〱飲みまッせ。」

「…………」

「返事しなはれ——えゝか？」

「ようおます。わたいも飲みます。」

「面んろい、面んろい！」松さんはまた皆のさきへ立つて、わざと大股に歩いた。

長さんも繁さんも、元氣づくと同時に、定さんから手を放してしまつたので、定さんは獨りで元氣をふり起し、苦しまぎれににや〳〵笑つて見せながら、背の跡から廊下を進んだ。

が、お菊は渠だけが樣子が違つてゐるのを見て、踏みとゞまり、

「あんたはん、どないしなはつた――そないに青い顏して？」

定さんは何か云つて人並みの相手にならうと思つたが、矢ツ張り苦笑の間にたゞにや〳〵してゐる外なかつた。

「こいつは、なア」と、松さんが跡戾りして來て、『電車の柱であたまを打ちやはつたんや。』

「まア、あぶのおました、なア。」

「けど、大したことやおまへんやうや」と長さんもふり返つて、浮付いた調子で口を出した。

「大事おまへんか？」

「……………」定さんは、うんと首をたてに振つたが、その首を振つただけでからだがふら〳〵した。

「先生を呼んで來まひようか？」

「そないなことせんかて」と、松さんはまた先きに立ちながら、『藝子はんが來たら、ようなりまッさ。』

「大事ないのんなら、ようおますけど、なア。」かう心配さうに云ひながら、女は定さんの脊中に手を持つて行つて、渠の羽織の退け衣紋になつて、而も左りの肩からはづれさうになつてゐるのを直して呉れた。

その時、定さんの鼻に、後ろの方から、女のしみ渡るやうなにほひがした。髮附けのにほひもまじつてゐるやうだから、あたまに結つた髮のにほひだらうとは思へたが、それを渠には女その物の慣れ〳〵しさと離れて考へることが出來なくなつた。

六

眞ン中を大きな菱形に張つた天井の電燈の下へ來た時、定さんは直ぐころりと横になつて、兩手であたまを押さへてゐた。

「しツかりしなはれ、ぼんち」と、松さんは定さんの上に馬乘りになつて、兩手で肩のところを押し付けた。

「痛い、痛い！」定さんはあたまから手を放して、その兩手で疊に力を持たせながら、からだをひねつて、上の重みから免れようと藻がいた。

「弱い奴ちや、なア。」松さんは立ちあがつた。そして他の二人の方に行つた。二人は、溫泉道の松並木が風に少しゆられてゐるのが見える手摺りのそばにあぐらをかき、全くの肌ぬぎになつて、卷煙草に火をつけたり、扇子を使つたりしてゐた。て、これも赤直肌ぬぎのあぐらになつて、「どうやろ、なア、ぼんちがあんまり惡いやうなら、ぼんちだけ、どこぞ靜かなとこへ寢さして置こか？」

「それもよろし。おまん、なア。」繁さんはかう答へて、開らいた扇子をばた〳〵使つた。

「けど、なア、まア、藝者に見てもろたらどうや――どもなつてそらなんだらええが――」長さんは定さんの方を見て、早くさうせいと促す樣子をした。

「そや〳〵、見てもろて行かなんだら、ぼんちだけに藝子はん見せたげへんのや。」から云ひながら、松さんはまた定さんのそばへやつて來た。

定さんは聽かない振りをして聽いてゐたのだが、三人が三人ともなぜ自分をかう退け物にしようとするのか分らなかつた。

ここへ梅田から電話をかけた料金も、定さんの財布から出した。往復の電車賃も同じ財布からだ。それだのに、あたまが碎けたかも知れないほどの目に會つた渠をそばに置いて、車中でても渠等ばかり面白さうにさわいでゐて、渠の苦しみを少しも思ひやつて呉れる樣子は見えなかつた。そしてここへ來ると、直ぐ、松さんを初め、おのれ等が身づから出し合つて散財するかの樣に幅を利かせて、「藝子を見せたらん」とは何のことだ？　渠等は渠の金でおごつて貰ふのだが、おごん主が不意の怪我をしたのを幸ひにして、その分までも渠等だけで占領してしまはうとするのかとも、定さんは考へて見た。

「氣の小さい奴等や、なア――わたいかて、部屋住みかて、大けえあきんどの息子や。一旦おごる云ふたら、ちツとのことは惜しみやへん。その代りわたいも一緒に仲間入りさせて貰ふ。」から憤慨して心を決したが、渠の分に當る藝者には、仲間の年順から云つてもきツと一番若いのが來るのだらうと想像すると、ふとほほえまれて目を明けた。そして松さんがそばに坐つてこちらをにこ〳〵見てゐるのに出

會した。

　松さんは、定さんの様子を、痛いのを胡麻化して苦笑してゐるものと見た。

「こら、ぼんち」と、定さんの手を押しのけるやうにしてあたまを無雑作に撫でてやりながら、『どうや、痛いか？』

「……………』定さんは、かう亂暴に取り扱はれても、そばに來て貰ふのを寧ろなつかしいやうな氣がして目に涙を湛へたが、返事にはかぶりを振つた切りだ。

「醫者を呼ばんかてえゝか？」

「……………」矢ッ張り無言でうなづいた。

「ほたら、置きまひよ。」松さんはこちらを見つめてゐた長さん等の方へ顔を向けて、その方が餘ほど面倒でないと云ふ風をした。

「えゝかいな、見て貰はんかて」と、長さんが心配さうに立つて來た。

「本人がえゝ云ふたら、えゝやないか？」

「けど、なア、惡いやうなことやしたら、行かんよつて」と云ひながら、長さんも坐わつて、定さんの額に手を置いて見たり、また、來ようとする藝者に關する想像が血管にまはつて脈搏を強く打つてゐる、定さんの手頸の脈を取つて見たりした。

　定さんは却つてそれをうるさくまたわざとらしく感じたと共に、松さんよりも長さん等の方がそんな

ことをして、わざとにも仲間を外させようと強いるのではないかと云ふまわり氣を持つた。

「痛おまッか、ぼんち」と、繁さんが椽端から聲をかけたのには返事をしなかつた。

そこへお菊が茶を運んで來た。先づ三人集つてるところへそれを分配してから、繁さんの方へ持つて行つたが、それから定さんが横にまるまつてゐる脊中のところに坐わつた。定さんのいら〳〵してゐる神經には、やアわりと香ばしい風が當つたやうて、嬉しさにおのづからからだが縮みあがつた。

「惡おまん、なア、痛うては。」

「痛うない云ふてまッさ。」

「けど、なア——」

「痛うないことはないやうやけど」と、長さんは定さんのどこを見るともなく明けてゐる目を見詰めながら、「醫者よりや藝子はん見たいのんやろかい？」

「そやない！」定さんは顔を赤らめて、淡泊さうに抗議した。そして長さん等の方から寢返りしたとたん、今度はお菊と顔を向き合はせたので、急いで目をつぶつて、あたまへまわしてゐた兩手の肱て顔を蔽つた。

「藝子はん見せたら、直りまッさ」と、松さんはわけもなく云つて、椽の方へ離れて行つたのを、定さんはまた頼りないやうな嬉しいやうな工合に感じた。

そして、

「どもないか、ほんまに」と、長さんがまだ心配さうに脊中へ手をかけてゐたのをも、早く離れて異ればいいと思つた。と云ふのは、病人として世話をして貰ふなら、渠等のやうな毒性のものでなく、この「ねえはん」にして貰へば、藝子などは來なくてもいいと云ふ氣があつた。

「ぼんち」と、手を肩に置いてお菊に呼ばれたのが、誰れにさう呼ばれたのよりも嬉しかつた。「どうだす。先生呼んで來ましよか？」

「もう、ええ云ふてたら、ええやないか」と、松さんは叱るやうな聲だ。そして團扇を大きくあふぎながら、「早う酒を持て、酒を持て。」

「は、はア――殿の仰せに從ひまして」と、お菊はわざと畏まつた樣子をした。

「芝居だッか」と眞顏で云ひながら、別な女中が浴衣を持つて來た。

「兎も角も、皆はん、お着かへやしたらどうだす」と、お菊が注意したので、椽がはのものが先づそのつもりになつた。

「あんた、着かへまッか」と、長さんが定さんに云つた。

「ほんまに、大事おまへんか？」また、お菊が聽いた。

「うん。」から、定さんは答へなければならないやうな氣がしてしまつた。が、その實、お菊と云はれるこの女だけになつたら、醫者を呼んで貰ふやうに頼むつもりであつたのである。

さうもしたいが、また藝子も見たい。

「かまへん、かまへん、成るやうに成れ」と、私かに決心して、定さんも起きあがつた。そして、長さんの後ろて、帯を解き初めた。おのづからしがんて行くその顔をお菊に見られないやうにして、横向きてかの女に衣物を脱がせて貰ひながら、「長はんも繁はんも、羽織も着ず、見ッともない風をして來た、なア」と考へた。

十四

定さんはこの料理屋の浴衣に着かへるのが珍らしさ、嬉しさに、元氣をふり起した。そして皆が「藝子、藝子」ばかり云つてるさもしさに、自分ばかりはさうてないぞと云ふことを見せて、さッき耻かしかつた時の意趣返しでもしてやるつもりて、新温泉へ這入つて來ようと云ひ出した。

「生意氣なこと云やはる。」松さんはかう一言のもとにはね付けて、煙草盆のそばにあぐらをかいた。

「およしやす。新温泉など、當り前のお湯やおまへんか？」

「それにせい、いつてもまた行けまッさ。」かう、長さんや繁さんも進まないて、ただ立つてゐた。

それてはやめようと、直ぐ素直には云へなかつた、何となく、自分の位をおとすやうな氣がして。て、少しむッとして、鐵色モスリンの帯をしめながら、

「ほたら、わたい獨り行て來まひよ。」

「ぼんち」と、松さんは一層強く出て、「なんて、そないな無理云ひなはんのや？ あんたが行たら、皆

ついて行かんならん。そないな世話やかさんかてええやないか？」

「うちのお湯にしときなはれ」と、お菊も口を出した。そして笑ひながら、「うちのんも新溫泉だッせ。」

「ほたら、置きまひよ。」かう云つて、松さんの方をじッと見た、あたまのづきん／＼痛むのを辛抱して、それでも、渠の云ひ分には、定さんも腑を落ちつけた。

そして皆てざッと一あびしてから、膳に向つた。暑いからとて、皆わざと椽へ並んだ。松並木に最も近い隅の柱を境にして、その右の板の間に長さんから松さん、左のに繁さんから定さんだ。定さんの方の列は、丁度、誰れかの山水の三幅對を懸けて、大きな松の植木鉢をあしらつた床の間に、疊をへだてて、さし向つてゐた。

「今晩は」と、入り口の襖の明きから手をついたものは、誰れも誰れも、まどゐの遠いのに驚いた。裾を曳きながら、

「とうない遠方だす、なア」と云つて來たものもあれば、

「威があつて、なか／＼あんた方のねきへは寄れまへん」と、わざと坐敷の眞ン中につッ立つてゐたものもあつた。定さんには、それが面白いことを云ふものだと思へた。來た中て、勘七と云つて、薄藍の濃淡て龜甲形の出た紋壁透綾を着たのが、最も年若らしかつたが、それが松さんのそばへ坐わつて、渠にばかりべちや／＼しやべくり出した。そして、

「旦那、こないだのお方どないしやはりました」とか、「裸か踊り、おもしろおました、なア」とか云つ

た。

「おれも一つ今晩踊つたるぞ。」松さんは直肌の腕て腕まくりをする眞似をして、元氣を附けてゐた。

「あんたはよう知つてなはる仲だッか？」から、繁さんが聽いたのに答へて、

「そやとも、なア」と、松さんは勘七を兩手て引き寄せて、「なか〲お安くない仲やもん、なア。」

「よろしゆおました、なア」と、かの女は押さへられた肩をすくめて身をのがれ、笑ひながら、くづれた膝を整へ、元の通りに坐わり直した。

「わたい等もそないなりとおまん、なア」と云つて、長さんはさがつた口じりて自分のそばの藝者を見た。

「合ふたり、叶たりだッか」それが氣まづい顔をしながらも答へた。そして定さんにさへ珍ころめいたと見える目鼻を動かして、「わたい〆子と云ひます、どうぞよろしう。」

「今から、もう、妥協しやはるんや困りまん、なア。」これは繁さんも話の相手を求める爲めの言葉であつた。すると、渠のそばにゐたのがまた氣轉を利かして、涼しい聲で、

「旦那、妥協やおまへん、ラッキョウだッせ。」

「こりや、やられた。」繁さんは箸て摘んで口へ持つて行きかけた薤のやうな物を宙にまごつかせた。

松さんは相變らず勘七ばかりを相手にして、惡口を云ひ合つたり、叩き合つたりしてゐた。

定さんのそばには、初めに坐わり後れた婆々ア藝者て、顔も皺くちやな「愛助ねえちやん」と呼ばれ

るのが來てゐた。渠が何の洒落も云へない上に、手をあたまへ持つて行つたり、目をぱちくりさせたり、顏をしがめたりしてゐるので、かの女も樂にとッ付くすべがなく、ただ渠の猪口が明くとその跡へお酌をしながら、他のもの等の話に調子を合はせてゐた。

渠はその藝者のふけた顏と、一番遠い場所にゐる松さんのそばの子の膝に透いて見える桃色とを時々見比べながら、何だか勝手が違ふやうに思はれた。

「年から云ふたかて、松さんがあの子を取るわけがない――また、誰れを取ると云ふことかて、金を出すわたいが決めたらええやろ」と心で不平がつた。

然し定さんの目的の勘七は、「わしが國さ」と今一つ渠の分らない物とを踊つてから、他のお坐敷へ貰はれて行つた。それを渠は鳥渡行つたので、また來るのだらうとも思つたが、出て行つた時の挨拶振りては、もう來ないのだらうかと失望し初めた。然し、あからさまにそれを誰れに尋ねて見ようと云ふ氣は、出さうと思つても出せなかつた。

兎に角、その女の爲めに張り詰めてゐた精神が斯うしてゆるんだので、またあたまの痛みに堪へられなくなつた。そして醉つた振りをして立ちあがつた。

「どこへ行きなはる、ぼんち？」松さんは皆と同時に定さんの方を見て、かう詰問した。

「どこへも行きやへん」と答へて、床の間の前へ行つて、床に横たへた紫檀の敷木を枕にした。

渠が「思ひ切つて歸つたろかい」と激したのはこの時だ。

八

「あんたはん、弱をおまん、なア」と云つて、例の愛助が落ち付いた聲でくゝり枕を持つて來て呉れたが、それも直ぐ皆の方へ行つてしまつた。そして、三味を鳴らして、

「さア、お歌ひやし、な」と云つてゐる。それに付いて、松さんが都々一を二つ三つ續けて歌つた。すると、繁さんが二上りだと云つて、『隅田のほとりに』とか、何とか云ふのをやつた。

「ほたら、わたいもやりまひよか」と云つて、長さんも何かやつた。

松さんがまたやり出した時、一方では繁さんとそのそばの藝者とが何とか云ふ拳を初めた。そして繁さんが二三度負けた。

「おい、京八、おれと來い、おれと。」松さんががさつな調子でちよいは、とん／＼などやつてゐたが、俄かにやめて、鼻で物を嗅ぐ音をわざとらしく大きくさせて、「臭い、なア、何ぢや? ヨードホルムのにほひや。あんた、瘡かいてなはるか?」

「あほらしい」と、京八と云はれたのが凉しい聲で怒つたやうに叫んだ。

「けど、なア、くさいやないか?」

「くさいかて、瘡と決つたわけやおまへんがな。」

「あつちやへ行きなはれ。病人は病人の世話などしなはれ。」

『看護婦だッかいな』と、愛助が口合ひを入れた。

『負けかけたさかい、そないな毒性なこと云ふて』と、京八は笑ひながら立ちあがつて、『わたいかて、女子一匹、へん、精神がありまッさ。』

『えろおまん、なア』と、〆子がその方を見あげた。

『そないにおこんなはんな』と、松さんは猪口の酒を吸つた。

『おこりやへんけど、なア――』

『ノウ〳〵、おこるべし、おこるべし』と、愛助がけしをかけた。

『ぼんちはどこぞ悪いのんだッか』と云ひながら、京八は定さんの方に足を運んだ。

『うん』と、松さんが答へて、『どたまを電車の柱にぶつけたのんや。』

『ほんまに?』と松さんの方にふり返つて、『どたまりこぶしもない――』

『洒落なはんな』と、松さんは云つたが、愛助にも聴かれて、定さんのことを殘酷な言葉で說明し初めた。

定さんは枕の上で、兩手であたまを押さへたまま、賑やかな方に向いてにや〳〵しながら、目を明けたり、つぶつたりしてゐたが、

『なア、ぼんち』と云はれて苦笑の目を明けた時、赤い蹴出しがちらと見えたかと思ふ間もなく、太さうな膝が渠の腋さきに坐わつた。繁さんのそばで鈴のやうな聲を以つてラッキョウの洒落を云つた女

て、この女ばかりが裾も曳かず、廂髪に結つて、奥さん然と地味なお召を着てゐるのは、どうしたわけだらうと思はれた。それが皆に聽えるやうに言葉をつづけて、「すり傷にかてヨードは付けまッさ——きのふ、家族溫泉へ行て、手拭ひで腰んところをすりむいたのんや。」

「あやしいもんや——新溫泉の家族風呂は、なア」と松さんが追窮したのに、愛助が調子を合はせて、

「そりや、さま〲なすりむき方もおまッさかい、なア。」

「そや〱！」〆子もそれに贊成した。

「ええ人があんまり奇麗にしてやらうとおもたんやろ」と、長さんも口を出した。

「よかつた、なア」と、京八はわざと嬉しさうに手を叩いた。

「へーえ」と、入り口の外で女中が返事をした。

「違ひまッせ、こッちやのことやし」と、愛助が向ふへうち消して、こちらでわざとらしくふき出した。

京八は首をすくめて、定さんににッと笑つて見せた。定さんも苦さうにだが、にッこりした。そして、ぷんと鼻さきににほつて來る藥のにほひを、却つて香水か何ぞのやうにやさしいものと感じて、そのにほひの主となら、この痛みを分けて、一緒に死んで貰つてもいいやうな氣がした。

「痛おまッか」と云つて、やわらかい手を肩に置かれた時、渠の姉よりもいいと思へた顏を下からじッと見詰めて、淚に目をしよぼつかせながら、それでもかぶりを振つた。

九

外からも、二三ヶ所三味や歌の聲が聽えてゐる。

明け放つた廣間へは、さッといい風が這入つて來た。

「おう、ええ風や、なア」と云つて、京入が定さんのそばを立つた時は、再び皆のものの歌さわぎが初まつてゐた。

渠の好きな子までが浮かれ出して、松さんの踊るかッぽれに合はせて、「冲の暗いのに、サッサ」などとやつてゐる。

定さんも寂しい氣がまた一しほ引き立つて來て、手をあたまから放して起きようとしたが、重い石で押さへられてゐるやうなので、再び枕の上に肱枕をした。

「どないせい、死ぬのんや。死ぬのんなら、うちの者を呼んで叱られるよか、こッそり思ひ切り樂しんで、跡の勘定だけをうちの者にさせたかてええ。」

から考へては見たが、渠をそそる樂しみとは歌でもない。酒を飲みたいのでもない。

松さん等のさわぎがどこか遠くの方で聽えるやうな氣持ちになつて來た時、定さんには電燈で明るいが然しひッそりした小間で、——而も呼べば直ぐ母も姉も來るやうな安全な、然しひッそりした小間で——好きな女の膝に抱かれて、自分の死んで行くそのありさまが浮んでゐた。

が、それも暫時のことで、渠が實際の痛みを堪へる爲めに目を堅くつぶつてゐるのをおぼえると、「おい、ぼんち」と云ふ松さんの聲が最も近くにして、「不景氣に何ぢやい？ ちよつとお出なはれ、相談がある。」

定さんはふら〳〵するからだを踏みこたへて、松さんについて、廣間の人々の返り見る視線の範圍を出た。そして便所への道の廊下に立つた。

「どないするのんや、寢てばッかりゐよつて？」

「……」青い顏に、ただ口びるのさきをとがらせて顫はせながら、松さんの醉ひの出切つたやうな赤い顏を見詰めた。

「歸る云ふたかて、もう、電車がありやへんぜ。」

「わたいかて、歸る氣やない。」と、不平さうにまた口をとがらせた。

「それて占めたもんや」と云ふ風にほくそ笑みて、松さんは低い聲をつづけた。「ほて、女子はどないしよう？」

「さう來てこそ順當や」と心に云はせて、定さんは全く得意になつた。そして自分の女を撰べと云ふことだと合點した。でも、特に低い聲をして、云ひにくさうに答へた。

「あの——さッきに——踊つた子がええ。」

「ひえー」と、松さんはあきれたやうに跡ずさりした。「まだそないなこと聽いてやへん。あの、なア、

鹽子を返さうか？　じやて寢さそか？　それとも、來とるのなり、別なのなりを皆て別々に取ろか？　それを相談するのんや。」

「わたい、知らまへんが、な、そないなこと。」

「ぶッ」と、松さんは堪(こら)へ兼て、押さへてゐた笑ひを吹き出した。そして廣間の入り口へ行つて首を突き出し、「おい、ぼんちや勘七さんに惚れてやはる！」

「うそや、うそや！」定さんはあわてて入り口から飛び込んだ。そして脊の高いからだをつッ立てた。そして酒の醉ひが加はつて一しほ痛むあたまを兩手でかかへながら、胸に溢れる恥かしさを胡魔化した。「そないなこと云やへん。」

　愛助は〆子と顏を見合はせて、冷笑し合つた。

「まア、きなはれ。」松さんは今度は定さんの手をぐッと引いて、つれ出した。

「賣れッ子は矢張り違ひまんな、なア。」定さん等二人に聽えるのを憚らず、〆子がここにゐない朋輩を羨む意味でかう云つたのには答へないで、愛助は笑ひながら叫んだ。

「わたいてはどうだす、お乳(ちゝ)をたんと飲ませてあげまッせ。」

「は、は」と、繁さんは笑つた。

「ちち、ははだん、なア」と、また京八の口合ひだ。そして首(くび)をすくめて、「わたいかて、どうだす？」

「みな、あのぼんちのおごりだッか？」愛助は眞顏になつて長さんに聽いた。

「ぼんちが玉突きに負けたおごりや。」
「負けた上に、おごりだツかい、な——ええぼんちやのんに、なア。」
こんな話が聽えるのをすべて冷かしと見て、定さんは聽かないふりをしながら、困つたことを云つてしまつたとまご付いてゐると、
「あの子は、なア」と、松さんはこちらで眞面目になつて說明した、「毎晩旦那があつて、あかんのやさうや。」
「ほたら、もう、ええ」と云ひ切つた。そして今の失敗を回復したやうな氣がして、元の場所へ戻り、またどたりと身を横になげた。何だか松さん等が默つて勘七を歸したのがうらめしい。かの女が行けなければ、京八をと云ふ下心があつて、一刻も早く樂にこのからだを介抱して貰ひたい外、何も願ふところがない。が、この場合、何ごとでも云ひ出せばまた失敗を重ねるかも知れないので、尋常にあたまが痛むから早く死の床へ入れて呉れいとさへ口に出せなくなつた。そしてぶり返して來たやうに痛む痛みを堪へる爲めに、床の間の方へ寢返りして、胸の中では獨りあせつて、
「やけ糞や、このまゝこゝで死んだれ」と云ふ無言の叫びをあげた。

一〇

「ほたら、もう、歸りまひよか？」長さんは先づ興さめた聲を出した。定さんが御機嫌を失つたと見た

やうすだ。
「電車がおまッかいか？」繁さんは進まなささうだ。
「もう、大阪へはおまへんが、な。」から云つて、愛助は落ち付きを失つて來たのを隠すやうに、細い銀煙管て煙草の火をつけてゐる。
「何のこッちやい、わたいにはわけが分らん。」松さんも皆の不興に釣り込まれて、「ぼんちも男やないか、一旦おごる云ふたら――」
「おごッてるやないか」と、定さんは後ろ向きのまま口をとがらかせたやうな聲てこぼした。「けど、わたいは大怪我をしたのんや。」
「怪我したもんが、勘七てもないやないか？　ぼんちはわが勝手ばかり云ふて、――來やへんもんは無理やないか？」
「無理やない」と云つて、病氣にかこつけ、今の耻を雪ぐつもりて、「ほたら、松さんに怪我人の世話がてけまッか？」
「わたい、看護婦やおまへん。」
男も女も一度期にわッと笑つた。
「笑ひたい人はもッと笑ひなはれ！」
「ほたら」と、松さんは定さんの機嫌を取るやうに優しくなつた、「どないしよ云ふのんや？」

「あんた等は勝手にしなはれ、わたいは醫者を呼んで貰ひまひよ。」

「醫者!」松さんは今更らのやうに驚いたが、他の友人に氣の進まない相談をかけた。「ほたら、醫者を呼んでゐろて、——わたい等は皆てじやこ寢しまひよか?」

「さア」と、長さんは確答しかねたのを見て、

「なんの、お錢の心配は入りやへん——どッちや道、ぼんちのおごりにしまッさ。」

「それもよろしゅおまッしやろが、なア」と繁さんもどッち付かずの様子だ。

「君も、お錢の心配は入りやへんぞ。」

「けど、なア」と、長さんがそれを受けて、「ぼんちの工合が分らんと——?」

「そやさかい、醫者を呼んで貰う云ふてるやないか?」

「呼んで見てから、また相談したらどうや?」長さんはなほ心がもち付いてゐるらしい。

「ほたら、この人達に濟まんやないか?」から云つて、松さんは藝者の方を返り見て、「あんた等の都合はどうや、な？　たとへ十二時過ぎてからの線香代は、わたい等で受け持つことになつても、あんた等にや割前はかけまへんぜ。」

「どうも恐れ入ります」と、愛助は松さんの冗談を受け流して、他の子どもの顔を見た。そして暫く目話しをしてゐたが、誰もどうと口に出すものがなかつたので、かの女がまた代表者のやうになつて答へた。「さしつかへない子だけは、なア。」

「そりや、おしつかへたら仕やうがおまへん——京八さんはどうや？」

「さア——」

「さア」と、松さんもかの女の返事を眞似して、興ざめた座をつくろひながら、「〆子はんはどうや？」

「さア——」

「こりや、あかん。」松さんは胡麻化しにあたまをかかへた。すると、愛助が、

「ぼんちの眞似だッか？」

男達はそれにつれて煮え切れない笑ひを擧げた。

そこへお菊が出て來て、京八を貰つて行くことになつた。かの女は丁度よかつたと云ふ風て身がまへを初め、他の皆に挨拶してから、定さんの脊中のところて腰を下げ、渠の顏をのぞくやうにして、

「ぼんち、さいなら。」

「……」

「さいなら——おこッてやはるのんや。」

「おこッてやへん、ゐて欲しいのんや」と答へたかつたのだが、定さんは言葉に出しかねた。そしてこのまま死んだら、あれにもこれにも、二度と再び逢ふことが出來ないのに——「そつて呉れたらええのんに、なア」と云ふ訴へが私かに胸一杯になつた。

「今夜死ぬ。きッと死ぬ。せめて死ぬまでゐてて呉れ！」から喉もとまでは來ても、聲に出せなかつた。

そして、自分のからだが獨りぼッちの寂しい闇に壓搾せられて、その結果としての如く、目から自然に、とめ度なく、涙がほと走り出る味はひを感じた。

そして、心の奥まで浸み込んだコードのにほひと涼しい聲の足音とを追つて、耳をこッそりそば立てながら、自分の家は何でも不自由のない大商人だと云ふことが、この場合、女どもに認められてゐないのを絶望的に殘念がつた。

松さん等が話して呉れたらいいてはないか？　一言耳うちして呉れたらいいてはないか？　金はいくらでも貰つてやるから、一晩だけとまれ。一晩でこの男は死ぬのだから、と。

思ひやりのない友人達だと思ふと、自分に容易く女を與へてやると約束したのは初めからうそて、ただそんなことを出しにして、おのれ等の勝手な飲み喰ひをしようが爲めに、自分を怪我させてまでここまで引ッ張つて來たのだらうと云ふ恨みと失望とが、心のうちで段々太いあたまをもち上げて來た。

同時に、またかう云ふ疑ひが起つた――藝子と云ふものは、皆の云通り、慾てその身を賣るのではないか？　今晩に限り、さうした樣子が見えないのは、松さん等のやうな風體の惡い人間と一緒に來たのてか知らん？

「何にせい、眩はしい夢のやうに一緒に來とつたかて、順々に影のやうに消えて行くのんや――それも、美くしい方から」と考へると、もう默つてばかりゐられないやうな氣になつた。

「さいなら」と、また例の涼しい聲が遠くの方で響くのが聽えた。すると、定さんの目の前には、はッ

きりと、先刻這入つて來た時の、この家の門前門内の様子が見えた。さッさと跡つて行く奥さん風の藝子――庭掃除や下駄番の男衆――多くの女中――その中から、最もいいにほひのしたお菊――最初に跡つてしまつた薄桃色の藝子――赤い色――ヨードホルム――「さいなら、おこッてやはるのんや。」

かう云ふ影や色や言葉などが、その瞬間に、一度期に定さんを襲つて、渠の神經を高ぶらせたので、渠の全身には、あたまの痛みと同志打ちをする、何だか知れない強い力が遠慮なく勃興した。そして、耻かしみの薄らいだ脇腹の間から、

「どないな女子てもええ」と云ふ聲が出たと思へた。この時、愛助が口を出して、

「もう、十二時だッせ――わたい等はどないしまひよ？」

「そや、なア」と、松さんが受けて、「どうや、ぼんち？」

「……………」定さんは、それでも、暫く返事が出來なかつた。が、これを最後に藝子どもが皆歸つてしまうのては困ると、胸がただどぎまぎした。渠はあたまから手を離し、思ひ切つて皆の方へ寢返りした。そして、松さんが盤の上で愛助のそばにあぐらをかいて、こちらを見てゐるのに尋ねた、「じやて寢たら、何だす？」

「わッ、はッ、は」と、繁さんと長さんとは、椽がはてまだ膳に向つてゐながら、一度に笑つた。二人とも箸を持つたままで、こちらを見てゐた。

「何がをかしい――いやしい奴ちや、なア」と、定さんは心て云つたが、おもてにはただいやな顔をし

た。

「あの、なア」と、松さんはほほゑみながら、小學校の先生を思ひ出させるやうな口調で、「皆と、なア、嬰子はんも一緒に並んで寢るのんや、――但し、なア、手も足も出すべからずだッせ。」

「結はへときまほかい、なア。」愛助が無駄な口を出したのにつれて、〆子も亦笑ひながら、

「わたい等の方が結はへられたら往生や、なア。」

「そないな詰らんこと置きまひよ！」

「は、は、は、は」と、他の皆が揃つて笑ひを擧げた。

二

定さんは皆が自分を馬鹿にしてゐるのだと見て、ぷり〳〵怒つた。そしてそれを反省して見る餘裕もないほど、あたまの痛みが辛抱し切れなくなつて來た。想像にせよ、うその影にせよ、それが目の前にちらついて、隱れた慾望をそそつて呉れる間は、何となく痛みのもたせ柱があるやうであつたが、その柱も亦渠のあたまにぶつかつた柱であつたのが溜らなく殘念だ。

「二重の衝突！」かう云ふ考へに思ひ及んだ時、定さんの女に對する情が全くあたまの痛みに變つて、腹のどん底まで通つて、からだ中を煮えくり返す。そして、一坐が互ひに興ざめて默つてゐる瞬間を、あたまをしッかり兩手で抱いたまま、ころげまわつて泣き叫んだ。「醫者を呼んで呉れ！ 醫者を呼んで呉

れ！」

松さん等は藥を少しても落ち付かせようと努めて、酒の醉ひは全くそこ退けになつてしまつた。

藝者どもはまた魂消てしまつて、皆そこ〳〵に引きさがつた。

碁を打ちに行つてまだ歸らないと云ふ醫者を探し當てて、店のものが連れて來た。そしてそれに病人の云ふ通りあたまのいやに張れぼッたい容態を云つて、よく診察して貰ふと、

「もう、手後れやさかい」と獨り言のやうに云つて、顏を靑ざめて、病人の寢かされてゐる小部屋を出て行つた。

それでも、皆は醫者が何か取りに行つたのだらうと思つた。で、定さんのまわりを取りまいてゐる友人や、店のかみさんや、お菊、その他の女中は、心配の餘り、別に言葉を出さないでゐた。

「うん、うん」とばかり、定さんは呻つてゐる。

やがて醫者が手に持つて來たコップの物を定さんに飮ませた。が、定さんは半分ばかり飮んでからそれをつッ返し、苦しさうな聲で、

「水は――入らん――藥を」と云つた。

醫者はこの言葉を聽いてそののき顫へた。が、それをまぎらせる爲めに、そのしがめ顏に苦い笑を帶びて、かみさんを見あげた。かみさんは、膝を突いてのしあがりながら、そこて窺いてゐたのである。かの女の心配さうな顏と藥の苦い笑とがぶつかつた時、藥は別に手當ての仕やうがないと辯解する口調

で訴へた、

「あたまの鉢が砕けて、病人の云ふ通り、腦味噌が外に出てるやうやさかい、なア――」

「えッ!」かみさんは、腰をぬかしたやうにぺたりと坐わつて、今更らの如く醫者の顏を見詰めた。

「矢張りそれか、なア」と、定さんには自分の想像してゐるところが事實らしくなつた。そしてしッかり目をつぶつたまゝ、初めて實際に自分を危篤だと考へた。そして、また、玉突のたッた三十點がいのち取りのゲームであつたかも知れないことばかりを悔みに悔まないわけに行かなかつた。「でも、こないなへぼ醫者の云ふことなどまだ分りやへん」と云ふ心頼みも出た。そして、

「よう、まア、その間辛抱てけた、なア」と、醫者がそれ隱しに感心して見せたのが幽かに聽えた。すると、お菊の聲もした、

「きついぼんちや、なア。」

「おれかて、男や」と、定さんは訴へかけても口には出なかつたが、涙はほろ〳〵と枕の上にこぼれた。そして、それを隱す力もなく、――今しがたまでのあまい夢の、赤い色や親しいにほひの名殘りを思ひ浮べて見た。

「ぼんち」と、松さんが呼びかけて、「しッかりしてなはれや　大阪へ電報も打つたんやし、ええ醫者もおこすやうに云ふたさかい、なア。」

から力づけられた時には、もう寶塚の醫者もゐなかつた。多くの女中もゐなかつた。そしてそこにゐ

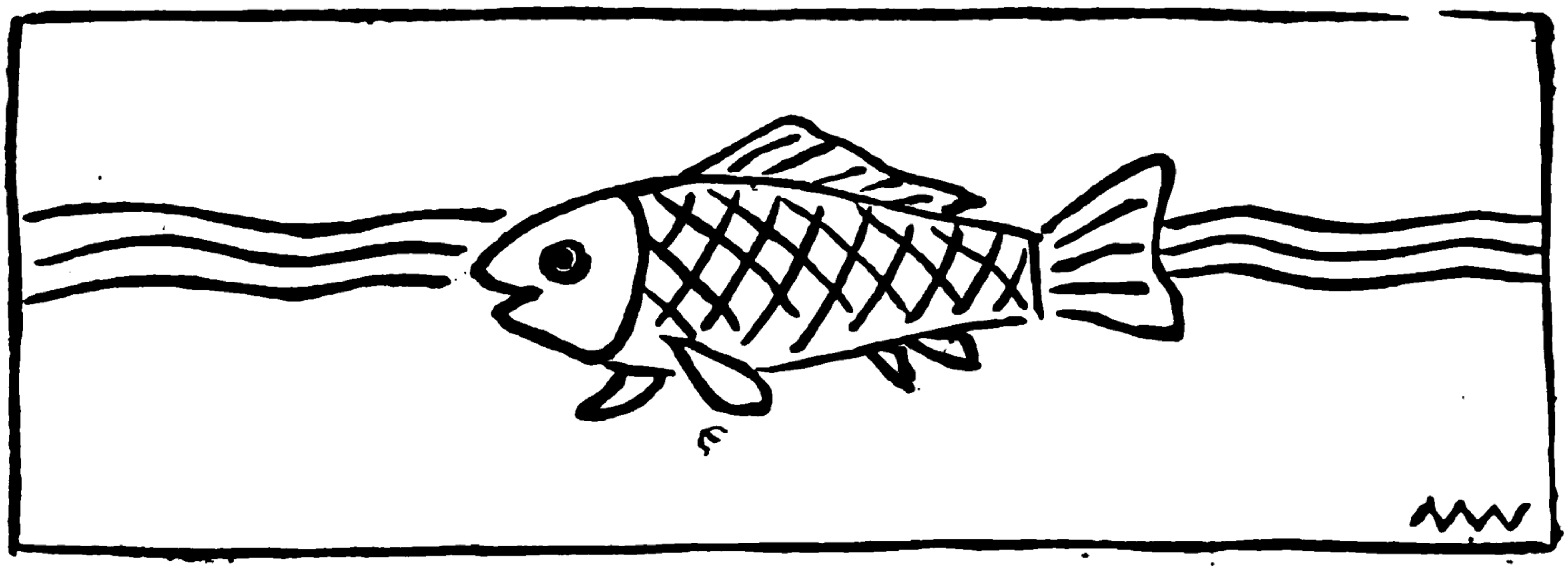
るかみさんや友人等の顔も見えないほど、定さんは「死にともない」ばかりの痛みと後悔とにもだえて、おのれの愚かであつたことを責めた。

「馬鹿だ、なア」と電車の隅から、あの時聽えた東京辯が憎いほど思ひ出されて、誰れに向つても助けを呼ぶことが出來ないやうな心細さに押し詰まつた。

そして、はたからなだめ賺すものがあるのを注意しないかのやうに、ただ、頻りに、

「早う、姉さん——おかアはん——お父さん」とばかり待ち受けてゐた。

（完）



午後

與謝野晶子

二人は先刻(さつき)クツシイの通て中食して歸つて來てからまだ一言も言葉を交さない。女は暖爐(ストオブ)の上の棚の心覺えのある雜誌の下から郵船會社の發船日表を出した。さうして長椅子にぺたりと腰を下して、手先だけを忙しさうに動して日表を擴げた。何時の昔から暗記して知り切つたものを、もとから本氣で讀まうなどと思つて居るのではない。男の注意をそれへ引いて、それから云ひ掛りをつけて喧嘩が初めたいのであつた。喧嘩と云つても勝つに決つた喧嘩て、その後て泣く、ヒステリイを起す、男をおろおろさせる、思つて見ればそれも度々しては面白くもない事に違ひないのである、もう飽きてしまつた慰み事に過ぎないのであるが、じつとして居て故郷戀しさ

に頭を暗くされ續けにさせられて居るよりはほんの少しばかり増しだと思ふのであらう。寢臺の足の方に附けて置いた机に倚つて居る男に聞える程の
「あ、あ。」
と云ふ吐息を女はした。
「どうしたの。」
男は顔を妻に向けた。
「あ、あ。」
今度は甘えたやうな吐息が女の口から出て、そして媚びる目附て男を見た。歸りたければ歸れば好いぢやないかと一寸强く威された時、一先づ負けて出る何時ものそれが、間違つて一足先きに出たのだと女は自身の樣子に氣がついた。
「淋しいのね。」
「ふむ。」
と云つたまゝ男はまた書物の上に目を落した。
「煙草を頂戴。」
「さあ。」
男は藤色のルパンの箱を左の手て持つて出した。

「厭、火を附けてよ。」
舌打ちをしながらルバンを一本出して口に銜へて、手元にあつた燐寸の大箱から正臙脂色のじくに黄な藥が附けてある花の藥のやうな燐寸を一本出して擦つた。女は默つて見て居る。火を附けた煙草を男は無意識に其儘飮んでまた本に讀入つた。女はそつと立つてルバンの箱と燐寸とを盜むやうに長椅子の上に取つて來た。
「上げやう。」
氣の附いた男が煙草を口から取つて見せるのを
「いいのよ。」
首を振つて女は見せた。
「失敬した。」
「あんなことを云つて、いいんですよ。」
「おまへ昨日あたりからおとなしくなつたね。」
と云つて男は本を下向けた。
「さう。」
女の目には涙がいつぱい溜つた。
「おまへがさうして居ると日本に居た時の夫婦のやうな氣がするよ。」

そんなことはない、私はさう思はないとか何とかまたあらがひたい氣もありながら、どうしたのかさうした言葉の見つからないのを煙草を飲むのに紛らして默つて居た。

「この煙草は辛くていやだわ。」

こんなことを女が云つた。

「スリイカッセルでも買つてこようか。」

「いいんですよ。」

女は笑顔を作つて見せた。何やらいぢらしい氣がして男は長椅子の女の横に來て腰かけた。女はまたむらむらと喧嘩がして見たくなつた。

「やつぱり私はあなたが憎いのですわ。」

「困つたものだね。」

「飲んで頂戴、もう厭になつたから。」

と云つて、女は煙草を男に渡さうとした。

「お捨てよ。僕もいやだ。」

女は立つて机の上の灰落しに煙草を置きに行つて其儘窓の方へ行つた。戸を前に引いて丁度胸の邊りまである鐵の欄に倚ると何時もの空が見える。途方もない事をしてしまつたと云ふ後悔を數へる東の遠い空が見える。薄鼠色の上に頻りに白い雲の動いて居る日である。目の眞向うに見える黑い高い家が、

此方向いた窓が一つも附いて居ないので牢屋のやうな不愉快な心地もその時々の氣分によつて起させられるのであるが、今日もやはり女はさう思つた。英國へ行つて居た間に隣の邸の大きいマロニエの七八本が暑氣に葉を傷めて落ち盡くしてしまつたのが見る度に腹立たしくも思はせられた。併し一番向うの木はもう二度目の芽を疎らに墨のやうな色をした幹に附けて居た。門の方からその家の十二三の下僕（ギャルソン）が白い胸當をして鳥打帽を被つた姿で、公園の道見たやうな芝の中の白い道を通つて來る。女は國に置いた長男の顔がまざまざと目に見えて來た。自分が身分不相應な、無分別な外國旅行などをした果てには子供達迄も落ぶれさせて、あの下僕のやうな事もさせるやうにもなるのではあるまいか、何時かの朝下僕が大きい手で撲られて居るのを見たが、あんな目を自分の子も見るのであらうか。女はまた男に對する怒りが火のやうに胸に燃えるのを覺えた。振り返つて見ると男はもう机の前に歸つて居て靜かに讀書を續けて居た。涙を零しながら欄の上から顔を出して下を見ると、遠州流の生花の心（しん）の枝のやうな反り返つてひよろながいアカシヤの木の根の下の處に向ひ合つて置いた二つのベンチに人の出て居るのが目に入つた。此方向いた方には主人のルイと西班牙の踊子が居る。土の上に低い小い卓が出されて居て、リキユウル用の小いコツプが三つ程と、ビイルのコツプが二つと酒の瓶の二三本が置かれてある。向う向きのベンチにはおかみさんのブランシユとおしごとに來る小母さんが掛けて居る。ブランシユは髪針（ピン）を口に銜へながら、膝の上で附髷を結び直して居た。薄紺のジヤケツを着た西班牙女（イスパーニユ）が頻りに笑聲を交ぜて話し立てて居る。前齒が拔けて居て糸切齒が牙のやうに光る小母さんは横向きになつて居るから、

上からも鬼のやうな顔の線がよく動くことが見える。ルイは植木いぢりでもした跡か上はオリイブ色の襯衣だけて居た。二十八とかで評判の美男の彼の顔は上から見ると眞中でもう少し禿げかけて居た。西班牙女は透き通るやうな氣持の好い青味を交ぜた白い顔色で、黒瞳で笑ふ時も凄艶な怒りの影が見える濃い眉を持つて居る。頤が佛蘭西型よりは心持張つて見える。髪を尼そぎ程に頸の邊りで切放してあるのは何處の踊子もして居ることであるが、こんな房々とした厚い黒い毛を持つたのは珍しい。卓中の辻も二つに分けた前の分け目も、顔の色のそれよりもまた一層白く青く美くしく見られる。ルイの顔にも似ない赤茶をした毛の地の色の隣にあるから一層それが目立つても見えた。ものを云ひ云ひ西班牙女が身體を擦り寄せて行くのを、恐いやうにルイが少しづつ身を引くのがをかしくて、三階の窓の女は思はず微笑んだ。下卑た手附きで小母さんがビイルのコップを取つてなみなみと注いで、一寸舌で嘗めて身體の横へ置いた。西班牙女がリキユウルのコップを持つとルイが瓶を取つて注いでやつた。自身のにも注いておかみさんに飲まないかと云ふと、ブランシユは忙しく首を振つた。小母さんがビイルはどうかと云ふやうなことを云つた。令孃(マドマアゼル)とか夫人(マダム)とか名につけて云ふ若い女、どれも先づ自身よりは容貌の好い獨身の女を七八人も家に置いて居るおかみさんの身になつたなら、遣る瀬ない腹立たしい思ひも時々はする筈なものであらうなどと上の女は思つて居た。そんな事ですつかり機嫌が直つてしまつた。

「一寸來て御覧なさいよ。あなた。」

「何があるのだ。」

「背庭へ出て居ますわ。」
「さうかい。」
　男は氣のない聲で云つて居た。
「下の西班牙人は綺麗ね。」
「さうかね。」
「あなたよく知らないのですか。」
「ときどき見る事があるやうだけれど。」
　時々男が見ると云ふのは、この家の中では一番贅澤な飾りのされてある下の廣間の戸口を開けたままて、寢臺の上に手や肩を出してだらしなく寢そべつた時のあの女なのであらうかなどと女は思つて居た。下で木戸のがたんと閉る音がして、早足で敷石の上を歩いて來る靴の音がするので、女はまた顔を外へ出した。
「あら、奥さん、いいお帽子。」
　と西班牙女がはしやいだ聲を低い金網垣の外へ掛けた。四人の目の前を
「今日は。」
　聞えない程に云つて逃げるやうに薔薇の帽が上り口の石段を驅け上つた。
「あら、キキですわ。」

驚いたやうに女が云つた。
「キキが珍しいのかい。」
と云つて、男は立ち上らうとした。
「だつて、だつてもうお腹が大きくないのだもの。」
「嘘だらう。」
靴を穿いた男は草履穿の背の低い女の肩に手を掛けて下を覗いた。
「もう入つちやつたわ。どうしたのでせうね、それに好いなりをしてたわ。」
「少し妙だね。」
男は下から目を上げたルイと顔を見合せて
「今日は」
と云つて、首を一寸下げた。女はすつと窓から身を引いた。机の前の今迄男の居た椅子に掛けて
「踊子は綺麗でせう。」
と女は云ふ。
「さうだね、目が悪いから輪廓位しか見えないけれど。」
男が何時も自分に對して用心深く遠い所に線を張つて居るのが憎いと女は思つた。
「二階の伊太利亞人はどう。」

「あの人も出て居るかい。」
「出て居ないでせうよ。」
女は口早に云つた。
「今夜はハルギエエルへ行きませうか、あなた。」
「行つても好いよ。おまへが行きたければ。」
「そんなことをお云ひになると私の戀人でも彼處にあるやうね。」
男は長椅子に掛けて、其處にある煙草を飲まうとして居た。
「さう岸の禿頭だの、後藤の胡麻鹽だの。」
「結構ですね、自分が一番立派だと思つて居らつしやるのだから。」
女も長椅子の方へ行つた。とんとんと扉を叩く音がする。
「お入り。」
と云ふと、女中のマリイがにたにたと笑つて首を振りながら入つて來た。掃除に廻つて來たのである。
「おいキキの奥さんはどうしたの。」
また窓の所に行つて立つて居た男は、赤い羽蒲團に手を掛けてめくりかけたマリイに云つた。
「キキ。」
マリイが問ひかへした。

「さう、さう。」

男が云ふと、其間休めて居た手を動かして蒲團を上げながら、マリイはをかしくてならないと云ふ表情を顔から頸つきにまで現はさうとした。

「どうして居るのだい。」

マリイは脣を閉ぢて點頭きながら、左隣の方の壁を指ざした。

「隣に居るの、此頃は。」

「さう、さう。」

とマリイが云ふ。

「あら。」

と云つて女は男と顔を見合はせた。

「子供をもう産んでしまつたの。」

マリイがうなづく。

「何時頃だい。」

マリイは指を折つて見て、

「二週間前。」

かう云つて大きい藁蒲團を手際よくマリイは裏返した。女が歩み寄つて向側から敷布を下に挾むのな

どを手傳つて居た。

「男の子なの、女の子なの。」

と女が聞いた。

「小い男の子でしたよ。」

「父なし子は丈夫で居るのかい。」

欄に肱を突いて身體を反り省すやうにしながら男が云つた。ちらと隣の窓に掛つて居た白いきれが目に入つた。

「田舎へ行きましたよ。」

掛蒲團の下かけのはしをもう一枚薄蒲團の下に挾みながらマリイが答へた。

「里へやつちやつたの。」

「さう、さう。」

「産の時もやつぱし屋根裏の部屋に居たの。」

「さうですよ。」

「男は一人位來たかい。」

「どうして、どうして。」

安樂椅子の上に置いてあつた羽蒲團を取らうとすると、マリイの汚れたタブレイの隱袋の中で鍵がち

やらぢやらと鳴つた。

「可愛さうね。」

男の傍へ來て女が云つた。

「キキの奥さんはもうこの間から散歩に出て居ますよ。」

「盛んな奥さんだね。」

男は苦い顔をして云つた。マリイは聲を立てて笑つた。開いた戸口から河合が長い顔を出した。

「やあ、入りたまへ。」

おかみさんがマリイを呼び立てる聲が下でする。

「奴隷のやうに私を思つてる。」

つぶやきながらマリイは出て行つた。箒も雑巾もそのまま持つて行つた。

「奥さん、この間は失敬しました。」

河合は怠さうな身體を長椅子に置いた。

「私こそ。」

女はにこやかに云つて寢臺の端に腰を掛けた。床から五六寸離れた白い足袋の先に西の窓から來る日影が落ちた。

「細君が怒つて居ないかつて山口も心配して居るんだぜ。」

河合は横にあるロバンの箱をいぢつて居る。

「さうかい馬鹿だね。」

「氣の弱い方ね。」

「僕だつて心配しましたよ。」

河合は頤を下につけて正目に女を見て云つた。

「あの前から頭痛がして居て自分ても早く歸りたかつたのださうだよ。」

「ぢやあ君もひどく怒られないで濟んだのだね。」

河合はをかしさうに笑つた。

「馬鹿な。」

男は机の引き出しから葉卷の箱を出して

「これをやり給へ。」

河合の傍へ置いた。

「うん。」

河合が一本撮んで指で先を取つて居る時、女も手を出して一本取つた。そして手を伸して机の上のナイフを取つて端を切つて男に渡した。此頃は人の前で態とこんなことをして見せたがる癖の出來た女を病的になつて居るからだと男は見て居た。

「何も持つて居やあしないぢやないか。」

河合は兩手を擴げて見せた。

「二十日かい、今日は。」

「さうかね。」

男は女を見て云つた。

「さうですわ。」

「驚いたらう。當月は何一枚書いて居やあしないよ。」

河合は態とらしい元氣好い聲で云つた。

「驚きはしないよ。君のこつたもの。」

「ふ、ふ。」

河合は首をすくめて笑つた。

「俺は馬鹿ぢやないから何も出來やあしない、出來やあしない。」

「困つた人だね。」

「俺はもう二百フランしか持つて居やあしないよ。」

「二百フランは眞實(ほんとう)にあるのかしら。」

「怪しいものだね。」

河合が笑つて云つた。

「僕の細君を珈琲店から追ひ歸しても仕方のないわけだね。」

「河合さんは綺麗な人を前に置いて見るだけていいんですわね。」

と女が云つた。

「やむをえずてすよ。」

「さうだとも。」

と男が云ふ。

「おい、カンキナても河合君にお上げよ。そしておまへもそんな所に居ずと椅子を持つておいてよ。」

男に云はれて

「え、え。」

と女は足を床に附けて立たうとした。戸口に人の來たけはひを聞いて、男は

「どなた。」

と云つた。愛嬌を目に見せたブランシユが中を覗いて、客のあるのを見て男を小手招ぎして外へ呼び出した。女は机を河合の方へ少し寄せて、出して來たカンキナの瓶とコツプを置いた。

「おかみさんはいくつてすか。」

「さあ、旦那樣より二つ上だとか云つてましたよ。」

黒味を帯びたカンキナが注ぎ餘つて机掛の上に血のやうに零れた。
「あれやあ亭主ぢやない、男めかけだ。」
「そんなことはないんですよ。」
「あんまり男が可愛さうだもの。」
酒を半飲んだコップを持つた儘河合は笑つて居る。
「おかみさんは二十貫位あるてせうね。」
「そんなこと、背が低いし、それに唯ぶくぶくして居るだけてすもの。」
男が入つて來る後からブランシュも姿を出した。もう綺麗に髮が出來上つて居る。この女の目から受ける感じも口元の感じも全然一緒て、美くしくはないが小利口らしい活々とした顏てある。髮がもうこの倍もあつたら美人の端に入れるかも知れない。未だ着物は木綿縞のダブレイをはおつた儘て居た。
「おかみさんの友達がね、帽子を買はないかと云つて持つて來たのださうだ。見せて貰うかい。」
男は女に云つた。
「さう、見てもいいこと。」
「氣に入ればお買ひよ。」
「ぢやゝ見せて貰ひませうね。」
河合はおかみさんと握手をして居た。ブランシュは首を振つておどけ拔いたことを云つて居た。寢臺

の上に置かれてあつた紙袋からおかみさんは江戸紫のびろうどの帽子を出した。絹の菊の小さい花が二つ附いて居て、庇には白いレエスが垂れて居る。

「好いこと。」

と女は嬉しさうに云つた。ブランシユが傍へ寄つて女の頭に帽を載せた。七八つも十も若くなつたやうな顔が直ぐ前の姿見に映るのを女は飽かず覗いて居た。

「いくらてせう、あなた。」

娘らしい聲て云つた。男が聞くと五十フランだとおかみさんは云つた。

「あんまり勿體ないのね。」

「欲しければ買つておおきよ。」

「だつて。」

「いらなければ早くさう云つてお返しよ。」

「ちやあかへしますわ。」

ブランシユは男から言ひ譯を聞いてうなづきながら

「こんなことをよく頼みに來るので私は困らせられるのですよ。」

と云つて、帽を提げておかみさんは出て行つた。

「晩には巴屋（ともゑや）へても行かうか。日本酒がもう來て居るかも知れないね。」

カンキナのコップを持ちながら女を見て男が云つた。
「さうね。」
女は唯さう云つただけてある。まだ今の帽子が目に憑つて去らないやうてある。
「奥さん帽を買つておおきになれやあいいのに。」
と河合が云つた。



病間

鈴木三重吉

私はうと〳〵した灰色の眠りから目を開いた。もう午後である。だれかゞ徐（そ）つと室内に這入つて來て、私の寢臺に近づいて、じつと私の眠りを見入つてゐるやうなのを、何だか邪魔なやうに厭ひながらも、またいつしかすや〳〵と寢入つたやうな氣がしたが、それは女が這入つて來たからであるらしい。

私は寢臺の側の小卓（スタンド）に、まだ小さい金線花の花が一つ、コップに挿して載せてあるのに氣が附いた。寢てゐる間に女が挿して行つたのである。けれども私はそれは汚れたあの女がした事だとは思ひたくない。たゞだれかゞ挿したのだ。

「だれかゞ下の家で貰つたのであらう。もうそろ〳〵かういふ早い色花が出るやうになつたのか。」

久しく何一つ色といふものゝない、蔭ばんだ黒い冬に鎖されてじつと一つ寢臺の上に橫はつてゐた私には、此素直な女のやうな、朱黄色の質朴な花の色が、室内の一つの變化であるばかりでなく、もうこれで、そろ〳〵冬は行つて了ふ、行つて了つたといふ印を得たやうに、子供のときのやうに單純な、何とはなく生々した溫かい喜びが暗示される。私がもう已にそろり〳〵室内を歩いたり、廊下ぐらゐまで出て行く事を許されてからも、外はまだ空が低く濁つてゐて寒く蔭ばんだ土の上に何の蔭影もなく冬ざれてゐるやうな日のみが續いた。私の衰へた心はいつも、さうした外の色のやうに淋しかつた。

此間から、とき〳〵、窓のカーテンに黄色い日影が浸みるやうな朝や午後があつたけれど、外へ出ればうそ寒いと女が言つた。私もまだ熱が取れないでぞく〳〵しつゝ蒲團に入つてゐた。

私は今コップの花と、半水に浸つたその柔らかい若い葉とを見つめながら、外の日向を想像した。窓には鈍い色のカーテンを通して蠟燭をつけたやうな光りが室内に這入つてゐる。私は土の上に出て見やうかと思ひつゝ、コップの花の名とその色とにつながつてゐる、私の記憶と情緒とに考へ入つた。

何であつたか、或作に此花が出て來る。一人の生な女が、その窃に戀ひる男の窓に、夜そつと此花を置いといて歸る。それを晝になつて、そこを通りかゝつたやうなふりをしてそつと覗いて見る。まだ男の目に觸れないと見えて、ゆふべの花はそのまゝそこに萎れてゐる。またあくる日、戀ひわびて、行つて柵の外に彳めば、まだやつぱりそれなりて男の手には取られぬ。わが戀の色は燃えてゐるのに、花の

色は萎れてさびしい。女は涙ぐんで歸つて行く。男に書きたい手紙も、字を知らねばすべもないゆゑ、また夜の間に行つて花を置くのであつた。

男は書をかくために來てゐるよその人であつた。

たしかにかういふところが書いてあつた。そのほかに此花には私自身の回想も引かれる。亡くなつた私の先の女の事て。――けれどもそれはもう考へたくない。

私はそろ〳〵寢臺を下りて。室を出た。

外には物靜な、黃色い日向が漲つてゐる。私は冬ざれた薔薇の木が蔓のやうに絡まつてゐる下り口から石段を下りて土の上に出た。

白いペンキの門の鎖された生垣の内には、裸になつた低い樫の木がばら〳〵に立つてゐる外には何んにもない。私はそれが好きてあつた。今は、さびしく休息してゐるやうなその木の沈んだ膚の色が、もく〳〵した日向を吸うて、彼等の冬の心を溫めてゐるやうに見えるのが小懷かしい。

私はその木の間の白塗りのペンチへそろり〳〵近づいた。何の色もない土の上に、私の草履の赤い色が浮きたつて見える。私は人がかうしたものへ色のある布を用ゐる意味が解つたやうに思ひつゝ、ペンチにかけて、その足先の色を見た。

足下には樫の影が土に寫つてゐる。膝の上に置いた、瘦せた私の蒼白い手にも影が寫つてゐる。私は目を上げて光りを包んだ白い雲の動く空を見た。私の家の屋根の上に、黑ずんだ風見車が、じつと北を

指したまゝ動かないでゐる。

僅三間ばかりを小さく包んでゐる此低い、黄色く染つた西洋造りの家よ。私はこれを探して貰つて、寢臺車の幌を下ろしてこゝに運ばれて來たときには、あの欄干の柱に纒はつた薔薇の花が赤く群がつて咲いてゐた。あの光澤のない黄色いペンキの板壁も私の心に相應うた。此家で私は死ぬるのだと思へば何も心に殘る事はないやうな氣がした。さうして毎日夥しい血を吐いた。それからでも、久しい私の病ではある。

私は今でも死なずに濟むものとは思つてゐない。私がかうして歩かれるやうになつたのは、私に最後の四月と五月との享樂を許された、短かい間の恩典のやうな氣がしてゐる。後ろの山から鳥の來てなく麗かな四月と、再びあの薔薇が咲く青い五月。——それまでの日かずは、時間として頭に浮べれば短かいけれど、あの、冬枯れた薔薇の木が赤い芽を芽ぐみ、小さい葉を出し蕾を持つて、それが赤くあの柱や屋根下を飾る課程を一つ〳〵考へ追へば私に許された月日は長いやうな氣がする。

私は此やうな事を考へつゝ、苦しからぬ程の輕い咳を續けた。さうして何だか水液が咽から出さうになつた。ハンケチで受ける。——血だ。まだ血が出るのだ。

大分止まつてゐたのだけれど、またかうして出る。歩いたからだろうか。——けれども私はもう愕かない。悲しまない。此血の色。ハンケチに滲んだ此赤い色と、履いてゐる赤い草履とが——それからあの窓の内の寢臺の側にある金線花の花とが、此行かんとする冬に見られるただ一つの色だと思へば、血

の出るのも私には一つの變化てある。

私はそれには平氣て、再び私の家の屋根や柱の薔薇の木を見た。

何といふ平靜な私てあらう。私は此間までは寢てゐて頻りに女といふものを畫いた。女の目と髮とを畫いた。さうして私がこれきりで死んて行くのを寂しんだ。それから私はあの油繪を壁にかけた。西洋の女の繪てある。石がけにもたれて、暮れて行く海を見てゐる女の目は、何ものかを求めて得られぬ寂しい私の心と同化して見えた。わたしは戀のやうにあの女を見入つてゐた。女が私に反いて、あそこへ行つて海を見て立つてゐるやうに見える日は悲しかつたけれど、私が思へば、女も私と同じ心持を湛えてあそこに佇んて、今宵夜にまぎれて私の室に這入つて來るのを待ちつゝあるやうに思へる日は胸がどき〳〵した。

人は笑ふてあらう。私の子供氣た心持を笑うてあらう。けれどもそのやうなのが、私が久しく生死の間に横はつてゐた間(あひだ)の、私の一つの事實てあつたのだから仕方がない。

それが、私は後にはその繪を見る刺戟に堪えなくなつた。いろ〳〵の意味て。——しまひには單に、その女の上着の赤い色それ自身が、色それ自身さへ私には苦しくなつた。私はあの繪を燒けよと命じた。女はそれを取りはづしたけれど、燒きはしないて了つたらしい。

それはどうてもよい、ただ私はどうしてから平靜な私になり得たのだらう。もう何の欲もない。惡みもない。寂しくもない。戀ひられるのはたゞあの薔薇の花が咲く日だ。

それはいゝが、あのいつかの雀はどうしたらう。私が寝てゐる暗い日の窓に來て、こつ〳〵、こつ〳〵と硝子を叩く。私がそつと下りてカーテンを開けると、つと羽搏きの音がして逃げて了ふ。さうして間を置くと再びやつて來てこつ〳〵と叩くのだ。それが何度となく續く。もう止んだかと思ふと。また明日やつて來てこつ〳〵とやる。私はもう下りて行つて追ふのも苦しい故、じつとそれを怺えてゐた。――その頃から女はあゝして罪を犯し出した。

或日には、それはあゝして私に自殺を促してゐる物音ではないかと思はれた。氣の弱い私は、許しがたい罪を犯しつゝある私の女をも殺す事は出來ない。私が私の惡む女を遁れ、私の病氣から遁れるためには、自からを亡ぼすより安易な方法はないと考へた。けれどもそれは何だか厭であつた。自分の女よりも咀はしいものは、さういふ氣まぐれの雀であつた。考へさせろ。そこを叩かずに、靜に一人私に考へさせろ。何故私は自分を亡ぼしてすべての厭ひから遁れるのが厭なのかを考へさせろと私は遂に雀に言つた。

それは私には苦しい日であつた。そのためにかいつもよりもひどく夥しく血を吐いた。

さういふ私が、どうしてから平靜になれたのであらう。もう私の女のした事は、たゞ何か本かなぞで讀んだ出來事に對するやうに、後には忘れ、もうどうでもないやうな氣になつた。私は衰へ盡したのだらうか。人を惡み、憤りをするにさへ力がないのだらうか。

あの雀はどこへ行つたらう。あそこらの屋根裏に巣でも食うてゐるのではあるまいか。それにしてはなぜ一匹の雀も此日向に下りて遊ばない。

私は目をつぶつて、日向の中にじつと漬つてゐた。私の衰へた血を刻む音が感じられる外には何事も私の頭に往來する考へもない。もく〱した日向。

何だか後ろの山の林を風が渡るやうな氣がする。

私はしばらくしてやつぱり寢臺に寢てゐた續きのやうな心持に目を開いた。

と裏の方から女が出て來た。私はも何の惡みも持たないけれど、あれの顏を見るのは厭でならない。自分の女の顏を見るのは泥水を吸ふよりも苦しい。——自分の女ぢやない。一人の女、私についてゐる一人の女。——あの顏は見たくない。

何か小さい櫛のやうなものを持つてゐる。裏の羊の毛をすいてやつてゐたのらしい。

私はそろ〱とからだを上げて、もと下りて來た方へ引き返した。女の顏を見ないために、近よつて言葉をかけられまいとするために。

惜しい日向よ。

これがやがて夜になれば、さうして夜が更ければ、あの白い門の戸が開くのだ。今夜はどうか知らぬけれど、夜あそこが開けば、それと共に一人の女が窃かにあの門から出て行くのだ。

秘密のない日向よ。溫かい冬の日向よ。

私はまた單調な寢臺に歸るのである。

中央公論

春期大附錄號豫告

本誌春秋二期の大附錄號が、現代文壇の最高權威たるは江湖の夙に識認する所にして、今更ら吾人の呶々するを待たじ。論文に於ても、說苑に於ても固より材料の精選、內容の充實を期して、目下廣く大家名士の寄稿を依頼中なるが、特に附錄として寄稿の快諾を與へられたるは

女と一年間（小說）……田山花袋
題未定（小說）……永井荷風
儀式（小說）……德田秋聲
題未定（小說）……森鷗外
木乃伊の口紅（小說）……田村俊子
題未定（小說）……平塚らいてう
京極（小說）……長田幹彥
袈裟御前（脚本）……森田草平
題未定（小說）……正宗白鳥

の諸氏也。何れも皆苦心經營の餘に成る雄篇にして、陽春四月の花の天地と其光彩を爭ふべく、苟も文學を愛好する人士の視聽は總て本號の上に集るべきを疑はざる也。

○定價 金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢 但清國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但 新年號春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一**郵便爲替** にて御送金の場合は **本鄕西片町十番地反省社** と指定し拂渡局を **東片町局** と指定あれば途中盜取の虞なし

一**振替貯金** 口座は**東京三十四番**なり、これにより御送金の方は外に**登記料一錢**を加えらるべし、然らざれば送金額より差引くにより殘金は端錢となりて却て面倒となるべし

一**郵券代用** 必ず**一割增**の事

一**集金郵便** の便法を利用せらるゝ方は、**座ながらにして誌代の拂込** をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加えたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄 金五錢
一金三圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢
（集金委托料及送達料）

一**受領證請求** は必ず返信料金を要す

大正二年二月廿七日印刷納本
大正二年三月一日發行 （禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 藤本兼吉

東京市本鄕區駒込西片町十番地
發行所 反省社
振替口座東京三十四番
電話下谷九一九
電信略號ハンセイ

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.

Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十[illegible]年[illegible]月二十九日　第三種郵便物認可